の上、金五拾兩被ㇾ下ㇾ之、卯年四月二十一日○【筠補】當年蝦夷地騒動に付、六月二十一日、若年寄堀田侯彼地へ發駕あり○當夏兩國橋邊大川夕涼少し○六月朔日二日、大雨盆を傾るがごとし○六月二十日、中平井村百姓文六といふもの、逆井村の川面にて蜆を取るとて、籠の内に日蓮上人の像を得て、平井妙光寺に納む○七月十九日より、深川淨心寺にて、身延山七面明神開帳○五月始より、猫死する事夥し○八月朔日より、五十日の間、淺草觀世音開帳、今年諸堂修復成る、合佛堂の前にて飯綱權現開帳○永嘉亭波靜、淺草寺志を著す○八月五日より、回向院にて、下谷通新町圓通寺黄金觀世音開帳○八月六日、算術師藤田權平定資卒、號雄山、四谷西應寺に葬す○八月十五日、深川八幡宮祭禮、隔年に渡しけるが、十二年前より喧嘩にて休みたりしに、今年久しぶりにて出る、産子の町々歳事記に有、雨天にて十九日に延る、同日産子の町々より踊り練物等を出す、江戸中はいふに及ばず近在より見物出て、晝四時靈巖島の出しねり物 永代橋の東詰まで來りし時、橋上の往來駢闐群集の頃、眞中より深川の方へよりたる所三間計を踏崩したり、次第に崩れて跡より來るものもいかんともする事ならず、いやが上に重りて落かかり水に溺る、助りしは稀にして、川下の水屑となりしは凡千五百人餘といふ、此噂たちまち江戸中へ聞えて、見物に出たる家族の苦心大方ならず、新大橋は通路止りて兩國橋を渡り、迎ひに出るもの晝夜引も切らず、官府より厚く令せられて、水中死骸を引揚しめ、男女老少を分ちて大路に積置けるを、家族尋ね來りてなく〳〵野邊の送りをなす、愁傷のさま目もあてられぬ事どもなりしとぞ、溺死の家族貧なるは御救の物給はりたり、この時顧末夢の浮橋といへる草紙に委しく記せりとなむ、

筠庭云、人込の處、一つ橋殿御通行有て後橋落る、此時難波町邊より程遠からねど、晝頃はさしたる怪我もなき樣に風説せしが、次第に大變の由沙汰ありければ、翌朝行てみつるに、橋詰 明地 河端に、男女別ちなく積たり、尋ね來りそれかこれかと求むる者、死骸を持歸る者、往來混雜いはんかたなく

其後は嵯峨町の河岸藏の間に處を定め流死人を置き、町家の方假役所出來て引渡あり、大橋又は兩國橋の方へかつぎ行こと夥し、落書樣々あり、其中に

御祭へ行のゝ道は近けれどまだだしも見ず橋の落たて

橋上群集にて橋の落たるを、跡なる者はしらねば、押かけ〳〵行とき、既に落んとしたる者一人、刀を抜て振上たれば、是にて餘程人を止めしとぞ、折節汐ふかく、落たる人多少早くわからず、汐引にしたがひて流れけれども、多き人故集り群りたりといへり、獵船を用ひて網を打て引たり、

○八月廿二日、九ッ時過、竹橋邊古松大枝折る○八月 永川明神本社、造營より年あらざるに崩たり○此頃西の方に箒星出る○蝦夷地騒動あり（補）當時落首に、打死と落死をする海と河、えぞは箱館江戸は箱崎○一石橋の橋杌嫩木の櫟なりしが、一面に芽をふき稚葉を生ず○九月三日、酉の刻、北東より南へ光り物飛ぶ、大サ鞠の如く青みあり○九月十五日、神田明神祭禮、御雇祭に三河町二丁目三丁目より子供相撲を出す○九月二十一日、青山熊野權現祭禮、出し練物出る、其後休む○十月四日、茶人川上不白卒、九十三歳、號孤峯又圓頓齋、始不羨と云、千の知心齋の門人、中古千家茶道の開基なり、谷中安立寺に葬す、墓所は天明元年生前に營む所也、中央に石燈籠を置き、火袋に妙法と鐫す、左に戒號をしるしたる碑あり、右に鍾馗大臣の如きもの劔を携へ、頭上に巨石をいたゞきたる石像を置り、何の故にや知らず○十一月高輪海上にて、蘆犀と云海獸を得たり○十二月一日、官儒柴野栗山卒、七十二歳、稱彦輔、號古愚、大塚御厩島に葬す○同十六日、儒師荻生鳳鳴卒、名天祐、稱惣右衛門、三田長松寺に葬す○十二月晦日、夜永田馬場火事、

◎文化五年　戊辰　六月閏

正月九日十日、大雪降、五十年來の雪といふ、所々松折れる○同月二十一日、晝人竹澤養溪卒、名惟房、淺草本然寺に葬す○二月朔日、夜大雨大雷○二月十三日、狩野養川院惟信卒、五十六歳○二月十七日より、市谷 柳町 光德院觀世音開帳、又文化七年午の四月にも開帳あり○本所 本佛寺 鬼子母神開帳○三月七日、晝人内田陶丘卒、玄對の男なり、廣尾光林寺に葬す○日暮里に從一位日野資枝卿御歌の碑を建る、今年の御詠也、常州水戸産江戸深川安宅の住人源延貞といふ人建る所なり、東なる日ぐらしの里は、花の頃貴賤群集して佳景を賞るよし、或人の歌よめと乞しかば、

たれとなく咲そふ花のかげとひてけふ日ぐらしの里ぞにぎはふ

○四月九日、俳人松露庵烏酔卒、熊澤氏、大塚光源院に葬○五月十日より、淺草大仙寺にて、鎌倉妙隆寺祖師開帳○六月初旬より雨繁く降り、十六日より十八日迄、江戸及近國洪水溢る、米穀價貴し○六月貧民へ御救米錢を下し賜ふ○閏六月朔日より、回向院にて、葛西半田稲荷開帳○閏六月二日、俳優尾上松緑六十四歳回向院に於て、昔の俳優小はだ小平次が幽魂を弔らひて施餓鬼を修せしむ、人々群集する事夥し、しかして後彼が事を狂言に取組興行しけるに、見物山をなせしかど、よからぬ事ありしかば、崇ならん事を恐れて、其後はあからさまに其名を唱へて、此狂言を催す事なし、

筠庭云、今日よくも覺えねど、京傳が淺香の沼と云讀本、小平次が事を作れり、其後なるべし、もとこの話一向あとかたなき童話にて、予稚きときふるさ老婆が語りきかせしは、小平次といふ魚賣、常に小はだを售れり、それが怪物に出あひたるをさなき物語なり、俳優にて旅あるきせしといふは、安積沼のよみ本俤をなしたるなり、柳亭に此事をかたりしに、彼も昔話をしらずといへりき、又この松緑の法事も一趣の狂言なり、

【筠補】永代橋新大橋掛替普請あり○閏六月十八日より二十日迄大雨降、再洪水溢る○七月回向院にて、野州那須野光明寺玉藻社開帳○七月二十一日、夜に入雷少し鳴、暮六時より大雨盆を傾るが如し○七月二十五日、晝九ッ時より南大風雨、家屋を損じ怪我人多し、豆州獵船七十餘艘覆る、又酒船入津絶て市中酒なし○八月回向院に於て、昨年永代橋水死の輩一周忌法事修行○八月にいたりても雨繁く降り、七日八日大雨、江戸諸國洪水溢る○九月二日、加藤千蔭大人卒七十二歳、本所回向院に葬す○十月芝金杉圓珠寺七面大明神開帳○十月四日、この日浴湯すれば壽を減じ、又は卽死するよしにて、貴賤入湯する事なし、元文元年の頃もかゝる事ありしとぞ○十月十一日、書家細井錦城卒、名知雄、稱藤右衛門、廣澤の孫なり、等等力村瀧願寺に葬す○十二月十九日、書家脇田赤峰卒、名順、稱郷右衛門、麻布圓林寺に葬す○頭巾のかわりにわたといふ物をかむる事はやりはじむ、

○文化六年　己巳

正月元日、大風暮六時過左内町より出火して、萬町四日市小網町照降町新材木町、堺町葺屋町兩座芝居、難波町高砂町元濱町邊武家方、夫より兩國藥研堀矢の倉跡にいたり、飛火して本所表町邊燒亡し、夜九ッ半時鎮る、筠庭云、此火事の翌二日晝過大雨降○正月雨降らず、日々烈風にして、火事度々あり○二月永代橋新大橋大川橋受負人止み、菱垣回船積仲間引受に成り、渡錢止む○二月五日、晝九時牛込火消屋敷脇より出火、番町の原迄燒亡、武家方多く燒る○二月十日より、日暮里妙隆寺祖師開帳○四月より行德德願寺彌陀如來開帳○三月廿四日、駒込圓乘寺にて、八百屋お七が百二十七回忌法事有、細雨降りけれど參詣翠集夥し、歌舞妓の輩供養する所といへり○四月二日、儒師伊東藍田卒、名龜年、稱金藏、七十八歳、駒込吉祥寺中洞泉寺に葬す、男を鑑岳といふ、詩を善くす○四月より七月迄、江の島本宮岩屋辨才天開帳あり、江戸よりの參詣夥し、江戸にても所々辨才天開帳あり○五月六日、儒師泉豐洲卒、五十二歳、稱斧太郎、名長達、淺草光明寺に葬す○六月五日より、回向院にて、常州眞壁郡船玉明神開帳○六月二十一日、官醫桂川甫周卒、五十六歳、名國瑞、號月池、老人二本榎上行寺に葬す○六月初旬、草加在矢場村寺院、塀の控へ木櫻也しが花多く咲り、江戸より見物人多し○七月橋場神明宮の內にて、武州御嶽山開扉○七月十九日より、本所本佛寺にて、甲州石和遠妙寺祖師開帳○七月深川宜雲寺に、英一蝶の筆塚を築碑を立る、市野光彦文を撰し、英一珪これを建る、これは一蝶宮居の所也し故なり○八月二十三日、夜亥の刻より二十四日迄大風雨、家屋を損る事夥く、火の見の半鐘を吹落す、伊豆房總漁人多く溺死す○八月卜者成田朝辰、鈴ヶ森八幡宮境內に狸塚を築く○今年諸國豐作也○九月朔日より三十日の間、牛込岩戸町南藏院辨才天開帳○淺草報恩寺、田原町向より今の所へ移る、此時東本願寺の地所廣がる○九月五日、詩人谷麓谷卒、八十一歳、名本脩、稱十次郎、畫人文晁の父也、淺草源空寺に葬す○九月五日、儒師篠本竹堂卒、名廉、稱久二郎、四谷南寺町榮林寺に葬す○調布日

記三卷寫本成、太田南畝先生公用にて、玉川の邊經歷ありし時の紀行也○十一月三日四日大雪、十二月迄解ず、

○文化七年　庚午

正月二十日より、淺草大仙寺にて、佐渡塚原根本寺祖師開帳○同二十七日、物産家小野蘭山卒、八十四歳、又六十七歳とも云、稱喜内、淺草誓願寺に葬す、

筠庭云、耋筵小牘は蘭山翁八十賀筵の時、門人に贈られたる冊子也、文化五年戊辰八月の事、八月は翁の生辰なり、これにて知るべし、翁今茲は八十二歳なり、此の書に云ふところ八十四歳、又一説ともに非なり、寛政十年、七十歳にて京より江戸に召れ、翌十一年七月廿八日、御納戸格にて始て御目見有、○二月二十日より、川口善光寺如來開帳○二月二十五日より、平河天滿宮開帳○三月七日より、回向院にて越後國乙寶寺大日如來開帳○同十一日より、淺草玉泉寺にて、鎌倉松葉谷長勝寺祖師開帳○同十五日より、石原德水辨才天開帳○同十三日より十九日迄淺草唯念寺にて、同廿一日より廿七日迄溜池澄泉寺にて、四月朔日より七日迄淺草稱念寺にて、下野高田山如來開帳○三月廿日、此頃世に行れし淨瑠璃語竹本住太夫死、築地本願寺中某院へ葬す、筠庭云、此住太夫が後八丁堀生れの者にて祖太夫といひしもの、後の住太夫になりぬ○四月朔日より、淺草柳稻荷明神開帳○同八日より、深川淨心寺にて、新會妙顯寺祖師釋迦如來開帳、曼荼羅を拜せしむ○五月十一日、狂歌師萩の屋裏住卒、七十七歳、金吹町に住す、始大屋の裏住といへり、堂上方より萩の屋の號を給はれり、深川法禪寺に葬す○六月十五日より、回向院にて、嵯峨清涼寺釋迦如來開帳、今年は例より參詣多し○六月二十三日二十四日、白金覺林寺にて、清正公二百年忌供養開帳○八月朔日より、護國寺にて、信州座光寺村元善光寺如來開帳、別當座光寺○【筠補】八月十一日、後藤庄三郎一件御仕置濟、同十二日、後藤三右衞門金座改役被仰付、是は銀座年寄なり○【筠補】音曲踊の名弘め、活花書畫會等の儀御觸あり○九月十九日、加藤遠塵齋卒、七十七歳、この翁は狩野玉燕の門人にして丹青を善し、經文を以て佛像を畫たる人也、服部坂龍興寺に、寛政八年成就したる五百羅漢等の像五十餘幅あり、大典禪師、これを賞して作られしあり、當寺に珍藏す○十一月十六日、東本願寺御堂再建上棟の式あり、文化三年災後五年目にして成就せり、今日參詣の男女未明より群集し、供物師物等目を驚かすばかりなり、棟梁を石塚志摩といふ○此冬マグロの魚漁ある事夥し、總豆相の三州にて一日に一萬本を獲るといへり○十一月十七日、儒師諸葛琴臺卒、名鑫、號鬢髮、下谷養玉院に葬す、

○文化八年　辛未　二月閏

舊冬より雨降らず、正月十四日雪、十七日大雪○正月二十四日、晝四半時過、淺草茅町二丁目裏より出火、表通りへは出ず、裏河岸柳橋萬八樓迄燒、凡三町に一町程なり、早春度々火事有○二月十一日、烈風申刻市谷谷町念佛坂より出火、四谷赤坂麻布西窪飯倉赤羽增上寺支院三四軒、燒亡す、此災にあふて死亡の者二百餘人と云々○二月十三日、村田春海卒、六十六歳、織錦吏一に琴後翁、稱平四郎と云、國學に長じ和歌をよくす、羣書一覽に云、寛平中の新撰字鏡を購得しより世に弘たるは春海が賜也と云々、深川本誓寺に葬す、

筠庭云、村田春海は、一度御連歌師坂氏養子となりしが、實家の兄うせて世繼なければ、坂氏を亡命の分にして實家に歸れり、坂氏より妻をばそれへ嫁しをくりぬ、春海もと其頃の大通と云者の内なり、されど和書を嗜みて名家となる、千蔭と一雙に聞えしかど、千蔭には弟子に學文ある者なく、春海は頗る學者多く濱臣等の弟子あり、其師の甲乙知べきものなり、

○二月二十八日より、牛御前王子權現開帳○閏二月十日より、根津社内觀世音開帳○同十八日より、護國寺山内にて、秩父札所觀世音惣開帳、開帳中雨繁し○同晦日より、牛島長命寺辨才天開帳○三月十一日より、池の妙音寺にて、駿州岩本實相寺祖師開帳○三月十六日より、永代寺にて、信州戸隱明神九頭龍權現開帳、別當顯光寺○四月初旬より風邪流行、人のなり小袖の模樣髮かたちはやり風さへ遲き山の手、獨山人○四月朔日より、回向院本尊彌陀如來、幷渡會天滿宮開帳○同日より茅場町藥師内にて、新座郡吹上觀世音開帳○四月十日、永代寺境内小芝居の假屋、雨後繩腐れて俄に傾き、見物人怪我多く卽死二人ときこえし○深川仲町蠶繰莽といふ人、天鵞絨もとゆひといへ

る物にて、鳥獸草木を造りて見する○四月二十六日、狂歌師千種庵恒海卒、五十一歳、稱山中要助、號霜翁と云、書林なり、今戸稱福寺に葬す○五月十日より、回向院にて、河州壺井八幡宮開帳、故障ありて半途に止む○同月二十三日より、淺草新堀正行寺にて、常州大増村正行寺大蛇濟度親鸞上人像開帳○【筠補】七月十一日、相州津久井郡名倉村名主源内召仕はな娘つねが死骸を掘出す、惣體色薄く朽木の如くかたまりて、高さ一尺八寸計、叩けばぼく〳〵と鳴る、臭氣なく此節蠅などもたからず、少し朽木の匂ひあり、四年以前巳年六月二日より熱を病み、同月二十日死去せし也○七月十六日より、橋場神明宮内天滿宮開帳○七月四日、畫人晁有輝卒、麹町心法寺に葬す○七月二十一日、儒師宿谷空々卒、名愼、稱喜太郎、下谷白泉寺に葬○八月上旬、毎夜暮時北の方箒星顯出る、下旬は西に見え、又曉には東に見る○九月三日、品川本宿新武藏屋といふ旅店より失火、烈風にして南側五丁程燒亡○【筠補】九月三日、下總國相馬郡土浦領藤代宿百姓久右衛門娘とやと云る者は、八歳にして男子を出生す、母子共に恙なし、生れたる小兒は初めは殊の外小さかりしが、日を追て常の小兒に異る事なし、母も小兒の事なれば父もなしと云、聲云、此事翌九年の誤也和漢編年に永祿七甲子年、丹波の國にて七歳の女子が子を產たる事みゆ○十月三日、儒師鷹見星皐卒、名允、稱三郎右衛門、六十二歳、淺草松源寺に葬す○十月二十八日、東本願寺御堂普請成就、遷佛供養衆僧音樂をなす、詣人夥し、今年開山五百五十年の遠忌也○十一月十六日、暮六時過、南傳馬町三丁目より出火、乾風にて中通りへ出、河岸へ燒拔け、材木町河岸迄出、夜九時鎭る、凡十二町程燒亡○十二月二日、書家荒木適齋卒、名翹之、稱左治、丸山長泉寺に葬○十二月十一日、夜九時過、淺草柳稻荷裏通りより出火、西北風强く新堀阿部川町より三筋町鳥越に至る、西福寺唯念寺燒る○同刻品川橋向より出火、鮫洲の邊迄類燒す○江戸歌舞妓年代記刊行、十五卷、立川焉馬作、三座芝居の基立より の記錄なり、今年より十二年迄追に印行す、

○文化九年　壬申

二月十五日より、羅漢寺にて、開山念持佛阿彌陀如來開帳○三月三日より、澁谷長谷寺にて、京淸水寺觀世音開帳、參詣夥しく、山内諸商人假や軒を列たり○三月五日より、洲崎辨才天開帳○三月より、池の妙音寺にて、佐渡一の谷妙照寺祖師開帳○三月十四日より、押上春慶寺普賢菩薩開帳○當春木下川淨光寺裏門の通、櫻樹を多く栽る○四月二十六日、三島自寛卒、六十八歳、名景雄、稱吉兵衛、三島やしきに住、國學和歌に長じ又能書なり、淺草新堀善照寺に葬す○五月十八日より、芝愛宕山にて、下總藏音寺□□開帳○同十八日、儒師山本北山卒、六十一歳、名信有、稱喜六、小石川原町本念寺に葬○五月二十五日、觀相名人石龍子法眼卒○七月大水、所々切所あり○七月八日、法如英慶和上遷化、澁谷村寶泉寺に葬す、世壽□□近世の碩德也○八月二十七日、戲作者市場通笑終、淺草祝言寺に葬す○八月東本願寺中德本寺にて、越後淨興寺寶物を拜せしむ○九月巢鴨染井の植木屋にて、菊の花を以人物鳥獸何くれとなく、色々の形を造りて諸人に見する、江戸中の貴賤日毎に群集して見物しければ、年毎に盛になり凡五十餘箇所に及ぶ、文化十三年迄ありしが夫より後造物は止みたり、此時菊の番付案内記、繪草紙類あまた印行せり、抱一上人植木屋何某が庭中の作り菊を讃りて、見劣りし人のこゝろや造り菊

○九月三日、下總國相馬郡藤代宿百姓忠藏娘とや、八歳にて男子を生、母子恙なし○十一月四日、晝八半時大地震、所々土藏毀れ、用水桶の水こぼるゝ程なり、品川神奈川邊分て强、家倒傾怪我人多し○十一月十七日、書家田中歸春卒、靈巖寺に葬す○十一月廿一日、夜五時過、龍泉寺村より出火、南烈風にて吉原新町へ火移り、夫より一廓悉く燒亡す、夫より西北の風にかはり田町へ飛、北馬道百觀音迄、一口は瓦町山の宿邊迄類燒し、川を越て本所番場町の邊少し燒る、吉原町假宅、田町、聖天町、瓦町、山の宿、三ノ谷、深川に六ヶ所等也、翌年八月元地へうつる○此秋音羽町二丁目三丁目あたりの西の裏手に、上水の餘りを引て瀧をこしらへ玉水簾と號す、高一丈五六尺幅一間餘有り、左右山を作り四時の花木を栽て、側に茶店を出し往來の人の休み所となす、天保の始より廢たり、

深山より落くる瀧の玉すだれかゝげてぞ見る水無月の空　蜀山人

けふぞ見るこゝも音羽の音高くきゝわたりぬる瀧の岩浪　縣麿

○十二月十九日、書家箕田牛山卒、號福應齋、麻布崇巖寺に葬す、長男松本猷吉、名騰號徠山と云○十二月嚴寒、兩國川氷あり○十二月二十九日、夜五ッ時前桶町より出火、西北烈風、南傳馬町より京橋竹川岸金六町迄燒亡○此頃カラン糖といふ癪のくすり賣街をあるく、蛇の目の紋付たる胸當をかけ、菅笠をかぶり網袋を背負、大聲にカラントウと呼歩行、淺草黒船町に舗をも出せしかども程なく廢たり、

○文化十年　癸酉　十一月閏

二月二日、夜九時過、三河町二丁目裏通より出火して武家方四軒程、三河町一丁目三丁目、皆川町、永富町、松下町、鎌倉町、新革屋町類燒、夜明て後鎮る○同十五日、夜亥半刻、下谷御成道黒田豐前侯の南隅長屋より出火、烈風にして石川侯御屋敷を吹越し、丸一茶店の裏につきて左右にひろごり、向側より仲町兩側殘らず燒失、池の端裏通り加藤侯長屋迄、西は三枚橋向料理屋松阪屋の側、東は呉服店松坂屋の側より上野町山下迄燒る○三月より、淺草寺念佛堂にて、常州鹿島太神宮不斷經所廣德寺赤童子開帳○三月八日より池の妙音寺にて、二の江妙勝寺祖師開帳○三月より、隅田川木母寺本尊幷梅若丸像開帳○三月菱垣廻船積仲間十組問屋株式定る、この時の人數千九百九十五人也○三月二十日より、大久保西向天滿宮開帳○四月朔日より、今戸八幡宮開帳○五月九日より、淺草 矢先本覺寺 祖師開帳○夏芝愛宕山權現開帳○五月、愛宕山別當圓福寺にて、長髮會あり、秋田侯の侍醫大關大中といふ人、所々の髭長き老人を集めて、書畫の會を催す所なり、

七十にみとせの花を咲そへてまたなゝそぢの月をながめん

○五月廿日より五日の間、九代目森田勘彌壽狂言興行○五月二十日、狂歌師手柄岡持卒、七十九歳、平澤氏、名常富、號月成、狂名喜三次、深川淨心寺中一乘院に葬○夏淺草寺老女、辨天の池へ水車を仕掛、人力を用ずして人形を踊らせ、鳴物を鳴らする見せ物出る○六月二日より、回向院にて、常州筑波山麓鷲影山權現開帳○六月初旬より、蕎麥を食へば死るといふ俗說行れ、蕎麥屋更に售ひなし○八月八日、書家大橋重雅卒、淺草西福寺中存心院に葬す○十月二十八日、法橋五松鶴林翁卒、翁は出羽國米澤の人、寛政中江戸に來り、夫より京師に登りて、坊城菅亞相君に菅家の筆法を授り、菅原の姓を給はり五松を氏とす、再江戸に下りお玉が池に住し筆道を教授す、今年七十一歳にして卒す、東本願寺中德本寺に葬す、文化七年菅家書則演義一卷を著して梓に行ふ○十一月九日、明六半時東より西方へ大二尺餘りの光物飛ぶ、武州生麥村の邊へ落、其響雷の如く、大なる野衾の如き獸にして肉翼ありしといへり○十一月二十八日、夜九時過、品川宿橋向出火、三町の餘燒亡せり○同月二十九日夜、高砂町西側より出火、西風烈く竈河岸へ出、又北風にかはり、和泉町東側より大坂町、堺町、葺屋町、兩座の芝居、難波町、よし町、乘物町、稻荷堀酒井侯御やしきに至り、翌朝六時過鎮火す○十二月二日、暮六時より、花川戸町去年燒殘りたる家々吾妻橋際迄燒亡、此節五十餘日雨無く、日々小火有○十二月四日、官儒尾藤二洲卒、六十九歳、名孝肇、稱良介、大塚御厩畠に葬す○十二月六日、書家松會平陵卒、七十三歳、名芳文、稱三四郎、淺草行安寺に葬す○吉原境町は年頃〻切になりてありしが、今年地主媚家なり、の居宅へ圍ひこみてより、町名を唱ふる事なし○

【筠補】此節勸化僧、「ごめんなさいりんきやうじあみだ堂建立」と云、あげましやうとて錢を與ふれば、「ご回向」と云、それを戲れに、

御免齋貧町人泪堂困窮上げましやう御威光、

回向の文はあまりのことあれば略す、

米價下落しければ、米安五大力

「いつまでさがる米相場、なまなか上でもの思ひ、たとひ喰ずに潰れる武士も、錢と諸色のふつりあひ、あゝなんとしやう、玉落とても金かさず、下略

○文化十一年　甲戌

正月十一日、夕七時過より俄に大風吹發り、所々家屋を損す、三十日初卯にて龜戸妙義社參詣群をなしけるが、暴風に家根舟猪牙舟數艘沒して、人多く死す、龜澤町にて侍一人空中に吹上、三四度もんどりを打て大地へ落る○正月十四日、暮時八代洲河岸より出火○正月二十五日、畫工松田龜玉卒、號清風館、駒込土物店高林寺に葬す○二月深川砂村元八幡宮より手前四五町の間、稚木の八重櫻を栽ふ、毒春游觀多し○二月二日より十五日の間、河崎弘法大師開帳○三月朔日より、永代寺にて、成田不動尊開帳、奉納幟大提灯米俵造り物等夥しく有り、此時より奉納目錄に繪な

加へ、板行して賣歩行事はじまる、

筠庭云、開帳奉納物の目錄に畫を加ふるは、ふるくもあるべし、そのかみ三圍稻荷開帳の時、尙左堂俊滿がうちは合細工物に、柱かくしの如き板に付たるものなりき、これ目錄繪なり、

○三月三日より、回向院にて、下總馬橋村萬滿寺不動尊仁王尊（丈九尺程）、開帳○三月六日、夜大雨大雷所々へ墮○同八日より、押上法恩寺にて、京本國寺祖師大黑天皐諦女釋尊淸正公開帳○三月十日、書家佐野東洲卒、（名潤、新堀正定寺に葬）○三月十八日より六十日の間、淺草觀世音開帳、同日より一の權現開帳、（其外境內の神佛三十三年目總開帳）○同二十日より、御藏前八幡宮にて、秩父子權現開帳○四月朔日より、澁谷金王八幡宮開帳○四月朔日より、下谷正法院稻荷明神開帳、（神田平永町小柳町より、大さ九尺計りなる鏡にて造りし狐の額と鍵の額とを納む、細工人舟月の門人舟月水なり○淺草に於て、薪を用ひずして自然に沸く所の釜を見せ物とす、）

筠庭云、自然に沸く釜、淺草に於て見世物にせしは後なるべし、且釜にはあらず、鑵子なり、持主は淺草聖天町和助店慶助と云者なり、中橋廣小路の茶見世にて、文化十一甲戌年正月十六日、初て見世へ出す、御廻り方より御糺これあり、同十八日、御內寄合へ持參云々、

○同日より、淺草金藏院子安觀世音開帳○同二日より、中野寶仙寺不動尊開帳○同八日より、四谷新宿子安稻荷本地十一面觀世音開帳○同十九日より、西新井弘法大師開帳○四月より七月中旬、江戸及諸國大旱魃、（都下門に松竹を建て疫を禳ふといふ、初春のごとし）○六月十八日、百瀨流筆道の師耕元卒、（長雄耕雲門人なり、今年七十八歳、赤坂法安寺に葬す、弟子三千人に及ぶといふ）○七月朔日より、回向院にて、河州壺井八幡宮幷權現開帳○七月京都上鳥羽村桂姫名代何某、官許を得て勸化の爲武家町屋を巡行す○七月頃より、德本上人小石川傳通院にて諸人に十念を授らる、貴賤の參詣群集夥し○秋護國寺觀世音開帳、（參詣群集す）○十月廿日夜、上野御本坊火○十月書家田中玉峯卒、（名爲則稱收藏）○十月より、淺草寺奥山へ謎坊主といふ者出る、（頓智なぞといふ看板を出し、十八九歳の盲坊主高座にありて、見物より謎をかけさせて卽座にとく、若解得ざる時はかけたる人に品なあたへてわかるとて、籾米俵藁子器物などを飾り置くに、取られたる事なしといへり、奥州二本松の產にして名を春雪と云、春の雪の如く謎を早く解くよし也、是を學びたるもの向兩國へも出たれど、これには及ばざりしなり、翌年春興「かけわたす春の露に遠近の雪さへとけて笑ふ山々」　曳尾庵元龜）○十一月七日、儒師中岡豐洲卒、（名幹、稱周吉、七十八歳）○十一月十七日、俳人建部巢兆卒、（號松甫、秋香庵、淺草日輪寺に葬す、京の蕪村をしたひしにや、彼に似たる草筆の畫讃多くあり）○十二月七日、夕七時、聖堂の內學問所火○【筠補】十二月廿八日樽氏菩提所西福寺へ參詣、役僧眞我へ金拾五兩を附屬す、祠堂金の心外に、山の手に居候僧にも金五兩賴み遣し、その翌曉に頓滅なり、眞我は知己なりしが、次年正月十四日、樽氏葬式濟て翌五日に、これも頓滅したる由奇事といふべし、妾吉田屋おこんは此事起りて、衣服調度隣家の豐前太夫が許に預け、川口おなをなどにも賴みしが、やがて殘らず封印附、金子も七百兩計上金となる、其外妾宅の事くだ〳〵しければ略す、この時因是道人、

大樽酒盡小樽愁　鶯遏歌聲蝶舞休
三十餘年春不絕　始知人世有涼秋

五山堂なども詩あり、忘れしところあればしるさず、○墳墓圖志三卷寫本成、（一名秋風抄、作者不詳、江戸聞人の墓碑を集む、）

○文化十二年　乙亥

正月、去十月六日より雪度々降、（二月四日迄二十八度に及ぶ、大雪や江戸と越路の入たがひ皆人毎にちゃみおるなり　曳尾庵）○三月十一日より、中山法花寺奥院祖師、［　］にて開帳○四月朔日より、廣尾天現寺毘沙門天開帳○同十五日より、江の島上の宮辨才天開帳、（江戸より參詣多し）○四月日光山二百回御神忌御法會○六月朔日より、回向院にて、秩父大日向山大陽寺髭僧大士開帳○六月二日、抱一君尾形光琳の百年忌修らる○六月二十五日、書家渡邊東河卒、（名彭、稱文平、淺草祝言寺に葬す）○德本上人傳通院本堂西北隅に大日堂再建○今年より肇り、朝貌の異品を玩ぶ事行、文政の始迄都下の貴賤、園に栽へ盆に移して筵會を設く、（やしなへば午の貝ふく頃までも牛ひく花のさかりひさしき　遠櫻山人）

筠庭云、下谷和泉橋通御徒町に、大番與力にて谷七左衞門と云人あり、其老母草花を好みよく種作れ

り、是に依て七左衛門も其法を傳ふ、茶事を好みければ、前栽など掃除して、人もとひ來て見るものも有けり、櫻草は享和の頃迄で作り、あまたの種類を分ち、淺き箱を多く重ねたる重毎に、かんてんをとき流し格子を入れ、其中に一花づゝつみてかんてんに挿して、望みに隨ひて借しつかはして見せしむ、夫より朝貌の奇品を作り、此度は六枚折の葭屏風に、細き竹に節毎によきほど間を置き、口を切水をつぎ、これに花一つに葉一ひらづゝ添へて挿したるを、葭屏風に掛けならべたるは、いと涼しくきよらなり、屏風はたゝみていづくへも持行るゝなり、文化五六年の頃の事なりき、其後大坂に在番したる時、多く牽牛子を彼地へ送りたり、抑これ流行の始めなり、

○七月朔日より、回向院にて、甲州善光寺如來開帳○同十六日より、下谷德大寺摩利支天開帳○七月二十一日より、長遠寺にて、下總曾谷法蓮寺祖師開帳○同日より、淺草念佛堂にて、出羽國湯殿山黄金堂於竹大日如來開帳、靈寶に茶釜前垂たすきの紐等有、前垂紐に紫縮緬を用ひたるもおかし○十二月雨森牛南卒、六十歳、名宗眞、一號松陸、醫にして詩を善くす○武藏夜話刊行、所澤村齋藤鵜磯著○筠庭云、武藏野話の畫なかきたる南蠻は、深川三角といふ所に住り、鵜磯が宅も其邊遠からぬ處と覺ゆ、一度とひける儘忘れたり、予が宅へ尋問せし其挨拶に行たる事有しなり、

◎文化十三年　丙子　八月閏

正月五日、歌人安田躬弦卒、號東本、稱一庵、深川寺町慧然寺に葬○二月十三日、土肥鹿鳴卒、七十餘歳、名貞雅、秀太郎、易學に委しき人なり、芝金地院に葬○三月三日より、木下川淨興寺藥師如來開帳○三月十五日より、回向院にて、目黒祐天寺本尊開帳○三月十六日より、淺草ドブ店長遠寺にて、鎌倉本覺寺祖師開帳○同十八日より、湯島社地にて、野島淨山寺地藏尊開帳○同日より、池の妙音寺祖師開帳○四月朔日より、護國寺にて、相州杉本觀世音開帳○四月二十八日より、淺草藁店法養寺にて、池上旅立の祖師開帳○初夏より閏八月迄、江戸疫癘流行、人多く死す○五月三日朝、葺屋町桐長桐が芝居梁長十二間末口一尺五寸折る、四年以前酉年類燒の翌年普請のとき、東海道橋樹郡下星川村杉山明神の神木を切て梁としけるが、兎角に芝居不繁昌なりしかば神の祟にもやあらんと人々云ひあひける故、芝居休の日僧を請して誦經せしむ折から、風もなかりしにすさまじき音して自然に折たり、されど怪我人はなかりし○五月三日申刻、吉原京町壹丁目より出火、一廓燒亡す、假宅、田町、聖天町山の宿町、瓦町、深川等なり○五月十七日、畫人鈴木芙蓉卒、六十八歳、名雍一、號老蓮、淺草八軒寺町大仙寺に葬○筠庭云、芙蓉は畫家の中にては文字もある人なり、其男文藏詩をよくす、上京して皆川淇園に隨ひ學び、江戸にかへりて程なく父に先立て歿せり、小蓮と號す、殘香集あり、押上妙見の境内に碑を建つ、名は遠恥と云○紫おもと初めて渡る、おもと、號すれども黍蘆の種類にはあらず、始は高價を以賣たり、寒を恐るゝ故唐むろにて養ふ○六月十八日より、回向院にて、府中深大寺元三大師開帳○閏八月三日四日、大風雨人家を損じ樹木を倒す、江戸中其外出水、東本願寺鐘樓倒れ、本所深川の邊家々床上へ水乘る○九月七日、戲作者山東京傳終、岩瀨氏、名醒、稱傳藏、五十六歳、回向院に葬す○俳家奇人談梓行、譬者玄々一編集、筠庭云、俳家奇人談作者の俳を敬齋といひて、高田與清に物學びしが、いかゞなりしか其後を知らず○九月梅櫻返り咲多し○九月頃、夜に入ていづくともなく拍子を取り、太鼓を打音聞ゆるといふ、

筠庭云、夜の太鼓の音するは、いはゆる本所のばけ太鼓なり、夜人靜まりては遠音聞ゆるものなり、然れど風につれて、髣髴として定かならねば、人これを怪しむ、本所小梅寺島などにて、若者どもばか拍子を習ふ、多く夜分集りてはやしする事なり、祭禮には神田山王に出しの拍子は多くこれを雇ふ、又葛西よりも出れば、槩してかさいと云、

○九月二十二日より、幸橋御門外畠地に於て、觀世太夫奏淸、勸進能興行あり、日數は晴天十五日を期とす、興行の間場中より失火して、舞臺棧敷樂屋一圓に燒亡す、再び普請をなして興行し、翌年九月に至て終る○十一月十九日、俳人不隨齋成美卒、俗稱井筒屋八郎右衛門、車坂町蓮花寺に葬す、

◎文化十四年　丁丑

正月十二日、曉八ッ時雨中、新乘物町南側より出火、兩座芝居燒亡、岩代町、大坂町、甚左衛門町、人形町通類燒○正月中旬、俳師葹雪庵午心卒、此春の歳旦に、梅が枝に句中に最早死行の語有し、けて目出た申に行野が、前表とはなれりといへり○二月九日、畫人金子金陵卒、名允圭○三月朔日、本所法恩寺祖師開帳○同二日より、永代寺にて、八丈島爲朝明神開帳○同日より、葛西花又村鷲大明神開帳○同三日より、青山善光寺にて、難波堀江彌陀如來開帳○同十日より、十五日の間、淺草

寺観世音開帳○同日より淺草玉泉寺にて、相州□寺天拜祖師開帳○同十一日より、淺草大仙寺にて、駿州海長寺願滿祖師開帳○青山梅窓院泰平觀世音開帳○同玉窓寺香像觀世音開帳○四月朔日より、芝神明宮地内にて、相州梅澤吾妻權現開帳○同日より、不忍池辨才天内にて、上州新田醫王寺旭藥師如來開帳○同日より、目黑鯖藥師如來開帳○四月朔日、荻野鳩谷翁卒、鳩谷翁名は信敏、天愚孔平と號す、俗稱喜内と云、雲州侯の史臣也、行年百一歲、下谷泰宗寺に葬す、神佛千社參りと號して札を張るに、繼竿のうらへ剃毛を付て、數十丈の高樓の屋根うらといへども安くはる工夫此人より始れり、此事寛政の頃より始り、天保の頃に至りても彌盛にして、藁を結び群をなし、壯麗たる堂社といへども憚る事なくこの札を貼す、甚しきにいたりては矢立の筆をもて大筆に書付しも有しが、天保よりこれを禁ぜられたり○四月十七日、官醫杉田元伯卒、七十八歲、名翼、號鷗齋、あたご下天德寺に葬○筠庭云、元伯は御目見醫師と覺ゆ、其子立慶又才子なり○同十九日、俳師雪中庵完來卒、七十歲○五月四日、官儒古賀精里卒、六十八歲、名樸、稱彌介、大塚御厩畠に葬す○五月より七月に至り、江戸幷諸國大旱○八月九日、官儒岡田寒泉卒、七十一歲、名恕、稱清助○十月二十六日、最上流算術の師會田算左衛門安明卒、七十一歲、藤田權平の門人也、文政二年卯十月、其子弟等淺草奥山へ碑を立る、鷗齋先生文を撰す○同日淨瑠璃語十寸見沙洲死、山谷春慶院に葬す、死後贈して七世河東とす、河東の名是にて絶たり○十一月二十二日、晴天未刻頃、江戸市中雷鳴の如き響して、光り物空中を飛ぶ、武州八王子横山宿の畑中へ落たり、長三尺幅七尺厚六寸程燻りたる石也、

◎文化年間記事

文化の始より、淺草寺七月十日の四萬六千日參に、赤き蜀黍を雷除とて商ふ事始る○淺草寺奥山三社權現の後へ、人麿の社を建る、社邊に山吹萩の類を栽景色を造れり○目黑村に富士山を築く、筠庭云、近藤重藏といふ人、この富士山の形を作りたり、地に華表を立て、自近藤某昇天の所と題せり、華表は列仙傳繡像に見えたる形の如し、近藤氏後年に此地の百姓一家の者を殺害ことあり○日暮里青雲寺の布袋の巨像を修性院へ移す○和合神の畫像はやり始む、其圖は人の知る所故いはず、近頃渡來れる清朝の板に多くあり、畫上に題して和合生萬福、日進太平錢、隨亭高学書、萬事吉兆圖とあり、貴人も常に床に掛られたり、大槻平次郎（盤溪）が崎嶇に行し頃、清人朱柳橋に和合神の事を問ければ、清朝にては寒山拾得なりといひつたふよし答へたる事を、同人の瓊浦筆話に載せたり、又清人蔣士詮が忠雅集に畫和合神の詩ありて、たゞ寒山拾得の二人の事とせり、荊山先生の編輯燕居雜話にくわしくいへり、

筠庭云、和合神初は萬事吉兆圖と云、元祿中長崎譯者より井上河州侯に獻ぜしを、其老臣にあたへられ、それより轉傳して一ッ橋殿寫させられしが、寛政八年十二月、神田橋の館にて燒失、其後文化五年八月、野々山六郎右衛門に命ぜられ、又彼原本を寫させらる、原本は御家士高山重右衛門が所藏なり、夫より望人多く、野々山諸人に寫し與ふ、餘りに所望多ければ、百幅を限りとしたり、是この圖の行はれし起源也、享和の頃鈴木芙蓉なども、この圖を望まれて度々書けるを見たり、流行始めは猶前なれども、盛りになりしは前説の如し、

○叶福助といへる泥塑人を作り、專らもてはやせり、是は昔よりもてあそべる、三平二滿女に對してつくりまうけしものなり○江州坂田郡國友村鐵砲鍛冶國友藤兵衛能當といふ人、蘭學の醫師山田大圓に謀り、蘭人携來る處の鐵囊中へ風を籠め、火藥火繩を用ずして、風の勢を以て放つの鐵砲へ、別に新意を加へ工夫を凝らし、風炮又氣炮と號して製し始む、蘭名ウインドルウルと云、文政のはじめより世に行はる、按るに、蘭製のものは一發なり、和製は二發三發に及ぶといへり○文化七八年の頃より、石菖蒲の異品を玩ぶ事盛に行れ、嚮に行れし橘に倍し貴賤之を賞玩す、所謂兩根三種、黑龍、黃金、虎鬚、劔脊、長生殿、姜老、有栖川、正宗、浦島、雪山、虎の卷、殘雪、蓑衣、天が下、天鹿絨、通繡青葉、斑入など品々の名あり○此時代名家△儒家　山本北山、龜田鵬齋、太田錦城、朝川善庵△詩　市河寛齋、大窪天民、館柳灣、菊地五山△書　輪池屋代翁、中村佛庵、渡邊東河、秦星池、關克明、松本龍澤、董堂敬義、中川由義、三井親孝△狂歌　眞顏、蜀山人、六樹園飯盛文々舍蟹子丸三陀羅法師、千首樓堅丸、鈍々亭和樽、琴通舍英賀、

筠庭云、文々舍は松風臺停々が弟なり、月次會を立てたるは松風臺なり、其時文々舍は補助なるのみ、且これらは數ふるに足らぬ類なり、英賀和樽なども同じ、是等をいはゞ猶いくばくもあるべし、社中廣多なる淺艸庵などを洩せるは如何にぞや、

△俳諧　神田庵小知、宜麥、自然堂鳳朗、不隨齋成美、八朶園蓼松、田喜庵護物、小簑庵頎嶺△畫　狩野伊川院法印、同晴川院法印、同素川彰信、抱一君、谷文晁、同文一、依田竹谷、英一珪、長谷川雪旦、鈴木南嶺、大岡雲峯、春木南湖、

筠庭云、竹谷などを出して雨潭を出さず、其外も猶あり、

△鑄物師　村田整民△碑碣彫刻　窪世祥△金彫工　戸張富久△刀鍛冶　水心子正秀、手柄山正重、大慶直胤△蒔繪師　原更山、羊遊齋、坂内寛哉△浮世繪　葛飾戴斗、歌川豐國、同豐廣、同國貞、同國丸、蹄齋北馬、鳥居清峯、柳々居辰齋、柳川重信、泉守一、渾名目吉、深川齋堤等琳、月麿、菊川英山、勝川春亭、同春扇、喜多川美丸、筠庭云、國丸は國貞が前にあるべし、猶古きは國政なり、瀬川富三郎が似貌は、之が書初めたり△鳥居は清長が弟子にて、古きは清元又戯作者の振鷺亭なり、次は清忠なり△目吉は板行ものにも見へず、金太郎をかけるを俗人賞す、隨分何をもよくかきたり△重信は至つて後輩なり、月麻呂は喜多川歌麿の弟子なり、春扇を出さば春德も出すべし、

○花形といへる俗樣の手跡行はる○神道講釋藤田伊勢義龍、矢部日向行はる○所々屋形船年々に減たり○角觝人八十島富五郎、不白の門に入りて茶事をよくす、根岸に住す○根岸圓光寺庭中、長廿七間横四尺餘の藤棚あり、一株の名樹なり、文化の頃迄は盛の頃都下の騒人こゝに集ひしが、惜むべし文政始の頃枯果たり○尾久村深山玄琳といへる人の園中に、牡丹數株を栽、開花の頃見物多かりしが、文化中より絶たり○文化の末、大坂の竹本津賀太夫江戸に下り、操座にて譽れをなせり、文政中迄江戸に行れたり○立川焉馬落話しの廢たるを起す、三笑亭可樂、朝寢坊夢樂出て彌盛に行はる、筠庭云、長き咄の今のふりになりたるは、石井宗叔はじめなり、夫れより可樂また紫檀樓古木などあり、專ら芝居咄は扇橋なり○狂言袴の模樣、遠州純子の模樣、又伊豫染といふ染物はやる、伊豫染とはいよ簾に比したる名なるべし○筠庭云、文化の初は長樂寺小紋大に行はる、其の頃横縞其後松葉色石疊市松ともいふ、これらもはやる、ぜいらつ格子縞は廢り果たり、いよ染は備前の產なり、縮緬に染む○文化の始より雁皮紙行る、豆州熱海旅舍のあるじ今井某これを製し始、江戸へ出して商はしむ、筠庭云、熱海の今井半太夫、雁皮紙を製したるは寛政の末享和の頃なり、江戸にて賣出しゝは通町の金花堂にて、中川由義看板を書たるが、能出來て評判を得たり、今もあり○和製唐紙始る、城州の人朝正喜義樂、通稱中川儀右衛門といふものたくみ出し、若年の頃江戸へ下り、下白壁町に住し、文化三寅年春宣許を得、其後文政十亥年深川扇橋に廣地を買求て、專らこれを製せしめて世に行ふ、又縱十間横五間の紙を製して、實萊紙と號す、天保元年寅十月六十八歳にして終れり○筠庭云、唐紙をこゝにて漉すことは、琉球人新垣親雲上、もろこし福州へ三度わたりて、遂に其法を得て、薩州に來りて製す、これ始めなり○ギヤマンの諸器物を製し始む、其製舶來のものにかはらず○琉球扇はやり出す○据風呂の鐵砲に火を焚て、其湯の中へ金魚或は緋鯉の類をはなして見せ物とす、兩國淺草御藏前にありし、

筠庭云、又金魚を下に泳がせ、上には粟の水飴を置て、透明して見ゆるやうにしたるが、堀の内へ行道にありし、嘉永のはじめ御成先にて御覽あり、還御の後御賄方へ被二仰付一製しけるに、粟の製方あしきにや黑くすきとほらず、依て其職人を雇ひて造れりとぞ、

○砂村王地稻荷社へ、疝癪を患ふるもの祈願して、靈驗を得るよしにて參詣する事始る、筠庭云、大知稻荷は細川侯下屋敷庭普請あり、其ころ人を許して見せしめられしより行はれたり、此屋敷今は稻荷の邊川越侯屋敷となりぬて、植木屋奉納に稻荷社頭を庭の如く作りぬ、

増訂武江年表巻之七畢

増訂武江年表巻之八

○文政元年　戊寅　四月二十二日改元

米穀去年より豐饒なりしかば、市中の者へ分限に應じ買入て貯置べき旨を命ぜらる○三月八日、畫人谷文一卒、三十二歳、號蜀齋、文晁の男也、淺草源空寺に葬す○三月の頃、市中へ醴を售ふ老嫗出るよし、これに觸れば疫を病といふ妖言行る○【筠補】四月四日より六月八日まで、麹町九丁目石雲山常仙寺寅藥師、六十一年目の開帳あり、寅藥師緣起の說妄誕笑ふべし、寅やくしの事嬉遊笑覽にいへり○五月五日より十日まで、葺屋町都傳内芝居にて、壽狂言興行○【筠補】五月十四日、相模浦賀へ諳厄利亞船來る、鹽噌等賜りて同月二十一日出帆○五月二十八日、澁谷道玄坂田の中より、其邊の女童方二寸計の金色の龜を得たり○六月十日、二分判通用始る○八月三田通寺町大工某、兩頭の小龜を得たり○八

月より十月まで、回向院にて、紀州道成寺觀世音開帳靈寶に清姫が鬼女になりし時の角といふものなどがませたり○筠庭云、此時道成寺緣起繪卷物出、借得て寫したるものあり、世に傳ふ、よきうつしすくなし○【筠補】八月南本所元町御用屋敷願人嘉兵衛店三勝、笠屋三勝が末孫といふ、是は森田座休み、其跡芝居假興行仕度段御免無之○九月二日、儒師無琴道人卒、六十八歳、山本北山の弟子也○十月六日、念佛行者德本上人寂、小石川一行院に葬す、六十一餘と云、上人は紀州日高郡志賀谷久志村の産、田伏某の男なり、四歳の時隣家の小兒戯に病て失けるより無常を感じ、念佛三昧にして廿七歳の時出家し、雖行を修して衆人を化導す、近年の碩德にして其行狀人の知る所なれば略す、

わがいほり草履の上に笠の下杖をはしらとすみぞめのそで　行者德本

○十月十七日、西北大風、夕八ッ半時過、淺草隨身門前曼荼羅堂より出火、花川戸町へ出、此邊は僅に燒けて中の郷の松浦侯御中屋敷へ飛、本所割下水より吉田町、吉岡町、三ッ目四ッ目の間へ燒拔け、深川猿江の邊、扇橋向六萬坪の際にて鎮る、一口は法恩寺橋通りより飛々に砂村迄燒亡す、竪一里の餘あり○同十九日夜九時、芝青松寺燒亡○武江披沙成、寫本、太田蜀山著、江戸志江戸砂子其餘の書に漏たる事を書集られたる書なり○江戸名家墓所一覽刊行、中古よりの江戸名家歿卒年月墓所を集む、本郷六丁目の書肆伊世屋平次郎號老耄軒の編にして、搜索尤勤たり、惜むべし板木今傳はらずと聞へし○十月二十一日、司馬江漢峻卒、七十二歳、不言道人と號す、江戸にて西洋畫をなし行はる、文もありし人にて長崎の紀行をあらはし、西遊旅譚と號し刊行せり、

筠庭云、司馬江漢はじめ町繪師なりしが、長崎へ行き蘭畫を學び、江漢と改名して江戸に顯はる、文才もあり、西遊旅譚は鯨を獵る事尤くはしくかきたり、いつの頃にか、佛國暦象編の作者に、その著編の事をいひけるは、今漢土も我國にも、暦法は西洋の法を御用ひなるに、天竺の暦日の事をいはるゝは如何とて、彼是論じたりとぞ、彼作者もこれを恐れて、東叡山にたより首尾よく刊成るよし聞て、江漢またこれを恐れ、いづちへかうせたり、程へて又出たりといへり、度々出沒したるこそおかしけれ、

【筠補】是月諸國豐作米價下落に付、買持米被仰付、

○文政二年　己卯　四月閏

正月二十一日、大雪○二月龜田鵬齋翁、高輪泉岳寺義士の墓邊へ碑を建る○二月八日、初午也飯倉町六丁目より出火、二町餘燒亡、同夜八ッ半時、新肴町より出火、弓町、彌左衛門町、竹川町、銀座四丁目、尾張町、三十間堀四丁目より二丁目まで、築地井伊侯御藩邊にて鎮る、南北十町餘東西四丁程燒亡、翌日晝四時頃鎮火也、火消人足の喧嘩あり○二月十一日畫工北尾重政卒、八十一歳、紅翠齋花藍と號す、根岸に住せり、浮世繪中の高手なり○筠庭云、紅翠齋は手跡はよくて、江戸暦の板下はこの人也、また住吉町髮の油屋松本の出し看板も其書也、畫は門人も能手多し○二月二十五日より、龜戸天滿宮法性坊社開帳、三月廿一日、境内にて神田青木何某、百疊敷の大さの紙へ龍の字を書す○二月二十九日、夜九時、本町一丁目より失火、本石町、室町、品川町、北鞘町、日本橋、一石橋の際迄類燒○夏より痢病行る、死亡のもの多し、此節の病を俗にコロリと云、これを避る守り也とて、探幽が戯畫百鬼夜行の内ぬれ女の圖を寫し、神社姫と號して流布せしを、尊ぶものもありしなり○二月十一日、小田原より木食の沙門名觀正、湯島圓滿寺へ着し、加持を施し光明眞言を授く、貴賤群集夥し○回向院にて、房州名古寺觀世音開帳○澁谷長谷寺にて、相州關本道了權現開帳○三月九日より、淺草幸龍寺にて、上總藻原妙光寺祖師開帳○四月一心流劍術師櫛淵彌兵衛宣根卒、七十三歳、小石川祥雲寺に葬す○五月新小判一分判吹替、七月より通用○夏淺草橋場に、銀座吹所出來る○夏回向院にて、嵯峨清涼寺釋迦如來開帳○五月十一日、畫人清水曲河卒、七十三歳、名晃、稱連○春より深川永代寺にて、江の島辨才天開帳○神田明神社地に額堂を建立す○七月八日、詩人柏木如亭卒、五十七、名昶、稱門作、

筠庭云、人もはやる時あるものと見へたり、如亭は上方へ行かざる前には名も聞えたり、其後はなきが如し、畫家には如圭なども然り、

再發してあらはれしは、大岡成寛、春木南湖などあり、されど雲峯は勤仕によりて畫を廢したる間に、文晁は盛りにして大家となれり、初は文晁成寛馬孟熙伯仲の間にいはれしものなりしが、其内にも馬孟熙すぐれたり、南湖は增山雪齋公の命にて、費晴湖に畫を學ばしむ、山水家なるの後は、狂ふてさまゞ〳〵書たる皆わろし、

○此秋浪花より下りし一田正七郎といふ者、籠にて人物鳥獸草花の類を作りしを、淺草寺奥山にて見せ物とす、遠近の見物夥し、狂歌

觀音の加護にてはやるかご細工皆人ごとにほめざるはなし

筠庭云、文政二年の春、難波天王寺に、九丈六尺の釋尊涅槃像を竹籠にて作れるが、殊の外はやりて、其の秋細工人江戸に來り、大なる闕羽の坐像、并其外さま〴〵小さきものども作りて、淺草寺の境内に見せものとす、思ふに先の細工の取くづしたる竹をも用ひしなるべし、此見せもの終りて、江戸の細工人どもさま〴〵大造なるものをみせたり、此翌年頃、彼大坂籠細工、上野山下にも作りもの出したれども、これは最早見物評判なし、

是より遙かに後、天保七年回向院に嵯峨の釋迦開帳に、龜井町籠細工師みせ物を出す、看板はしころ引の朝比奈と時致なり、其細工もとの細工にくらべては拔群すぐれたり、それよりまた一兩年すぎて、淺草奥山に同じ細工人の作、其みせ物の看板は山姥と金太郎なり、是もいと花やかにて、細工は前前と同じく、顏手足籠目あざやかに透、指など細かなる所いと能作れり、此細工の彩色は、橋本町の水油屋庄兵衛が忰幼名吉之助といひしが、成長して畫師等琳が弟子となりたれども、畫は又一風なり、北齋が女を妻としたりしが離別したり、其故は北齋が女繪をよくかき、芥子人形など作るに巧みなり、されど吉之助畫を手傳はせず、其外にはこの女針わざ縫物などはよくせず、かれこれ心にかなはずして別れたりとぞ、右かご細工はこれが彩色なり、下繪も同じ、

○また兩國橋西詰に、籠細工にて大なる酒顚童子の形を作り見せ物とす、江戸龜井町笊ご師の細工なり、始天竺の僧うたゝれ枕と題して、涅槃の釋迦如來を作りしが、嵯峨の釋尊開帳の折なればとて、酒てん童子に改し也、向兩國にてもギヤマンの燈籠并蘭船の造り物抔も見せたり、是よりこの方大造の見せ物出る○七月二十六日、浮世繪師勝川春英死、五十八歳、號九德齋、本願寺中善照寺に葬す、牛島長命寺に碑あり、六樹園の文也、

筠庭云、勝川春英は春章につゞきたる上手なり、操芝居看板はいつも春英が書たり、見物ほめざるはなかりき、又其頃三芝居茶屋より、暑中に得意に贈りものとする團扇の畫、おかしき思ひ付を筆かろく書けるは、他の畫師及ぶものゝあるべからず、又三馬が作芝居の樂屋中の事を書るもの、大本にてあり、其繪春英なり、太刀打たての處、人物裸に書たる活動、いとよく書なしたり、

○十二月九月夜、御成道井上侯御屋敷燒亡○十二月二十五日、乾烈風、未中刻、三味線堀佐竹侯御屋敷より出火、即時に向へ移り、柳澤侯市橋侯御屋敷、南は新し橋の方へ燒出、又鳥越明神社閻魔堂、天文原の邊茅町迄、其外町屋寺院多く類燒す、翌日淺草茅町より出火、其邊二三町燒る○同二十六日夜、南部侯御屋敷燒失、其外小火所々に在○二月二十一日、儒師井上四明卒、名瀧、稱仲一、號佩弦園、今年九十七歳にて卒す、男を羅齋といふ、文政十年に卒す○【只補】此節葺屋町川岸に大坂下り谷川定吉手品興行、うかれの蝶とて扇にて蝶をつかふ、一蝶齋は是を學びしなり、

○文政三年　庚辰

正月元日、挿花師本松齋一得卒、百三歳、淺草常林寺の故住なり、其傳三園いなり境内の碑文に見えたり○正月二十四日二十五日、龜戸天滿宮鷽更の神事始る、去年大坂天滿の社にて、太宰府の例に習ふて此事を始む、當社にも今年よりはじむ○【只補】正月二十八日、鳥亭焉馬龜井戸にて落語會を開く○二月中旬、深川沖へ鯨二喉寄る、六間半程の小魚也○三月十一日より、淺草玉泉寺にて、松葉谷妙法寺祖師開帳○三月より、深川淨心寺にて、身延山祖師開帳○三月二十四日、庚辰年庚辰月庚辰日に當る、朝五時年德神を祭る事行る、此日應永七年より四百廿三年目に當りて、支干同じといへり○春より角筈村熊野十二社權現開帳、境内の池に觀船の造り物あり、この節日々雨降りければ、或人の狂歌に、「十二そう池に觀ぶれ一さうで人が出さうにすると降りさう」○六月朔日より、回向院にて、信州善光寺如來開帳、兩國橋邊見せ物多く出る左に記り○不忍池の南西の端に土手を築、中に細流を隔、所々へ小橋を架したり、茶屋料理屋など建列ね、櫻を栽て春の頃はわけて賑

ひけるが、天保に至て取拂せらる○六月六日夕方、大雷所々へ墜る○儒師市川寛齋卒、七十三歳、名世懋、號西野、稱小左衛門○八月十五日夜、月の内に木星入る○八月十七日、麻布一本松氷川明神祭禮再興、産子町々出し練物等を出す、其の後中絶す○今年正月より秋にいたり、寺地或は兩國橋詰へ大造の看せ物出る、おのれが見る所を左にしるす、

△針金細工兩國廣小路へ出る、細工人胡蝶、「難波なるかごの細工にまけまじとたくみ出したる江戸のはりがね」△麥藁細工同所へ出△虎遊び同所へ出虎の造物△雨乞小町淺草奥山へ出、ゼンマイ仕掛、東陽齋常山作△笊籠細工東兩國經瀧登△茶番細工淺草奥山へ出、人形多し、細工人堤深川齋△麥藁張細工同所へ出、七丈餘りの青龍刀、十二支の額、其外北齋の下繪にて見事なり、大森の職人これをつくる△貝細工同所へ出、貝細工大塚看造、人形細工末吉石舟△七小町人形同所へ出る、二代目原舟月作△籠細工同所へ出る、松民齋作△丸竹細工同向院内へ出る△江戸細工西兩國へ出、助六人形其外、麥藁にて衣裳を張る△削掛白澤の造物同向院内へ出三田高伊作△貝細工同向院細工人滿亭一等寶亭平輔△ギヤマン象頭山景東兩國へ出る、細工人大坂武樂齋△文覺上人荒行同向院へ出、細工人惣助、鶴三郎、泉五、茂定△瀬戸物細工同向院内へ出る、細工人龜祐周平△時雨櫻同所へ出、ゼンマイ人形、細工人大坂金橘堂△絲瓜細工淺草奥山へ出、江上仙吉作、此小屋より出火して造物悉皆灰燼となれり△瀬戸物細工同所へ出、細工人大坂富永軒△三玉の牛兩國向へ出、生き牛也、頭に玉の如き物三つ有△大盆石淺草奥山へ出る、大坂井上宗菊作、

筠庭云、淺草寺奥山に出たる計も夥しき見世物なり、かゝる事も又あるまじとぞ思はるゝ、其中にすぐれてよかりしは貝細工なりき、あまりに處々に出て、後には見物人なくなれり、

○九月八日、大風雨所々破損す、湯島麟祥院大木の樅中より折る、是にあたりて死亡二人あり○九月二十八日夜、光物飛ぶ○十一月二十四日、俳人壺外卒、七十歳、高田誓願寺に葬す△十二月二十九日、本白銀町より出火、本町邊燒亡○四月二十四日、儒師下田芳澤卒、七十一歳、名武鄰、稱三藏○【筠補】此頃さいのさいのと云童謡流行、

○文政四年　辛巳

正月十七日夜、相州鎌倉八幡宮燒亡、

筠庭云、八幡宮石階の下に、大なる銀杏の大木あり土俗云、公曉この樹の下に隱れ居て、實朝公を討しとなり、それはさて置、年數もしれざる木ならん、中にうつろありて大蛇すめり、運數盡たるにや、此度の火に燒死、臭氣久しく殘れりとぞ、再御建立成し後、其所の者に聞しに、蛇の灰を物の藥として、甞めたるもの毒に中れり、人恐れて其灰を由比が濱に棄しとなん、

○同日品川宿殘らず燒亡○同月十八日、芝新網町より出火、大火と成○同日石町より本町三丁目迄燒る○同夜小石川傳通院前五丁餘燒失、すべて正月火災多し○二月中旬より風邪流行、賤民へ御救米錢を賜はる、筠庭云、此時流行風をダンボ風といふ、ダンボサンといふ童謡行はれし故なり、うんすんと車に似たるだんぼ風押す人もありひく人もあり」○三月十五日より、深川永代寺にて、下總成田山不動尊開帳○同十七日より、護國寺觀世音開帳○四谷泰宗寺にて、武州高雄山權現開帳○眞先稻荷明神開帳○四月より回向院にて、羽州湯殿山大權現、大日如來開帳、別當注連寺○鎌倉松葉谷祖師、淺草□□にて開帳○四月十三日、書幷鑑定家菅原洞齋卒、五十歳、淺草寺町白泉寺に葬す○四月二十一日、儒師原冠山卒、五十九歳、名鑾、稱小笠原仲○五月筋違御門の外牛込袋町代地友次郎が妹むめ、身内より針を出す、友二郎は家主金次郎が店をかりて、かすかなる暮しをなす者なり、むめはことし十四歳になりけるが、身内痛みて乳の下膝或腋の邊より、縫針十四本を出す、去年下谷小島町なる藥種屋に逗留してありし時、かの家の座數又は二階へ、何とも知れず度々小便にて濡したる跡あり、又かの藥種屋新右衛門町へ引移し時もともにかしこへ行、夜中寢たる時側を腿のかけ行、又は蒲團の下へ入小便にて汚しける事毎夜の事なりし、其外にはかはりし事を覺えずとぞいひける、異國にもまた古くかゝるためし有、

史記曰、張嗣伯嘗聞二屋中呻吟聲一、嗣伯曰、此病甚重、乃視之、見レ一老姥稱二體痛一、而處々有二點黑一、無數、嗣伯還煑二斗餘湯一、送令レ服之、服訖痛勢愈甚、跳投レ床者無數、須臾所レ黯處皆拔二出針長寸許一、以レ膏塗二瘡口一、三日而復云、此名二釘疽一也、

稽神錄云、處士劉亮言、其所レ知額角患レ瘤、醫爲剖之、得二一黑石碁子一、巨斧擊レ之、終不二傷缺一、復有下足脛生レ瘤者上、因至二親家一、爲二獅犬一所レ齧、正齧二其瘤一、其中爲得二針百餘枚一、皆可レ用、疾亦愈、

○六月長崎より百兒齊亞國の産駱駝二頭を渡す、閏八月九日より西兩國廣小路に出して見世物とす、變名カメエル又トロメテリスと云とぞ、予此時眞物を看て、和漢三才圖會橋守國等が繪本にあらはす所の虛なる事を知る、脊に肉峯ありて鞍のごとしといへる說によりて、二つの肉峯を畫り、肉峯は一つにしてしかも高し、足は三つの節ありて三つに折る、高九尺長二間、牡八歳牝七歳といへり、後に北國へ來行て見せ物とせしが、寒氣にふれて斃たりと聞えり、堤它山といふ人駱駝考一卷を著し梓に行へり、

くびは鶴脊中は龜の甲に似て千秋らくだ万歳らくだ　加茂季鷹

三十二銅にて見せしかば
押あふて見るより見ぬがらくだらふ百のおあしが三つになれては　村田了阿

筠庭云、此見世物出てより後、物の大にして鈍なるやうなるをらくだと云、その詞今にのこれり、又雑木を燒たる堅からぬ大なる炭を名附けて、らくだ炭と云て行はれしが、當嘉永四年の春は此炭稀なり、此頃人用ゐざる故焚出さぬ成べし、

【筠補】此頃の事とかや、大橋邊に依田某といふ幕府の士あり、其召遣の中間、近所なるあたけといふ所の切みせにて口論し、其所の者の爲めに一人うち殺されたり、其事内濟せずして、遂に此切見世取拂となる

○春より夏にいたつて大旱、米價登揚す、七月七日夜たゞ〳〵雨降、八日夜大雨漸く降、正月より七月に至二十一度雨降し迄なり○七月朔日より、回向院にて、足立郡性翁寺木餘彌陀如來開帳○七月二十六日、書家董堂敬義卒、六十四歳、稱中井嘉右衛門、小笠、宜松、蠅虎等の號あり、西門跡中淨見寺に葬す、

筠庭云、敬義はそのかみ腹殼秋人といへる狂歌師なり、一とせ夏日團扇に、定くらうぞざるに暗の與一兵衛、ひとりで行くはあぶなかん平と云狂歌して書さたるを多く人におくれり、その後萬象亭世の中の狂歌を集めて、吉原細見の體に作りし中に、江戸町河岸といふを反吐狂歌の部と有て、其中に

團扇屋定九郎と書たるは彼が事なり、

○九月十二日、塙檢校保己一卒七十六歳、號水母子、萩原宗固の門人、國學に名有し事人の知る所也○筠庭云、塙檢校いまだ卑賤の時、桃花薬槃を求めたきに價なし、平川大神に其頃日參なしけるに、途中ある屋敷長屋の窓より是を見て問ひ尋れ、志を感じて右の書の料を借したりと、自らかたれりとぞ○十月二十日、書家岸本晩翠卒、名政和、一號蝶遊園、稱孝左衛門、

○文政五年　壬午　正月閏

正月元日、雪尺に滿つ○正月二十一日、辰中刻、日暈再重兩傍に虹あり、巳刻に至て消る、閏正月二十一日又同じ○王子稲荷社再興、翌年春成就○二月六日、戯作者式亭三馬卒、四十七歳、本町二丁目住、號本町庵、遊戯道人、稱菊地太輔○筠庭云、三馬一たび芝神明町書肆萬屋太治右衛門が養子となりしが、程なく出て、後本町に舖を開く○投扇の戯世に行れしが辻々に見世をかまへ、賭をなして甲乙を爭ひしかば、八月にいたりて停らる○春より葺屋町河岸において唐人踊の見世物を出す、カン〳〵踊と云、踊の末に世に行れ

て兩國深川等へも出す、諸人これを眞似たり、再云、この踊は大坂より始りたるよし也、蛇を遣ふ事は清俗紀聞の圖中に據れるところなりと云、

かん〳〵とてる日にそだつひる顔は　　蜀山人
つるつてとんと庭をはふ〳〵
かん〳〵の氷も今朝は解そめて　　同
きはきで匂ふ窓の梅がえ

筠庭云、かん〳〵踊り見世物、先一人出て棒をつかうことあり、次に蛇をつかひ次に踊りなり、大坂にて見せたるなれど、其地より始りしにはあらず、此時用ひたる胡弓は、竹にて作りたる柄杓やうなる提琴にはあらず、木にて作りたるなり、胴は片面のみ皮をはりたるなり、摩るには細竹に松脂を粉にしたるをふりかけて用ふ、馬尾を用ひたり、聲云、カン〳〵踊は長崎より始れり、

○御藏前大護院にて、攝州天王寺奥院太子開帳○三月五日より、永代寺にて、加州倶利伽羅山長樂寺不動尊開帳○三月より、深川淨心寺にて、鎌倉片瀬龍江寺祖師開帳○四月四日、畫人内田玄對卒、七十四歳、名瑛、筠庭云、玄對書譜なる林麓畫觀とかいひし、林麓は號なるべし○五月三日、木挽町芝居より出火○六月より霖雨、戸田川出水○七月十五日、書家沼尻龍涯卒七十五歳名其章○秋、山下に笑布袋といへる見世物出る、場中色々の造り物有、奥に一つの堂有、内に布袋のいれぶりたる像あり、面部腹手足ちりめんにて張る、側にて呼おこせば驚て目を覺し、夫より團扇を持て踊る、目のはたらき屈伸人に異ならず、末に口を開きて大に笑ふ事あり○八月二十二日、大風雨夕方津濤、深川木場邊三尺陸へ上る○九月小石川赤城明神祭禮、産子町々より出し練物多く出す、十八日晴天にて十九日當日雨天、廿四日に延る、其後中絶す○十一月、夜中街頭に出て及物を以て威す盗賊行る○篆刻家、稲毛屋山卒、六十八歳、稱宜右衛門○筠庭云、屋山は讃岐人、栗山と同郷なり、所に屋栗山といへる山あり、兩人共にこの山の名をとりて號としたれども、昇沈の身分格別なり○十返舍一九が作の道中膝栗毛、享和二年初編を發兌せしよりこのかた世に行はれて、今年迄に四十六卷を著し全く備る、此餘四編の綴足續々編を合て五十六卷なり、

○文政六年　癸未

正月十二日、麻布古川より出火、品川八ッ山邊へ飛火品川本宿より鮫洲迄燒亡す○二月八日、俳人素外卒、

九十歳、號一陽井玉池、今戸慶養寺に葬す○三月八日、書家秦星池卒、六十一歳、名其馨、稱源藏○淺草田圃鷲大明神開帳○三月十七日十八日、淺草三社權現祭禮、四十餘年目にて出る、都鄙群集す、先規の通神輿乘船あり、産子町々出し練物等花麗を爭へり○三月二十一日より、川崎平間寺大師開帳○三月二十八日より四月十二日迄、王子稲荷明神開帳○【只補】是春より芝宇田川町に、若鶴白瀧といふ二軒の茶屋出來、若鶴の娘十八九、白瀧は三十歳計のいづれも美婦なり、外二三人宛相應の女を抱入、次第に繁昌し、留守居其外富人入込、裏に二十間餘の座敷をこしらへ、隣に料理屋も二軒出來て肴をはこぶ、後いかゞはしき風聞有て召捕られ、二軒とも取拂申付られたり○四月六日、太田南畝翁卒、七十五歳、名覃、稱直二郎、狂歌をよくし初名四方赤良といふ、蜀山人、遠櫻山人、杏花園等の數號あり、戯作の書數十部あり、世の知る所故贅せず、白山本然寺に葬、

筠庭云、南畝また緇林樓の號あり、あまりに博雅の聞へ高きにや、一たび青雲の望みありて勤仕せしが、おもひの如くならず、又もとの身持に歸れり、紀定麿は兄弟なり、狂歌をやめて精勤しければ立身したり、聲云、定丸は甥なり、弟にあらず、

【筠補】四月二十二日夜、於二西丸一御書院松平外記相番を殺害す、本多伊織、沼間右京、戸田彦之進は即死、間部源十郎は深手、神尾五郎三郎手疵爲ゝ負、外記自殺に及、一件堀田侯御宅及評定所に於て申渡落着、十月九日にあり○四月六日、儒師葛西因是卒、六十二歳、名貫、稱健藏○四月十七日より三日の間、中村勘三郎寛永の初興行より、二百年目の壽狂言興行○四月五月旱天、五月下旬より霖雨○五月より回向院にて、攝州四天王寺太子開帳、五十年目の開帳なり○五月十九日より近在出水、大川筋大水、熊谷堤切れ、久保村と云處百餘軒流、戸田川の渡し通路を止む、兩國橋危く新大橋は半くぼみたり、小柄原地藏尊膝の上迄水あり○六月二日、狂歌師烏亭焉馬死、七十餘歳、稱和介、號談洲樓○六月十三日曉、神田仲町一丁目より出火○八月十七日、夜八時より南大風雨所々家を損ず、怪我人死亡の者多し、品川高輪鮫洲邊大浪、家を沒したる所少からず○九月十四日、山

本清溪卒、名正臣、京の人にして國學和歌に長ず、江戸へ來り客旅中に終る、歳七十歳○【筠補】十月八日夜、牛込邊へ大さ一間半程なる石零つ、晝雷鳴あり、夜に入光り物通る、先年も王子邊へ石落たる事ありといふ○十二月二日より、卯辰の方に彗星現る○十二月二十五日夜、麴町三丁目より出火、折節西北の風烈しく、一丁目河岸迄定御火消屋敷、一口は貝坂より五丁目岩城升屋にて止る、其の火直に高貴の御館へ移り、永田馬場山王の門前町屋、其外虎の御門迄の間諸侯の藩邸數宇、南は狐坂より赤坂の御火消屋敷、田町四丁目迄燒亡す、此夜平川の社年の市にて、混雜いふ計りなし○今年更に雪なし○十二月十三日、儒師松下葵岡卒、七十六歳、名壽、號一齋、稱清太郎、烏石の姪也○不知月日儒師幡鎌鄰齋卒、

○文政七年　甲申　八月閏

春より麻疹流行、夏秋に至る、引續風邪行る、此節雨更に降らず、麻疹は東海道筋よりはやり來たれり○二月朔日、晝八時過、三河町一丁目南角茶漬屋より失火して、西北の風烈しきにつれ、鎌倉川岸、本銀町、本町、石町、十軒店、駿河町、室町、品川町、本船町、小田原町邊、日本橋迄燒る、この時荒布橋數人押合ふて欄干左右へ開け、水中へ落入即死怪我人等有○同夜四時過、音羽九丁目より出火、櫻木町、目白坂、改代町邊燒亡、此頃近在大火あり、熊谷、八王子、興野、忍、行田、館林、桐生等燒亡せしと聞り○二月五日、夜九半時、銀座一丁目より出火、弓町邊類燒せり○二月八日には、靈巖島の邊に火災あるべきよし、誰いふとなく正月の末より流言しけるが、此妖言い如く同日夜六ッ半時過、同所南新堀二丁目より出火して、湊橋際迄燒る、此時町火消鬪諍に及び、怪我人多く即死のものもあり、筠庭云此火事喧嘩の時、指揮の役人皆立退れたり○二月新吹南鐐銀通用始○三月十三日より、淺草慶印寺にて、京妙滿寺祖師開帳、幷同寺所藏紀州道成寺の鐘、清正公朝鮮より持參の大曼荼羅等拜せしむ○三月下旬より、山下にて五重塔をせり上る見せ物出る、其高二丈餘といへども、中へ組込てせり上る故土中は刪掘りたるのみ、其の九輪小屋を貫き大路より見ゆる○三月二十一日、畫人鍬形蕙齋卒、名紹眞、北尾重政が門人にして、始めは北尾政美といへり、一枚繪草紙のるゐ多く畫り、略畫式をあらはして世に行れ、又京の黄華山が花洛一覽圖にならひて、江戸一覽の圖

を工夫し梓に上せ、神田の社へも江戸圖の類をさゝげたり、其男を赤子といふ○琦庭云、蕙齋はもと竜河岸疊屋の子也、薙髪して紹眞と改名、越後侯の給師と成、於玉ヶ池に住す○四月三日、暮六時、吉原京町二丁目より出火、廓中燒亡、假宅は花川戸町、山の宿、瓦丁、深川、大新地小新地、仲町、表櫓、裏やぐら、猫つき等なり○四月中旬より、薩摩座操芝居久しく絶たるを再興す○七月一朱金通用始る○七月二十四日、八月十三日十四日大風雨○八月中霖雨、關東洪水○七月二十六日、畫人片桐處翁卒、六十一歳號蘭石○八月十五日夜、雨中牛の如き怪獸二疋、北より南へ空中を飛行、光あり○八月十七日、國學者清水濱臣卒、四十九歳、泊洦舍、號す、稱元長、東本願寺中善照寺に葬す○琦庭云、清水玄長は醫師なり、下手の由、下谷かや丁に住す、物の標注をあまた作れり、上京して旅の打聞といふ紀聞あり、石川年足墓誌出しころ也、文政二年か○今年夏、京より花隠といふ畫工下る、櫻花を畫くに妙を得たりと云、數種の形狀を心にこめて畫く、櫻の外はかく事なし○九月赤城明神祭禮の時、牛込榎町に大サ五尺餘の獅子頭二ッを作らしめて飾る、諸人見ものとす、今に年々祭禮の日街頭に飾置り、此後千住天王祭禮にも、大なる獅子頭を作りて飾る○十二月五日、暮六時頃、芝口一丁目より出火、同二丁目三丁目、中川侯、脇坂侯、仙臺侯御屋敷等へ燒込、夜五時鎮火す○武藏名所考御板成、冠山老公御編輯也○我衣十八卷寫本成、御成道須田町代地に住ける、醫師曳尾庵元龜の輯なり、壯年より見聞したる世の中の噂、何くれとなく書あつめたるもの也、元龜俳諧を好み弟子もありし、文化の頃三河町三丁目へうつり、後板橋宿に住して終りしと聞り、

筠庭云、我衣は何人の書たるか、曳尾庵これを得て其後を筆記したるなり、全部それが書たるにはあらず、無聲云、我衣一册は龜甲醫師加藤玄悅の著なり、曳尾庵玄龜二代目をつぎ、續編十八册を著す、

○文政八年　乙酉

春より秋へかけて連雨止む時なし○正月七日、浮世繪師歌川豐國死、五十七歳、聖坂功運寺に葬す、稱熊吉、一陽齋と號す、歌川鬼春の門人にして一家をなし、享和以來世に行れたり、門人數多有、柳島法性寺の碑陰に見えたり、

筠庭云、豐國はじめ一向はやらず、芝邊に住ける故赤羽根金毘羅に立願日參し、滿限の日何にか有けん繪を書て、神明前の草子屋泉市が所に行て、これを錦繪にして賜へ、寫料は受不ゞ申と賴みしが、不便におもひて板本これを刊行せしに、相應に售たりしかば、隨分出精して書れよとて、次々に繪を出し、それより漸々に行はれたり、この故にはやり盛りても、泉市が方をば疎略にせざりしとなり、流行りし頃は中橋通横町に三笑亭可樂が隣家に居れり○三月五日、金雕工戸張富久卒、稱喜惣次○三月七日、曉烈風小傳馬町三丁目より出火、通油町、馬喰町類燒○ビヤボンと號し鐵にて作りたる笛行る、小兒の玩とす、一に津輕笛といふ○四月十一日大風○四月の始より、藤八五文奇妙と呼て、癪の藥を售ふもの街を歩行、深き菅笠をかぶり胸當を掛ける○四月二十三日、儒師太田錦城卒、六十一歳、名元貞、稱才助、谷中一乘寺に葬す○琦庭云、錦城は山本北山門人なり、よからぬ行事種々聞へたり○夏より秋に至り、刄を以て人を威す盜賊行、町中夜番繁し、やがてしづまる○五月二十六日、淨瑠璃語清元延壽齋死、清元姓の元祖なり、延壽の名は二代目也○八月九日、中川由義卒、七十二歳、源無量南山と號し書をよくす、辭世「惡痴といふ心にこゝろまどはれて有無のわかれを今ぞしりぬる」○

【只補】秋より冬に至り疱瘡流行○八月東南に彗星現る○十二月十九日、夜五半時、葺屋町操芝居より出火兩座芝居燒、元大坂町、甚左衞門町、住吉町、人形町の邊類燒す○十二月二十七日、儒師河原遜齋卒、四十五歳、名遠業、稱熊五郎、紀州の人なり○東都近郊圖板行、一枚摺、中田惟善撰○【無補】是春兩國廣小路にて、出雲の神事舞興行、

○文政九年　丙戌

春度々地震○二月大雪二度降○回向院にて、相州箱根荒人神開帳○淺草唯念寺にて、下野高田山如來開帳○三月九日、儒師龜田鵬齋翁卒、七十五歳、名興、稱文右衞門、善身堂と號す、下谷金杉に住す○秋又地震數度に及ぶ○今年遊女玉菊が百年の忌に當れりとて、淺草新堀永見寺に墳墓を營む、石碑に藥顏玉露享保十二年六月廿五日と銘せり、玉菊が事は前にもいふ如く、角町中萬字屋勘兵衞が抱の遊女にして、享保十一年三月廿九日廿五歳にしてみまかれり、淺草新寺町光盛寺へ葬りける事は、補さうし其餘の册子どもに明らかに見へたり、永見寺は萬字屋が菩提所なれば、墳墓を營しよもしなれど相違の年月を記し、戒名跡にてまうけたる物と見ゆ、

筠庭云、百年忌といふは誤なり、荻野梅塢といへる者、玉菊が墓所を或ものをそゝのかして繕ひ、碑を立けるはこの前年なり、其文に今文政八年乙酉五月十九日は、玉菊がうせし日より百歳に餘り二十とせの年過ぎてこゝに建るなり、

山崎久作といふもの、この玉菊考あり、さて今世に吉原燈籠といふ事は、玉菊より起れりといふが、普

通の説なれど誤りなるべし、また玉菊拳相撲の手覆といふもの、京傳が奇跡考に出したるを、玉菊考にも眞と心得たり、これ又大なる誤なり、それらの事繁ければこゝに記しがたし、嬉遊笑覽を見て知るべし、

○七月九日、暮時神田松田町より出火、南風にて東神田町々類燒す○十月二日、狩野素川彰信卒、

○文政十年　丁亥　六月閏

正月三日、夜九ッ時過、葺屋町より出火、兩座歌舞妓幷操兩芝居、堺町、芳町、人形町通片側、大坂町、甚左衞門町にて鎮る○二月國學者羽倉惟德卒、六十三歳、御風の義子也○春より夏へかけて、江の島上の宮辨才天開帳、江戸より參詣多し、金澤稱名寺にも開帳あり○三月九日、西窪光明寺主雲室卒、七十五齡、山水を畫くに巧みなり、又詩をよくす○三月十日より、淺草寺觀世音開帳○牛御前王子權現開帳○深川八幡宮開帳○三月晦日、醫師大槻磐水卒、七十一歳、玄澤と稱す、前野圖化の門人にして蘭學を世に弘め、又物産に委しき人也、男磐里二男磐溪と號す○肥前國上益頭郡矢部庄田所村産、大空武左衞門といへる大男江戸へ來る、今年廿三歳、丈七尺五寸、量三十五貫目、手平一尺二寸、足長一尺三寸五分といへり、「大空のしぐれ飴やの傘借らむ」　畫人北馬○角觝人阿武松緣之助、稻妻雷五郎　横綱免許○七月本郷五丁目六丁目東側、火除の爲町家を取拂せられ、筋違御門外、淺草御門の外、櫻田等に於て代地を給はる○九月神田明神祭禮、御屋祭止み附祭十六箇所に成る、一箇所より一品づゝを出す、曳物三、踊臺七、練物六と定む、引萬度と稱する物此時より止む、

○文政十一年　戊子

正月八日夜、淺草幡隨院の邊より出火して、天文原まで類燒す、寺院町屋多く燒亡す○二月五日、暮六時、神田多町二丁目湯屋より失火し、東風にて西神田町町一圓に類燒し、又北風になりて本銀町、本町、石町、駿河町、室町の邊に至り、夜亥の下刻鎮る○二月二十四日、增上寺方丈火○春川口善光寺如來開帳、門前船渡の所へ開帳の間假橋をわたす○山王御祭禮附祭、今年より二十箇所づゝに成る、一ヶ所より一品づゝを出す○下谷小野照崎の社地へ、石を疊みて富士山を築く○七月八日、狩野伊川院法印榮信卒、五十四歳○鎌倉八幡宮御再建成○十一月二十一日、等覺院抱一上人逝去あり、六十八齡と聞えし、名輝眞、號文詮、露鄰雨華庵といふ、尾形光琳の畫風を慕ひて一派を弘めたまへり○玓庭云、抱一上人そのかみ狂歌をよみて尻燒猿人といふ○儒師　菅原東海卒、名基、稱文藏、九十歳、給

○文政十二年　己丑

今年の大小元祿十年に同じ、よつて其角が大庭を云云の句を吟じて便利をなしける○正月十八日大雪○二月十七日大風、音羽より出火、巢鴨の邊迄燒亡せり○三月二十一日、北風烈しく、巳の刻過神田佐久間町貳丁目河岸の材木小屋より火出て、神田川を飛で東神田武家町屋一圓に燒、夫より東は兩國橋際濱町邊武家方より永代橋手前迄、西は須田町通り西側殘り、東側より今川橋向本銀町、本町河岸御堀端通、數寄屋橋外迄、南は新橋鹽留迄を限りとし、其間の町々は本町、石町、大傳馬町、小傳馬町、馬喰町、横山町邊一圓、堺町、葺屋町南座芝居、牢屋敷邊、小網町、八丁堀、靈巖島、鐵砲洲、築地武家方、西門跡より先海手に至り佃島迄、木挽町芝居、京橋、新橋邊町屋類燒に及び、翌二十二日朝鎮火す、武家方類燒夥しく、南北凡一里餘東西二十餘町、燒死溺死の輩千九百餘人と聞り、御救の小屋九箇所を建て、類燒の貧民を救せらる、此時紀州高野山へ燔死群靈菩提の爲に弔をなし石碑を建る○四月六日、未刻南風、麻布長坂より出火、飯倉片町、麻布谷町邊、赤坂溜池黑田家御中邸際まで燒亡、夕方雨降る○六月十九日より三日の間、回向院にて燒死人供養別時念佛修行あり○當三月類燒の町々焦土を以て、龍閑町より元岩井町迄の間、火除の土手を築せらる、十箇所に分てり、總長合て五百五十餘間、高二丈馬踏六尺鋪九間なり○鶴が岡八幡宮、永代寺にて開帳、開帳中大火に付、四月七日迄閉帳、其後再開帳あり○六月六日、狂歌堂眞顏卒、七十七歳、小川嘉兵衞○玓庭云、狂歌堂眞顏はじめ庵をつくりて、狂歌の判をしけるとき、「狂歌堂もとは汁粉を賣しかば格別あんはうまく出來たり」○七月一朱銀通用始る○八月下旬、大川通千住往來留る○十月　狂歌師　神田庵厚鹿終、神田鍋町に住す「月花とうかれ出たる夜あるきのけさとちらるゝ雪のあしかき」○暦原考一卷梓行、石井光致著、

○文政年間記事

深川永代寺、鐵砲洲稲荷内、茅場町藥師境内等に、石を積みて富士山を造る○神田明神社地に富士淺間社を勸請し、六月朔日參詣始る○赤坂大岡侯御藩鎮守豐川稲荷、有馬侯御藩鎮守水天宮、御藏前池田侯鎮守瑜伽山大權現、關原村大聖院不動尊、本郷喜福寺觀世音、本所能勢侯妙見宮等參詣始る、又西新井惣持寺弘法大師、牛込岩戸町、南藏院聖天宮、谷中吉祥院聖天宮、目黑正覺寺鬼子母神、信心の輩參詣多し○深川淨心寺石像の上行菩薩、祈願の者多く、像を水にて浴す○新井村梅照院藥師如來、小兒蟲封じの加持をなす○盆種の松葉蘭萬年青行はれ、數金を以て賣買す、又南天燭の異品を弄ぶ、千駄木植木屋勇藏、盆種の松を造る事工なり、又南天燭の異品をも造り始む○筠庭云、數金のみならず、小林多兵衛といふ人は、歌よみにて盆種を好み、松葉蘭の異品を得てもてあそびしを、花戸これを望みて數拾金にもとむ、歌城これを得て藏書の文庫を造れり○藍摺の法帖流行、筠庭云、藍摺の法帖とはハル打の石搨をいふにや、ヘルンスは藍色なり、その國どもには藍なし、漢土にも舶來を用ゐるべし○太布の汗手拭はやり出す、寛永の尤の草紙に、こはきものといふ件に、太布の手ぬぐひとあり、昔もありしものなり○筠庭云、尤の草紙の太布とあるは地ふとの布にて今いふ太布にあらず○澁を引晴雨に用ふる傘行る○川越箭弓稲荷社、下總駒木村諏訪明神社、江戸より參詣人多し○淺草平右衛門町に住し後深川六間堀へうつる桐澤嘉六といふ者、色々の奇巧を案じ造り出す、其内四人を以てから臼十六を舂しむるの器、又自在機と號し、居ながらにして機織る器は奇巧なれど行れず、から臼は四隣をさはがし自在機は價貴きゆゑ行はれず煙草を刻む器と、組絲を簡易に作るの二器は今に行れたり、筠庭云、煙草を刻む器もとより上方は江戸の地切の如はなし、皆油を引て仕掛ある器にて刻めり、其器とは異なるか○白き盆挑灯切子燈籠廢れ、彩色の草花を畫る挑灯行はる、筠庭云、岐阜提灯も他色を用ゐず、ぬるのみにて畫なかけるを好めり○和國橋のほとり新材木町に、二十三屋といへる櫛やあり、いつの頃よりか唐櫛といふ物を作りて商ひ始ける、十九四（とうぐし）といへる字謎にて、合すれば二十三となる故、二十三屋とよびける、この家久しく相續しけるが、文政にいたり絶たり、

筠庭云、二十三屋の悴に癡呆なるものありて、好みて乞食となり人の門にたち、扇にて手掌をうち、何

かわらぬ上るりをかたる、櫛屋にても外聞わるければ、度々引もどしたれども、なた〳〵出しとぞ、其頃人の知りたるものなり、

○白金三鈷坂の山中庵、雜司谷の向耕亭は古き料理やなりしが、これも文政中に絶たり○晴雨計といへる小き木偶を商ふ、手はかるかやのぢくを以製す、雨降時は自然に持たる傘をさす○文政始の頃より、大坂の石田玉山が弟子岡田玉山修德、江戸へ下りて神田紺屋町に住しけるが、或日家を出て後歸らず、常に着たる垢付し衣服の儘にて、路費も貯へずして出たり、其妻もありてきん隣のものと俱に尋れども行方知れず、其繪も次第に行れ、且好人物にてありし惜むべし、筠庭云、後の玉山はもと中江藍江が弟子とか、江戸に來て神田明神に爲朝の像を圖したる額を納む、下た地わろきにやひわれたりと見ゆ○神事の挑灯に草畫の巴を畫く事、靈岸島濱町のちやうちんやより始りて、草畫の輪寶草書の萬字も次第に出來たり○一中節淨瑠璃再びはやり出す○目黑石古坂梅やしき出來る、

○天保元年　庚寅　三月閏　十二月十日改元

正月十四日夜、下谷啓運寺火○三月町火消差股大伐鋸始る○閏三月廿四日、狂歌師六樹園飯盛卒、七十八歳、石川氏、名雅望と號、國學に長ず、男を槃外樓清澄とい、ふ、ともに狂歌をよくす、父に先つて終れり、

筠庭云、旅人宿なりしが、いつの頃にか馬喰町邊宿屋共、公事に出たる旅人、長く止むる事に付咎められたる時、六樹園も所を拂はれしとぞ、元の名なりや五郎と呼べり、四ッ谷に居しが、其宅を清澄に與へて、其邊うら道に上げ地といふ處に隱居したり、夫より程へて御赦などありしにや、靈岸島邊に移れりと云ふ、本の如く紙など商ひしにや知らず、文かく事狂歌師にはすぐれたり、都の手ぶりなどおかし、されど是も綾足が西山物語の口つきなり、

○閏三月晦日雹降、下谷の邊は殊に大きく、目方廿匁或は卅匁位也○夏の頃寺院に入て竊に石塔を磨き、戒名に朱を入るものあり、程なく止む○春の頃より始りけん、伊勢大神宮おかげ參り流行し、次第に諸國におよぼし、江戸よりも參詣す

る者夥し。阿州の者登り始しより四國一圓になり、又京大坂に移り夫より諸國に及せしとぞ、寛永の件にいへる如く、道中施行の宿施行渡し有、馬駕は美麗に飾りて、參詣の輩なのせ價を受けず、酒飯菓子等を賣し、金錢手拭其餘道中要用の品を與ふ、貧賤の者といへども參宮の者へは、禮を厚くしてこれをもてなす、宿々の繁昌言語の及ぶ所にあらずとなむ、十月の頃にして此こと止む、此時梓行せる文政神異記といへる册子に詳なり、京師の板にて春木楠亭といへる人の編なり○秋より淺草寺二王門修復○秋深川淨心寺にて、甲州身延山祖師開帳○八月十七日、麻布一本松氷川明神祭禮、四十年目にて產子の町々より出しねり物等出る○九月廿三日夜、雜司ヶ谷題行院失火、法明寺、祖師堂、釋迦堂其外寺中のこらず燒亡し、鬼子母神堂并末社門前町屋等は悉なし○十一月朔日、西新井總持寺鐘供養撞始あり、道俗群集する事おびたゞし○十一月廿日、畫家觀嵩月卒、七十六歳、名常雄、晩年景納と號、英一蝶の門人也、深川陽岳寺に葬す、

筠庭云、榎坂秋語は阿州侯の魚物の用達なり、俳諧を好み旁ら茶器を翫ぐ、それがいへらく、嵩月一蝶の筆を看定すること、大方は嵩谷抔の目を通したるをも贋物とてうけずして云く、一蝶といひて歸府の後書たる、かく多かるべからずとなり、是は自分の畫くことの遲きに較べていふなり、名人の速筆なるを知らずといへり、度々蹴付られて呆れたるなるべし、

○十一月廿三日夜、本所菊川町より出火、砂村の邊迄燒亡○十一月晦日、巳中刻橋町三丁目より出火、若松町、横山町同朋町、其餘武家方等類燒○十二月八日夜、下谷御切手町より出火、幡隨意院其外寺院町屋燒亡○十二月廿三日、夜四時小傳馬上町より出火、小傳馬町一丁目、大傳馬町二丁目、通旅籠町、新材木町、堺町葺屋町兩座芝居、其外類燒凡六町に一丁半程燒る、明七ツ時鎭る、この冬所々に火事あり、十一月以來凡廿八度に及ぶ○【筠補】十二月中、五千石御旗本寄合にて、伊藤主膳屋敷は龜澤町御竹藏前東角なり、この人法恩寺後ろ神道方吉川四方之進屋敷を借り、魚鳥の殺生せしが聞へて、御詮義の上本家伊東修理大夫へ永御預けになり、暫くの間新町四丁目脇東町といふ處に居られしが、夫にては濟ざるにや本家へ行れたり○【無補】是年大森に於て化物細工を見世物とす、

○天保二年　辛卯

三月五日より十九日迄、龜戸天滿宮開帳○春より淺草本藏寺にて、甲州山梨郡休息村立正寺祖師開帳○築地明石橋南千二百坪餘、新規埋立地になる○四月深川要津寺門前良左衞門、森下町喜八、木綿の裁屑にて製たる木綿紙といふ物を漉始む○七月朔日、遠山荷塘卒、三十七歳、淺草稱念寺に葬、內外の書籍に涉り、又詞曲月琴を善くす、北西廂記注釋、月琴考、胡言譯語等の編あり、

筠庭云、一圭は越後の人、京都妙信寺の僧たりしが長崎にいたり墮落して淸朝の語學を覺へ、江戸に來りて本所表町横町にすめり、一人比丘尼を具したり、是は彼が妻なり、長崎妓家の女なりとぞ、これをつれて彼處を走りしにやしらず、されど容儀もよからず、ことに一圭よりは年上と見へたり、住所は稱念寺行者と云ふものにして家を借たり、月琴を引くことは其の比丘尼にまなびしなるべし、西廂記を講じ所々に行て小說をよめり、また職人をやとひて月琴提琴を注文して、舶來のものゝ如く作らせて、崎陽より取寄たるよしいひて望みの人に售る、才子なり、小說はわが物の如くいひ說しかど往々誤りあり、表札には荷塘一圭と書たり、號を苗字のごとくにしたり、歿して朝川善庵碑銘を書て過賞せり、善庵殊の外これに心醉したるもおかし、されば此文を五山堂見て、これにて見れば一圭はすばらしき者なりとて笑ひたり、

○七月廿四日、儒師西脇棠園卒、名簡、稱惣右衞門、六十九歳○八月七日、戲作者十返舍一九終、重田氏名貞一、下谷どぶ店善龍寺に葬す、寺中東陽院檀越なり、辭世、此世をばどりやお暇にせん香と　ともにつひには灰左樣なら○九月十三日より、堀の內妙法寺祖師開帳○日蓮上人五百五十年忌供養、法花宗諸寺勤行○幸橋御門外に於て、觀世太夫勸進能興行あり、十月十六日を初日として、晴天十五日の間興行の定なりしが、雨天其外にて翌年へかゝり、日數の外日延興行あり、辰の六月に至て停む、興行の日費殷翠集せり○十月廿二日、日暮里修性院の庭中に於て、京師より下りし不退堂といふ人、大字壽の字を書す、竪廿六間横十九間、仙過の紙壹萬貳千枚繼、墨七石三

斗、筆長貳間、朱印廿疊程あり○筠庭云、大書の時介錯人あり、書人は筆を肩にかけて引てまはる、介錯人墨を器物に入れたるを筆先に洒きかけたりとぞ○十一月廿三日曉、上野御本坊火○十一月廿九日夜、本所石原町出火、大久保侯下やしき類燒、

○天保三年　壬辰　十一月閏

正月二日曉、五郎兵衛町より出火、北紺屋町、南傳馬町、白魚屋敷其外類燒す○三月より淺草幸龍寺にて、下總駒木村諏訪明神開帳○四月十七日より三日の間堺町中村勘三郎芝居、十二代目相續の春狂言興行○【無補】五月五日、鼠小僧捕縛せられ、八月十九日淺草に於て所刑○五月廿一日、淺草新寺町本藏寺にて、豆州玉澤法華寺祖師開帳○秋高縄泉岳寺山門再建、樓上に十六羅漢の像を排列す○八月十七日、麻布氷川明神祭禮、花出し練物等出る、其後中絶す○九月芝如來寺門前佐兵衛といふ者、鎮火の要具とて水車樋と稱し、井の水を繰上る器幷に逆柄の柄杓を賣始む○十月新吹貳朱金通用○冬淺草寺觀世音開帳○九月廿一日、下谷龍泉寺町千束稲荷の祭に、纔の花出し練物を出しけるに、吉原西河岸の娼家より是を見んとて、屋上へ登りし遊女禿若イ者都合十六人誤て落けるが、各重き疵をかうむる○十一月二十八日、浮世繪師柳川重信卒、四十六歳、

筠庭云、柳川重信は志賀理齋の子なり、師なくして畫をよくせり、北齋が風なりしが、本所一ッ目辨天の前なる髮結床の障子に、牛の時參りする女を、野ぶせりの乞食等が犯さんとする圖を書て、いと能く出來たり、北溪これを見て、畫は社中の風なるがかばかり書んものを覺へずとて、其所にて問しとぞ、夫より相知りて、北溪これを引て北齋が弟子とす、其後北齋これを養子とせしが、如何したりけん義絶におよべり、夫より重信頻りに板下を書しを、北齋これを板元に禁じて、互に意趣を含みけるを、柳亭種彦雙方をなだめて事和らげり、柳川といへるは柳亭の字をとるなり、この時より柳川と號したり、八犬傳も初めはこれが筆にてよし、無聲云、志賀理齋が子は重山といひ、後二代目重信となりしなり、

○十一月琉球人來聘、正使豐見城王子、前王の使澤紙親方也、十六日江戸到着の日初雪降、雪中管絃にて行列す、

品川驛にて雪いと白うふり積りたるを見て、　豐見城王子

武藏の〻原と聞にしいにしへはいざしら雪の軒つゞきなる

また――奉りける日、

同

わだつみの底よりいで〻日本の光をあふぐ龍のみや人

○閏十一月十九日、寅刻糀町出火、夜明鎮る○冬風邪流行、賤民へ御救米錢を給はる○續諸家人物志刊行、青柳東里著也、先に京の池永某がありはせし日本諸家人物志の後編也、

○天保四年　癸巳

二月朔日より、寺島蓮花寺にて、富士山本尊大日如來開帳○不忍池辨才天開帳○芝泉岳寺釋迦八相曼荼羅開帳、其外西新井總持寺弘法大師、增上寺芙蓉洲辨才天、王子稲荷明神、木下川藥師如來、同白髭明神、多摩郡井の頭辨才天、新鳥越安盛寺妙見宮等開帳○山谷正法寺にて、佐渡塚原祖師開帳○三月九日より、淺草幸龍寺にて、京都本圀寺祖師開帳○同二十日より、永代寺にて、下總成田山不動尊開帳、奉納寄進の品夥し○三月七日より、相州江の島下の宮辨才天開帳、江戸より詣人多し○四月朔日より、永代寺にて、葛西澁江村觀正寺客人權現開帳○同二日より、回向院にて、下總法藏寺祐天上人像幷地藏尊開帳、此時大なる數珠を見すり、中に諸國の神佛の像を安置す、珠の大きさ五寸餘○四月五日より淺草寺にて、太秦廣隆寺聖德太子開帳○同八日より、深川淨心寺にて、小田原淨永寺祖師七面明神開帳○四月十五日、羅漢寺三市堂修復成る、今日畫時過中尊の觀世音像を遷す○六月淺草第六天祭禮、今年より昔の如く神輿を渡す○篆刻家益田勤齋卒、七十歳、名濤字萬頃○此夏靈巖島東湊町の先に、川邊靈神とて祭る、何の神とも知らず、一時に參詣群集しけるが、纔の間にして止たり、或人の說に、此川を渡し時、水中より上りし觸幾をまつる所にして、首べを川邊に書改しなりといへり○七月半の頃より、湯島根生院の屋上樹木の中に、黃昏より雀幾百千となく群り集る事夥し、人是を戰ふといへども左にあらずとぞ、或人云、是は雀にはあらず、閑田耕筆に其說を擧たるあとり

といふものにて、常は人に見えぬものなりと、未その是非を知らず○八月朔日、大風雨家屋を損じ樹木を折る、深川三十三間堂宇分倒る、所々怪我人多し○今年米價登揚し、貧民へ御救の米錢を賜る事度々也、富有の町人、各貧民へ施しの米錢をあたふる事おびたゞし○谷中長輝山感應寺、護國山天王寺と改む○十一月朔日夜、八丁堀松下町代地福本といへる酒樓より出火、近邊類燒せり○江戸名所圖會梓行、此書は寛政中祖父長秋居士の遺稿、先考縣麿の校訂にして、郊外におよぼせるは大かた縣麿の編輯なり、半梓に行ひしもの有、又草稿漸く成りて淨書に及ばざりしもの有、先考歿後遺稿を淨書して庸書に委れしは、おのれが若冠の頃にして、烏焉の誤謬尠からず、今にいたりて悔れども かひなし、杜撰の罪を先考におはせざらんが爲こゝに書つく、

○天保五年　甲午

正月七日、中村佛庵卒、八十四歳、名景連、稱彌太夫、御畳大工の棟梁にして書をよくす、

筠庭云、佛庵小梅村に暫く居たるに、その地を俳優岩井紫若が買取しかば、佛庵玆に居る事ならず去る時、雲介が住あらしたる家なれば、河原乞食や跡にきぬらんとやら書て出てたりとかや、負おしみといふべし、夫より後龜戸天神橋白河端に家を求めて居れり、自ら雲介といふ事は、東海道箱根にて駕籠舁が持たる杖を請乞て、其杖に諸名家の題詩を乞ひて刻したり、面白からぬ物ずきなり、思ふにこれは其頃東海道名所圖繪行はれしが、畫上に銅脈が雲介行の狂詩を題せり、其結句竹杖一本天下に横行すと云ふ事あり、是によりたる思ひつきと見へたり、遂に雲介舍と號す、

○二月七日、北風烈して、晝八時、神田佐久間町二丁目琴師の家より出火して、卽時に神田川を越て東神田お玉が池の邊へ移り、一圓に燒廣がり、東は兩國矢の倉（蔡名なり）邊にいたる、西は神田お玉が池より今川橋向本銀町、石町、本町、室町迄東側一圓、傳馬町牢屋敷、油町、鹽町、堺町、葺屋町兩座の芝居、住吉町、難波町、大坂町、小網町邊、この間に狹りたる町は少しも殘る所なし、日本橋より先は通り町筋東側、八丁堀、靈巖島の邊、新川、新堀、永代橋際迄、鐵炮洲、築地門跡より海手まで、木挽町芝居、佃島等悉く燒亡す、方域去る丑年三月の火事に大やうたがはず○同月九日、烈風にてありしが、暮時檜物町より出火、西河岸通り一二丁目迄類燒す○同月十日、晝九時頃、大名小路の邊より出火して、諸侯の藩邸數宇、鍛冶橋御門、數寄屋橋御門、南鍛冶町、鈴木町邊、南傳馬町、銀座町、尾張町、三十間堀、新橋向木挽町、築地邊、芝口二丁目迄延燒、三度の燒亡一ッにして、長凡壹里幅平均にして十町の餘といふ、燒死怪我人數ふべからず、御救の小屋十箇所へ十三棟を建られ、貧民を救はせらる○同十三日未下刻、駒込九軒屋敷より出火、同所西教寺并武家町屋等類燒せり○此節雨少く風ふきて火災度々あり、人々安き心なし○三月朔日より、目黑不動尊開帳○同日より、上野清水堂觀世音開帳○弘法大師千年忌、眞言宗寺院所々供養の碑を立る○筠庭云、此頃にても有しか、同向院にて何れ九尺計、大師やうのいろは四十八字を、唐かれの鑄物の如く作りたるは、張貫細工といへり、鋼色奇絶に作りたり、妙工也○三月より牛島蓮花寺、其外弘法大師安置の寺院開帳○四月より淺草本願寺にて、下總多古村妙光寺祖師開帳○淺草寺町正覺寺にて、武州新座郡□□祖師開帳○七月二十五日、川崎平間寺弘法大師、自坊にて開帳○夏より秋へかけて旱○八月六日、古筆九代了意卒、八十四歳○八月三田中道寺、實相寺と改む○九月眞字二分判通用止○九月二十三日、書家松本龍澤卒、七十五歳、名龍章、稱主膳○十二月十九日、曉丑刻、淺草東仲町より出火、六丁程燒亡○【筠補】是年より翌六年に及び、あさりやなんとかゝといふ童謠流行、又おつこちといふ詞行はる、染色におつこちしぼりといふもの出づ、

○天保六年　乙未　七月閏

正月十一日、明六ッ時過、神田蠟燭町より出火、皆川町、永富町、松下町、三河町一丁目二丁目、鎌倉河岸迄類燒、晝時前鎭る○同月二十四日、子の中刻、吉原角町より出火、廓中殘らず燒亡す、假宅、花川戸、山の宿、聖天町、東仲町、門跡裏門前、田原町等なり、三百目限りにして元地へ移る○二月八日、谷中茶屋町出火、いろは茶屋一圓燒亡す○二月九日、神田明神前町屋より出火、聖堂脇より河岸迄燒亡○三月十日夜、四谷より市谷迄燒亡○三月より、淺草本願寺にて、駿州沼津妙海寺祖師開

帳○三月十日より、不忍池辨才天開帳○柳島妙見宮開帳○四月朔日より、三圍稲荷開帳○四月より、澁谷長谷寺にて、京音羽觀世音開帳○四月より、目黒正覺寺鬼子母神開帳○四月廿八日、書家關克明卒、六十八歳稱忠藏、號潢南○五月より、芝神明宮境内にて、京都六波羅密寺本尊觀世音開帳○淺草寺奥山に、韓信市人の跨を潛る所の木偶を見せ物とす、人形丈二丈二三尺、衣裳羅紗猩々緋等の類を用ふ、よき細工なれど飾たるのみなれば面白からず、されば見物少し○六月二十五日、未刻地震○七月より、淺草本藏寺にて、柴又村題經寺帝釋天板本尊開帳○閏七月朔日より、回向院にて、鎌倉覺園寺藥師如來巨像、幷日光月光十二神將等古佛開帳、

筠庭云、是も回向院に開帳の頃にや、見せものに女の足藝といふもの出る、さきに青山長谷寺に出て、後回向院に出しなり、其時の番附ありしが今頓に見へず、足を手の如くに遣ふ希世のわざなり、されど和漢ともに昔も往々あり、予別に記したり、

○閏七月四日、狩谷棭齋卒、六十歳、名望之、内外の書に涉りし人也、稱津輕屋三右衛門○閏七月十八日、曉地震、此節度々地震あり○九月頃より、鼠山に長曜山威應寺御建立、法花宗、翌年にいたりて本堂鐘樓總門僧房等ことゞく成就す、巍然たる梵刹なり、しがほどなく廢せられたり○十月百文錢通用始る、鐵錢を鑄させらる○野州産人參の髭を貧困の病人に給る、官醫石坂氏製法○十一月二十九日夜、上野山内火○十二月八日夜、下谷金杉石稲荷の邊より出火、金杉通り迄燒亡、

○天保七年　丙申

二月九日、巳刻地震○二月十六日より、芝泉岳寺八相曼荼羅開帳○三月朔日より、淺草三社權現開帳○三月七日より、奥州柳津圓藏寺虚空藏菩薩、淺草寺念佛堂にて開帳、奥州會津の産七歳の三つ子、日々開帳場へ出る、惣頭鶴松二男竹松三男龜松といふ、容貌よく肖たり、日尾荊山先生品生絲を編輯せらる、寺内へ大坂天保山の見せもの出る○三月十一日より、谷中妙福寺日親上人開帳○三月より、永代寺にて、勢州國府村府南寺本尊阿彌陀如來開帳○三月より、丸山興善寺にて、松葉谷妙法寺祖師開帳○三月より、淺草寺境内淡島明神開帳○四月朔日より、永代寺にて、葛西半田稲荷明神開帳○四月より、淺草寺町蓮光寺にて、遠州貫名山妙日寺祖師開帳○四月四谷伊賀町續新規町屋出來て、四谷新堀江町と號す○四月八日より、大日坂妙足院大日如來開帳○六月朔日より、淺草西福寺にて、甲州燈籠佛開帳○六月十五日より、回向院にて嵯峨釋迦如來開帳○六月十七日より、十四日の間、本所東大寺勸進所にて、二月堂觀世音開帳あり○六月十九日夜、獸の毛所々へ降る○七月麻疹流行、豐前國宇佐八幡宮神領小濱村産にて、赤髮の男兒二人を猩々翁の形に出立せて、兩國に出して見せ物とす、兄は十一歳猩壽と號し、弟は八歳猩美と號す○今年四月より日々雨降、又曇天にて五月に至り霖雨止む時なく、菜蔬生る事なし、嵯峨開帳詣人少く、看せ物あまた出したれども見物なし、兩國橋畔納凉なた寂莫たり、七月十八日二百十日に當り、旦より大風雨家屋を傷損す、大川通出水あり、是より米價一時に登揚し夫のみならず八月朔日、先に倍せる大嵐朝より烈しく、屋宇を破り樹木を折り怪我人あまたあり、近在は水溢る、是によつて米穀彌乏しく諸人困苦甚し、七月より貧民御救として米錢を給はり、又十月にいたり筋違橋御門外より和泉橋迄の間河岸通りに、御救の小屋を營てこれに居らしめ食物を給はる、此節水油拂底になり、小賣の油やは商ひを休む○【筠補】甲州都留郡は田少きに、當年の氣候にて皆無也、八代山梨巨摩の三郡にて米買〻、都留郡へ附送らざるより事起りて、八月甲州都留郡百姓共徒黨一揆、同郡下和田村百姓武七事森右衛門頭取、所々を打毀す、人數四千人と云ふ○【筠補】今度長崎出島へ蘭人持來る一角、長さ九尺と云、生魚にて持渡るは此度始ての由、ウニコールは歐羅巴洲の内、スエーデンと云ふ海に産す、たとへば魚長さ二間なれば、角は長さ一間あり○九月十九日、築地御堂大鐘成、今日供養撞始あり、富家の娘貴賤群集夥し○十月二十二日晝、淺草寺輪藏燒亡、堂内より尖火類燒なし、この時暫時の間此邊斗り雨降る、觀世音の利益なるべしと云へり○十一月十二日、夜四半時、神田鍋町北横町より出火、類燒二丁○十二月二十九日夜、根津門前茶屋町燒亡○江戸買物獨案内三冊梓行、

○天保八年　丁酉

飢饉につき去年より賤民へ御救を下し給る事度々也○二月九日狂歌師文々舎蟹子丸卒、久保氏、筠庭云、文々舎蟹子丸の名は、もと俳諧師の名なりと蟹子丸語りき○深川淨心寺にて、身延山祖師開帳○八月薩摩蠟燭售ひ始む、魚蠟と號す○疫癘行る○八月十四日、朝より大風雨、人家を損じ樹木を折怪我人多し夕方に至て鎮る○九月神田明神附祭の内、橋本町壹丁目より籠細工の曳物を出す、歌舞妓の趣向にて墨主と櫻の靈の人形也、顔より手足衣裳岩組立木にいたる迄悉く籠にて造り絵の具にて色どりたる也、珍らしき事故こゝにしるす、

筠庭云、此籠細工も前に記しゝ者の作なり、

○十月壹分銀新規吹立らる○十月十九日、曉六時、吉原江戸町二丁目より出火、一圓燒亡、假宅、山の宿、花川戸、深川八幡前等なり、三百日限り元地へうつる ○五兩判新規吹立らる、十一月朔日より通用はじまる○十二月九日、夕八時過地震○日光山志五卷梓行、植田十兵衛孟縉編輯 ○關八州路程全圖一枚行酒井喜熙著、

○天保九年　戊戌　四月閏

正月十五日、歌人片岡寛光卒、稱周輔又權太郎、號郁子園、傾城が窪蓮久寺に葬す○筠庭云、寛光は周朔といふ醫師の子なり、其業を嫌ひて外神田坊正片岡仁左衛門女の婿と成○二月廿二日、明六半時、根津門前茶屋町より失火、宮永町、七軒町其外近邊寺院燒亡○三月六日より、牛島白髭明神開帳○同十一日より、新寺町玉泉寺にて、下總香取妙興寺祖師開帳○十七日より、回向院にて、井の頭辨才天開帳、境内にて人形師泉目吉の細工にて、色色の變死人を作り見せものとす○同じ頃市谷茶木稻荷明神開帳、奉納の造り物あまた有、何れも小間物の類を見立て作りし也○二月活鯛屋舗新規町屋成○四月十七日、大風午の刻過、小田原町二丁目湯屋より失火し、始は北風なりしが南風にかはり、伊勢町、瀬戸物町、本町、石町、本銀町邊より今川橋通り、西は鎌倉河岸、小川町武家方、西神田町々一圓燒亡、室町の邊は夜戌刻過に燒る、同所にて鎮る、

筠庭云、晝前は長閑にて、殊に今日安國殿を初め木下川其外へ詣ずる人多く、皆狼狽してかけ戻る事夥し、

○閏四月四日夜、麹町出火○五月廿一日より、永代寺にて武州多摩郡長淵郷玉川明神開帳○同廿五日より回向院にて、紀州加田淡島明神開帳、錢にて紙雛の形を額に作りて納む、其外奉納物あまた有、此開帳故ありて半途に止む○酒入津尠かりし故、市中に濁り酒を製して售ふ家多し○八月廿五日、大風雨地震○十月日本橋へ、去年二月大坂にて事ありし何某が一件落着の捨札立つ、○筠庭云、大坂に事あり、しは去年二月十九日なり○十月九日十日湯島天滿宮地主戸隱明神祭、出しねり物あまた出す、遠近の見物群集す○十月十六日大風、朝淺草御厩河岸渡し船一艘覆りて人多く死す○十一月八日夜、水谷町より出火、佃島迄燒亡、翌日巳刻鎮る○同九日夜市谷左内坂出火○東都歳事記五卷梓行、月岑著、長谷川雪旦并雪堤畫○江戸方角註解一卷梓行、三遷著、

○天保十年　己亥

正月十一日、雪二尺五寸程積る○三月朔日より、龜戸天滿宮開帳、○筠庭云、天滿宮開帳に奉納もの種々あり、中にも木彫細工人寄合、さまゝのものをつくれる額、又歌川國貞田舍源氏を書きたる美麗なりき、當時國貞天神門前に住す、裏家なり○三月二日、西南大風土砂を飛す、夕七ッ時小石川茗荷谷より出火、駒込富士前にいたる、武家方組屋敷町屋ともに夥しき類燒なり○三月三日より、青山善光寺にて、一光三尊彌陀如來開帳○同十一日より、千駄谷仙壽院鬼子母神開帳奉納物多し○六月十七日より、回向院にて、川崎平間寺弘法大師開帳、東兩國に籠細工十一間の寶船七福神の見世物出る○相州江の島辨才天開帳、江戸より參詣多し○四月南國橋御普請成し時、龜井町の住人形師末吉石舟九十二歳其妻とゝもに渡り始めをなす石舟は雛の人形師にして、置物根付の細工に名あり○六月十七日より、麻布廣尾天現寺毘沙門天開帳○神田明神社一の鳥居建改、其費三千金といへり○六月末、上野中堂の後三抱ばかりの大木風もなきに折る○十二月朔日、大風晝時過、四谷泰宗寺門前より出火、青山まで延燒に及ぶ○十二月廿六日、高田眞定院より出火、高田邊町屋類燒、穴八幡宮の樓門燒失○同廿七日夜、吳服橋内秋元侯御藩邸より失火、

○天保十一年　庚子

二月廿八日より、王子稻荷明神開帳○三月朔日より、元飯田町世繼稻荷明神開帳○三月三日より、小石川牛天神開帳○同六日より、淺草寺町正覺寺にて、下總大野法蓮寺祖師開帳○同十三日より、淺草玉泉寺に

て、佐渡塚原根本寺祖師開帳○四月より、根津權現山内駒込稲荷明神開帳○谷中妙福寺祖師幷日親上人開帳○四月朔日より、芝神明宮内にて、天滿宮御筆の像開帳、此時境内へ、京より來りし壬生狂言を見せ物とす、後淺草寺境内へも出る、面白き事にて有しがさしてはやらず○同二日より、角筈村熊野十二社權現本地觀世音開帳○五月より、麻布善福寺開山像開帳○八月十五日、芝田町八幡宮祭禮、產子町々より出し練物等出す、其後止む○八月橋場料理舗棹月樓柳屋何某、普請成就して商賣を始む○九月七日、夜五時、元數寄屋町より出火尾張町迄類燒せり○九月十日、朝大風雨○十月十三日、淺草寺本堂修復成就にて、今夜酉下刻本尊念佛堂本堂普請中本尊は此堂に安置し奉るより遷座あり、遷佛の間は惣門を閉し、講中の外入る事をゆるさず、終て暫時開帳あり、道俗群集す、此時迄本堂に、曾我蛇足が末孫寂叔が筆の惟茂鬼女の額、關齋文祥が筆の關羽額、鈴木芙蓉が筆の僅讃の額等ありしが普請の時はづしたる儘再度掲る事なし惜むべし、

筠庭云、淺草寺本堂の額、此時より見えぬゝの猶あり、古さ額にて揚香が虎を逐ふ圖なくなりて、今岸良が畫見えたり、蘭齋が孔雀などもなし、江漢が油畫周防錦帶橋の圖、これは本堂修復前より見えず、

○十二月十四日、畫人谷文晁卒、號寫山樓、又畫學齋、薙髮して文阿彌と云、淺草源空寺に葬す、

筠庭云、養子文一上手なりしが早く死し、文晁も身まかりて、文二畫もよくなりしかど、一度もとの宅引拂ひさまよひしが、又もとの二丁町に家作りて住けるに、これも不幸にして昨嘉永三年歿したりとぞ、殘りしものは借財と三つになる子ばかりとぞ、さく惜むべし、文一が子ありしが如何なりしか、

○十二月十八日、神田明神社御修復成就に付て、亥刻遷宮あり○羽州新庄郡二間村、百姓林助が孫長次郎として十四歳になれるもの、六七年前より兩眼自在に出遣入す、眼の玉大さ一寸餘もあるべし、其出たる眼へ紐を下げ錢五貫文を掛る、つひに江戸に出して宮地廣場等において見せ物とす○繪本東都本化道場紀梓行、不染堂蓬翁著、一卷、江戸法花寺院緣起神佛等あつむ、

○天保十二年　辛丑　正月閏

正月六日夜、四谷御簞笥町より失火、四谷傳馬町御門外麹町等類燒、翌曉迄燒る○正月二十七日夜、根津門前茶屋町燒亡○三月より、傳通院内福聚院大黒天開帳○三月二十八日より、淺草寺觀世音開帳、奥山にて驢馬を見せ物とす、又菊川國丸といへる者、同所に出て曲鞠を蹴る、見物日毎に山をなせり、又淀川富五郎といへるもの〻作りし貝細工の見せ物もあり○同日より回向院にて、熊谷寺彌陀如來幷蓮生像開帳○同晦日より、青山善光寺にて、鵜木光明寺觀世音開帳○護國寺觀世音開帳○四月より、茅場町藥師如來開帳○六月十五日より、回向院にて、越後高田善導寺大師開帳○淺草新寺町玉泉寺にて、口州市部村祖師開帳○五月十八日、屋代輪池翁卒、名弘賢、稱太良兵衛、書國學に名あり、白山前妙清寺に葬す、

筠庭云、屋代翁實子なし、養子の見ん事を恥てにや又重復もあればにや、遊女の事芝居俳優の事、後世雜說の書寫されたるも板本も、あまた賣られたり、其頃おのれも求めし物あり、

○五月より、坊間の法度中古に復すべき旨を令せらる、此事は憚多ければこゝに略す○五月二十九日、俳人大梅居卒す、七十歳、始北山門人にして梅外又克徒、詩を善くし後道彦が門に入て俳諧を嗜り、御藏前の富商小島屋酉之助といふ、家衰て後元大工町に居し、房齋と號して菓子を售ふ、孤山剩庵等の號有、淺草寺中修善院に葬す、深川長慶寺に碑あり、門人卓郎建之、鮮世、七十やあやめの中の枯尾花

○六月より、淺草念佛堂にて、箱根荒人神開帳、境内に大坂細工人柳文三の作瀨戸物細工の見せもの出る○九月神田明神祭禮の時、今年より附祭十六箇所を改て三箇所と成る、一箇所より三品づゝ出す、踊臺、地走り踊、練物の三品なり、曳物は止む、御屋祭こま廻し始る、淺草田原町源水これを勤む、弘化四未年より弟子本所元町源彌これを勤む、こまの曲は萬歳、打末、きぬた、山がら、掛はし、玉子の上、風車、立あふひ、水の上、きせる、風車、帆綱とり、又枕の曲は三重、八つはし、あや杉、すくひ、打拔、こまの曲、しやつきり、筆の先、三重の絲渡り、がんぜき、しの竹、扇、唐子遊び、階子のり、絲渡り、大こま、○九月兩國橋西廣小路へ、紀州和歌山の生れにて齒力鬼右衞門といふもの見せ物に出る、磁器の茶碗を嚙割り、或は鐘の龍頭を口にくはへ、其餘重き物をくはへて自在に扱ふ、又淺草寺の奥山へ、釣馬となづけて曲馬を乘り、後に馬人ともに宙に釣上る見せ物出たり○十月七日、曉七年時、堺町より出火、兩座芝居、堀江六軒町、元大坂町、新和泉町、新乘物町其外類燒○【無補】十一月二十七日夜、娘淨瑠璃三十六人召捕れ入牢、翌年三月落着す○十一月晦日夜、上野大佛堂より出火、佛像燒損じ堂宇燒亡す、同十四年御再建あり、慈濟庵空無上人建立六地藏の一軀井彌勒

菩薩の像も燒て御再造あり○十二月菱垣廻船仲間十組商人、其餘冥加金上納御免あり、諸商人問屋仲間御停止あり○十二月十七日、大雪三尺程積る、淺草寺年の市詣人尠し、

○天保十三年　壬寅

新暦頒行、天保壬寅元暦といふ○正月二十七日、大風明方、深川山本町尾花屋酒樓より失火、近邊類燒あり○二月二十五日より、湯島天滿宮開帳○去年十月、堺町葺屋町の芝居燒失後、兩座幷操人形座、淺草山の宿小出侯御下屋敷の地へ引き移るべき旨の公命ありしが、當二月三日同所にて替地を下し給はる、四月廿八日より町名を猿若町と號す、木挽町の芝居も追てはこゝに引るべきよしにて、三町分替地總坪一萬七十八坪餘と聞ゆ この庭中に昔の一里塚の跡といふもの、五間に十間高一丈餘の山あり 又姥が池の舊地と稱するものあり、池を埋て小祠を築る、小出家の御下やしきは鼠山へ移させらる、是より後歌舞妓役者他町の住居を禁ぜられ、この三町の内に住居せしめらる、又途中編笠をかむる、

なちこちのたれもむれくる山の宿さるわかまちとよぶ子鳥か那

○三月朔日より、永代寺にて、神奈川觀福寺浦島寺と云、觀世音開帳○同三日より、同所にて、成田山不動尊開帳○三月七日、西大風晝時過、牛込通寺町より出火にて、小石川小日向、駒込邊、巣鴨、西ヶ原迄、武家町屋寺院多く燒亡、燒死怪我人夥し、○瑣庭云、彼岸の内の火事也ければ寺町を出て心さす西ヶ原とんだひがんの風の手の内○三月十日酉刻、本所回向院前元町尾上町燒亡○三月十八日、官府より命ぜられて、江戸端々の料理茶屋二十餘箇所取拂、酌取女は吉原町へ入る、八月迄次第に引拂ひ、吉原へ一家引移りて娼家となれるもあり、所謂二十ヶ所餘の柏戸は山本町なり△新地、つきだし新地と云△古石場、越中島町、新石場、同所續定裾繼山本町横通り、櫓下、山本町通の方也、網打場、松村町、あひる、又海といふ、本名佃町也、あひるといふ事は、昔房州畦蒜郡の船頭この所へ移る、帆洗ひ女といへる名目にて賣女始といふ△本所辨天、八郎兵衛やしきないふ、松井町おたび、深川八幡宮旅所門前也、吉岡町、吉田町、鐘撞堂入江町△淺草堂前、龍光寺門前△三田三角、壽命院上り屋敷△麻布市兵衛町、麻布宮村町、殿下といへるはこれより前に廢れたり△市谷じく谷、谷町△根津門前△谷中いろは茶や、天王寺門前也△音羽町△鮫ヶ橋△赤坂麥めし、田町也、遊女の事を昔よりよれといふ、よれの劣りたるといふ意にてなづけしにやあらんいぶかし○三月二十二日、北大風晝時、高輪稲荷門前より出火、品川新宿北品川宿類燒す○【無補】是節行德邊にて、弘法大師の靈驗により、白布水に浸せば紺色に染まるとの評判あり○中野寶仙寺不動尊開帳○四月朔日より高輪太子堂庚申堂稲荷社開帳○【筠補】六月初旬繪草紙屋芝居役者遊女繪など悉く停止、又人情本作者爲永春水手鎖○六月より、回向院にて、南都法隆寺聖德太子開帳、靈寶數多拜せしむ、何れも古物なり、當春深川の開帳よりして、亂杭渡りといふ見せ物行れ、此度も境内へ出る雞波龜吉、菊川傳吉などいふもの也○六月十五日、山王御祭禮、御屋駒廻し始り、附祭二十箇所なりしを三組に改る、一ヶ所三品づゝを出す○六月大傳馬町小船町牛頭天王御旅出の事、當年より五箇年の間休む、神田社地にて居祭あり 南傳馬町天王は渡る也○七月十九日、戲作者柳亭高屋種彦卒、種彦四郎、號足薪翁、赤坂淨土寺に葬す 辭世、散るものに極る秋の柳哉、

筠庭云、高屋彦四郎頭より呼れて申付らるゝやう、其方に柳亭種彦といふものありて戲作致すよし、已來戲作致させ申間敷との事なりとかや、程なく歿す、與云、種彦は切腹して死したるなりと、

○夏より秋へかけ旱天、泉水の水枯て池中の魚死したる所多し○八月猿若町操芝居初興行、結城座○八月溜池上白山社取拂○九月猿若町一丁目中村勘三郎、同二丁目市村羽左衛門が芝居初興行○十一月琉球人來聘、正使浦添王子、副使座喜見親方なり、此度は東叡山へ參詣無し、

杜　むらさきの色なりはへて衣手のもりにかゝれる藤なみの花　王子

松　としをへし子の日の松を今は又君が八千代のためしにぞひく　同

○町中勸請の神佛引拂、本銀町觀世音は上野大佛堂前、藥研堀不動尊は本所彌勒寺へ、同所金比羅權現は淺草第六天の内、坂本町成田旅宿不動尊は御藏前大護院へ、本所番場秋葉權現は橋場總泉寺中へ、西河岸地藏尊は鼠山へ移る、其外町道場と號するもの數へ盡しがたし、いづれも寺院へ移し、又は淺草と鼠山の修驗巫覡の宅へ引るもあり○角觝人不知火諸右衛門横綱免許○當冬木挽町五丁目河原崎權之助芝居顔見世狂言興行中、命ぜられて猿若町三丁目へ引移るべき替地を給ひ、翌卯年秋にいたり土木の功成て、芝居掛りの者殘らず移る○十二月二十七日、大雨雷鳴あり、

○天保十四年　癸卯　九月閏

正月二十八日、畫人長谷川法橋雪旦卒、六十六歳、名宗秀、疊岳齋、一陽庵等の號有、淺草幸龍寺に葬す○二月六日夜より、毎夜西南の方へ白虹顯る○二月九日地震、用水桶の水こぼるゝ程なり、巳の下刻なるべし、

筠庭云、正月中旬より白氣西方に顯はれ、毎夜宵の内見えしが、二月末に至りて見えずなれり、駿河にては、阿部川の向ひなる、德願寺山の方に當りて出ると云ふ、

【筠補】三月三日、奥州田村郡守山領、三城目村三楯山喜作卯二十九歳、身の重さ三十貫目餘、手掌押たる形半紙に滿つ、千住宿楯山藤藏方に來り居る、頓て角力取になりたるが、不器用にてよくとらず○三月二十六日、大風晝時過、櫻田太左衞門町より出火、此邊町町類燒○四月七日、書家卷菱湖卒、名大任、稱右内、一號弘齋○筠庭云、弘齋三四年發狂して終れり○【無補】四月十七日、吉川町花火商玉屋出火して所拂となり、誓願寺前へ移る○【筠補】五月二十日、高年の者三十五人、九十歳以上也御米を賜る○五月市井居住の巫覡修驗をして、淺草書替所の脇側量所の脇澁谷豐澤村鼠山等へ地を賜はり、殘らず此所へ移る○今年夏より大川通その外川浚を命ぜらる○夏本材木町續の堀を埋られ町屋と成る○溜池の端へ馬場を築せらる○六月三日、夜大雨大雷○九月湯島聖堂御普請成就○九月十一日夜、三十間堀三丁目より失火、銀座町その外類燒○九月、下谷啓雲寺、上野山王山の麓に在しが、今のところへ移させらる、此時山下床見世殘らず取はらはせらる○九月猿若町三丁目河原崎權之助芝居初興行○閏九月二十一日明六時、淺草福井町一丁目より出火、茅町一丁目二丁目、平右衞門町少し燒る○【筠補】閏九月於二吹上御庭一相撲上覽、大關劍山、不知火○十月八日、神田旅籠町失火○十一月廿六日夜、湯島五丁目より出火、定火消御屋敷迄燒る○十二月四日夜、芝口二丁目より出火、此邊町屋類燒せり○十二月二十一日、畫人英一珪卒、八十餘歳、二本榎承教寺中顯乘院に葬○十二月二十七日夜、西風丑時頃、鍛冶橋内より出火、五郎兵衞町より疊町、白魚やしき北紺屋町、弓町の邊一圓、尾張町より木挽町、西門跡の際武家方迄、銀座町、本材木町河岸其外數ヶ所燒亡二十八日朝東風に替り、數寄屋町、南鍋町、加賀町、山王町、丸屋町、出雲町の邊類燒、夕七ッ時鎮る○古金銀二歩判、二朱銀、一朱銀等通用を停らる、

○天保年間記事

天保七八年の頃より、日本橋四日市翁稲荷明神靈驗あらたなりとて、祈願をこむる者陰晴を嫌はず群集し、又文政の頃より四谷新宿の北正受院に安ずる所の奪衣婆へ、口中の病を祈りて參詣の者多かりしが、嘉永の今に至り彌盛になり、諸願を祈り日參百度參の輩多し○雜司ヶ谷法明寺塔頭、毎年十月會式の飾物止む○神社佛閣の富興行、文政中殊に盛にして數十ヶ所に及びしが、天保の末より止む○田畑村に梅園を構へ數百株を栽たり、紅白を交へ毎春遊觀多し、

○獨搖草、天竺牡丹、ヲキサといふ草はやる、あるじの號なり、獨搖草は形狀合歡に似たり、手を以て搖すれば卽時に葉を垂れ、合歡の夜々眠るが如し、舶來のものにはあらずとぞ○筠庭云、獨搖草はコロイトなり、葉のしぼむのみにはあらず、枝の節曲り伏すなり、五瓣は小花瓶色にて、咲いと微細なる英出て來て子あり○煎茶の會行る○浮世繪師國芳が筆の狂畫、一立齋廣重の山水錦繪行る、

筠庭云、此頃國芳、賴光病床四天王の力士直宿を書たる圖に、常にある圖なれど、化物に異變なる書樣したり、其内に入道の首は、已前小產堀と呼處本所にあり、爰に挑灯屋にて風を賣りしが畫をかき得ず、猪の熊入道とて、彩色は藍ばかりにて書たる首卽これにて、惡畫をうつしたるなり、この評判にて人々彼是あやしみたるもおかし、板元の幸にて賣かた多かりき、近時も療治をする所のつまらぬ錦繪を色々評判うけて賣りたり、皆不用意にして幸ありしなり、

○現在の文人墨客諸藝人、又諸舊物等を角力に取り組、甲乙を記せし物はやる○六字南無右衞門、左門、よしたか等が流れを汲る女太夫行れて、場を構へ高座に登りて恥る色なく、婦女子のにげなき義太夫節の淨瑠璃をかたりける、愚夫愚婦さそひてこれを聞これを看て、藝の功拙をいはずして容貌の美惡を論じけるが、やがてこれを禁ぜられしかば、此輩いづちへか去たり○横縞の染物はやる○近世文墨の士殊に

多く、名流達士も隨て尠からずと聞し、されど現存の輩は憚りてこゝに誌さず○人情本と唱へて、男女の私情淫奔のさまをのべたる草紙數多刊行しけるが、天保以來新作なし○近頃月琴を彈すさぶもの多し○皇朝鶯を弄ぶ事いにしへよりかはらず、然るに近年殊に盛にして、養ふ事も次第にたくみになり、毎年正月二月此鳥を飼ふともがら、都下の鳥屋茶店等に會して、音聲の美惡を論じ風流の名を設く、近頃春日山と號するもの尤絶妙にして天下第一と稱し、三笠山と號るもの是に亞りとぞ、隅田舍某春鳥談一卷を著し、畜育の法其餘鶯の論委しく擧たり、

筠庭云、鶯はむかしより付子と云ふ事をして育すれば、よき鳥一羽あれば、又もよき鳥出來し故に、むかし鶉飼はそれを識れり、鶉は如何程よき鳥にて高金なるも、それ一つにて他にうつすことならぬものにあればなり、然るを近時のやうを聞くに、これも今は卵をとりてかへさするといへり、天工を奪ふが如し、

○寒暖計と號し、四時寒暖を量るの器行る、もとは蘭人持渡りの品なるを、本邦にて製し始たるよし也○深川仲町一鳥居の傍に在し富士山を毀て町屋とす、

○弘化元年　甲辰　十二月十三日改元

二月より、牛の御前王子權現開帳（半ばにして止む）○淺草寺町本願寺にて、上總國藻原妙光寺祖師開帳○中延八幡宮開帳○龜戸天滿宮開帳○春より夏に至り、兩國橋西廣小路に大なる假屋を構へ、こま廻し竹澤藤治（下谷の住）こまに手妻の曲とゼンマイからくりを交へて見せ物とす、見物山の如し、これに續ひて淺草に住る奥山傳次といへるこま廻し、竹澤の趣向に習ひこまに手妻を交へ、道具建にからくりをなして、淺草寺奥山にて見せものとしけるがさして行れず、其後人形師竹田縫殿介、同所にてもみけし人形の見みものを出したり、

筠庭云、小屋壞れて怪我ありしは、三人兄弟とて物まね上手にて、其頃流行しなり、又前後は覺へず此頃竹澤のこま未だ出ぬ時、其處に圍ひもせで、輕業をしたる虎吉とかいへる童は、小さき臺共つみ重ねたる高き上にのぼり、下には拔身の刄を立てたり、上にふせたる小樽の底に手を掛て、逆立をなすとき、たがゆるみ樽ひらきて壞れて落ち、刄に貫かれて死したり、

曲ごま、二月中旬より八月まで、兩國にて行はれ、夫より九月は芝神明に出、

其後は仕掛したる種々のこまを、細工人淺草御藏前にて、大路にて賣物とす

○四月五日、夜九半時、小石川下富坂町より出火して駒込土物店迄類燒（幅三丁長十三町程なり）○肥前平戸產大男生月鯨太左衛門といへる相撲取來る、（身の丈七尺五寸、重さ三十六貫、掌一尺八寸、今年十八歳、十八人力と云、筠庭云、大男去冬より玉垣額之助方に來れり、角力に出しが、程なく嘉永三年庚戌五月二十五日死去す）○五月五日、兩國橋西廣小路芝居小屋崩れて、即死二人怪我人數多あり、（雨後縄の腐し故といふ）○七月九日、暮六時、小田原町一丁目より失火、伊勢町、瀬戸物町、室町類燒、夜九時鎮る○七月二十四日、曉八ッ時、田所町湯屋より出火して、元大坂町、長谷川町、彌兵衛町、元濱町、油町、高砂町、富澤町、河岸迄類燒、朝五時頃鎮る○七月二十八日、俳師田喜庵護物卒、（七十三歳、號東賓居淺草稱念寺に葬）○越後の產男女の侏儒に踊りををどらせ、向兩國に於て看せ物とす、（筠庭云、此短人女はしらず、男は兩國橋邊に常に耳かき抔賣て居しものなり、時にありては大黑のまねして所々物をもらひ）○十月より、巢鴨染井菊の造り物再び始る、（文化よりこのかた花壇のみにて造物は絶たりしが、今年巢鴨なる靈感院の會式の飾り物として、宗祖の御誕のさま蒙古退治の體など、菊花にて造りしより始り、植木や毎に菊の造り物をなして諸人に見せける、翌巳年よりは白山駒込根津谷中にいたる迄植木屋ならぬ家までもきそひて造り年々に造りしが、嘉永の今にいたりて少しくおとろへたり、）

筠庭云、菊の番附次の年も九月賣あるく、數十ケ所にて夥しき事なりと、見し人云く、形もの造りしはほんどに植て宙につるし、又竹筒にさしたるなど、花の形色は見るに絶へずと云へり、左もあるべし、

○十月十七日より、王子稻荷明神開帳○京師の畫工岸駒が男岸良江戸に來り、淺草觀音堂へ揚香の額を掲る○今年長壽の人、水口壽山（百五歳）、末吉石舟（百一歳）、花井白叟（九十八歳）、大岡雲峯（八十歳）、前北齋爲一（八十五歳）

○弘化二年　乙巳

正月二十四日、北大風砂石を飛す、晝八時過、青山權太原續三軒屋町武家地より出火して、一時に燒ひろがり或飛火して、麻布三軒家、一本松、鳥居坂邊、六本木、龍土、市兵衞町、櫻田町、永坂邊、廣尾、白金魚籃觀音大信寺の邊、二本榎、伊皿子、猿町、高輪并田町等燒亡して海手に至る、夜に入狸穴三田の新網町の邊燒亡、戌下刻鎭る、武家寺社數を知らず、町數百二十六箇町、燒死怪我人或は海邊の者前後の火に包れ海中に入溺れ、死するものを合せて幾百人といふ事を知らず、赤羽橋の側に御救の小屋を建て、類燒の貧民を育せらる、此夜何れの家よりのがれ出けん、荒熊一疋人込の中を狂ひ走りて、某侯の藩内へ逃入しと、家臣何某父子二人にて仕留たり、又此火事の時白金藥町一丁目羅宗西照寺の表門に掲たる明の心越師の筆普明山と隷字にて書たる扁額火中にして燒る、明和九年行人坂の火事に危く燒りたりしが、今年は門燒落て額のみ燒れり、諸人奇とす、瑞聖寺、善福寺、麻布氷川社、高輪太子堂、庚申堂、稻荷社、泉岳寺、如來寺等は燒れり○二月靈巖島に築立地成る、後町屋を建て富島町と號す、龜島橋の南也○三月二十七日、曉七ッ半時、柳原土手續富松町より出火、久右衞門町、豐島町、大和町、江川町、橋本町邊、小傳馬町、鹽町、油町、田所町、堀留町、新材木町より長谷川町、高砂町邊にいたり、四十九町の類燒なり、夕七ッ時ごろにいたり鎭火す、筠庭云、牢屋敷は同り不レ燒やけたれども別條なし○【筠補】四月二十二日、後藤三右衞門居宅土藏封印附○【筠補】五月六日、當八代目市川團十郎、親父海老藏へ孝心に付、青ざし十貫文御褒美頂戴の由、間もなく其次第板行して賣歩行く○【筠補】一旦止められしが、當三月頃より兩國橋邊夜發、又所々に辻講釋昔咄寄場も已前より多く、定めなければ思ひ〳〵に始む、去ながら忽ち仕舞て續くはすくなし、淨るりもあれど素語りなり○當年開帳は、二月九日より牛御前王子權現、去年淺日數也同日牛島蓮華寺弘法大師、二月二十五日より井の頭辨才天、同二十八日より目黑不動尊、三月三日より川口善光寺如來、今年本堂の下を掘て戒檀廻りを始む門前渡し場へ假橋をかける、同五日より淺草寺町泰宗寺藥師如來、同九日より吾妻森吾妻權現、同十五日より增上寺芙蓉洲辨才天、同二十日より川口錫杖寺天滿宮地藏尊、四月朔日より芝神明宮内辨才天、同日より

深川洲崎辨才天、同日より品川海晏寺辨才天、鮫洲觀世音彌陀如來、四月より出村本佛寺鬼子母神、五月廿五日より葛西柴又村帝釋天、七月朔日より愛宕山内辨才天、山の下開山堂にて開帳、右何れも自坊に於て開帳あり○七月より、淺草寺町正覺寺にて、中山鬼子母神開帳、同じ頃より廣尾天現寺毘沙門天、目黑高幢寺金毘羅權現開帳○八月十五日より、小石川白山權現鎭守八幡宮開帳○三月十五日より、相州江の島上の宮辨才天開帳、江戸より參詣多し○五月淺草寺五重塔修復○九月牛島所々栽木屋寺院等に菊の造り物出來る、筠庭云、牛島菊の造りもの、出茶屋抔しるしたる紙札張たれども、噂ばかりなりし事あり○【筠補】七月、此頃八丁堀にて、人に似たる犬の子生れて申出るとなり○【筠補】吉原燈籠、近年珍敷趣向、藝州宮島回廊出來たり○【筠補】九月麻布にて、唐もろこしの實變じて、鷄の頭の如き形と成、國芳錦繪に出、これは氣候によりて口して出來る、中は灰の如しと云、他國には往々あり、珍らしからず○九月猿若町より聖天宮表門の通へ、眞直に小路をひらく○十一月二十八日、俳人自然堂鳳朗卒、飯倉に住、始蓑笠庵對竹といふ、谷中天王寺に葬す○十二月五日、暮六時、吉原京町二丁目より出火、廓中燒亡、假宅は、花川戸、山の宿、聖天町、瓦町、淺草山川町、田町、新鳥越、山谷、深川八幡前、同松村町、佃町、同常磐町、八幡宮旅所門前、本所陸尺やしき、時の鐘やしき、入江町、長岡町、八郎兵衞屋敷、辨才天前、松井町等なり、暮より春へ掛て假宅をしつらひ、午年九月元地普請成て引移る、假宅は二百五十日限りとして元地へ移る、此時あらたに出來たる局見せな、吾妻長家、關本長家、永續長家、三長長家といふ、松葉長屋な稻毛長家と改む○十二月十一日夜、坂本町より出火、茅場町表裏藥師境内燒亡、

●弘化三年　丙午　五月閏

今年正月元日より三日迄の間、牛房に毒ありといふ俗說行れて諸人食ふ事なし、筠庭云、午の年なればこの俗說出たるにや、ごばうは牛蒡にて午にあらず、○正月十五日、北風烈しく砂石を飛す、夕八時過、小石川片町の北武家地より出火して丸山へ移り、本妙寺菊坂の邊より本郷御弓町、夫より元町邊又本郷通り湯島町通り春木町邊、神田明神門前、神田社樓門境内神社、并湯島天滿宮聖堂は恙なし、旅籠町、仲町の邊にいたる、湯島の火は駿河臺へ飛で小川町へ燒込、東西神田町々一圓

燒亡し、今川橋向は本町、石町、室町、大傳馬町、小田原町、小船町、堀江町、小網町、茅場町、八丁堀、濱町、永代橋際迄、靈巖島、築地、鐵砲洲、佃島（本願寺迄南八丁堀にいたる、西は御堀端通り神田より一石橋迄、日本橋の向は通一丁目より疊町迄、京橋手前一圓類燒、この間に包れし町々遲速はあれども殘る所なし、翌十六日の晝九時過、炭町の竹河岸にて鎭る、長凡一里十餘町、大小名御藩邸數を知らず、町數貳百九十餘町燒死怪我人數ふるにいとまあらず、湯島圓滿寺三層の多寶塔（開山上人建立の塔なり、又妻戀稻荷社近頃再建して莊麗たる社なりし、も此時燒たり、

筠庭云、親船數艘燒、所々橋落、燒死人多しと云、見及びたるも二十人計りなり、今川橋南詰に十二三人有り之、日本橋江戸橋も燒落、土手藏日本橋の方は舊來燒落ちたる事なきに、此度始めて落る、佃島類燒に付、寄場流人ども三日の間放さるゝ故、諸商人の店に來りねだりがましき事共あり、是を恐れて家業をやすみ居るもの多し、

童謠にそのことだんよと云事行はる、是は去年霜月頃、まるぼうろと云菓子をうりあるく者あり、皮子樣のものを脊負ひ、大聲に「丸山名物まるまるだんよ」といへりしが、しばしありて來らず、それより小童はやり歌にうたひだす、

小兒の戲言に、火事はどこだ丸山だといふは、元よりいひしことなり、本妙寺火事に云傳へてなるべし、

○類燒の貧民御救の小屋三ヶ所へ建られ、其餘の賤民へも米錢を給はる、（富有の高家よりは色々の施なす）○正月十六日、圓覺參更になし○三月より、深川八幡宮開帳○同洲崎辨才天本社修復成就にて開帳○三月十五日より、淺草八軒寺町大圓寺にて、川越在鄕戸妙昌寺祖師開帳○三月より、永代寺地主七渡り辨才天開帳、（昔海へさし出たる島にて有し頃、江城の邊より當社へ詣るに、七ツの橋を渡りける故、この名有りといふ）○四月三日より、湯島社内にて、埼玉郡野島淨山寺地藏尊開帳○四月二十三日、俳師小裝庵確嶺卒○五月晦日、關原大聖院不動堂火、（額堂僧房燒失）○五月十七日、和歌幷國學者鎌倉柱園卒、（五十八歳、御弓弦師、始岸本大隅、後本姓朝田に改稱、權之進、薙髮して露圓といふ、誓願寺中林宗院に葬）○【筠補】五月浦賀へアメリカ船來る由、又琉球へ先年來れるフランス國の船又來る由○六月より、回向院内一言觀世音幷藁苞辨才天開帳○蛛の絲卷成、寫本一卷、（岩瀨百樹七十八の時の著也、安永天明已來世上の風俗を記す）○夏の半より雨繁くして晴るゝ事稀なり、六月下旬大雨彌降續き、洪水溢れ出て、下總羽生領利根川通り堤の邊九尺餘りと聞しが、二十八日子上刻葛飾郡權現堂村より六里上、本川股村堤切れ洪水漲り出、千住邊家屋を浸し、小柄原の石地藏尊肩より上のみあらはる、箕輪の邊一時に水溢れ、床の上三尺ばかりに及ぶ、住居ならずして外へ逃退くとて、溺死のものもありしとぞ、日本堤より見るに蒼海の如し、

筠庭云、六月二十四日、此節利根川滿水、二合半堤切小合の溜防ぎて居れど、土手覺束なきよし、二十七日二十八日、本所北割下水邊少々づゝ出水、二十九日水增來る、床低き處は皆水つく、石原町御勘定方五味善右衞門へ注進、權現堂堤切れ水溢るゝよし、此時晦日なり、七月朔日、或人話に云、昔年の出水は七月十二三日より、少々づゝ水增して引不申處、十七日に至り黑雲の如く渦卷押來り、甚火急の事に有り之、此の處は今日に至り少し減じ候へども當分大汐の節故か、其時々には水增、兎角同斷に水湛へ、諸安心ならず難澁いたし候、

出水の夜より武家は門を開き、高張挑灯を玄關に燈し、町家は軒に挑灯をかけ、往還路次明らかなり晦日の夜、菊川町邊何の風聞にかさはぎ立、夜明るまで騷動す、所々此通りなるが多し、未だ水の入らざる町家、この分にて老少逃去れり、

同月三日曉前時分、早鐘太鼓の音頻りに聞へ、此節毎夜いづことしらず、鐘の聲聞ゆれども、今曉はいと近き程なり、夜あけて止む、是は中川六間の邊切れて水入、龜戸小村井などにて騷ぎたるなり、其水

法恩寺邊へ來る、横川に御助船數艘、これは夜分提灯明らかなり、町家へは日々食物賜はる、近在へは江戸有德の商家よりも、種々のもの施行し、又郡代町方御賄方は、組屋敷へ御用船出、諸方船持御用に出、茶船一艘に船頭四五人あり、船は御用次第あれども船頭不足のよし、さも有べきなり、十二日天神川あふれて町中に水來る、此時瓦町川岸通所々土俵にて塞ぐ、龜有村邊溜水切落したるなり、小梅通押來る、七月十五日水大方引、

此節異船又々浦賀沖に來る、先の船再び見へたるよしなり、

利根川添の處は作物損じたれども、當夏麥作いづくも宜しく、上方東國すべて豐作のよし、諸民安堵の思をなす、

○【筠補】七月二十五日頃、高島四郎太夫、安部攝津守へ御預けと成る○【筠補】八月朔日、風なく美日なり、先月十一日も二百十日なりしかど穩なりき○六月十五日、山王御祭禮社頭御修復により、同月廿九日に延る、此節洪水未だ滅ぜず、七月にいたり彌大雨降、七日八日より再水增して、大川水勢すさまじく、大川橋新大橋、永代橋損じて往來止り、兩國橋のみ通行なれり、本所邊所によりて水軒端に付く、本所の士民夜中俄に江戸をさして逃來る人有、其混雜いはんかたなし、夫より船持に命ぜられて、日々助船數艘を出されて、これを救しめらる、此輩馬喰町の旅人宿に預けられ、やがて住所へ歸らしめ給ふ、この夏兩國邊夕涼なし、諸所船宿業か休む○【無補】八月六日、護持院原に於て、井上清十郎父の讐本莊茂平次を討つ○當年在々にも災あり、上州桐生、倉賀野、野州宇都宮、佐野、本庄宿、熊ケ谷、深谷、行田等其外大火あり○喜多靜廬丙午辨一卷を著輯す、寫本、世の人丙午の年には災厄ありと云、且此年に生るゝ男女を忌む事世のならはしとなりたれど、忌むまじき事其餘祥異等の例、舊史を徵してくわしく述たり、

○弘化四年　丁未

正月十一日、夜亥刻、下谷通新町より出火、千住三昧の寺院殘らず燒亡す○正月廿八日、曉丑中刻、桶町より出火、三町程類燒○三月三日より、西新井弘法大師開帳○三月五日より、關原不動尊開帳○同十八日より、淺草寺觀世音開帳○三月より、淺草燈明寺一向三尊の彌陀如來開帳○湯島社地にて、野島地藏尊開帳、去年の殘り日かずなり○五月より、淺草寺町大仙寺にて、武州馬場村諏訪明神開帳○三月廿五日、小山田與清卒、國學をよくす、幼名高田茂右衛門、又六郎右衛門、後に小山田將曹と改、號知非齋、松の屋、擁書倉といふ、今年六十五歳、深川靈巖寺中靈哲寮に葬す、

筠庭云、與清は生國はしらず、或云、相州津久井の人なりとなん、高田氏の養子となる、其頃よからぬ事どもありて、暗き所にも入りしかど、幸にして免されたり、夫より書を集めて擁書倉と名付し、處はもと見世店の藏なり、此號近藤正齋と暗合す、又知非齋とも號して、舊惡を改めしは文字の蔭なり、

○河原崎芝居春の狂言に、蟲拳、狐拳、虎拳の所作を催しけるが、世に行れて諸人酒席の戲れにこれを眞似たり○春淺草寺の奥山へ見世物に出さんとて、朝比奈の人形を造る、頭の大き一丈餘、煙草入の大さ二間なり、なかば出來しかど、事ならずして止ぬ、後につくりしは惣丈一丈餘の物也○三月二十四日、信州大地震人多く死す、江戸も此夜少しの地震あり、今年三月八日より、川中島善光寺如來の開帳ありて、諸國より參詣群集する事稻麻の如し、然るに淺間山の烟常よりも減たるを怪しみ居たるに、三月廿四日晝夜快晴にてありしが、夜四時頃俄に大地震ひ出し、立所に家屋を覆し、壓に打れて卽死するもの幾千人といふ事を知らず、善光寺近邊の旅店は參詣の輩泊り合して、この禍に逢ふもの有、ともに數へがたし、無い程この倒れたる家より火燃出て、大火と成る、善光寺の本堂は頃たる儘殘り、其餘は悉く灰燼となんぬ、この時山中にのがれて利益を蒙り、一命を全ふせしもの數多あり、又雷鳴の如き音ありて、尙ゆり出し夜明に及ぶ迄八十餘度、四月五月にいたりても猶止事なし、大地は裂けて泥砂涌出し、其間へ人家墮入、丹波島より二里川上、虛空藏山廿丁程崩れ犀川へ落入、洪水溢れ丹波川水押出し左右湖のごとし、燒死の人馬幾といふ事を知らず、或筆記に三萬人とあるは大凡の積りにて證としがたし、水内郡は殊に甚しかりしとなん、其他山崩れ水溢れ一村を流す、たまゝ生殘るものも片輪となり、米穀盡て飢に迫り道路に悲泣す、この間地震は止時なく、用水は泥水となり雨遠にして餓に苦り、程なく官府より小屋を建られて、この窮人を育し食物を給はりけるとぞ、誠に近年の大厄にして聞く毎に戰慄す、開帳の前門前へ大なる高札を建しに、一夜にしていづちへか失ひ行方をしらず、再建るに又行方なし、三度にいたりて晝夜番人を付たり、是この凶變を知らしめ給ふさとしならんと跡にていへりとぞ、

筠庭云、此時落書流行拳文句、

「さきは信州善光寺、開帳ぶら〳〵出かけます、泊り屋ぐら〳〵御堂へ參りましよ、だんだん〳〵くえてきた、爺さまも婆さまもひしやがれた、供は

ほう〳〵にげてきた、迎にさあきなせ、

これは當春、猿若町二丁目の狂言に拳ありて、このごろ流行れるなり、

○五月十六日、曉八ッ半時、横山同朋町より出火、橘町、馬喰町、横山町邊類燒す、朝五ッ時鎮る○六月大傳馬町、小舟町、天王神輿御旅出の事、去年迄五年の間休しが、今年より渡しまゐらす○史籍年表刊行、一卷伴信友著○目黑茶屋菊造物出來る○十月吉原秋葉權現祭の時、花出しねり物等多く出す○聲曲類纂六卷梓行、月岑著、

◎弘化年間記事

根岸新田といふ所に梅屋敷をひらく、園中廣からねど紅白枝を交へて頗る壯觀なり、庵主富右衛門といふ、此家にも鶯の會あり、抑此地ハ初音の里と號し鶯の名所とす、東叡山凌雲院主某、初音の里のゆゑよしを記して此所に碑を建らる、碑陰に當時江戸に勝れたる鶯の名寄を錄し○革色といふ染色、石垣しぼりといふ染模樣はやる○谷中瑞林寺塔頭久成院妙法善神社祈願の者多し○高輪石神、同所安泰寺境内へ移る○七年以來雪降ること稀なり○繪直しといふ戯れ行る、無心にして一ッ二ッの點畫を施し、餘人これに筆を加へて畫になすの戯にして、丈人の喜ぶべきものにあらず、

筠庭云、繪直し、惡繪などいふ戯れ、昔もありしが、さして行はれもせず、文化八年辛未四月頃、京師にて繪直しあり、點者より一筆書て出すを、人々思ひよれる儘に是を繪となす、點者それを選みて甲乙を定むる事なり、

◎嘉永元年　戊申　二月十六日改元

今年の大小章の字を以て暗記す、運筆の順により縱を小とし横を大とす、章○二月六日より晴天十五日の間、筋違橋御門外加賀原に於て、寶生太夫勸進能興行あり、五月十三日に終る、興行の日毎に遠近の貴賤輻輳して、錐を立るの所なし○【筠補】二月十一日より兩三日、兩國邊見世物類不ㇾ殘休む、是は同所元町質屋の下女、講釋場の茶番男に通じ、又外にも密夫ありけるに、茶番の男憤り、十一日の朝質屋の店に拔身を持て入、亭主は五ヶ所手負、女房下女も手疵受、十三日に亭主は死たりとぞ○二月二十九日、喜多靜廬

卒、八十四歳、名讓言、稱三左衛門、號梅園、西久保天德寺中教受院に葬す、内外の書籍に涉りし人なり、

筠庭云、姓は北なり、喜多にはあらず、北靜廬はもと樽三などの如き料理屋なり、家名住所も聞しかど忘れたり、屋根屋が聟となり、茶屋は滅したり、木阿彌が社中にて狂歌師なり、網破損針金と云へり、一度古本のせどりと云ふものになりしとか、書籍の表題よく覺へたる人なり、性質風雅なく、祭禮などの繁華なるを見る事を好めり、

○二月二十九日より、芝泉岳寺八相曼荼羅開帳○春六阿彌陀如來六ヶ所開帳○三月三日より、青山善光寺にて、大坂知光寺彌陀如來開帳、此時善光寺本堂普請成就せり○三月廿三日夜、赤坂表傳馬町壹丁目より出火、數ヶ町燒亡○四月藤澤山游行上人化益、日輪寺旅宿、また松秀寺へも宿せらる○五月護國寺山内松の梢に鷹巢をくふ○六月初旬より旱○六月二十五日より八十日、回向院にて、嵯峨釋迦如來開帳、今年の開帳參詣例よりは少し、境内唐人踊、奉書流り杯とて色々の見せもの出たり○七月より、淺草本藏寺にて、甲州青柳村福昌寺祖師、同所蓮光寺にて、上總奥津妙覺寺祖師開帳、朝參り多し○八月廿六日、浮世繪師英泉終○八月二十三日、北畠玄惠法印五百年忌、市谷仲の町金春氏にて能幷狂言興行あり、按ずるに玄惠法印は觀應元年六月十日に寂せり、嘉永二年に至りて五百年也、今年取越たる也○八月二十九日、御連歌師壽阿彌曇齋卒、八十歳、號如是緣庵、空華、戲號劇神仙と云、小石川傳通院寺中昌林院に葬す、

筠庭云、壽阿彌はまし屋といへる菓子屋の二男なり、五郎作と稱す、北山の弟子となりしが、勤學もせず遊びあるき、戲場を好み田舍などに出ては、旅役者と成し事もありしと云へり、壯年の頃松本幸四郎を好めり、もとより歌など少しはよみしかど、文をかくには漢文をよむやうなるかな書して終れり、一たび千葉氏の聟と成て、別に蒔繪師の株を求めてもらひしかど、氣違ひの樣なる男なれば、厭はれて分れたり、これが能は芝居の大帳をよむ事上手なり、是又一奇人といふべし、

○十一月淺草東仲町大路に堀拔井を掘る○十一月六日、曲亭馬琴卒、八十二歳、名解、號蓑笠、玄同、著作堂等の數號あり、始瀧澤、清右衛門と云、薙髮して篁民といふ、

著作の事は世の人普く知る所也、天保中明を失ひて後も猶著作少なからず、小石川茗荷谷深光寺に葬す、著作堂隱樂蓑笠居士と號す、辭世、世の中の役をのがれてもとのまゝかへすぞ雨と土の人形、

筠庭云、曲亭は京傳と一雙に稱せらる、されど京傳は漢文字よめず、讀本と云ものは曲亭に及ばず、唯京傳は和らかに、曲亭は辯說をかざる、もと京傳が深川に居し時、馬琴いまだ著作したる事なかりしが、京傳がもとに行て弟子たらん事を求む、其頃馬琴糊口もならねば、京傳口を入て繪雙紙屋蔦重が店に遣したり、馬琴俄に十露盤習ひて、其店の番頭を勤めたりと、京傳が話なり、

○十二月九日、夜亥刻、北品川歩行新宿より出火、壹丁目迄燒る○目黑行人坂大圓寺明和九年の災後廢たりしを、今年再興の企ありて本堂を建、釋迦如來毘沙門天を安ず○川口善光寺本堂普請成就○神代文字考一卷梓成、鶴峰戊申編輯○累歲風雨時に順ひ、百穀豐饒にして都鄙の良賤閑を獲る事多きが故、殊に快樂をなし、東台の春の花墨水の秋の月は更なり、神祭佛會或啓龕の場に賽し、春冬二度の相撲に輻輳し、花街に戯れ梨園に遊び、又は市井の囂塵を避け、多麻川に年魚を汲では樽前に歸路を忘れ、眞間に丹楓を賞しては詩を賦し歌を詠じ、斜陽を惜む輩も尠からず、實にこれ昇平の御恩澤にして、造次顚沛忘るまじくこそ、

枝直

おろかさのたることしらぬ心にもあらずやはある御代のめぐみに

千蔭

筑紫の海えぞのちしまのおきかけて浪たゝぬ世は濁るともなし

空阿

いくちよのはてしもしらぬむさしの、野風になびくよもの民草

宗固

かりはこぶたみもたのしめ此秋のいなばの露のふかきめぐみを

桂山

なさまれるよはふく風もしづかにてあさげの烟つゞくたみのと

嘉永改元戊申季冬穀日稿成　　編者　齋藤市左衛門幸成

増訂武江年表卷之八畢

増訂武江年表卷之九

●嘉永二年　己酉　四月閏

正月廿二日夜、芝神明町より出火して神明宮羔なし神主宅燒る、宇田川町、濱松町、中門前等類燒に及べり○同廿四日申刻八官町より出火、太左衞門町、佐兵衞町、山王町、丸屋町、八官町、南大坂町、芝口北紺屋町等類燒せり○【無補】二月七日初午、元烏越松浦侯屋敷家中の小供、狐に喰殺されしとの風說あり○二月八日、儒者朝川善庵卒、名鼎、號學古塾、稱鼎、小梅常泉寺に葬す○三月六日より、獨樂廻し竹澤藤治改梅升、其子萬次郎改藤次とゝもに、兩國橋西詰に大なる假家をしつらい、獨樂に幻戯の曲を交へ、先年に倍したる奇巧をして看せ物とす、見物の諸人群集をなし、九月の末に至て停む○三月幕府下總國小金原御鹿狩、十七日夜子刻御發輿、十八日夜亥刻頃還御○新大橋御掛替あり○同月廿日より六十日の間、赤坂一ッ木威德寺不動尊開帳、境内に芝居見せ物等出る○同廿五日より十五日の間、鰮戸天滿宮境内法性坊社開帳○同廿九日より三十日の間、西葛西領花又村大鳥大明神開帳、大なる竹把三千二滿假面其餘色々の奉納物あり、所矢納辨才天開帳○【無補】四月四日より七日間鳴物停止、紀州侯逝去の故なり○四月十二日より三十日の間、本所回向院に於て、出羽國湯殿山黃金堂お竹大日如來開帳、執事良芝坊、お竹の蔽膝、庖厨の板流し等、此前の開帳の時とは其品かはれるもなかし、雨天續きて參詣少なかりし○同十三日、浮世繪師前北齋爲一卒、九十歳なり、淺草八軒寺町誓願寺に葬す、辭世句「人魂でゆくきさんじや夏の原」翁名は長政といふ始勝川春章に學び春朗と號す、後倭屋宗理に學びて二世の宗理となる一號群馬亭ともいへり、自ら一化をなして葛飾北齋と改む、夙齡の頃草双紙の畫作ありて時太郎可候としるせり、文化の末より戴斗又爲一と號す、寛政の頃より嘉永の今に至りて、刻板の密畫讀本のさしゑいくばくと云ふことを知らず、北齋漫畫其時の粉本世に行れ、九旬に及びて筆力衰ることなく、三都其外門人數ふるに遑あらず、娘榮女も又板畫けり○同月淺草源空寺にて、俠客幡隨院長兵衞が二百年法事執行あり○同廿日より廿四日迄、牛込原町幸國寺祖師開帳身延山靈寶を拜せしむ○閏四月より五月まで、霖雨冷氣を催せり○五月十九日、大風雨家屋を損ふ○深川靈岸寺、本所彌勒寺本堂再建成就

○五月高田穴八幡宮樓門再建成○【無補】六月五日明七ッ時、本材木町出火、一町全焼す○六月十七日十八日大風雨○廿二日雷鳴、夜五時より深夜迄止時なく數ヶ所へ墜る○六月廿七日詩人菊地五山卒、名桐孫、字無弦、號娛庵、小釣舍、稱左太夫○七月十九日より六十日の間、深川淨心寺にて、身延山奥院孝樂院、祖師七面明神開帳、參詣群集す、【無補】此時毎朝未明より、深川開帳場へ朝參り、太鼓打ならしてれりゆく、八月七日に至りて之を禁ぜらる○神田相生町向參前舍に、心學師備後の人中村德水出席、聽人多し○同月大雨度々降り、常陸下總洪水溢溢し、人家溺る○投扇の戯行はる、大坂よりはやり來れり、投扇は投壺より出て、安永の頃大坂の人工夫しけるとか、源氏物語五十餘帖の題號によりて、其名目を定め甲乙を爭ふ、寛政の頃また天保中にも江戸に行れしなり○今年より四谷新宿後正受院安置の奪衣婆の像へ、諸願をかくる事行れ、日毎に參詣群集し百度參等をなす、これ迄は口中の病を守たまふとて、信心の者もありしなり、これに依て賣僧ども種々奇怪の妄說を云ふらし、香花を募ること甚しかりければ程なく露顯し、官府の御所置に依ておのづから群集のこと衰へたり、又此頃愛宕下の吟窓院へ、だつえ婆の巨像を安置す、坐像にして一丈餘もあるべし、古筆了伴の寄附也と

ふ○八月二十四日、夜子中刻、神田松枝町蠟燭屋治兵衛方より出火して、松下町代地、久右衛門町代地、横山町代地、岩元町道有屋敷、小傳馬上町、元柳原六丁目、大和町代地の邊、龜井町、小傳馬町、旅籠町、大丸は殘る、大傳馬町二丁目、堀留町焼込、通油町一丁目、田所町、長谷川町、新乘物町、新材木町、岩代町、堺町、葺屋町、堀江六間町、元大坂町、甚左衛門町、小網町一丁目横町にて明方に鎮る、町數三十四町、長八町、幅平均して二町餘の類焼なり、宅屋數と銀座は差なかりし○同二十五日、豐海橋西新川通出火、三町ほど焼る○九月富士講の行人を禁ぜらる、身祿派清康派等の流派あり、この内俗人の身として病氣平愈の加持祈禱を行ひ、奇怪の說等いひ觸しける故なるべし○江戸割繪圖梓行、高柴三雄蔵、櫛に寶暦より明和安永迄に、狐狸軒瀬名貞雄君のえらばれし割繪圖の體裁にならひて訂正し、方域を分ちて一枚づゝ次第に梓行したるものにして、三十四枚を全部とす、これに續て景山致恭といへる人あらはせるものも、又梓行して世の便利となせり○淺草寺荒澤不動堂の相殿にありし客人權現を、あらたに祠を營て安置す、青樓の輩など參詣して貨殖を祈る、是は客人の文字にのみよりて詣るなるべし、然ども客人の神は山王廿一社の内にして女神なり、されば娼家にはいらぬ神なりと南畝翁の假名世說にもいへり、この類世に多し、紺掻の家々にて愛染明王を祭るは染の一字により、或は人丸は鎭火の神なり、垣の許にて火留るといふ緣

語なりといふも亦此類なり○十月目黒茶屋町酒肆茶店の園中に、菊の花を以て人物其外の造物出來て、行客の足を停む、また牛御前境内長命寺境内にも、菊の造もの花壇等出來たり○同晦日暮時より雨降出し、夜子刻より大風雨雷鳴あり○十一月三座歌舞妓芝居役者入替りなく、翌年正月になる、茶屋飾物は例の如し○同七日、巳下刻、麹町平河町三丁目より出火して、同町二丁目迄焼る○同廿三日、暮時過、下谷南大門町より出火、長者町、練塀小路武家地類焼せり○同酉の日、淺草田甫鷲明神酉の市の日なれど、別當長國寺に此程事ありて開門なし、諸人門外より拜す、商人は例の通り出る○十二月九日夜五時過、富澤町より出火、長谷川町、難波町、高砂町、住吉町、新和泉町類焼○同廿三日曉、千住宿三丁目より出火、旅舍多く焼亡せり○淨瑠璃語三世富本豐前太夫豐前掾と受領す、文久の頃より寶琢翁と號す○近年花菖蒲を愛する人多く、葛飾郡堀切村わけて多し、仲夏の頃諸人遊觀す、小村井村里正孫右衛門が園中に、梅樹また花菖蒲其餘四時の草木を栽て、盛の頃諸人の縱觀をまつ、寺島村里正三七が園中も、又花菖蒲其餘の草木多し、本所四目植木屋文藏、芍藥の數種をやしなふ、開花のころ諸人遊賞せり○種痘の事近頃より弘りし事なれど、此頃牛痘をうゆる事京師より行れ、蘭學の醫師專ら是を用ふる事盛に行はる、深川海邊大工町桑田立齋此術にくはしく世に行れり○宇治紫文齋淨瑠璃、一中節より出たる由なり、一派をなして行はる○近年烟管のラウ竹短きを好み、惣たけ五寸以下なり、明治以來は西洋の風を學びて、殊に短きを用ふる人多し○此頃四谷内藤新宿の旅舍豐倉屋何某、同所北裏通北側の谷をならし梅樹數株を栽、また中央に池を掘り、三方へ心匠の亭をつくり設け、料理を售ひ春秋亭と號し、遊觀の所とす、されど數年を經ずして閉店す○【無補】去年の秋より錢拂底にて、是月に至りては彌甚しく、少々の買物にはつり錢を斷りて賣らず、商家の店頭に金子差引一切御斷の札を張る、

○嘉永三年　庚戌

正月元日、申刻より日蝕三分半○同七日、昨夜中より雪降出し十年ぶりにて積る○龜戸天滿宮追儺の神事毎年節分の夜執行ひしを、今年より正月六日に改む○同中旬より、廣尾古川の邊に蛙合戰あり○二月朔日、亥下刻、下谷金杉町屋燒亡○三日より六十日間、上野清水堂觀世音開帳○五日晴天、彼岸の入なり、乾大風土砂を飛す、巳刻麹町五丁目續き岩城升屋の後なる、高田放生寺の拜借地に在る見守番人の家、炭竈屋より出火して、烟西東南に被り、一時に燒ひろがり、黑烟天を焦し同町五丁目より一丁目まで、隼町、平川町、山本町、谷町邊、又武家地多く燒け、定火消御役屋敷、京極侯、明石侯、三宅侯、大村侯、鳥居侯、山王門前町屋、山内は恙なし内藤侯、井伊侯、細川侯等の御屋敷類燒に及ぶ、藝州侯は別條なし、夫より黑田侯、内藤侯、九鬼侯、丹羽侯、柳澤侯より外櫻田へ飛で、京極侯、木下侯、相良侯、御勘定奉行御役屋敷、加藤侯、朽木侯、兼房町、和泉町、備前町、伏見町、鍛冶町の邊、愛宕山本社二王門額堂、末社別當所末寺、同所麓東西大小名やしき一圓、眞福寺、天德寺、同門前青松寺へ燒込、增上寺は支院數宇燒け、神明社濱の大久保侯より金杉橋、松平因州侯下屋敷、其外柴井町、宇田川町、神明町、三島町、七軒町、中門前、片門前、濱松町、新網町、湊町、西應寺町、同朋町濱町、金杉一丁目より五丁目邊の町屋一圓、圓珠寺、正傳寺、安樂寺、德覺寺其外此邊の寺院類燒して、芝橋際迄濱手に至り、夜戌下刻漸に鎭火せり、會津侯、仙臺侯、新錢座は殘る、諸侯の藩邸五十二宇、小名九十二宇、町院十九宇の餘、町數五十七町なり、長凡三十三町餘、幅廣狹平均して四町の餘と聞り、燒死怪我人數ふべからずとぞ○同十三日、昏過き星月を貫く○同廿二日、曉七時、芝森元町續武家地醫師服部某の宅より出火、飯倉一丁目の邊燒込、明方鎭る○三月三日より、淺草寺町正覺寺に於て、足立郡新曾妙願寺祖師開帳、巨像なり○同四日より、淺草寺觀世音開帳、參詣群集す○同九日より、淺草寺町本藏寺に於て、武州小金

領八木本妙寺祖師開帳○同二十日より三十日の間、青山善光寺一光三尊の彌陀如來開帳、境内みせ物等出る○同日より向兩國に於て、奥州二本松百々目木村產七歳の男子、惣身に鱗を生じたるを看せ物とす○俳優市川海老藏號白鳥、驕奢に長じたる故を以て、天保の末追放せられしが、今年大赦に遇て二月歸鄕し、三月十七日より再び芝居へ出る○四月十五日、午中刻、千住宿二丁目より出火、五丁目まで燒る、去年燒殘りし處なり○同十七日より七日の間、十三代目中村勘三郎代替り壽狂言興行○同十七日夜、北品川東海寺、山上牛頭天王社并神樂殿とも燒亡、定例神樂の夜に過ちたるなり、程なく御再建あり○【無補】是月流行詞に人を呼で返事をすれば鹽梅よし、又はよかつたねなどいふ、先年ぽかんといひしと同じ事也○五月八日、暮六時過、本材木町一丁目より出火、青物町、左内町、音羽町、新右衞門町の邊、町數十五町、長三町十間餘、幅一町半程燒込、明方に至りて鎭る○【無補】五月十八日より七日間鳴物停止、尾州侯逝去の故なり○【無補】五月二十六日、大男生月鯨太右衞門瘡毒にて死す○六月朔日より三十日の間、本所御船藏前東大寺勸進所にて、南都二月堂觀世音開帳○同六日、畫人宋紫崗卒、七十歳なり、稱補本雪溪、紫石の末なり、東本願寺地中德本寺に葬○六月中旬より曇天多く、冷氣にて病者多し○【無補】六月二十六日より三日間鳴物停止、西丸御廉中壽姫逝去の故なり、法號澄心院、此君少し跛なり、歌川國芳筆三枚續の錦繪女醫師のもとに療治を受くる圖中に、美婦の下駄と草履とを、かたへに履きたるを畫きしは、此君の事を諷せしものなりといふ○【無補】是月牛込横寺町長五郎店清吉妻きんの連れ子まつ十一歳、食物振舞猫に異ならずとの噂ゆり、見物に行く者多し○七月より御塹浚はじまる○七月より兩國橋手前にて、丹後國加佐郡大江村の產、惣身に黑毛生じたる女兒名はふくを熊、小僧と名づけ見世物とす、其後所々にて見せけるが、見物すくなかりしかば、伊達もやうの衣服をきせしめ、市中へ菓子を賣あるかせたり○秋中芝神明宮境内寶祿稻荷開帳○八月八日、夕七時頃、又夜五時頃より大雨大雷、曉に至て江戸并近邊百餘所へ墮ける由也、諸人恐怖す○秋米價貴し、程なく下落す○同十日より六十

日の間、目黒瀧泉寺に於て、秩父我野子權現幷本地釋迦如來開帳、靈佛靈寶等を拜せしむ、（子聖幼稚子の日丸像同御母阿字女像あり）別當天龍寺○八月末、櫻樹の返り花咲たる所あり○深川越中島築足地出來す○角筈村鐵砲調練場を廣げらる○八月日不詳歌人本間遊清卒、（號百里、七十餘歳なり、隨筆みゝと川といふ三十餘卷あり、面白き書なり）○【無補】八月十五日、深川八幡祭禮中喧嘩あり、卽死怪我人多し○【無補】是秋牛御前旅所へ、北條屋敷内の稲荷をうつして小屋をかける○十月六日小石川一行院にて、德本上人三十三回忌法會を設く、貴賤參詣群集せり○十六日曉八時、小石川下富坂町續き地より出火して、一町餘燒る○晦日雨降、琉球恩謝の使節江戸へ着す、（正使玉川王子、副使野村親方なり、十一月十九日と廿二日登城、十一月廿七日上野參詣す、十二月廿日發足す）○上總國より鬼若力之助といへる男童、冬角力の時土俵入をなす、（八歳にして丈四尺、目方十八貫目）○北本所番場にありし遠州秋葉山權現の旅宿、天保中橋場の總泉寺へ移りたりしが、今年又本所御船藏前中央寺へ移り、講中より本堂を新たに建替て、當寺本尊大日如來の相殿とす○三座歌舞妓の入替り顔見世狂言、古例の通り十一月になる○三崎法住寺諸堂修復成る○【無補】十一月十九日、先年脫牢せし高野長英、原三伯と變名し青山に隱れしが、捕手の爲に縛せられんとして自刄す○十一月二十九日、曉丑下刻、本船町の酒屋長兵衞宅より出火、室町一丁目、小田原町、安針町、長濱町、伊勢町、瀨戸物町等類燒し、明六半時過ぎ鎭る○【無補】十二月三日夜五半時、千住出火し、翌四日箕輪金杉類燒す○十二月末風邪流行、春にいたる○淨瑠璃語常盤津文字太夫豐後掾と受領す○冬湯島天滿宮社前に、永人石といふ物を立る、（男女の緣組を求るもの迷ひ子を尋るもの其外祈願の旨を書して此石の片面に貼す、餘人よりは其心當あるは記して片面に貼して求る所のなやだちとす、京師熊野社境内にあるものに擬しけるよしなり、）

○嘉永四年　辛亥

正月四日曉、新肴町より出火、鎗屋町、銀座三四丁目、尾張町、新地休伯屋敷、三十間堀等、町數十町長二町餘幅平均して一町二十間餘類燒に及べり○【無補】正月十四日より十七日迄降雪○同十九日より十日の間、狂言座十三代目市村羽左衞門、竹之丞と改名相續壽狂言興行○春より所々に芝居興行あり、谷中惣持院門前明地、湯島天神社地、茅場町藥師境内、（開帳に付てあり、）本所回向院境内等なり○二月十六日より六十日の間、眞先稲荷社開帳、雨天續て詣人少し○同日より五十日の間　牛込原町圓福寺布引祖師鬼子母神開帳○同二十五日より三十日の間、芝神明宮内天滿宮開帳、（小泉氏）○同二十八日より百日の間、相州江の島窟辨才天開帳、江戸より參詣多し、（岩本院執事）○同晦日夜、目黒瀧泉寺門前茶屋町燒亡○春より山の手邊に强盜あり○三月朔日より六十日の間、下總國駒木村成顯寺諏訪明神、淺草幸龍寺に於て開帳、（日期師開眼の像なり）○同三日より四月十四日まで、深川猿江摩利支天開帳、（日先社といふ）○三月菱垣廻船積仲間、千九百九十五株と唱へし諸商賣組合問屋、幷に仲間等の名目再興せらる、（天保十二丑年停止あり、しを今年再興せられたる也）○三月吉原角町萬字屋茂吉、江戸中へ遊女大安賣の報帖を配る、（これにならひし家二軒あり）○米價去年より續て貴く幷風邪流行す、依て町會所に於て、市中貧困の者へ御救米賑給あり○此春より雨しば〳〵降り、夏の末より秋へかけて炎威殊に盛にして疫病行はる、七月の頃、は東海道大井川砂礫やけて渉りがたく、數日川どめのことありしとぞ○諸人編蘭笠（あやがさ）をかむる事行はる、間もなく廢れたり○春より浪花の幇間市丸新玉などいふもの、江戸の戲作者十返舍一九が編の道中膝栗毛を趣向とし、世にいふ茶番狂言の脚色にて、滑稽を旨とし兩國橋西詰にて興行す、見物多し、（其後所々へ出る）○四月朔日より六十日の間、茅場町藥師如來開帳、參詣多し、（寶物の内に豐太閤の馬印千なり瓢の一を見する木製にして金箔剝落せり、）境内芝居興行あり○同三日、北大風未刻、四谷鹽町二丁目續北寺町邊武家地より出火、鹽町、傳馬町、四谷御門外迄、其外組屋敷寺院多く類燒あり、（泰宗寺も燒たり、）長九町三十間餘、幅平均して三町廿間なり、また同日未刻過、内藤新宿の鰻屋より出火、旅舍大方燒亡せり、長六町餘、幅平均して

四十五間程なり○同十一日朝、荏原郡大井村御林町の海濱へ小鯨一喉よる、長三間餘、頭長三尺八寸餘なり、死て後なり、淺草寺奥山へ出して見せ物とす、臭氣たえ難きゆゑ見物少し、又深川にて得たるスナメリといふ九尺計の魚を鯨と號し、兩國橋畔にて見せ物とす○同廿日より六十日の間、東本願寺地中德本寺に於て、三州勝鬘皇寺聖德太子像開帳、土佐光信筆太子傳繪卷四幅吳道子佛畫其外靈寶多し○夏より兩國橋西詰曲馬見世物繁昌す○五月五日より六十日の間回向院境内に於て、豆州八丈島爲朝明神像開帳、境内へ見せ物多く出る、縫物細工と、ふ見せ物出る、其内に二丈餘の大黑天あり、腹の内より壽老人出て躍る、ことあり○同十三日儒師大黑梅陰卒、五十五歳也、本郷興安寺に葬す、梅陰稱を龜二郎と云、天明中北亞米利加魯西亞等へ漂流して、寛政中歸朝せし伊勢白子の船頭幸太夫が子なり、父殁して後市店に奉公して、其主家の哀へし時忠義あり、後九段坂上小宮山侯の藩にあり、儒學教授をもて業とせり、大黑をもて氏とすることは、幸太夫大黑丸の船頭たりし故とぞ、母に仕へて孝ありし人なり、名利をいとひて世人に交らず、故に名をだに知る人まれなり、死後事跡をしるして牛島長命寺へ碑を立たり○六月廿一日より三十日の間、小日向大日坂、妙足院大日如來開帳、日く れ方詣の人多し○【無補】七月四日丑の日、土用の入も丑の日なれば、眼の呪とて家々の門口に線香をたてる○七月十七日夜、橋場貨食舗川口某自火にて燒亡、間もなく再營して商をはじむ○同廿日夜雨、大雷所々へ墮る、凡三十餘所といふ、其以來晴天廿五日つゞき、八月十六日に至りて雨ふる○同二十八日より六十日の間、甲州山梨郡初鹿野村天目山栖雲寺毘須羯摩天作摩利支天勝軍不動尊、回向院にて開帳、武田家の遺物等靈寶多し○秋より猿若町一丁目中村勘三郎が芝居にて、中古下總國佐倉にて事ありし佐倉惣五郎が事跡を狂言に取組興行、俳優市川小團次この役をつとめる、柳亭翁が作の田舍源氏といふ稗史をつゞり合せたり、見物の貴賤山をなし、佐倉の村民も此噂をきゝ、競ふて江戸に來り此芝居を見物せり、江戸よりも芝居掛りの者、各報賽として彼地の靈社へ詣して香火をさゝげしとぞ○【無補】八月二十五日、龜戸天神祭禮に付開扉あり○九月十七日、夜子中刻北大風、淺草門跡添地長泉寺より出火、同寺中四宇并報恩寺本堂其外燒亡し、其邊は殘り飛火にて阿部川町一圓、新堀へ出、淨土の龍寶寺等燒亡す、長三町四十間、幅平均四十餘間といふ○巣鴨染井の里造り菊今年は甚少し○十月十八日晴天、淺草寺輪藏再建新始の式あり、十方に勸化して建る所なり今日見物多し○十月櫻花所々に咲く○鰹多く釣れる○兩國橋西詰に虎の見せものとて出る、是は豐後國より生捕りし猫の大なるものなりといふ、聲云、是時其鳴く聲の聞へざる樣、拍子鳴物にて紛らしたりといふ○十一月より、不忍池辨財天の境内へ經堂を建る、翌年閏二月成就せり○同六日、畫人大西椿年卒、俳竹之助、字大壽、號楚南、運霞堂、淺草寺地中金剛院に葬す○【無補】十一月十五日、鷲明神緣日、堀田原池田屋が催しにて、幇間及女藝者召連れ、舟にて淺草の鷲明神に詣で、夫より向島へ渡り大七にて仕度す、道中すべて柳亭種彦作田舍源氏をまねびて裝飾し、土手通りを大川橋の方へ練り行く、舟は橋の邊へ待せ置きたるが絹の幕を打ちたり、此邊往來繁き處なれば、見物夥しきに乘じ總踊りを演ず、此事官に聞へ御咎にて、二十三日北御番所にて手鎖になりたる者二十六人（内女九人）なり○十二月二日、明六時前、神田橋内松平越州侯屋敷火事○同六日、曉八時、淺草御藏前大護院門前町屋より出火、八幡宮は殘り、三好町黑船町等河岸まで燒る、凡そ一町餘燒失○同十四日、曉九時半小傳馬町二丁目葛籠屋源助宅より出火して、通旅籠町、田所町角迄燒る、大丸屋は殘る○同二十日、夜子刻過、馬場先御門外松平因州侯屋敷より出火、土州侯少々燒亡、松平右京亮殿、南町奉行御役屋敷、永井侯屋敷等類燒せり○同二十五日曉、九段坂下火事○同二十九日丑刻、駿河臺甲賀町火事○當冬更に雨なし、春へかけ度々火災あり○元赤坂町肴賣鐵五郎が男金太郎、三歳にして武鑑を暗記す、又新材木町丸屋德次郎が男藤吉、四歳之もまた武鑑を暗記す○海老色といふ染物はやり出す、

○嘉永五年　壬子　二月閏

正月四日、巳刻、米澤町三丁目南側の蕎麥屋より出火難波橋の手前、藥研堀埋立地、兩國橋手前、廣小路の西側、横山町三丁目、馬喰町四丁目、淺草御門の際迄燒亡、風もあらざるに燒廣ごり、黄昏に至り鎮る、長二町四十間、幅平均五十間の餘なり○同六日暮時、麹町山元町より出火、麹町四丁目五丁目、平河町燒亡、岩城升屋の向側迄燒る、長二町程なり○同八日、曉丑刻過、光り物乾より巽へ飛ぶ○去年冬より更に雨降

らず、火災度々に及ぶ、依て正月十五日より、火の元守方嚴重の御沙汰あり、町中番屋人數を募りて晝夜に怠らず、時々刻々地所毎に路次内を見廻り、天水桶、竹階子、差股、龍吐水、水鐵砲、水桶、水籠、目印の幟、挑灯等、救火の要具を整へて飾り置り、又大風の時は拍子木を打て相圖とし、貨食舗、河漏肆、豆腐屋、錢湯其外大火を焚く家は、連日其活業を停むべき旨を示さる、「拍子木に寢られぬ風の頭痛には、むべふり出しぞくすりなりける」○【無補】二月朔日、大雪、寒氣強し○二月十九日、千駄木七面坂下紫泉亭（植木屋宇平次といへる舊家なり）梅園をひらく、又四時の花を栽、盆種の艸木を育て、崖のほとりに茶亭を設け眺望よし、諸人遊觀の所となりて、日毎に群集するもの多し○今年菅神九百五十年の御忌辰にて、諸所の天滿宮開帳あり、（二月十五日より三月廿七日迄、龜戸天滿宮開帳○同廿五日より六十日の間、麹町平河天滿宮御眞筆の御影開帳○閏二月十五日より五十日の間、小石川牛天神開帳）○閏二月朔日より六十日の間、三田淨閑寺魚籃觀世音開帳○同七日八日、龜戸御嶽社に於て、菅神御眞筆等高貴の御筆御神號御神影、其外名家名筆の御神影神號等、諸家の藏せるもの數幅を借得て拜せしむ、（龍主糸川尚章、板橋定時、補助山名行雅、關口定眞といふ人なり）○同十六日より六十日の間、淺草寺町本藏寺に於て、上總國山邊郡家の子村妙宣寺祖師（中老日秀上人作）開帳あり、（同寺二王尊の内一軀を拜せしむ、一軀は國に殘せる由なり）○【無補】同二十二日夜、本所林町出火○同二十八日未刻、下總眞間（國府の奎）總享寺所化寮より失火して、本堂僧坊燒亡せり、山門ばかりは殘りたり○彼岸の頃迄春寒去らず、雪度々降る○同下旬より、淺草寺奥山に鯨細工看せ物出る、鯨の骨を以て長さ十間の鷲、その餘の物を造る、色々の偶人のはたらきあり、招きに辨才天、時政の木偶、大蛇をつくる、細工人涙花の大江忠兵衛、長谷川平吉、竹田由三郎等なり○幼兒の手遊びに、河豚の皮を茶碗の類へ張り、竹にて打て音を出す事はやり、街に售ふ○三月朔日より十五日まで、目黑不動尊開帳○同九日より五十日間、駒込浩妙寺七面明神開帳○同十六日、夜子下刻、北品川宿より出火、南風烈しく二町ほど燒亡す、（東海寺門前井旅舍多く燒る）○同十九日、暮六時より同二十日未中刻まで、深川三十三間堂にて大矢

數あり、（酒井雅樂頭殿の臣鶴田辰五郎廿一歳、太子流岡田半九郎門人同藩金澤鐵二郎の指南と云々、總矢數一萬四千五本の内、通し矢五千三百八十三本なりといふ）○三月霖雨○初音人形と號し、木偶の腹を押せば笛の音ありて、啼聲を出すもの京より下りて行はる○春の頃より淺草寺奥山乾の隅林の内六千餘坪の所、喬木を伐梅樹數株を栽、また四時の草木をも栽、池を掘て趣をなし所々に小亭を設く、夏に至り成就し六月より諸人遊觀せしむ、（千駄木植木屋六三郎の發起なり）○淺草花川戸の邊に住る一老嫗、猫を畜て愛しけるが、年老て活業もすゝまず、貧にして他の家に寄宿して餘年を送らんとせし時、その猫に暇を與へなく〳〵他家へ趣しが、其夜の夢中にかの猫告ていふ、我かたちを造らしめて祭る時は、福德自在ならしめんと敎へければ、さめて後その如くしてまつる、夫よりたつきを得てもとの家に住居しけるよし、他人此噂を聞て、次第にこの猫の造り物を借て、まつるべきよしをいひふらしければ、世に行れていくらともなく今戸燒と稱する泥塑の猫を造らしめこれを貸す、かりたる人は布團をつくり、供物をそなへ神佛の如く崇敬して、心願成就の後金銀其外色々の物をそへて返す、其廓は淺草寺三社權現鳥居の傍にありて、此猫を求る者夥し、此事兒女輩といへども心ある人は用ひず、なして丈人の駭くべきにあらずといへども、此頃は丈夫も竊にこの猫をかりて、祈りけるもこれあるよしなりしが、四五年にして此噂止みたり○四月二日より六十日の間、淺草御藏前大護院に於て、川口善光寺一光三尊阿彌陀如來開帳○同日より五十日の間、淺草寺町正覺寺に於て、下總葛飾郡本行德村正讃寺祖師妙見宮開帳○猿若町三丁目結城孫三郎が操芝居、當所へ引移し後不繁昌に付休座、町並の家作になる○五月朔日より六十日の間、本所回向院にて、三州矢矧鏡立山光明寺天滿宮開帳あるべきとて、四月廿四日江戸へ着しけるが、故有て開帳を停られしかば、一日も開帳なく同月十三日歸國なり、（江戸着の日、木魚講中といへる輩數百人群をなし、木魚をならし高聲に念佛して送りけるは、思はざるの甚しきといふべし）○同十四日、夜九時より八

時六分迄、月蝕皆既○夏病犬多し○同晦日、亥下刻、西御丸炎上、御霊屋恙なし○同晦日、亥下刻、本所元町より出火、回向院前町屋焼亡せり、あわ雪豆腐両側の通りまでやけたり○猿若町二丁目市村羽左衛門が芝居にて、享和の頃青山邊なる鈴木主水といふ武士、内藤新宿の賤妓白糸と倶に情死せしこと俗謳に殘りしを、狂言にしくみて興行しけるが、殊の外繁昌しければ、俳優二代目坂東秀佳、内藤新宿北裏通成覺寺へ、白糸が墳墓を營たり○【無補】六月朔日曉、回向院門前奈良茶店日野屋裏より出火○【無補】お豆大極上と呼び歩行く、砂糖豆賣の女商人、先年よりありしが、是月に至り其賣子中に上方の遊女あがりの美人現れ、大に流行す○七月十日曇、御先隊（さきて）の騎士（より）故人淺羽筈之助、中島流の火術に名ある人なり、今年五十年忌先代三年忌にて、今日佃島沖に於て彼家より出て、晝夜相圖烽火調練ありて、六百餘をはなつ、水陸見物群集す、これ迄は熟練の家々年々當所沖にて調練ありけるが、當年以來興行なし○同十二日、白金村鷺森神明宮の邊に住て、紙を漉て生業とせる男、三十餘歳二本榎なる萬屋といふ呉服屋に頼れ、商物を脊負て他の家へをくらんとしけるが、秉燭（ひくれ）のころ路次にて盗賊に出遇ひ、白刃を振て威されけるが、懐中にありける祐天上人の自書の六字の名號、大山不動尊の畫像をして心中に祈念しけるが、夢中の如くになりしばらくして心付、家に立歸りて後、かの二品を拜するに、名號畫像ともに刃の跡數箇所殘れりと○同二十五日夜、柏木成子町出火○同廿日廿一日廿二日大雨、千住邊出水三日湛へたり○廿七日、夜子刻、北品川宿三丁目玉屋佐介といへる旅舎より出火、宿内旅舎大抵焼て、南品川妙國寺門前の町家に至る、長七町餘幅平均四十間程なり、貴船社は殘る○同二十八日より六十日の間、下總國中山法華寺奥院祖師像、淺草寺町本藏寺に於て開帳、鬼子母神内拜あり○中の郷瓦町長壽寺にて、土中を穿ち金銀雙身の歡喜天の像を得てこれを祭る○夏の頃より神田松枝町なる大工保五郎が畜猫、鼠を愛して乳をふくませ、我がうみ落せし小猫と共に養育す○【無補】是月魯西亞船一艘、我國の漂流人三四人を載せて浦賀に來る○八月十日、朝五半時より九時頃迄大風雨、家屋を破り樹木を折る、永代橋へ大船流當りて橋を傷ふ、所々に怪我人あり○同廿五日より六十日の間、茅場町藥師境内天滿宮開帳○下旬より百日の間、麹町平河天滿宮境内にて、子供芝居興行す○九月十日曉、青山六道の邊植木屋五軒程焼る○十月雜司ヶ谷法明寺會式中、境内に蕃椒をもて大なる達磨をつくる○【無補】是月山田屋某、淺草寺奥山粟島社の後に園地を拓き、菊を植えて遊覽に供す、見物多し、茶店を出し餅を賣る○十一月朔日、巳刻より日蝕九分なり、闇夜にはならず、往來の時行燈を用る程にはあらず○同廿五日畫人菊田伊洲卒、伊川院法印の門人なり○同晦日、大名小路松平能州侯屋敷より出火、松平越州侯屋敷類焼に及ぶ○三座芝居顔見せ狂言春にのぶ、茶屋の飾ものはこれあり○【無補】十一月十七日夜、紅葉山寶庫失火○十二月二日三日の頃、いづくよりか來りけん、巣鴨なる加州侯下藩邸の邊より、老猪一疋駆出し大路を過り塀墻を越て、牛込柵下（やらい）酒井侯別莊の地へ入りしを、藩士某跡足を斬げるより彌猛り狂ひ、早稲田なる乞丐人の家に入、その娘閭巷に徘徊し三味線を鳴らして錢を乞ふ、世に女太夫といふものなり、を牙にかけ投出したり、其後何れへ走去りしや知らずと、かの女は外科の醫生を請ふて、股の疵を縫しめ療養を施しけるが、苦痛甚しく存亡を知らずと聞り○同十日曉、新材木町河岸の納屋焼失○角觝人劍山谷石衛門五十三歳、十六年續て東の大關を勤む○近年一の字つなぎ二の字崩しといふ染物はやる、是は町火消一番組二番組救火卒の目印なるを、それと知らで求る人あり○豐國が筆にて、天明の頃より文化頃までの俳優似顔繪を梓行せしむ、

○嘉永六年　癸丑

正月七日、石川梧堂君卒去、名は総明、字錫我、一字蠡甫、又知秋庵、鵞幕臣也、能書をもて世に聞えし人なり○同十六日、朝より大雪尺に満つ、翌十七日より十八日まで、三日の間大雪降つもる、十八日申刻に止む但し十七日より夜

へかけて降りたり、七旬の老翁もかゝることは見ずと、春寒殊に烈しく火災度々あり○深川永代寺境内に、操芝居百日の間興行す○三座芝居入替顔見せ狂言今春に延る○二月二日、巳下刻地震三度、水溜桶の水溢る、此日同刻相州小田原の城下町々なはじめ、神戸、大磯宿、大山邊、箱根、伊豆の熱海、三島沼津の邊に至るまで、地震數度に及び、同夜子刻に至りて人家を覆し、火災起り死亡の輩あまたありしとぞ○同四日、午中刻、下總松戸宿出火、暮時鎮る○同十二日、暮六時過、大塚小石川よりさきの大塚なり、松平大學頭殿屋敷出火、家來の住居長屋又は作事小屋等三町（軒か）計燒、竹林燃て響をなせり○同二十日より四十日の間、駒込南谷寺目赤不動尊開帳○同日より六十日の間、王子權現同稲荷社開帳、三月雨天の日多く詣人少し、五月廿二日迄の日延あり○同廿日、一刀流小野派劍術師淺利又七郎義信卒、行年七十六歳、酒井若州侯の臣なり、淺草田圃慶印寺に葬す○三月六日より六十日の間、淺草寺町本藏寺に於て、鎌倉松葉谷安國寺祖師、幷に熊王稲荷開帳○同七日、丑中刻、市谷田町下二丁目より出火、東へ二町程燒る、西風吹雨中なりし○同十日より六十日の間、本所回向院に於て、去年催しける三州矢作光明寺天滿宮開帳あり、牛若丸と淨瑠璃姫の木像あり、近年の作とおぼし○【無補】同十五日、本所にて夜鷹四十餘人召捕られ入牢、是時市中の女髪結も召捕へられしといふ○不忍池浚ひ始り秋に至る○伊勢町に於て、一丈七尺の大烏賊を見せ物とす、目方五十貫目の餘なり、上總國海濱より得たるところといふ○南越志曰、常自浮二水上、烏見以爲レ死、啄レ之乃卷取、故名○大塚護國寺の山内、喬木の梢に鷹巣をくむ○本石町四丁目裏通に、東海道五十三驛見立の料理といふものをはじむ、祥風亭と云ふ、程なく廢たり○四月十四日、儒師龜田綾瀬卒、稱三藏、名長梓、七十六歳、鵬齋翁の男なり、今戸稱福寺に葬○同下旬淺草新堀に、三尺餘の鯉一喉流れよりたるを、此邊の者取あげけるが、嗚呼の者ありて鋸曳などして、天台龍寶寺の池に打入たるが、程なく死したり、扨彼男俄に傷寒の病に罹りて終りけるを、鯉魚の祟ならんといふものありしかば、同寺の境内に埋葬し、鯉魚の圖を鐫たる墓碑を營みしに、此碑を祈りて諸願成就する由云ふらして、白痴の男女日毎に來りて香花をさゝぐ、程なく墓碑を廢せり、この鯉の似せ物所々へ見せものに出せり○聲云、三月三日鯉を捕へ四日鯉おちる、長三尺八寸、不忍池浚に出だるなり、廿二日鯉四十九日法會、參詣多し○春より

夏へかけて淺草寺奥山曲馬の芝居行はる、座頭は渡邊芳三郎なり○四月深川仲町に於て、阿蘭陀渡りチャルゴロと號し、函中自然と色々の音を出すの器、また漢交茶釜と號して、火氣なくして熱湯となるの器をして看せものとす、この茶釜は文化頃にもありし物なり○五月十日、曉八半時、神田佐久間町二丁目火事○同十日より六十日の定にて、本所回向院に於て、勢州國分の阿彌陀如來開帳あり、別當大寶院、同月七日此本尊江戸着にて品川の品川寺を出立あり、黎明より講中と唱へし輩江戸幷近郊より出、其黨を分ちて男女一樣の新衣を着し、何講中と記したる多くの旗を飜して佛龕を送迎す、又見物の貴賤群集し、品川より兩國橋畔に至る迄二里餘り、大路へ駢闐して錐を立るの所なし、しかるに午の中刻、柳原岩井町上納地なる飴屋源左衞門が店より失火し、半町の餘燒たり、これに依て救火の人夫と行違ひ、道路の混雜いふ計りなし、しかるにこの開帳始りてより詣人多く繁昌しけるが、亞墨利加の船始て浦賀に着せしより俄に閉帳し、七月又九月に至りて開帳あり、境内に燈心にて大なる虎の形と雙千禪師の形を造りて見せ物とす、細工人、浪花松壽軒なり、又竹田縫之助が作の木偶もあまた見せたり、外に昆布をもて廿四孝の偶人をつくりし見せものも出たり、兩國橋の東詰に見立女六歌仙と題し、女の偶人をつくりて見する、京師の大石眼龍齋吉弘といふ人の作なり、其容貌活るが如し、これ近年行るゝ活人形、江戸に於て行るるの始なるべし○【無補】五月十五日、高田馬場に於て、流鏑馬あり、見物夥し○【無補】同二十二日、番町邊の地自然におちいる○牛込榎町濟松寺境内毘沙門天社、毎月六の日を緣日として參詣始る○五月下旬より七月中旬に至り、炎旱數旬を踰たり、五月廿一日より六月十一日迄同十三日より七月十日迄なり同十一日十二日の兩日雨降○六月三日、北亞墨利加合衆國華盛頓使節正使マッテウ○セロベルリの船大小四艘、相州浦賀の要津に舶し貿易を乞ふ、これに依て諸家警固嚴整にして、數艘の番船海上に充滿し、旌旗を飜して晝夜に懈らず、しかるに同月九日浦賀の鎮臺戸田井戸の兩侯、同州久里濱にして其呈書を受納ありしかば、同十二日纜を解て沿海を發せり、江府の貴賤始には仔細を辨ぜずし恐怖して寢食を安んぜず、老人婦幼をして郊外遠阪に退

しめしもありしが、平穏にして不爲に屬し、諸人安堵の思ひをなせり、是より後魯西亞、英吉利、佛蘭西等次第に來舶して、書簡を呈し貿易を庶幾す、後數度應接ありて、乞ふ所に任せて假の條約をもて貿易を許し給へり、此後數度通般する事勝計すべからず、其顛末を記せるものは牛に汗し棟に充べし、依てこゝには委しくせず、「泰平のねむりをさますじやうきせん（蒸氣船）たつた四はいで夜も寢られず、又或卿の御戯（上喜撰）のよしにて、「一日のもとやまだちやるめるもふかぬまにとけて歸りしあめりかのふね（亞墨利加飴）○異國船渡來に付て、回向院境内國府あみだ如來、六月十日より、開帳、七月三日より又開帳あり、二十二日より又開帳、九月十八日より十月九日まで開帳あり、（開帳の間六十餘日なり）○小船町天王祭禮延て、六月十九日出輿あり、廿二日に歸輿なり○御藏前牛頭天王、丑年によりて六月七日八日九日三日の間開帳あり○同十五日、赤坂氷川明神祭禮執行（出しぬり物等も出る）○此頃鍛革の甲冑を製し街を賣りあるく者多し○今年蚊帳賣更に來らず○六月二十四日、柳橋の西なる拍戸（ひやうたや）河内屋半次郎が樓上にて、狂歌師梅の屋秣翁が催しける書畫會の席にて、浮世繪師歌川國芳酒興に乘じ、三十疊程の澁紙へ、水滸傳の豪傑九紋龍史進憤怒の像を畫く、衣類を脱ぎ繪の具にひたして着色を施せり、其濶達磊落思ふべし○七月佃島沖狼烟稽古、今年よりこれなし○七月三日より六十日の間、淺草寺町本藏寺に於て、武州一の江妙覺寺祖師開帳○同十七日より始り、暮時より戌の方に彗星現る、（けん星とも云ふ、廿二日迄次第に北へよりて見えけるが、其後は暈りて見えず）○同十八日曉、外神田なる松下町壹丁目代地出火○同二十二日より五十日の間、（幕府御他界に付鳴物御停止あり）鳴物御停止に付、國府あみだ如來閉帳有○二十六夜群集の場所、八月十五夜の宴、八幡宮祭禮、彼岸參、重陽の佳節等寂として聲なし○【無補】八月三日大風、地震あり○九月より、品川沖に礮臺（御臺場と云）新規築立御用始る、（御殿山井泉岳寺門前の山を崩し、此土を以て御臺場の用に宛ら）○同十五日、神田明神祭禮來る卯年に延る、（十五日本社に於て祭式ありしのみにて、産子町町花出しねり物等出す事なし）○回向院國府のあみだ如來開帳、九月十八日より十月十二日迄三たび始る、（劍難除の守なりとす、そのかたわらに鐵砲玉にあたらずとしるせり、異國船渡來せるより思ひよりて此守を出せしなり、浮屠家の貨殖なはかる事、商家にまさりてかし）○十月八日より七日の間、上練馬村圓光院貫井子權現、自坊に於て開帳○芝神明宮祭禮、先月より延て今月執行○十月より靈巖島圓覺寺境内にて、百日の間芝居興行○十一月十五日、西久保八幡宮祭禮執行、今月より當社境内に於て、百日芝居興行○浦風門人白眞弓肥太右衞門といふ角觝人出る、二十一歳、身の丈六尺八寸餘、目方四十貫五百目、飛驒國木谷村の産といふ○十一月三座芝居役者入替り春に延る、飾り物なし○十一月二十四日、夜子中刻、池の端御數寄屋町吹抜といへる小路より出火、廣小路迄燒る、長一町四十間幅五十間程なり○【無補】同二十八日、淺草天王橋に於て、常陸國破賀村幸七妹たか、叔父の助太刀にて兄の讐與右衞門を討つ○十二月高輪築出地成就迄の間、二本榎の通りに街道替る○同十五日、曉丑下刻、音羽町三丁目明家より出火、牛込改代町、水道町、古川町、松が枝町、築地片町邊に至り、夜明て鎮火す、長十町餘幅一町程なり、（武家地組やしき等類燒多し）○【無補】同十六日、淺草市群集夥しく怪我人あり○同二十一日、曉雨雷鳴あり、季冬より春へかけ暖氣にして氷なし○洋舶渡來よりこのかた、西洋の地誌同戰記砲術等の書を編し、或は犯疆錄の類を飜製し新編をあらはし、刊行せるもの牛に汗し棟に充べし、明治の頃に至ては彌盛なり、其題號一擧の盡る所にあらずといへども、見聞に及ぶ所のみ聊こゝに載たり、

△夷匪犯境見聞錄（寫本卷數不定）△唄國侵犯紀略（寫本六卷 鹿谷行藏）△鴉片始末（寫本一卷 蠹齋藤馨）△清英戰記（二永山幸之助）△海外新話（板本五 嶺田右五郎同二編同）△清英近世談（十板木 早野惠）△水陸戰法錄（五寫本 佐藤元海）△海外異傳（板津齋藤某）△西洋雜記（前板本後寫本 山村昌永）△海外人物小傳（五冊）△海岸備要（五板本 陵宵園）△瑣國論附尾一（活板蘭人編 覺世道人序）△海防私策（寫本 羽倉用九）△三兵合法△海上攻守說（五寫本）△兵學小識（寫本 初鈴木春山 後高野長英）△三兵タクチイキ（高野長英）△西洋軍馬惣說（寫本三）

△練兵實備板本三山鹿素水△海防私議寫本長山貫△海防衆議鹽田玄泰△甲冑便覽絲川板本五澤畔醒釋△甲冑着用次第板本岩井白潤亭△文武問答板本同編△舶砲新編寫本十藤井釋△軍陣備要救急摘方板本一芜園舍守拙△西洋火具編寫本△海上砲術全書杉田巽作圖あり△鈐林必携重板二三宅侯隆居△砲術語選板本一上田仲敏△萬國旗章圖譜板一露川艫△舶旗圖譜一折本松井南岱△異國往來幷漂流年表板二枚石塚豐芥△漂客奇談板本一中濱禹次郎△亞墨利加總記板本一廣瀬達可行△魯西亞本紀略寫本△異國落葉籠板本一三木光齋△坤輿圖識板本七巽作玄甫△同補四同△八紘通志板本三同篇△地球方圖永井助吉△三才正蒙板本三同△地學正宗杉田成卿△新宇小識二寫本猪俣昌永△輿地志略青地林宗△地球圖折本一水府鱸鳳卿△地球度制雷洲△同兩珠栗原信晃阿部櫟齋注△帝爾露西亞國志三寫本馬場貞由△露西亞地名考一寫本△邊要分界圖考故人近藤正齋△射擲表板折本大塚同庵△雄飛論水府藤田△蘭學調法記折本板宇田川△新論會田恒藏△避邪小言板本四大橋順藏△怪妄論寫本△釣船問答同△步操軌範板折本培闌牧天穆△蝦夷善圖△銅柱餘錄寫本三宮林藏△蝦夷圖板愛我堂△蝦夷圖境輿地全圖板藤田溫卿△蝦夷行程記△蝦夷日誌寫本松浦武四郎△颶風新話伊藤氏△米利堅新說△元寇紀略△外蕃容貌圖畫三△海國圖志印度部△神風遺談三△英吉利文典一△散兵用則△洽乙蘭士文範一△釋和蘭文言△鐵熒鑄鑑圖鹿齋金森鑄錄△銃工便覽肥州小城井上△洋算用法一楊江柳河△蘭語通培闌牧天穆

○此頃鳥銃に用ふる所の火藥を製する所諸方に始りしが、荏原郡小山村、板橋宿、淀橋町、三田村其他數ヶ所に於て誤つて火を發し、即時に怪我人死傷のものあまたありし○大小名或は陪臣其外匹夫にいたる迄洋船渡來よりこのかた、壤夷又は一旦の御和親等激切寛體の策を演、建白せる輩勝計すべからず、其内憶斷管見をもてつゞり、抱腹にたえざるものも鮮からずとぞ、或は深川冬木町に於て、車輪船といへる物を工夫して造らしめけるが、出來あへずして畫餅となり、淺草の馬具師は水中を潛りて敵に向はんがため、革の囊を造りしが息の通ふ手段を考へず、その外狠狽して井蛙杜撰の說をつらね、世の笑柄となりしも多かりし○坊間に所謂山師と稱するもの、貨殖をうちにし攘夷を表とし、兵器の利用其外色々の工夫をなして願出たるものあり、昔豐太閤征韓の時、韓人日本の刀の利なる事を恐れて冑を製したりしに、切る事もならざれど重くして被る事ならず、世の譏を受しといふ同日の談なるべし○江戸遊覽年中行事一卷梓行、幽篁座主人編とあり、

○安政元年　甲寅　七月閏　十二月五日改元

正月十三日、亞墨利加の舶再渡來して豆州下田へ着、三月廿一日退帆す、此間官吏應接の事件は、我輩の委曲に辨知すべき所にあらず、其大畧は世人粗傳聞せる事故こゝに記さず○西洋寫眞鏡の技術は、天保の頃西班牙の某舍密の術に長じけるが、海濱の蜃氣樓に據りて思ふ所あり、深く其理を攻窮して工夫を凝らし、終に此術成りしとか、然れども本邦には更に知るものなかりしが、今玆甲寅の春、亞墨利加の聘舶本邦へ航通せし時、玆州の官吏應接の序、彼國人より官吏の容貌を摹して贈り越しけるを見て各感歎し、其方術を乞ふて傳習せられしより、自ら桑庶に及ぼし、武州久良岐郡横濱港に於て場をひらき、其技を施しける輩あり、始は男女の容姿を專として、山川臺榭万象に至らず、寫せる所も鮮明ならず、適依稀たる疎影を得て珍重せる人もありしが、次第に串熟せるもの出來、玉川三次、信夫何某、大鐘隆慶なんどいへるもの、江戸に於て弘んとしける頃、肥州長崎より内田九一といふもの、夙齡の頃よりこの地に羈寓してこれを學び、奮勵して其術を得てより、東武淺草旅籠町に住し、專此技を弘め、門葉日を重て蔓延し、聲譽一時に噪し、寫す所山川の秀美、神祠梵刹の輪奐、貴賤屋宇の鱗差、蝸舍蓬戸に至り、又高貴の尊影を始とし、士庶人の風姿より柳巷の嬌態、梨園の靚粧、其他雜技の黨に逮ぶ迄、罄摹し出さずといふ事なし、其餘草木禽獸の類にいたるまで眞に逼るが故、男女老穉爭ふて覓る事になれり、しかれども市中に場を構へ求る

人あれば、即時にその像を寫すの家、又万象の摹本を排列して售ふの肆盛になりしは、明治六年以來の事なり、

再云、内田九一名は重、長崎万屋町の産なり、幼稚の頃雙親を喪ひ、伯父吉雄圭齋と云醫師の許に養れて人となり、彼地なる上野某に隨ひて寫眞の術を學び、後武州横濱に來りて熟煉し、東京に弘たり先輩あれ共其可否をいはずして、九一をもて本邦創業の人と思ふが多し、後駿河臺紅梅町に壯麗なる第舍を營みてこゝに住しけるが、乙亥の季冬病痾に罹り、惜むべし享年三十歳六ヶ月にして、丙子二月七日卒せり、其門人跡を繼でこの技を行へり、又吳服町なる清水東谷も此技に長じ、其外横山松三郎、淺草なる北庭筑波、江崎禮二其他有名の輩枚擧に遑あらず、寫眞鏡の方法は、柳川某が編の寫眞圖錄二卷に委しく載られたり、

○正月暖氣なり○正月より一朱銀通用始る○二月十日、曉丑刻、青山緑町火事○二月廿日、酉上刻、南傳馬町三丁目東角より出火、あさり河岸、大富町裏手迄燒る○三月廿六日夜雷鳴、翌廿七日晝又雷鳴、所々へ落○四月二日より三十日の間、押上最敎寺什物蒙古退治旗曼荼羅を拜せしむ○同五日より六十日の間、龜戸東覺寺大山同木の不動尊開帳○同十一日より六十日の間、淺草寺町玉泉寺に於て、鎌倉名越松葉谷妙法院祖師開帳、日叡上人作○同廿二日巳刻、荏原郡小山村御嶽の森といふ所にて、鐵砲に用ふる合藥製造の時誤て火を發し、水車の家崩れ即死三人、重き疵をかうむるもの二人ありけるとぞ○伊勢町鹽河岸拍戸百川において、卓子料理を始て行はれたり○五月十二日、雷雨、深川扇橋細川侯中屋敷へ墮、雷火にて燒る○同廿七日夜、辰の口小普請定小屋より失火、役所のみにて類燒なし○【無補】六月七日、麴町平河天神裏門前、鷄卵商某家へ白晝何者とも知れず礫を投げ込み、引續き三日に及び其姿を見し者なし、狐狸の所業なりとて見物に行く者多し○六月十一日、明六時過、柏木淀橋の水車の家より火を發す、これは年頃此川端に在し所の水車を以て、この頃鐵砲の火藥を製しけるが、今朝いかゞしてか一奴隷火を過ち合藥に移りしかば立地に火起り雷霆よりも恐ろしく、凌兢響して其者は五體微塵となり、其家は更なり淀橋町長十九間幅六間餘燒亡す、此響にて近邊より角筈村、本郷村、中野村等、人家傾き或は潰れ、倉庫も破壞し大木も傾たり家屋蕭疎の所なれども、怪我人五十餘輩ありとぞ聞り、江戸近邊はいふに及ばず、近國へも響たりとぞ○【無補】同廿六日夜、住吉町往來に於て、太田六助二十九歳親の讐山田金兵衞五十二歳を討つ○七月七日曉、本材木町六丁目より出火、長二町餘燒、夜明て鎭る○同十日より十五日頃まで、深夜月の形七ッ或は四ッ三ッ半位に見ゆる○閏七月十五日より三十日の間、芝金杉正傳寺毘沙門天開帳○山王權現祭禮延て閏七月廿三日に執行、前日より快霽、例よりは涼し、躍輦の正面の道具立を、踊引ぬきの時に替らす事なはじむ○夏より新吉原江戸町一丁目大黑屋文四郎が娼樓にて、遊女をして伊勢音頭の踊を始む、程なく止○七月下旬、坊間に噂して來月ははやり病あるべし、晦日迄に牡丹餅を拵へて食する時は、此患なしといふ妄譚行れ、牡丹餅の賣れる事夥し○秋傷寒風邪等の病人多し○夏の頃より入谷に松下亭といへる蕎麥屋出來る、庭中に池をほり少しく趣をなせり○秋千駄木藪下の植木屋に瀧を作る、又淺草寺奥山人丸社前にも瀧を作て諸人に浴せしむ○柴井町勘介が店を借て、白銀職をなせる安五郎が妻さと三十九歳八月二日明六時、男子三人を産む次男は同月五日に死す○八月牛込赤城明神の境内に於て、百日芝居興行○外神田御成道堀家の向大久保熊次郎殿屋敷の鎭守儀助稻荷、寶珠稻荷、子安稻荷社へ祈りて、諸願成就するよしにて、この頃より日毎に參詣多し、法華勸請なり○九月魯西亞の船豆州下田に着○同廿六日、深川八幡宮修復成就して、今日遷宮の式を行ふ○十月高輪に川越侯陣屋成、高輪南町の内間口八十四間二千六十坪の町屋を取拂はせられ、八丁堀松屋町河岸に於て代地を給はる

○同月千駄木の邊菊の造物六軒程出來る、染井巣鴨は花壇のみなり○十一月三日、曉丑半刻、妻戀坂下手代町火事、一町計り燒る○同日辰半刻地震、市中の者は大路へかけ出す、翌五日深夜まで數度震ふ、小川町諸侯のやしきには瓦潰れ、其外土藏の壁等所々に破損多く、長屋潰れて卽死に及けるもありし由なり同刻伊豆國甚しく震ひ、東海道筋これに亞りと云ふ○三座芝居顔見せ狂言春に延、飾物計りあり○同五日、亥刻、淺草聖天町より出火、西風烈しく猿若町三丁目へ移り、二丁目一丁目三座芝居幷茶屋其外一圓燒け、聖天横町、金龍山下瓦町、山の宿町一の權現、花川戸町、六軒町、淺草寺地中十箇院、借地町家等燒亡、鎭符の社は殘る、本龍院は門前町家のみ燒く、本社幷山上別當恙なし、此の火大川を飛て小梅なる水戸侯下邸へ移り、小梅町小倉庵料理屋の手前にて止り、黎明に鎭火す、長五丁廿間餘、幅平均して壹丁廿五間餘と云ふ○角觝人富士島某門人喜見城瀧之助土俵入をなす、十四歳、身のたけ五尺五寸、目方廿三貫目、駿州清水湊の産と云ふ、同向院冬の角力へ出る○中の郷業平橋の手前に料理茶屋をひらき、在五庵といふ、庭中湯瀧をつくれり○十二月十八日、曉八半時、柏木成子町より出火、角筈新町へ燒込、長一町半程燒亡せり○同廿日、夜四半時過ぎ、深川雲光院本堂僧坊庫裡等燒亡せり○同廿八日、酉下刻、神田多町貳丁目北側なる、乾物屋三河屋半次郎が宅より出火して、始は北西の風强く、連雀町、新銀町、佐柄木町、須田町へ燒込、北風に替りて須田町二丁目、通新石町より通り町筋本銀町、本石町、本町四丁、本兩替町、駿河町、北鞘町、品川町、室町壹丁目、日本橋際迄、東は小柳町、黑門町、三島町、岸町、永井町、富山町、紺屋町邊、浮世小路、鹽河岸、瀨戸物町、小田原町、本船町、同河岸通迄燒出し、曉にいたり東風になり、又色々に替りて西の方雉子町、四軒町、三河町四丁、同裏町、此邊武家地養安院屋敷、鎌倉町、龍閑町、松下町、永富町、皆川町の邊にいたる、此間に挾れたる町々は殘る所なく燒て、廿九日朝五時頃鎭れり、牢やしき殘り、東神田平永町より東の方は恙なし、武家地の燒亡は少し、町數は百一ヶ町、長十町三十間餘、町幅平均にして四町四十間程といふ○此冬更に雨なし

○此頃町飛脚といふもの市中へ出て、書簡を屆くるをもてなりはいとす、淺草より出たるが始にて所々より出づ、ちいさ成る箱を脊負、棒の先へ風鈴を下る、

●安政二年　乙卯

正月日々晴天○正月より回向院境内にて、子供芝居興行○同廿五日より、湯島天神境内に於て芝居興行、僅の日數にして止む○正月初旬、所々梅花開く○同廿九日、初午の宿宮にあたりしが、同夜子刻、本所駒留橋北なる松前侯屋敷より出火、大風にして三宅侯其餘武家地多く燒け、横網町、小泉町、御臺所町武家地なり、より回向院方丈書院庫裏へ移り、夫より本堂土藏造の棟へ燃付燒亡し、明方に至り鎭る、火事により回向院境内角力興行を停む○二月餘寒强く、去年より雪更に降らず○二月十八日より八十日の間、淺草寺觀世音開帳、貴賤男女日々參詣群集せり、同寺奥山に大坂下り活偶人といふ見せもの出る、肥後國熊本なる松本喜三郎といふ者造る所ろなり、木偶にあらず泥塑にあらず紙糊のものと云ふ、手長島、足長島、穿胸國、無腹國其外異國人物、丸山遊女の偶人等多く、男女とも活る人に向ふが如し、又竹田龜吉作大象の作り物あり、見物群をなす、又同所にて、去年浪花に趣きて横死せし俳優市川團十郎八代目が肖像、狂言に出立たる形、樂屋のさま、極樂へ至り成佛のさまなど作りて看物とす、普通の細工なれど、最負多かりし俳優の自盡をいたみし折から故、おのづからにして見物群集せり、細工人竹田縫之助清一なり、又輕わざ綱渡の上手增鏡勝代といふも、同所へ出て見物多し○同十五日より六十日の間、小石川傳通院地中福聚院三神具足大黑天開帳、奉納物多く、芝居見せ物等出る○同廿日より三十日の間、矢口村新田明神開帳、五百年の御忌なり○同廿日より六十日の間、淺草八軒寺町本法寺に於て、下總國平賀本土寺白毫祖師開帳○二月より大相摸大聖寺不動尊、彼地にて開帳○同廿一日、夜雷雨○同廿四日、夜子刻過、北紺屋町より出火、白魚屋敷、五郎兵衞町、南鍛冶町、疊町、南傳馬町三丁目西側迄燒亡せ

り、長一町幅一町廿間程也○同廿七日、鳳凰丸御船浦賀より品川へ着す○同晦日、曉八時、淺草材木町火事○三月より、諸國寺院の梵鐘を以て、大小炮小銃に鑄換らる○同朔日より六十日の間、深川八幡宮開帳、（木社修復成しによつて開帳す）○同朔日夜、子下刻、小網町壹丁目と堀江町四丁目との地尻境より出火、坤の風熾にて、小網町壹丁目、同横町、照降町、小舟町、堀江町、親仁橋を越て堀江六軒町、甚左衞門町、葺屋町、堺町、岩代町、新材木町、新乘物町、大坂町、新和泉町、田所町、長谷川町、難波町、住吉町、高砂町、彌兵衞町、元濱町、富澤町若松町、久松町、村松町、橘町、同朋町、馬喰町、横山町通旅籠町、通鹽町、藥研堀埋立地、吉川町、米澤町に至り、柳原向へ飛で、淺草森田町、旅籠町、茅町、平右衞門町等の代地、第六天社、茅町通東側一圓、同所藤堂侯、本多侯中屋敷、書替所にて朝五半時過鎮火、淺草御門渡り櫓燒失、石垣燒損ず、町數六十八町、武家地共長延十三町餘、幅平均四町程なり○同三日より十五日の間、牛島牛御前王子權現開帳○【無補】同六日夜、御本丸御金藏内の金子、小判にて四千兩紛失す、上槇町清兵衞地借藤岡藤十郎（三十九歳）富藏と共謀し、木を以て合鍵をつくり盜みとりしが、安政四年二月二十六日、露顯して召捕へられ、五月十三日兩人引廻の上、千住に於て磔刑に處せらる○同九日より五十日の間、赤坂圓通寺祖師七面宮開帳○同十日より六十日の間、本所回向院境内に於て、常州水戸向井村藤澤山神應寺鎭守別雷皇神本地蹴上觀世音開帳、（惡心僧都の作なり、雷除の守札出）○同十日より六十日の間、寺島村蓮花寺弘法大師開帳○芝愛宕社前に繪馬堂再建、（火災の前本社の南に在しを東の崖に移す）○三月より、兩國橋御修復始り、南の方へ假橋かゝる○牛込若宮町清五郎が店をかりて、酒を商ふ（居酒屋といふ物なり）遠州屋又藏が娘さと、今年十五歳になりけるが、市谷田町一丁目なる手跡指南秀根堂某がもとへ奉公住してありしに、春の頃より男子に變ず、骨格容貌も全くの男子と成り里次郎と改む△按るに變生男子の事、伴蒿

溪が閑田耕筆にも見え、又西土の書にも見えたり△史記、魏襄王十三年、魏有二女子一化爲二丈夫一△京房が易傳に曰、女子化爲二丈夫一、玆謂二陰昌賤人爲レ王と云云、又男化して女となれるは△漢書、哀帝建平中、豫章有二男子一化爲二女子一、嫁爲二人婦人一、生二一子一△皇明通紀、程宗隆慶二年五月、陝西民李良雨忽變爲二婦人一、與二同賈者一苟合爲二夫婦一、其弟良雲以レ事上二所司一奏聞とあり○五月より、湯島圓滿寺境内に於て、百日芝居興行○同月元數寄屋町二丁目に盆種の櫻花咲く○六月十一日、夕七時過雨、雷所々へ落る○七月十九日より五十日の間、牛込原町經王寺大黑天開帳、（中老日法上人作）○同十九日、茶湯者吉村貫阿卒、（八十四歳、號白醉庵、築地本願寺中福泉寺に葬す）○同月南の方、月下に白氣現る、十一日夜四時殊に鮮なり○八月十四日夕七時、神田九軒町代地火事○此頃下賤の方言に、左計をさして「おあいだ」といふ○去年高輪南町の内、川越侯陣屋に成るに付被二召上一、代地として八町堀松屋町の河岸へ給り、八月中町屋建揃ふ○八月定火消八ヶ所に成る、（小川町と六番町を減ぜらる、武家の救火隊也）○八月十一日、畫人沖一峨卒、（字子卿、稱貞藏、後薙髮號二靖齋一）○九月十五日、神田明神祭禮、車樂遨物神輿ともに御城内へ入るに及ばず、產子の町々自在に渡すべき旨、八月二十三日の御下知により道筋替れり、（御屋太神樂井こま廻しは今年より止む）車樂遨物は當日例の通御茶の水土手へ集り、櫻の馬場神田社前より三河町一丁目迄は例の通りなり、神輿計は行列を整へ神田橋を入り、古例の如く酒井侯屋敷前大手御橋の上にて奉幣あり、夫より元の通神田橋を出、新規道筋になり鎌倉河岸龍閑橋を渡り、本銀町一丁目本石町一丁目本町一丁目壕塹に添て、本町一丁目二丁目三丁目より、例の道筋小網町南傳馬町假屋より京橋迄、夫より歸輿、道筋先例の如く、車樂ねりものは神田橋へ入らず、三河町一丁目より神輿と同く龍閑橋を渡り、本町へ出て同町三丁目より思ひ思ひに退散す、夜五時に神輿歸社あり○日枝大神神田大神兩社の祭祀は、隔年に執行して東都の一盛事

なり、邊物等は當日御城内へ入て幕府の覽に備へしかば、年々其趣かはる事なし、よつて是迄の祭祀は一一記さず、明治以來は其時々遊俠の黨俄に企る所のみにして、年々に不同あり、且神輿渡御の道筋等もかはれることあり△祭の時偶人其外造物を車にて曳するを、當地の方言に出しと云ふ、名義拙く文字にもうつし兼る故、和州譽田社に始りし車樂の文字を借り用たり、以下これに同じ○同十五日、夜月蝕皆既、夕七時七分より六時三分に畢る○九月二十六日、淨瑠璃語清元兵衛死、五十四歳、深川淨心寺に葬す、二世の延壽太夫にて世に行はれし人なり○同晦日、夜子刻、須田町二丁目東側婦王散の塵三好氏宅より火事、小柳町ひさゝか燒込たり○十月二日、細雨時時降る、夜に至りて雨なく天色朦朧たりしが、亥の二點大地俄に震ふ事甚く、須臾にして大廈高牆を顚倒し倉廩を破壞せしめ、剩その頽たる家々より火起り、熾に燃上りて黑煙天を翳め、多くの家屋資財を燒却す、神宇梵刹は輪奐の美を失ひ、貴賤の人家は鱗差の觀を損ふ、尊卑の大患東都の物恠何事か如之、凡此災阨に罹りし儔、家族に離れて道路に逃漂、甚しきは壓に打れ炎に焦れて、生命を損ひしもの數ふるに遑あるべからず、號哭痛噢の聲閭閻に滿ち、看るに肝消え聞に魂奪はる、其顚末委曲に演る事を得ざれば左に大略を擧ぐ、凡このたびの地震、江戸に於ては元祿十六年以來の大震なるべし、今夜四時より明方迄三十餘度震ひ、其餘十月迄百二十餘度に及べり△御城内石垣、多門見附御番所等、所々破損あれ共格別の事なし△御曲輪内甍を並べし諸侯の藩邸、或は傾き或は崩れ、立地に所々より火起りて、巨材瓦屋の燒崩るゝ音天地を響かし、再振動の聲を聞く、曉方に至り灰燼となれるも多かりし△小川町の邊一圓潰家多く、小川町猿樂町は所々より火起りて、大小名邸數宇燒亡せり△小石川隆慶橋手前江戸川續武家地燒亡△谷中天王寺五重塔は九輪計り折て落る△根津より下谷茅町の通殊に甚しく、人家潰たること軒毎なり、七軒町より出火、茅町二丁目よりも出火して、この邊

多く燒たり△下谷坂本も家毎に潰たり、同三丁目より出火一丁目迄燒たり△上野町一丁目裏組屋敷より出火、廣小路常樂院、大門町、黑門町、長者町、德大寺、一乘院中、御徒士町、その外類燒多し△東叡山諸堂別條これなし、大佛は御首落て碎る、不忍池石橋崩れ落、境内茶屋殘らず燒る△下谷御成道諸侯の邸總て潰たり△本郷新町屋の邊潰多く、麴室所々崩れ、落て卽死ありける由なり△本町、石町、日本橋向の邊より、大傳馬町、小傳馬町、馬喰町邊、神田の邊は、去冬と當春の炎に罹りて、家作あらたなる故おのづから痛少く、よつて池魚の阨も又これなし、されど土藏の壁は皆震ひ落せり△淺草田町の邊潰家殊に甚し、淺草寺地中馬道邊より出火、地中東の方寺院十八宇幷町家燒く、田町一丁目二丁目より火起て、聖天町、山之宿町、金龍山下瓦町、山川町、猿若町芝居三座、南馬道、北馬道、花川戸町西側等燒て死亡人多く、花川戸町河岸の角にありし六藏の石灯籠、稀世の古物なりしが、傾く事なくして全し△今戸橋畔柏戸金波樓玉屋庄吉潰れて火起り、近隣類燒せり△橋場町金座下吹所出火△山谷寺町寺院大方潰れ、又は大破に及ぶ、山谷淺草町殘らず潰る△淺草寺本堂二王門風雷神門恙なし、本坊奥向潰る、境内堂社多く潰れたり、五重塔九輪のみ傾く△駒形町出火、駒形堂は殘り、諏訪町、黑船町、三好町迄燒る△東本願寺は本堂恙なく、地中潰たる多し△行安寺門前より出火、玉窓寺より出火、近邊燒る、寺町寺院大破△吉原町の燒たるは他所より早し、京町二丁目江戸町一丁目より火起り、其餘潰たる家々より次第に燒出て、一廓殘らず燒亡す、大門外五十軒道は北側のみ殘る△小柄原より出火旅舍殘らず燒亡△三圍稻荷社幷末社額堂潰る、土手の際に在し石大鳥居倒れて碎る、長命寺潰れ牛御前は額堂其外潰る、隅田川堤裂大地割れて泥水湧出たり△本所の地は殊に震動烈しく、家々兩側より道路へ倒れかゝりて、往來なり難かりしと、死亡幾百人なるを知らず、又燒亡の場

所多し△本所緑町壹貳丁目燒亡、同四丁目五丁目、花町、上村氏、德右衞門町、龜戸町、半町、南本所荒井町、北本所荒井町、五の橋町、出村町、瓦町、番場町、中の郷竹町、同所武家地、茅場町、石原町其外組屋敷等潰燒亡す、中の郷太子堂、押上最敎寺、柳島妙見宮の門前、柏戸橋本の家潰る、萩寺本堂僧坊、光藏寺、長壽寺本堂潰る、龜戸町少々燒、小梅瓦町、柏戸小倉庵潰る、出火近邊燒る△一ッ目辨天社拜殿其外潰、御船藏前町より出火、此邊一圓に武家町屋燒る、此火深川六間堀の火と一ッに成れり△五ッ目五百羅漢寺本堂大破、左右の羅漢堂幷に天王殿（布袋四天王、關羽を安す、）潰、三巾堂（俗にさゝえ堂といふ、）大破に及べり△深川の地も本所と等しく震動甚しく、潰たる家々より出火多し、熊井町、相川町、中島町、蛤町、黑江町、大島町、仲町、山本町、永代寺門前、伊勢崎町、龜久町、富吉町、三間町、西町、諸町、元町、常磐町、六間堀町、八名川町、森下町、小笠原侯、井上侯、太田侯下屋敷、其餘御旗本衆或は組屋敷等燒亡せり、六間堀神明宮は火中に殘り、富岡八幡宮恙なし、別當永代寺は大方潰たり、三十三間堂三分の二潰る、深川寺町玄信寺、海藏寺本堂潰る、猿江の邊寺院町屋多く潰たり△靈巖島鹽町より出火、同所四日市町、同所銀町二丁目、大川端町燒亡△濱町水野侯中屋敷燒失△築地西本願寺恙なし、鐵砲洲松平淡州侯屋敷より火出て十軒町へ燒込△南鍛冶町一丁目より出火、同二丁目狩野屋敷、五郎兵衞町、疊町、北紺屋町、白魚屋敷、南傳馬町、南大工町、松川町、鈴木町、因幡町、常磐町、具足町、柳町、炭町、本材木町等へ燒込△柴井町も潰家より出火あり△芝西久保麻布の邊、其外四谷、赤坂、市谷等、山の手と唱ふる所は震動少く、潰家も隨てすくなかりし△品川沖御臺場の内建物潰れ土中へ入り、剩火を發したり、此夜潰家より火起り燒亡に及し場所間數左の如し、

△大手御門前、西丸下八代洲河岸、日比谷幸橋御門内まで、長十三町餘、幅平均三町程△南大工町より燃立、京橋の邊一圓燒失す、長五町餘幅平均二町程△築地松平淡路守殿より火起り、十軒町燒失、長一町半餘幅平均四十間△柴井町木戸際より起り、同町のみ燒る、長一町四十間餘幅三十八間程△靈巖島鹽町より起り、濱町、四日市、北新堀、大川端迄、長一町餘幅五十間程△淺草駒形町より起り諏訪町外五ヶ町類燒、長四町餘幅三十間程△同行安寺門前より起り、龍光寺門前玉窓寺より起る、長三十六間餘幅卅間程△淺草寺地中より起り、田町、花川戸町、猿若町燒失、長八町餘幅平均二町半程△吉原町殘らず、非人頭かゝへ内燒失、長三町餘幅平均二町二十間程△上野町一丁目武家境より起り、下谷廣小路東の方一圓燒、長六町半餘幅平均壹丁十間程△下谷茅町二丁目より起り、武家方燒、池の端七軒町より起、長二町半餘幅平均四十五間程△下谷坂本町三丁目より起り、同一丁目二丁目燒失、長二町二十間幅平均四十五間程△千住小塚原町より起り、下谷みのわ町へ飛火燒失、長一町半餘幅平均五十間程△橋場金座下吹所より起り、又今戸町より起り、最寄燒失、長一町二十間餘幅平均二十間程△小川町邊燃立ち家不ㇾ知一圓、水道橋内まで燒失、長六町半餘幅平均四町程△濱町水野侯中やしき長屋内燒失、長五十二間餘幅四間程△小石川りうけいばし邊武家やしき燒失、長四十二間餘幅十間程△永代橋向南の方、深川永代寺門前仲町邊一圓燒失、長十間幅平均三町程△深川いせざき町、龜久町の邊燒失、長三町餘幅平均三十間程△新大橋向御船藏前町、六間ぼり森下町邊燒失、長七町餘幅平均二町半程△本所緑町より堅川通り、中の郷五の橋町邊燒失、長六町餘幅平均三十間程△南本所石原町法恩寺橋まで、龜戸町燒失、長一町二十間餘幅平均十二間程、△南本所荒井町、北本所番場町の邊燒失、長三町餘幅平均二十五間程△中の郷成就寺、向小梅町元瓦町の邊燒失、長五十間程幅

平均八間程、以上江戸中燒亡場所、合凡長二里十九町餘、幅平均して二町程と聞り、

○三日朝五時過にいたり、諸方の火やうやく鎭れり、○神社は大方破損少し○凡此度の地震に、武家町屋寺院等に到る迄、家の全きは甚少し、倉庫は悉く壁落て、これに觸て死たる者多し、火災ある所の倉庫は悉く燒て、家財雜具は更なり、重代の名器珍寶亡び失たるもの數をしらず、再度の震動を恐れて、貴人は庭中に席を設けてこゝに明し給ひ、庶人は大路に疊を敷き戸障子をもて四方を圍ひ、しばらくこゝに野宿し、傾たる家はかりそめに繕いてこゝに憩ひたり、本所深川下谷茅町山谷等の地は家毎に潰れたれば、更に大路の通路さへ成がたし、頓て壞たる家の材木を集て、はかなき假屋をいとなみて住居しけるが、甚しきは食糧にさへ竭て、焦土にたゝずみ悲泣せるもありけるとぞ○二日夜よりこのかた、地震屢ありて更に止む事なし○町會所より日々野宿の貧民へ握飯を與へられ、又御救の小屋を所々に建て養はる、富人も又色々の施しを行へり○地震の後酒肆食店商ひ甚少し、絃歌鼓吹街に絶たり○地震の後、池の端辨才天境内の料理屋殘らず門外へうつす○板材木作事諸職人傭夫の賃錢甚貴し、官府より嚴重の御沙汰あり○このたびの地震、近郷は更なり近國にも及べりとぞ○地震の前兆色々の談あり、又其夜危難にあひし輩さまざま話柄あり、こゝに略す○地震の事を誌して梓行せる安政見聞志、同見聞錄など題せし冊子あり、坊間に舊ふ所の一枚摺、綴本、にしきゑの類何百種といふ事をしらず○吉原町娼家の僑居は、五百日の間免許ありて、十二月より春へかけて次第に營作成り、元地の家作は翌辰年より巳年へかけ、同年六月迄に成就して各徙移せり○同僑居の地△淺草は東仲町、西仲町、花川戸町、山之宿町、聖天町、金龍山下瓦町、今戸町、山谷町、馬道町、田町一丁目二丁目△深川は永代寺門前町、仲町、東仲町、山本町、佃町、常磐町一丁目、松村町△本所は御船藏前町、八郎兵衞屋敷、一ツ目辨天の邊なり、松井町一丁目、入江町、長岡町一丁目、陸尺屋敷、時の鐘屋敷等なり○抑此夜都下の急變、いづこも同じ轍なれど、わきて花街の忽劇はかならずしもいふべからず、未だ夜更るにあらざれば、每家酒宴に長じ歌舞吹彈の最中、俄に家鳴り震動して立地に崩かゝり、うつばりくぢけ柱折れ、其物音は雷霆よりも凌兢く、魂中天に飛び、慴怖周章して二階を下んとすれば、胡梯跳りて下る事ならず、狼狽し宛轉落れば、巨材其上に墮重りて五體を挫き、或は其間に挾れて自在を得ず、號べども援る人なく、呼べども應ふる人なし、瞬目の頃火起りて焰勢其身に迫る、危くして遁れ出たるも途方を失ひ、烟に咽びて道路に倒れ息絶たるもあるべし、家のあるじ家族に於ても猶しかり、僅に四肢を全うして脫れ出たるもあれど、資財寶貨は他へ運ぶに遑あらずして、むなしく灰燼となしつ、この火五街に延蔓して廓中殘る家なし、三千の遊君或は漂逃、あるひは亡たり、かゝるをりには看返り柳も見かへる事なく、合力稻荷も力を合するによしなし、久喜萬字屋は火前に向ひ、火炎玉やはくわえんにうづまる、海老屋が柱はえびの如く曲りて燒け、菱屋がかどは菱の如く窳て殘れり、較明方に及んで阿房一片の烟と立登り、惜むべし廓中盡く烏有となりぬ、燒死怪瑕人幾百人かありけんさだかに知れる者なし、火中に其骸を繹出し、慘怛して腸を斷ち、なく〳〵家に送りて後葬儀を營む、五十軒道は六道の街となり、編笠茶屋のあみがさは郊送の被り物とやなりけむ、この夜此里に遊びし騷人嫖客、この妖孽にあひて或は横死し或は重き疵をかうむり、勃窣して路頭にさまよひ、たま〳〵無事にして落のびたるも、衣服佩刀を失ひあらぬさまして家に歸りしもありけるとぞ、まして廓中の男女、この夜の窮厄はた金銀財寶數を竭して失ぬる事量り知るべからず、痛むべく歎くべく、何ぞ毛頴をもて演る事を得んや○十一月國家より諸宗の寺

院に命ぜられて、此度の禍に罹りて亡びる輩、迷魂得脱の爲、同二日施餓鬼法會を修せしめらる、緇素參詣して香花をさゝぐ○此度變死怪我人市中の呈狀には變死男女四千二百九十三人、怪我人二千七百五十九人とあり、寺院に葬し人數は、武家浪人僧尼神職町人百姓合て、六千六百四十一人と聞り○蘆の屋檢校は、塙檢校よりこのかた瞽者の博識なり、惜むべし地震の夜針術の爲に病家に赴て横死せり、（西久保光明寺に葬）○十一月より町會所に於て、震災に罹りし貧民へ御救米を分ちあたへらる○同廿三日、兩國橋御修復成就によつて、老人の渡り初あり○同晦日長唄の三味線に名ありし杵屋六翁死、（七十餘歳）○【無補】同三日、赤坂田町料理茶屋、隱賣女の媒介せしによりて召捕へられ入牢、十二月に至り御叱にて落着す○【無補】十月の頃より駒込巣鴨邊に於て、夜中刀物を以て女の臂を刺すものあり、十一月上旬に至りて止む○十二月二日、切支丹坂火事○同七日夕七時より、雪降出して少しく積れり、（地震後假の結ひしたる家々、小屋がけ野宿の貧民、その困苦いふばかりなしとぞ）○同八日、夜子刻、八丁堀水谷町一丁目より出火、長凡一町幅五十間程燒失す○同十日、北辰一刀流劍術師千葉周作成政卒、（淺草誓願寺に葬す、淺利又七郎の門人にして一派をなせし人なり、二男榮二郎も名人の聞え有りしが、文久二戌正月卒したり）○松平越州侯高田の中屋敷安置の觀世音、今年より毎月十六七八日には、諸人參詣を許さる○同廿日、雪降て尺に滿つ○地震後河原崎權之助が芝居名題森田勘彌に改む、（俳優前の坂東三津五郎なり）○近頃麁糙の菓子に、紅梅燒と名付る物を售ふ家多し、是は香餅と云んを、しか誤れるなるべし、

増訂武江年表巻之九 畢

増訂武江年表巻之十

○安政三年　丙辰

正月二日曉、櫻田御門外上杉侯屋敷より出火○小石川上富坂町出火○深川越中島續に砲術調練場を築せられ、築地に講武所御取建あり○同十七日、書家生方鼎齋卒、（五十八歳、酒狂人の爲め切害せらる）○春も少しき地震度々あり○二月より、淺草寺奥山に活偶人みせもの再び始む、（肥後熊本松本喜三郎が作なり、水滸傳の豪傑、忠臣藏夜討、鏡山淨るり狂言の偶人、一ッ家の姥、爲朝に島人、遊女屋内證の體、久米の仙人布洗女など活るが如く造りたり、この假屋間口十三間奥行十四間にて、偶人の數六十二あり、看せものを開けるうちの壯觀なり）○二月旋風吹くこと度々なり○同十五日、丑中刻、北西大風なりしが、下谷廣德寺向おたふく横町の武家地より出火して、此邊多く燒け、立花侯、佐竹侯、柳澤侯、松平總州侯、松浦侯、小笠原侯兩家、加藤侯、前田侯、曲淵侯其餘小吏の家々、下谷辻番屋敷（半分燒）等類燒して朝五時頃に至り鎮る○春淺草御門外第六天社境内に於て、操芝居興行○二日上野護國院に、七萬日念佛會滿散、この法會は慈眼大師の發起にて、夫より以來今年今月七萬日に當れる由也、緇素老稚群參する事夥し、（三十三年目毎に法會を修せらるゝといふ）○同廿四日より六十日の間、下谷高岩寺延命地藏尊開帳、（世にとげ抜地藏といふ）○同廿五日より六十日の間、麹町平河天滿宮社地に於て、越後菅原村天滿宮開帳、（京北野同作と云）○三月八日より、（日限失す）目黑正覺寺鬼子母神開帳○同十四日曉、本郷附木店武家地火事○同十五日より五十日の間、成子常圓寺長生日蓮上人像開帳、（六老僧日持上人作）○同日より六十日の間、深川永代寺にて下總國我孫子宿子權現開帳、（別當延壽院なり、日限半途にして止む）○同廿日より六十日の間、下總國成田山不動尊、深川永代寺に於て開帳、（江戸着の時送迎の人數、千住より深川迄街衢に寒りなせり、永代寺境内は寸地を洩さず、看せ物茶店諸商人の假屋をつ鍬を立べき所なし、開帳中日參朝參等夥しく諸人山られたり、又奉納の米穀幟挑灯扁額等境内に充滿せり○看せ物は江戸細工人の造りし活人形、里見八犬士の土偶人、曲馬輕業大女の三人兄弟といふもの出たり、この姉妹は下總國葛師郡庄内領木の崎村百姓彦七娘にて、なつ十六歳なか十二歳より八歳也、いづれも格別大なるにはあられど肥滿せる事甚し、其餘色々の見せもの出たり）○同月四谷天龍寺後、上水の端へ櫻樹數株を栽ふ、間もな

く廢せられたり○同月、淺草寺仁王門修覆始る○同廿七日、曉大風、芝宇田川町より出火、柴井町再燒る、長一町五十八間、幅平均して廿間餘也○四月十一日曉、牛込若松町火事、組屋敷燒込○五月四日、儒醫深川元儁卒、稱潛藏、號霽宇、儒學又老佛に涉り、物産國學西洋の學もあり し人なり、本所御臺所町に住せり、本所妙源寺に葬す○同月淺草寺五層塔婆の九輪、地震の時傾たるを修理す○夏の頃より、芝仙臺侯中屋敷に勸請ありし、奥州松島鹽竈明神遙拜所へ、毎月十日諸人參詣を許さる○六月十五日、山王權現祭禮、恒例の通神輿行列車樂計り御城内へ入る、附祭の伎踊邏物と御雇大神樂同獨樂廻しは今年更に出さず、午刻驟雨雷鳴あり、神輿の行列のみは跡に殘りて雨にあひたり○新貳分金通用始る○八月九日より、深川永代寺に於て、相州江の島本宮岩屋辨才天開帳始りしが、更に詣人少し、然るに同月廿五日の大風雨に假家潰れて、境内にある所の小堂に移し、程なく歸國あり○秋九段坂下に蕃書御調所御創建あり、異邦渡來の書、并に和版異國の事を記したる書を改らるゝ由なり○八月より十月迄、大の月三月續きしにより、古例の通今月十七日十八日、芝切通金地院觀世音開帳、坐像にして宋陳和卿が作なりといふ、此日詣人へ求るによつて抄子を與ふ、家にかけて守とし、又旅行の輩懷中して方位の凶を避るといふ○八月廿三日微雨、廿四日廿五日續て微雨、廿五日暮て次第に降しきり南風烈しく、戌の下刻より殊に甚しく、近來稀なる大風雨にて、喬木を折り家屋塀墻を損ふ、又海嘯により逆浪漲りて、大小の船を覆し或は岸に打上、石垣を損じ洪波陸へ溢濫して家屋を傷ふ、この間水面にしば〳〵火光を現す、此時水中に溺死怪瑕人算ふべからず、曉丑刻過て風雨やうやく鎮れり、始の程は少時雷聲を聞く、又風雨の間地震もありし也、翌廿六日朝より霽に屬す、諸商人活業を休むこと數日なり、人家所々潰たる數ふべからず、寅卯兩年の災に罹りし場所、家作の新らしきも潰れしあり、去冬の地震にいたみしは更なり、微塵になりしもの數を知らず、去年の地震に山手の家々は安泰なるが多かりしが、今年の風雨は江戸中一般の大破にて、家潰傾かざるも、屋上の板天井の板をも吹散らし、甍を重ねし家々は殊に瘧み倒れ、海岸山崖の家はわけて烈しかりし、山林には喬木折摧け草は一夜に枯萎たり、ことに駭歎すべきは築地西本願寺の御堂なり、さしもの大廈なれども一時に潰れて微塵とはなれり、此邊船松町、上柳原町、南本郷町、十軒町南飯田町、南小田原町、深川洲崎、芝高縄、品川等の海岸は、殊に風浪烈しく人家を溺らし、或は逆浪にさそはれて海中へ漂汎し、資財雜具は見るが内に流失たり、諸侯の藩邸も海岸にある者はこれに同じかりし△深川本所の地、大方床の上二三尺水の上りたるが多し、同所に在し吉原町娼家の假宅、大破に及び潰たるもあり△永代橋大船流當りて半ば崩れたり△大川橋勾欄吹損じたり△本所靈山寺本堂潰る△淺草西宮稲荷鳥居折れ、三社の前なる鐘樓は屋上を吹飛して跡方なし、活人形見せ物假家なかばを損ふ、この邊にて家を損ひしもの、此假家へ入て當分の雨露をしのぎたり△御藏前華德院閻魔堂潰る△湯島天神銅鳥居神樂堂倒る△御城内格別のいたみなし、半藏御門は渡り櫓綿れて落る、御廓内松の大木折たるもの多し△芝片門前一丁目潰家より出火して雨中燒廣がり、神明町、三島町、宇田川町西の方等へ燒込たり、增上寺山内は別條なかりし△其外市谷吉原町の内、下谷金杉村淺草日輪寺内、その餘所々潰家より火出たり△砂村邊行德の邊、堀江猫實三崎の邊、其餘近郊人家流れ溺死のもの多し、柳原の柳風雨の後新芽を生じて春の如し、楓葉しぼみて看楓の噂なし、菊も又同じ、十月所々返り花あり、海棠花咲て春にかはらず△風雨の後はかなき假屋をしつらへ露眠の輩多く貴賤の艱難いふばかりなし△凡この度の風雨近郊は更なり、東海道駿河の邊より、信甲の邊所々にも及びし由也△此度の事件を誌して安政風聞志、又地震海嘯考等の編輯梓行せり○町會所より市中野宿の貧民等へ御救米錢を分たる、又富商よりも施行多し○九月下旬より諸宗寺院に於て、去年地震の時横死の輩、迷魂得脱の爲に再法筵を設く○同廿八日曉、元

飯田町中坂燒亡○淺草奥山に於て、大輪の菊花八十餘種を集て看せ物とする由、其内四海の月といへるが差渡一尺六寸、日本一勢龍西王母といへるが同一尺五寸、其外一尺四寸より九寸迄の名目をあらはし、九月の末より報帖を配りしが、十月の始場を開てより行て見るに、花の大さ漸く四五寸に過ず、花にあてたる紙の大さ一尺餘りもあるべし、見物各欺かれたり、それ故か催主の名をあらはさゞりし○十月二日より十一月二日迄、本所回向院に於て、明暦丁酉江戸大火に亡びし輩、二百年忌法事修行あり、道俗日毎に參詣し、滿散の日は殊に群集夥しかりし○十一月廿日、柳原堤なる町會所建添地籾藏を葛飾郡小菅村に移し、新し橋向に籾藏あり、其跡へあらたに町家を建られ、柳原請負地と號す、翌年夏より次第に家作建排ね、繁昌の市店となれり○同八日、午刻過、通三丁目東側中程より出火、同四丁目東側福島町、松川町、下槇町、榑正町へ燒込たり○同十四日、朝五時、本所入江町火事、吉原町娼妓家の假宅より燒出たり○十六日曉、龍閑町續神田一番の土手際より出火、四軒屋敷類燒す○同廿日曉、神田橋外養安院屋敷火事○同廿三日曉、上野谷中道觀成院失火、類燒なし○十一月より翌巳年にいたり、淺草寺觀音堂前奥山等に櫻樹千本を栽ふ、北方の佳人驟客のうゝる所なり、享保に始り寛政に再び栽、此度に至り三度なり○十二月廿日、畫人喜多武清卒、八十一歳、字子憤、號可庵、鶴翁、五清堂、文化の頃より世に行れし人なり、二本榎清林寺に葬す、辭世の狂歌碑面に彫たれど、拙ければこゝにしるさず○今年日本史御版成る、二百四十卷、六月の頃世に弘られたり、本邦の歴史此書にとゞまるにやあらん○麹町の續馬場に於て、小笠原家の門人馬術稽古の爲、炮碌調煉と云ふ事を工夫し始らる、庖厨に用ふる大なる炮碌にあらず、差渡四寸計の土器を頭上にいたゞき、馬術稽古の面を被り、馬上にて隊伍を定め打合ひ、土器のこぼれしを輪とし全きを疵とす、見物多く出○亞國の船渡來せしよりこのかた、異國諸州の船次第に通航し、貿易を許し給ひければ、和俗の稱へにカナキン、ラシヤ、ゴロフクレン、綿ゴロウ、唐サントメなどいふ物多く持渡り賣買す、價の廉なるをもて求る人多し、其外諸器物等次第に運輸せるが故、西洋諸品に限り舊ふる塵も多く出來て、貨殖せるものこれあり、按るに、近き頃迄は本邦へ通航するは和蘭陀のみなり、故に世人西洋の諸品書畫の類を見ては、すべてオランダと稱したり、近來諸洲通航せるをもて其別をしりたる人多し○近頃十姉妹鳥の名、の異品を養ふ人多し○大坂下り新十郎、秀三郎、光之助、仙太郎、雀三郎、彌一郎、虎十郎、新玉などいふもの、照葉狂言と號し、能の間狂言により歌舞妓狂言の所作を交へ、所々に於て興行せし、見物多かりしゆゑ、江戸にてもこれをまねびしもの多かりけれど、いづれも拙かりし○此頃淺草御藏前に、大笠と諢名せる賣卜者出る、籐笠の差渡五尺餘もあるべし、岡田某といふ、

○安政四年　丁巳　五月閏

正月三日、曉より雪降つもる、去年の冬より火災は少し○正月より、淺草寺奥山に於て、故人高屋柳亭翁が編述の稗史田舍源氏の趣をもて作れる偶人、其餘花街の體、歌舞妓狂言の偶人を造りて看せ物とす、秋山平十郎が製造なり○正月晦日より、兩國橋詰に於て、大坂下り早竹虎吉、獨樂にてづま、輕趫、綱豆り、その餘色々の技藝を交へ、一人して行ふ、見物群集夥し、これに續て三月頃より櫻綱駒壽といへるもの、其弟子幸吉、福松、助三郎などいへる少年とゝもに大坂より下り、早竹にひとしき業をもて、淺草寺奥山に看場を開き、見物群集しけるが、五月の末にいたりて歇む、○二月三日大雪降積る○二月風邪を病むもの多し○同十五日より三十日の間、眞崎神明宮本社に於て、末社麁香社の祭神、手置帆負神、彦狹知神二神の像開帳、木匠の祖神といふ、諸人少し○同廿日より六十日の間、深川洲崎吉祥院辨才天開帳○同廿一日、午刻過、赤坂御門外黑田侯中屋敷火事○同廿八日より六十日の間、目黑瀧泉寺不動尊開帳、境内見せもの多く出る、諸人群集し奉納物多し○【只補】二月下旬より、淺草奥山に於て、上方下り輕業師櫻鯛駒壽、飛び放れたる曲を演じ、見物多し○三月朔日より六十日の間、芝神明宮境内辨才天開帳○同十五日より五月廿八日迄、增上寺山内柵門の内蓮池寶珠院芙蓉洲辨才天開帳○同三日より百日の間、相州江の島下の宮辨才天開帳、諸人多し、何れも巳の年により辨才天開帳せしむる所なり○同十五日より三十日間、多摩郡

井の頭辨才天開帳、別當明靜山大盛寺○同日より三十日、西葛西關原大聖寺不動尊開帳、大山同木と云○同十八日より六十日の間、淺草寺町正覺寺に於て、佐州阿佛房日の丸日蓮上人像開帳○同日より三十日の間、二本榎覺眞寺弘法大師作首尾圓滿辨才天開帳○蒸氣觀光丸御船品川沖へ着○彼岸櫻三月末に至る、隅田川櫻は四月に盛なり○三月一石橋南詰に、迷ひ子の爲に標石を建る、西河岸町の本頭（いぬし）思寄りて立るところなり、正面にまよひ子のしるべ、左の方にたづぬる方、右の方にしらする方と鐫す、尋るものは其兒の年齢格好衣服親の住所等を書付、なしふる方は見聞に隨ひ其模樣と迷ひぬる所を記し、此石に粘して便利たらしめんとなり、官府よりも奇特の事とて御賞美あり、これより後これなまねびたるものあり○四月朔日より六十日の間、深川永代寺に於て、常州眞壁郡大寶八幡宮開帳、神寶に小烏丸太刀其餘刀劍の類多し、名におふ靈社なれど、開帳中詣人少かりし○同十四日、或諸侯の臣小倉某とて弱年の士、遠國より東都へ下り、始て芝居を見んとて、猿若町三丁目の芝居を見物しけるが、俳優市川市藏が天竺德兵衞に扮して、親を害するの狂言を看て、俄に憤りを發し刀を拔て切かけしが、かしこく避て樂屋へ逃入ければ、追んとするを芝居掛りの者是を止んとして、一人は淺手一人は深手を負ければ、多人數出てやうやくに取押へける由なり、思ふにかゝる痴人は惡人よりも恐ろし、敵打の狂言に出あはゞ名のりて助太刀に出べし、されど忠臣孝士の貧に迫りたる脚色を見ては、財を施し救んとするや、おぼつかなし○同十六日より六十日の間、上總國柴山觀音寺本尊十一面觀世音、慈覺大師作、那羅延密迹の二王尊像、吡首羅摩作、本所回向院に於て開帳、三月廿一日江戸到着の日、角觝人佛龍を舁く、開帳中貴賤輻湊して靈驗を仰ぐ、境内に百面相といふ見せ物を出す、貴賤老稚の婦女子喜怒哀樂の姿を造りし所にして、活る人に向ふが如し、細工人竹田源吉といふ、見物多し○同十八日曉、牛込正藏院門前町屋より出火して、築土邊武家町屋とも燒亡せり○同十九日夜、本所松井町一丁目に僑居の廛を開し、吉原揚屋町娼家新丸龜屋鐵五郎が抱への遊女玉川雛次兩人、馴致の客兩人合て四人、一間の二階座敷に於て情死す、男は小田原町と長濱町の魚店につかはる〻男なりし、吉原町開發よりこのかた、四人一時に情死せるためしを聞ず○同廿三日曉、宇田川町兩側災○五月閏の任には三月十日とあり筋違橋御門外加賀原千九百八十坪をして、築地講武所付町屋敷に命ぜらる、町名を筋違橋御門外講武所附町屋鋪と云、七月頃に至て家作成り、繁昌の町屋と成る○【無補】同廿七八日大雨、芝愛宕下出水溺死四人あり、千住洪水、往來の出水人の乳を越ゆ○閏五月より始り神田なる防火の封疆十ヶ所文政中築立られし所也、を取崩し、町屋に改られ町會所付受負地と號す、右封疆の土を以て、今川橋通りの川筋本銀町一丁目北より、龍閑橋際ばかり殘る、大傳馬鹽町北迄の間、幅八間餘の川を埋て新規町屋と成し、講武所付受負地と號す、八月に至り右川通埋堙の事成て、翌年に至り次第に家作建揃ひたり、今川橋井東西に在し四ツの小橋を廢せらる○夏より永代橋御修復始る、この間北の方茶店の所へ假橋かる○六月南傳馬町天王出輿の事十一日に延、十八日歸輿あり○同十五日、赤坂氷川明神祭禮、車樂の外に曳物二つ出、伎踊邏物は出さず、これは本社破損によりて、附祭を減じて修復の料に充る由也○夏櫻田久保町の原に、轆轤首の女とて見せ物とす、覗からくりの如く箱をつくり、中を闇くして目がれの穴より見る、おもてに紅粉をよそほひ、首をふる事數同なり、いつはりと知りながら見る人多し、又此邊に同案の見せ物出て、ろくろ首の女二人となれり○吉原町娼家の僑居、六月を限りとして引拂ふべき旨を命ぜられ、追々に新宅成りて舊地へ歸る、假宅の間六百日なり、引移の時行裝目を驚かせり○秋新大橋の東岸に、蝦夷地產物會所を建らる○七月九日より六十日の間、深川淨心寺に於て、甲州身延山祖師七面宮開帳、參詣群集し、毎朝未明より開門を待て參詣す、講中の輩神事の時持出る萬度といふものの如く、思ひ〳〵の行燈をつくり、燈火を點じてこれをかつぎ、群なわかちて一樣の衣類を着し、太鼓を打題目を唱へて往來する事たへず○同十七日より九月廿七日迄、大師河原平間寺弘法大師開帳、參詣多し○同廿二日、夜風雨雷鳴あり川々出水家屋を傷損す○同廿六日、夜に入て大雨降、廿六夜、六月の出を待つの所々、幷日暮の里諏訪明神祭禮、參詣の輩急雨にあひたり○八月四日、曉八時、淺草西福寺庫裡より失火して、本堂方丈其外悉く燒たり○同廿八日、淺草大護院廿世道本師化寂、權僧正に任ず、世壽九十歲、神奈川金藏院に葬す、能書の聞え有し人なり○同廿九日曉、本材木町七丁目出火○同晦日、牛込原町出火○八月より、外神田新町屋へ人形芝居始る○九月十五日、神田明神祭禮、神輿車樂等御城内へ入る、附祭

踊伎邏物は出さず、（御屋大神樂にこま廻しも不レ出、婦女の警固一切なし、十六日禮參り雨にて淋し）○同晦日、茶人川上渭白卒、（六十九歳、お玉が池に住せしが、上州植田に赴きて卒せり）○九日に凶會日九日ありとて人々忌けるが、更に事なかりし○十月朔日二日、回向院にて去々卯年地震の時、非命に終りし輩追福として法事修行あり、その餘諸寺院にも修行あり、諸人參詣供養す○同十日、湯島天滿宮祭禮、十一日十二日に延て執行あり、產子町々より車樂伎踊邏物等あまた出せり、（廿年ぶりなり）兩日快晴にて見物の老少群をなせり、當年は所々の祭禮に各車樂邏物等を催して賑へり、（大久保西向天神、谷中諏訪明神、牛御前、根津權現、白山權現、小石川氷川明神等なり、其餘猶有べし）○十月上野山下に床見せ再興あり、（茶見世、講釋場、見世物、食物店、書物屋、道具屋その外諸商人多く出る）○同十二日、朝より北風烈しかりしが、夜九時過駒込淺嘉町より出火して、白山の手前淨心寺同門前町家、一音寺、阿部侯の下屋敷の長屋へ移り、夫より飛で駒込片町、同追分町本多侯屋敷迄燒亡す、長二町幅平均して一町程なり○十四日、亞米利加合衆國の使節、副使とゝもに二人始て江戸へ着す、（朝川崎を立て、品川高縄通り町筋、本町二丁目より御堀端通、小川町九段坂の下蕃書御調所へ到着す頃、見物の老少面を以垣とす、逗留中副使ヒッスケン、田安御門外的場に於て馬術をこゝろむる事幾度なり）○十日中旬日を失す、午の半刻晴天にして遠雷の如き響して、東北より西南をさして空中を鳴渡る事二度計り、不思議の事と思ひしに、（後より）鶏鳥（一に獵子鳥又鷂胡雀）巨細群をなして飛渡りたるよしなり、其翌日よりして麻布青山澁谷の邊、樹木にこの鳥夥しく止り棲たるを、捕得たるもの多かりし由なり○同廿四日、夜四時前大雨中、淺草三間町火事○當冬火災少く世上穩なり○十二月六日、吉平橋畔にて、淺草の棹子（せんどう）神田の救火卒（ひけしにんそ）と喧嘩して、其夜神田の俠夫競ひ發り、柳橋向淺草に押寄せて、棹子何某が家を毀ち、翌七日再度鬪爭に及びて、雙方疵をかうむるもの多かりし○冬深川越中島續き武術調練場築立成就す○荏原郡大井村梶原稻荷社、遽然に時行て參詣群集し諸願をかくる、近邊茶店等多く出たりしが間もなく止む○牛込加賀屋敷青木左京殿臣飯田順之助易義と號す、今年百十六歳の由、稀なる長壽にして、しかも矍鑠の翁なれど更に文字に疎し、漸く此頃他人にすゝめられ少しく文字を書す、

○安政五年　戊午

正月三日、曉より雪降積り尺に餘れり○戲れの大小、「小正算ちがひ六七四十三」○同九日、夜亥下刻にや、淺草猿若町三丁目森田勘彌が芝居より出火して、同町二丁目、聖天町、金龍山下瓦町燒失、（眞土山は恙なし、猿若町壹丁目は殘り、二丁目の芝居は燒たり）○同廿一日雪、亞墨利加の使節江戸を立ち、芝より乘船して豆州下田へ赴く○同廿二日夜、麹町平河町火事○同晦日、夜中より雪、秉燭の頃積る事尺餘なり○正月より、神田紺屋町土手跡に、操芝居興行、又二月より新革屋町埋立地にも、かぶき芝居興行せり、何れも竊にはじむる所なれば、やがて停られたり○二月朔日、明六時、芝愛宕下木下侯屋敷より出火○同十日、（彼岸の終り、初午の二日前なり）朝より北風烈しかりしが、日暮てより少しく鎭りぬ、然るに戌刻安針町長濱町二丁目の境、魚店の納屋より火出て一時に燒廣ごり、瀬戸物町、伊勢町、本小田原町、長濱町、本船町、室町裏通へ燒込、江戸橋を越て四日市町、青物町、萬町通一丁目、二丁目裏手、音羽町、佐内町、小松町、川瀬石町、本材木町四丁目迄、新右衞門町、榑正町、平松町、南油町中通、又海賊橋向牧野侯屋敷へ少しく火移り、坂本町、南茅場町、山王旅所門前、其餘八丁堀邊一圓燒亡す、（松平越州侯、九鬼侯は殘る、中興力町火中にして殘る）、北紺屋町、金六町、岡崎町、松屋町、日比谷町、永島町、松川町、幸町、長澤町、本八丁堀高縄代地、北島町、竹島町、南八丁堀へ移る、（橋際稻荷社は危く殘る、又蒟蒻島も殘る）、靈巖島、川口町、長崎町、銀町、圓覺寺、富島町、東湊町に至り、佃島へ飛で住吉社も燒たり、夫より本湊町、船松町、十軒町へ燒込、武家には阿州侯中屋鋪、細川侯燒失、松平淡州侯屋鋪少し燒込、此所にて止る○翌十一日巳半刻に鎭る、町數八十五町長延十八町餘、幅平均して四町程なり、（此時土藏の多く燒たるは、卯年の地震後修復の麁略なるがゆゑ燒たるが多しとぞ、市中初午稻荷祭、火事により大方二午に延す多し）○同十五日、曉寅刻、小日向竹島町武家地より出火して、上水端江戸川の邊武家地、

牛天神下諏訪町等焼亡○淺草寺奥山へ貝細工見世物出る、植木草木鷄に太鼓人物等なり○三月二日より六十日の間、市谷柳町光徳院千手觀世音開帳、天滿宮御作といひ傳へたり、四十九年目の開帳なり、芝居見せ物多く出、奉納物多し、參詣群集す○同三日より六十日の間、川口善光寺阿彌陀如來開帳、參詣多し○同三日、猛雨中曉七半時、通新石町西裏通卸し菓子屋伊之助宅より出火、佐柄木町、鍋町、同北横町へ燒込、夜明て鎮る、長五十間幅三十間程なり、夜明て後風雨猶烈し○同五日、亞墨利加の使節再出府して蕃書御調所へ着し、當分こゝに泊す○同十日、阿蘭陀領事官愛宕下眞福寺へ着す、亞人三月十六日淺草寺へ、十八日王子筋へ遊觀せり、是より以來蘭人魯人英人度々遊歷せり○同十一日より六十日の間、淺草新寺町正覺寺に於て、甲州青柳昌福寺祖師開帳○同月永代橋御修復成就す○同月より飯倉瑠璃光寺境内にて、百日芝居興行○四月五日、戊申刻、深川亥の堀火事○同五日、蘭人回向院にて相撲見物す、これより後應これあり○同下旬甚冷氣を催す○同月頃より米穀價貴踊す○十四日夜雷鳴、本郷へ二ヶ所へ落○五月七日、亞墨利加人豆州下田へ退く○同十五日より六十日の間、回向院に於て、上總國松谷村勝覺寺本尊釋迦如來、幷に四天王像開帳、四天王の像はあらたに刻みし所なり、詣人更になし○同晦日、夕七時、谷中三浦坂下火事、花火を製して售ふ人にて、火をあやまち卽死四人あり、家數五軒程燒たり○吉原仲の町往還へ花菖蒲を栽る、「花あやめ」うつしうゑれば黒なれてゆるしの色の紅やとくらむ　六來園○六月四日、和蘭陀の使節眞福寺發足○同六日、夕八時過驟雨降出し、七時より猛雨雷鳴強くして、深夜迄に數ヶ所へ墮る、江戸の内計も凡四十餘ヶ所と云ふ、近郊にも及ぜりとぞ○同十一日より日々雨降、十四日は山王祭前日にて、朝は雨ふり後止て曇り、宵より晴て月清朗なり○同十五日山王權現祭禮、去々辰年の通り、神輿行列幷車樂のみ出で御城内へ入る、附祭伎踊邊物なし、今日快晴にてありしが、日暮過より夜に至り大雨益を傾るが如し、又雷鳴あり、出し計りは大抵其町内へ曳入れし頃なり、神輿行列山下御門の内より此强雨にあひ、壕塹の水陸地へ溢れ、膝下より水に浸りて各迷惑せしとぞ、又所々に出水あり○七月四日、魯西亞の使節豆州下田より芝眞福寺へ着す、同日英吉利使節船品川沖へ着、西洋の船次第に本邦へ來りしが其船品川へ着したるは今年英吉利を始とす、使節其外芝西應寺へ着す、十八日英吉利船出帆○同十八日、書家市川米庵卒、九十歳、名三亥、字孔陽、稱小左衛門、一號亦顚山林堂、根岸に住す、日暮里本行寺に葬す○同十九日より六十日の間、深川淨心寺に於て、甲州小室妙法寺祖師七面宮開帳、妙法寺は宗祖上人山伏と宗論ありし蹟なりといふ、消毒の御供出る、諸人これを乞求詣人多し、八月八日より五十日休み、十月二日よりふたゝび開帳あり○同二十六日、快晴にてありしが、申下刻より雨降出し、夜中降つゞき曉にいたりて尙大雨に成る、二十六夜待として月の出を拜する場所更に寂寥たり、日暮里諏訪明神祭禮日にて神輿を渡せしが、夕方より詣人散亂し、去年に同じさまなりし、翌日又大雨にて所々大水溢れ出たり○同月淺草寺奥山に朝顔の見せ物出る、近邊朝起の人にあらざれば見る事あたはず、よつて見物すくなかりしもむべなり○同月江戸より相州大山石尊社參詣の者少し、是は去年江戸講中、程ヶ谷宿に於て彼地のものと喧嘩に及たりし故とぞ○夏中雨多くして炎威烈しからず、秋にいたりても天顏快晴の日少し、冷氣がちにて眩暈逆上眼病頭痛をやむ人多し○同月末の頃より都下に時疫行れて、芝の海邊鐵砲洲佃島靈巖島の畔に始り、家毎に此病痾に罹らざるはなし、東海道中駿河の邊よりはやり來りしと云、八月の始より次第に熾にして、江戸中幷近在に蔓り、卽時にやみて卽時に終れり、貴人は少し、始の程は一町に五人七人、次第に殖て檐を並べ、一ッ家に枕を竝べ臥たるもあり、路頭に匍匐して死につけるも有けり、此病暴瀉又は暴痧など號し、俗諺に「コロリ」と云り、西洋には「コレラ」又「アジヤ」「テイカ」など唱ふるよし、東都の俗ころりといふは、頓死をさしてころりと死したりといふ俗言に出て、文政二年病病行れしよりしかいへり、しかるに西洋にコレラといふよしを思へば、おのづから通音なるもなかし、大かたは卽時に嘔氣を催し、吐瀉して後續て瀉痢をなし、手足厥冷し塞痿痺て企踵に絶命す、稀には數刻の後蘇生せるもありける由、多くは天札の輩にして、老人に尠く又小兒にも鮮し、醫生は籃輿を飛して東西に奔走し、庸醫藥舗といへども藥餌を乞ふ者更に絶ることなし、官府よりも藥法を擇で貴賤に示されたり、偖此虚にや乘じけむ狐惑の患もあり、此等の妖孽を攘ふ爲とて、鎮守祠の神輿獅子頭を街頭にわたし、此頃幕府の御他界により、鳴物御停止ありしなれば、絃歌鼓吹閭閻に絶へ、市中も寂寥として物淋く、夜中往來甚少し、閭巷

に齋竹を立軒端には注連を引はへ、又は軒端に挑灯を燈しつらね、或は路上に三峯山遙拜の小祠を營し所もあり、節分の夜の如く豆をまき、門松を立けるも有し故、厄拂の乞丐人も出たり、何人が云出しけむ道中にて天狗の示現を得て、疫神を攘ふの壓勝なりとて、羽團扇といふものに紛ふ爲に、八ッ手といへる木の葉を軒に釣るべしといふ妄言にならひて、これらの事も行れたり、又此頃魚類を食へばこれにあたりて速に死ると云て、魚類を求る人甚鮮し、故に漁者魚舗活業を失ひ、貨食舗もこれに亞り、わきて鰯には毒ありとて、鮮魚といへども求る人なし、よつて鷄卵菜蔬價を增たり、棺を售ふものわけて高價を貪り、晝夜を分たずして造れども出來あへず、後には普通の桶を作るもの、又は木匠を傭ひてこれを造らしむ、（淮南子鬻ゞ棺者欲二民之疾病一）このともがら些しく貨殖せるものもあれど、やがて其病にかゝりしも多かりし、寺院も葬儀にかかりて片時の暇なし、小柄原、深川靈巖寺、桐ケ谷、四谷、狼谷、落合村、其餘三昧の寺院は混雜いふべからず、棺を積む事山の如く、故に止事を得ずして數旬の後を約し置、或は價を增して次第に荼毗の煙とはなしぬ、其あたりの臭氣鼻を襲ふてたえがたかりし、此頃街を徘徊するに、郊送（のをくり）の群に逢ふ事さらにたえず、日本橋、永代橋、兩國橋或は淺草、下谷、谷中、三田、四谷其外寺院の多き所にては、陸續して引もきらず、日本橋畔にはこれを見る事百に餘れる日もありしとぞ八月朔日より九月末迄、武家市中社寺の男女、この病に終れるもの凡貳萬八千餘人、內火葬九千九百餘人なりしと云、實に恐るべきの病也、八月末の頃は次第に蔓延して、その邊際はたしかならねど、奥羽のあたりにもいたりしと聞り、（駿河遠江のこなた道中も甚盛にして、武家方往來の節雇夫少く、家士も又煩へる者多し、宿々夜に入て篝を焚き、山林には鐵砲を放ちて邪氣を拂ひし由なり）九月初旬より些しく遠ざかり、十月に至り漸く此噂止たり○此頃有名の人にして此病に罹り物故せるは△狂歌師六朶園、燕栗園△俳人西馬、得蕪△狂句點者五代綠亭川柳△小

說作者山東京山、（八十八歳、岩瀨氏百樹、涼仙、柳下亭種員、樂亭西馬△浮世繪師一立齋廣重△軍書講談貞山△淨瑠璃語三世清元延壽太夫、（藤田やと云ふ）△三味線彈杵屋六左衞門、鶴澤才次、其餘角觝人、俳優、花魁の輩にも多く是ありと聞り○八月初旬より彗星、宵は乾の方曉は艮の方に現る事毎夜也、光芒北に靡て甚長し、次第にちいさくなり、坤の方へより光芒南へ靡けるが、九月中旬に至りて見えずなりぬ○同十二日、佛蘭西の使節船三艘品川沖へ着す、（愛宕下眞福寺へ宿す）同九月退帆○同十五日、所々八幡宮鳴物御停止中に付延ぶ、良夜曇、世上月宴なし○同廿五日、所々天滿宮祭禮延る○彼岸中六阿彌陀、卅三所觀世音巡拜、牛島掬塢が園中の七草、龍眼寺の萩等遊賞の人なし○八月より、二本榎覺眞寺にて、百日芝居興行、（十月に延、又翌年の春に延る）○九月六日、浮世繪師一立齋廣重死、（六十二歳、安藤氏、稱德兵衞、歌川豐廣の門人なり、普通の世態畫に同じからず、善く名所山水を畫き、又動物の寫眞によし、江戸并國々の名所を畫きて行れし人なり、又草畫もよろし）○同十日、畫人鈴木其一死、（名元長、字子淵、稱其一、號必庵、爲三堂、噲々、淺草北寺町正法寺に葬す、抱一上人の御門弟にして、善く光琳の風を學び得し人なり）○九月より、町會所に於て、市中其日暮しの賤民へ白米を頒ち與へらる、米價登場并に時疫行れたるが故也○九月下旬、風邪流行○九月十月雨少し○九月又彗星申酉の方に現る○九月廿日、酉刻、本所相生町四丁目火事○同晦日、丑中刻、駿河臺高山氏邸失火○十一月四日亥下刻、三田豐岡町火事○三座芝居俳優入替り顏見せ狂言なし○同月十二日、朝より乾大風砂石を飛す、未下刻、赤坂三分坂上專福寺門前の町屋より失火せり、この頃旱天打續たりしに、大風により同所寺院、御掃除町、赤坂新町、元馬場邊組屋敷、御旗本衆屋敷數宇、一ッ木町三軒家の邊、清水谷（檜木やしきはのこる）、三河臺まで武家方數宇、大御番組屋敷、不動院、同門前町屋、六軒町、市兵衞町北の方燒込、同所西武家方多く燒、飯倉片町永坂の上戸澤侯、京極侯中屋敷、狸穴邊武家方數宇、麻布十番新河岸といふ邊に至り、夜五時頃鎭る、飛火にて燒たりし故、其間々に殘れる所あり、故に燒込の場を拾ふて數ふるに、長さ凡十四町三十

間餘、幅平均して一町三十間の餘なり、赤坂氷川社は差なし○同十五日、曉丑刻、神田相生町の北なる若林氏屋敷より失火し、始は乾の風烈しく、同所續武家地へ燒込、相生町、松永町、八軒町、佐久間町一丁目より三丁目迄、仲町一丁目、花房町邊へ廣がり、和泉橋燒落、柳原堤を越て柳森稲荷社は殘れり東神田鎌倉横町代地、松下町代地、龍閑町代地、横大工町代地、濱松町此邊武家地、市橋侯、横瀨侯屋敷、お玉が池武家地數ヶ所、細川侯殘る、小泉町、豐島町少し燒込、久右衞門町、松枝町、辨慶橋通旅籠町へ飛火大丸屋殘る、橋本町、馬喰町二丁目迄、又明方艮の風に替りて堀留町、大傳馬町牢屋敷、鐵砲町、小傳馬町より小舟町、堀留町、新乘物町、岩代町、新材木町、葺屋町、壙町半分燒、元大坂町、甚左衞門町、小網町一丁目、荒布橋燒落る、又東の風になりて神田町々一圓に燒たり、内神田にては殘に殘りしは、養安院やしきと四軒町半分のみなりし、北より西の限は岩井町、平永町、小柳町、柳原受負地、須田町、連雀町、佐柄木町青山侯長屋少し燒込、雉子町、四軒町、三河町四町、同裏町共不レ殘、本多侯屋敷其外三河町續武家方燒込、御堀端鎌倉町、龍閑町、本銀町四軒やしき、新石町、鍋町、鍛冶町、本銀町、本町、石町、兩替町、北鞘町、品川町、駿河町、室町通町筋、本船町、安針町、長濱町、伊勢町、瀨戸物町、日本橋半分燒、橋向四日市邊より通一丁目、東側殘る、二丁目、三丁目、四丁目一圓、呉服町西河岸町は殘る、南傳馬町、檜物町、槇町、桶町河岸通り、南鍛冶町、五郎兵衞町、疊町の邊御堀端迄燒、北紺屋町殘る、東の中通りは青物町より川瀨石町まで兩側、夫より南は箔屋町より先西側燒通り、具足町、炭町の邊に至る、晝時過には巽の風に替る、同夜戌下刻鎮る、又御曲輪の内因州侯屋敷も災にかゝられたり、町小路燒死怪我人算ふべからず、倉庫の燒落たるも甚多し、又旋風吹起りて、御堀の端へ運び出したる資財雜具を虛空に卷上たりといふ、凡長延廿二町餘、幅平均にして七町程、町數二百五十九町、武家八十餘宇なり○災後佐久間町河岸通へ、貧民御救の假屋を建て、露眠の輩を宿せしめ、三度の食を

與へらる、未二月にいたり元地へ歸り、或はあらたに宅を求めて夫々安住す○十二月十七日、曉丑刻、箱崎町一丁目より出火○同十九日曉、大川端町より出火○此冬更に雨なし○神奈川に於て異國貿易を許し給ふ○本所表町榮壽院篠塚地藏尊はやり出し、諸願をかくるもの日々參詣す○此頃紀州の產紫色の磁器を商ふ家多し、江戸にも紫藥の法をならひ得て燒く者あり、もとは淡州にて燒始しとてあはぢ燒といふ○狂言座森田勘彌、氏を守田とあらたむ、

○安政六年　己未

正月元日節分快晴○同二日雪降る○同月英吉利船品川へ着、同十九日退帆○同十一日、申下刻、小石川戸崎町祥雲寺より出火、北風にて戸崎町、柳町御先手の組屋敷、御掃除町武家地等類燒、長三町程燒る、慶安中大師河原の池上某と酒戰の戲をなしける地黃坊樽次が墓碑は、卯年の地震に割たるをつくろひ置たるが、今度の火事には差なし○【無補】同十五日、月蝕皆既○正月より、淺草寺奥山に偶人細工人肥後熊本秋山平十郎、機關細工人竹田縫之助にて、活偶人數種、又ゼンマイからくり、寶船に七福神笑布袋等の見せ物出る、唐子の獅子舞殊に奇巧なり、笑布袋は文政以來三度目なり○【無補】二月二日、櫻田御用屋敷失火○二月五日、初午快晴、所々稲荷祭花出し等出して賑へり○此頃梅花漸開初む○同八日、下澁谷村室泉寺古義眞言開山快圓慧空和尚百五十回忌法事執行○同十四日より、彼岸中七日の間快晴續たり、近年かゝる事を見ず○同十六日より六十日、牛島牛御前幷相殿王子權現本地大日如來開帳、貞觀二年起立より一千年に當り、供養の爲開帳すと云ふ三月上旬より堤の櫻次第に咲、日々參詣群集夥しく奉納物あまたあり、佐竹永海子の筆常磐御前の扁額は、江戸中の料理屋より納る所なり、堤の上に娼家橋本屋と角觝人との奉納挑灯、二町餘りに排列す○同十八日より六十日、谷中養泉寺宇賀辨才天開帳、宿老日法上人作○同廿一日、亥の刻より南風烈しかりしが廿二日曉彌烈しく坤方より扇き、丑の五點青山穩田藝州侯下屋敷内、松平江州侯屋敷内より出火、炎勢熾にして松平志州侯、井上河州侯下屋敷、其外諸家下屋敷數宇類燒し、綠町、原宿町、久保町、龍岩寺、慈光寺、熊野權現社別當淨性院、千駄谷組屋敷、聖輪寺瑞圓寺八幡宮殘る、立法寺、長善寺、境妙寺、神明宮幷神主小川氏、御廐磚藏六道邊殘、

永井遠州侯下屋敷、其外御旗本衆數宇、裏大番町右馬殿、横町組屋敷、左門町所々燒亡、忍原横町迄、四谷大通、西は大木戸手前、東は鹽町三丁目二丁目、傳馬町三丁目迄、北側は田安侯下屋敷へ燒込、北寺町淨運寺西向寺、養國寺、全勝寺、全德寺其外寺院多く燒け、龍昌寺横町、湯屋横町、淨運寺横町、菱屋横町、舟板横町車力門横町、荒木横町、此邊武家方數宇、松平攝州侯中屋敷、饅頭谷修行寺の門前、修行寺自證院等は殘る藥王寺、京恩寺、凉月寺燒亡、安養寺燒亡、月桂寺、市谷谷町燒亡、板倉防州侯下屋敷燒込、百人組并松平伯州侯下屋敷、松平佐州侯中屋敷、水野土州侯下屋敷、念佛坂上下一圓、大窪邊組屋敷等に至り、朽木江州侯屋敷、法善寺其外燒る、鬼王神社、天滿宮等は殘れり、牛込原町二丁目三丁目、廿人町、若松町、同所續組屋敷、幸國寺、願正寺、蓮光寺、清久寺、法身寺、廿人町長久寺、南昌寺、正光寺、專念寺、大龍寺、常泉寺、常立寺、寶祥寺、高田松平越州侯下屋敷馬場下横町、早稲田町、松平能州侯下屋敷、供養塚町御先手組屋敷、御持組々屋敷、御徒士組屋敷、根來百人組屋敷、其外武家地多く燒亡、本松寺、感通寺のこる西側寺院門前町屋、高田毘沙門堂、水稲荷社殘る、穴八幡宮并別當、放生寺、櫻門計り殘る、龍泉院、靈感院、早稲田町正法大養寺、龍善寺、宗清寺、眞成院のこる、高田馬場手前植木屋一圓、料理屋の側殘る、清水侯抱屋敷、破損町、尾州侯外山下屋敷燒失し、高田の火目白臺へ飛で、松平大炊侯屋敷、細川侯下屋敷、松平羽州侯下屋敷へ燒込、又一口は清土雜司谷村、高田村、戸塚村、龜井隱州侯下屋敷、中山備州侯抱屋敷、早稲田村一橋侯抱屋敷、其外諸家下屋敷燒亡大野山本淨寺飛火にて燒、西青柳町、音羽壹丁目西側迄燒亡、此所にて廿二日辰下刻鎭火、此時分には救火の卒勞勞して更に見えず、凡諸侯上屋敷下屋敷合廿餘宇、小名は枚擧すべからず、組屋敷も數ヶ所燒たり、神社三宇寺院五十餘宇、町屋卅五町程、長凡壹里八丁餘、幅平均して四丁半と云、此長さは類燒の場所を拾ふていへるなり、青山より雜司谷迄は二里に餘るべし、此邊のもの多くは池魚の厄に罹れるもの稀にしてかゝる大火にあひ急遽忙迫して道を過ち、其身を損ひしものも多かりしよしなり、燒死怪我人、倉庫迄燒失ひたる數を知べからず○

二月廿四日より六十日の間、本所表町榮壽院本尊篠塚地藏尊開帳、惠心僧都の作、篠原伊賀守守本尊と云○同廿五日、龜戸天滿宮祭禮執行、去年八月の祭禮延たるを、今年二月御忌の祭をも兼て執行あり、神輿產子町々渡御の事、久しく絶たるを、今年渡し參らす、別當の行列はなし、大なる獅子頭を出す、產子町々より車樂十七輛、踊臺五荷、地走り踊等出す、當日快晴にて殊に暖氣なり、江戸中の見物群集する事夥し、但廿四日前日に神輿渡御道筋、本社より表門川端へ出、南へ龜戸町、清水町、北松代町四丁目迄、東へ御旅所へ入、同門前より東へ同町、南本所瓦町、北松代町四丁目續き、龜戸村五ッ目渡場迄、夫より引返し西へ旅所橋渡り、松代町、柳原町通、北へ本所茅場町、松代町と武家地の間廻り、元の松代町、柳原町、横川の通橋を渡り、西へ花町、緑町、相生町通り、北へ尾上町、元町の通、兩國橋東詰駒留橋藤堂侯前、小泉町、回向院裏門通土屋侯、松坂町の間より南へ、又東へ曲り相生町、緑町北裏武家地境の通、夫より南へ横川の橋を東へ渡り、南へ辻橋渡、西へ德右衞門町、材木町、松井町河岸、辨天門前より東へ、武家境津輕侯横通南へ、菊川町河岸通、菊川橋渡、向河岸京極、山名、鳥居家前、柳原町より四の橋を北へ渡り、小梅代地東へ本多、井上、堀家前を深川六間堀代地、柳島町の間左右出戻り、天神橋渡り北へ、河岸通裏門より還興あり○三月三日、上巳佳節快霽、此頃上野彼岸櫻盛なり、夜に入て雷鳴氷雨降る○同十日曉、龜井町火事○同十三日暮時、駿河臺淡路坂火事西村氏火元○同十五日、夜酉北大風戌刻、神田仲町一丁目藁屋富之助宅より失火して、同二丁目三丁目柳屋敷、牛込代地、花房町通船屋敷、佐久間町一丁目河岸通、此邊去冬燒たる所多し、竹木炭薪の置場へ移り、夫より柳原堤を越へて、去冬殘りし柳森稻荷本社計り燒、柳原受負地、柳原岩井町、紺屋町三丁目代地にて鎭る、跡の火は猶熾にして八軒町、相生町、六軒町、松永町、花房町代地等燒て、十六日曉丑刻頃鎭る、長二町四十間餘、幅平均して一町廿間程なり、去冬十一月燒て漸く家作なりしと、又假廻等の家多く燒たり○同廿一日より五十日の間、下谷唯念寺に於て、下野國高田山一光三尊阿彌陀如來開帳、參詣多し○同廿七日曉、南本郷町火事○

同月末より四月五月冷氣なり○同月頃より麻疹に類せる病氣行はる○同月末日本橋掛替御修復成○同和泉橋掛替成る○同月末より四月に至り、高野山木食諦念といふ僧、本所一ッ目大德院に宿して、諸の病人へ加持を施し藥湯の法を示す、日毎に群集の人多し、五月末當地を發足す○四月朔日、阿蘭陀の船品川沖へ着す、使節高輪東禪寺に逗留す、蘭船江戸へ來るの始なり○【補】是月兩國大德院に於て、弘法大師の加持あり、晦日まで群集夥し○五月五日より、兩國橋西廣小路に於て、紙細工い看せ物出る、中に色々の商店を造り金物屋、瀬戸物屋、八百屋、乾物屋、鮮魚干魚屋其外各商品を紙にて張り拔、又鉢栽の草木、田圃の菜蔬、菓蓏の類をも造れり、英賀亦米横山分司櫻と云もの〻製造とぞ、見物少かりし○同五月御倉町續き下曾根侯御預り調練場明地へ、異國人の旅館を建らる、接賓所と號せらる○同廿三日、畫人高島千春稱壽一郎今年八十齡、薙髮して柳橋拍戸に於て賀筵を開く○同廿六日、英吉利船品川沖へ着、使節東禪寺に宿す、亞墨利加は此節麻布善福寺に宿す○同月魯西亞、佛蘭西、英吉利、阿蘭陀、亞墨利加等五箇國貿易を免さる○六月貳朱銀通用始り、小判一分判を吹替られ、異國銀其儘通用せしめらる○同朔日より三日迄、飯倉熊野權現祭禮、車樂邊物等出て賑へり○同月初旬より、飯倉瑠璃光寺境内にて、操芝居百日興行結城座より興行して櫓を上る、秋よりはかぶきに成る○七月より、小川町三崎稲荷社の前通武家屋敷へ替地を賜り、其跡へ講武所を建らる、三崎いなり社は東の方水道橋の際へ移させらる○同月より、淺草大川橋御修復始る○【無補】同十五日、月蝕皆既○同十八日、魯西亞使節の船品川沖へ着し、同廿四日三田大中寺に宿す、八月九日退帆○同月下旬より、去年行れし暴瘧病ふたゝび行れ、男女死亡多し、九月に至て止む、南都、泉州、大坂の邊分て行れしよしなり○同廿五日、朝より大風雨、家屋牆塀を損じ樹木を折、所々出水あり、近在も又出水ありて、堤を崩し田圃を傷ふ○八月十二日夕方より、翌十三日へかけ大風雨○同十二日、儒師日尾荆山卒、七十一歳、本姓魚住後日尾と改む、名定光、字德光、稱宗右衛門、號瑜直齋、至誠堂といふ、和漢の學に富み、書を善くし歌を詠じゝなり、谷中本通寺に葬す、其傳日暮里修性院に立る所の碑文に詳なり○同十三日、壹歩銀吹替御徇○同十五日曉、淺草南馬道町より出火、隨身門の外南より出自性院、壽德

院境内町屋類燒○同十六日、佛蘭西船品川へ着、使節は三田濟海寺に宿す○【無補】同十七日夜九時、五郎兵衛町出火○同月異國御條約五卷、梓に鏤めて貴賤に徇示さる○日本紀略刊行、全備にはいたらず○同月、神田多町二丁目にて、菜蔬を售ふて活業とする甲賀屋長右衛門卒す、この人生得魚介蟲に委しく、ことゞく種類を分ち其圖を摹し其說を舉く、この内鯛譜二卷說一卷を梓行せり、圖は自畫にして尤よし、其餘は草稿のまゝにしていまだ印行せず、その稿はかの家に藏せり○九月より、鐵小錢吹立を命ぜらる○九月十月甚暖氣なり、眼病煩ふ人多し○同十五日、神田明神祭禮前々の通神輿、車樂、附祭邊物、御雇太神樂、獨樂廻し等出て、殘らず御廓内へ入る、十三日より快晴にして見物殊に夥しかりし、十五日夜神輿歸社の後雨降る○【無補】同二十四日、儒家佐藤一齋卒、八十八歳○秋より芝田町四丁目海岸に、外國人上陸場御取建あり、翌年成就す○和泉橋通りに種痘所建○十月二日夜、桶町二丁目火事○同十日、湯島天滿宮祭禮、產子町々より車樂伎踊邊物等多く出せり、十月は地主神戸隱明神の祭なるべけれど、自ら天滿宮の祭と心得たるなり、九月宿宮の日大雨降ければ、十日を宵宮とし曇天にわたし、又十日に大雨降しかど雨中にわたせり、ねり子共の衣裳伊達をあらそひしも泥土にけがれたり、されど傘をも用ひざりしは江府の風俗なるべし、車樂十三輛、踊臺五荷、地走りをどりも出たり○今年は下谷五條天神相殿の天滿宮、赤城明神、小石川氷川明神、その外祭禮にはねり物等出て賑へり○同十七日、申刻御本丸炎上○冬にいたり米價貴揚す、○十一月三日、申刻、麻布龍土伊達遠州侯邸より出火北風にして龍土材木町御先手組屋敷燒る、阿部播州侯やしき少し燒込、日暮頃鎭る○猿若町三座の芝居俳優入替り春に延、飾物なし○同月章魚を釣る事多し、魚店毎にこの魚を商ふ○同八日大雨、晝時過より霽に屬す、此日酉の日にてありしが、鷲大明神社參詣少し、これよりして晴天續き更に雨なし、十二月小火

屢あり○同廿五日、戌刻、深川相川町より出火して、富吉町、熊井町類焼に及べり○【無補】十二月三日、青山百人町に出火ありしより、廿一日迄火事九度に及ぶ、皆小火なり○十二月九日、大川橋御修復成り渡初あり○同月金雕工河野春明卒、七十三歳、龜戸龍眼寺に葬○同初旬より、湯島天滿宮社地にて、薩摩吉右衞門名題操芝居を興行、翌年の正月歌舞妓芝居となる○冬角力回向院境内にて興行の時簑島某の門人舞鶴駒吉といふ小兒土俵入をなす、當年八歳重さ廿五貫目、駿河の產と云ふ○同十三日晝時、澁谷宮益町火事、一町程燒亡○同十五日明方、松村町續武家地火事○淺草市其外に、肉色の三平二滿女假面を商ふ事を始む、又福耳のおたふく面となづけ、耳の付たる三平二滿の假面、神田雉子町なる高矢郡次といふ人の工夫にて、天保中神田社の年の市に售はせけるが、一旦すたれ又この頃所々に商ふを見たり○近頃坊間の壘地に乞丐人の輕趫をなす、長き丸太或は竹を以三本程すぢかへになし、上の方を一ッに結付、麻索を幾筋となく蜘の巢の如くに引はへ、この上に登りてつな渡りの技をなす、又籠拔け其外色々の曲をなし、錢を乞ふもの所々へ出る○兩手人形となづけ、衣笠梅壽剃髮といふ者、雙手に二ッの偶人を持遣ふ、所々の寄場といふに出て行れたり、

○萬延元年　庚申　三月閏　同月朔日改元

元日晴天、去年十一月以來雨雪甚少し、火災屢あり○今年の大小去年に替らず、三月に閏あれど本月は同く大の月なり、同じ大小二年續きたるも珍らし、松本董齋が戲れに「四七二十八で五ざりま小」と書たるが、二年の便利をなせり○正月三日、夜子上刻、上野眞如院災○同五日、酉牛刻、妻戀下手代町千田某宅より火事、四十五間餘燒る○同七日夜、聖坂功運寺門前火事、四十七間餘燒る○同十日午刻、下總松戸宿燒る○同廿三日申刻、靈巖橋受負河岸釣竿屋より出火し、放火と云、靈巖島町、鹽町、濱町、四日市町、新川大神宮、蒟蒻島拍戸永秀樓、扇屋も燒込、戌刻頃鎭る○同廿七日、芝山内花岳院燒亡○春風邪行はる○二月二日より五十日の間、本所押上春慶寺普賢菩薩開帳○同三日、水道橋御門内講武所御開創あり、築地講武所は御軍艦操練所と成る○同四日曉、八丁堀千川屋敷より出火、龜島町迄燒る○同六日明方、本郷菊坂田町より出火、二町餘燒亡○同十日曉神田塗師町火事○二月より三月迄、霖雨つゞきて繁盛の場淋かりし、下旬單櫻咲始む○同十九日、巳刻過日比谷松平大膳大夫殿屋敷火事○廿三日より六十日の間、深川永代寺に於て、遠州豐田郡山東村光明山鎭守摩利支天火防光明大權現開帳○同廿八日より六十日の間、深川淨心寺に於て、洛北實相院宮南御殿法圓山證寺天拜朝日妙見菩薩子安鬼子母神開帳○角力興行も雨天にて延び三月より興行す、三月廿四日漸く霽に屬す○三月朔日より六十日の間、市谷八幡宮境内茶の木稻荷社開帳○同三日、上巳佳節朝より雪降積る、外櫻田に於て悪劇の事あり、他書に見えたればこゝにしるさず○同十日より六十日の間、回向院に於て、野州安蘇郡彦間村大正院根本山神本地藥師如來開帳、故有て半途にして閉帳す○同十五日より六十日の間、淺草寺觀世音開帳、日毎に參詣群集せり、奥山に肥後の松本喜三郎が細工にて、三度目の活人形見せもの出る、四十八癖と號し、男女四十八種の偶人を見する、喜怒哀樂の情態をうつし、さながら生る人に向ふがごとし、招きには龍宮玉取女の形なり、又同所に秋山平十郎が作男女相性の偶人、竹田縫之介がからくり人形の見せ物も出たり○錢瓶橋にあらたに水門を建らる○同月晝人高島千春卒、八十一歳、薙髮して融齋鼎湖○去年夏異國貿易の事免許あり、武州久良岐郡芒新田横濱村に厩場を定給ひしかば、今年春の半より同所戸部の山を崩して通路を開き、此土を以て田圃を平均し、增德院の上の山六萬餘坪の所、交遮の老樹を伐膠轕の荒草を苅て山上を平らかにし、又所々に橋梁を架し亞國ミニストルの旅館を營れ、夫より次第に西洋諸州の旅館に及ぼし、大厦峻宇甍を排ね、異域の諸州よりはたえず碇泊して貿易を專とせり、又神祠佛院の破壞を修補せしめ、あらたに市廛娼廓等をも闢しめられしかば、東京近郊は更也、他境遠陬の販夫芻蕘もこゝに交加して活業を營み、貨殖せるもの少からず、巨萬の

商家は檐を列ね、妓家は各高樓を設け、又邸舍拍戸劇場の類に至る迄ともに賑ひ、人烟輳列し萬船常に來往し、舳艫海岸に連接して、疇昔の寂寥にひきかえ其繁闠耳目を駭し、東關隨一の港とはなれりける、抑此地は近郊の勝地にして海岸にさし出、遠く房總の翠巒、近く本牧の斷岸、神奈川の臺、權現山其他の眺望一瞬の内にあり、尤幽邃の所にして、東海の驛路を去る事僅に一里餘といへども、海路を阻るが故韻士墨客といへども繹る事稀なりしが、今年開港ありしより通路の便利を得、加之鐵道汽車の要器を設られしを以て、良賤こゝに輻輳し、四時の遊觀絶る事なく、連日抑留して歸を忘れ、驛路來往の旅客も俱に躊躇せるもの尠からず、されば江府の男女、此勝槩を視ざるを以て恥とはせり、此所に昔より辨才天社あり、芒の辨天又洲乾辨天ともいへり、致景の所なり○【無補】閏三月麻疹流行、同二十九日地震あり○四月朔日より八月晦日迄、富士山へ男女登る事をゆるさる、諸國より參詣夥し、孝安天皇御宇九十二年庚申、開闢より三十七度目の庚申にして二千二百餘年に及ぶと云々○大判吹直新金通用せしめらる○五月角筈村十二社權現境内に花菖蒲を栽る、遊觀多し、一兩年にして廢たり○同十五日より六十日の間、回向院に於て、京都嵯峨清涼寺釋迦如來開帳、七月の風雨等にて追々に日延あり九月廿一日閉帳、其後傳通院大黑堂增上寺等にて開帳あり、十二月にいたりて歸國あり、回向院開帳の間、境内見せ物多く出し内、傀儡師の大人形は坐像にて高さ三丈餘なり、腹の中より座敷をせり出し、又浮るりの出語をなす、又松本喜三郎作怪談其外の活人形も出たり○淺草寺奥山に、籌を以て十餘間の虎を作りて見せ物とす○十五日より六十日の間、深川永代寺に於て、甲州八代郡左右口村圓樂寺役行者前鬼後鬼の像開帳○同二十五日、ホルトガルの使船始て着し、高輪東禪寺に宿す○同二十六日、神田明神社一の鳥居建、小田原町の魚店より寄附す、弘化三午年類火の後再營する所なり、七月朔日上棟の式ありとて諸人輩集す○同二十七日より駒込富士内拜あり○【無補】六月十日、浮世繪師一寶齋芳房歿、廿四歳、國芳門人なり○六月十五日、山王權現祭禮、當年より舊例の如く車樂、附祭伎踊、邊物、御雇獨樂廻し等出て御城内へ入る、異國人辰の口御作事方定小屋に於て見物をゆるさる○同晦日、本所竪川通に數萬の白蝶羣り來り、

水面に浮び或は舞ふ、あだかも雪の如し、その内五ッ目の邊最甚しかりしとぞ○【無補】七月十一日、アメリカより豹渡來、吹上に於て御覽あり○七月十六日、フロエスの使船始て來り、品川へ着す、ドイツ國より出船せりといふ、赤羽接遇所に宿す○同二十二日より雨、二十四日朝より北大風雨終日止まず、家屋を損じ塀牆を倒し樹木を折り、海上には覆破漂蕩の船多かりしと聞ゆ、夜に入て鎮る、所々に出水あり、回向院嵯峨釋尊の開帳場大破により、本尊は小石川傳通院へ遷坐あり、八月十五日より再び回向院にて開帳ありしが、境内見せもの、小屋潰れたるが多し○同月の末、淺草寺二王門の傍に見せ物出る、變死人或幽靈等の作りものなり○同月下旬より、兩國橋西詰にて豹を見せ物とす、見物群集す、闌入持渡る所といふ身丈四尺餘もあるべし、尾は三尺に餘れり、去年十一月に生れて纔に九ヶ月に及ぶといふ、鷄狗の類生餌を食す○八月十五夜、月清光一點の雲なし、諸人月宴を催し河邊殊に賑へり○秋の頃より、米穀菜蔬水油薪炭、其餘諸物の價貴踊せり○申年の頃より、脱藩浪士の類にや、官吏又は商家其餘おのれが銜む輩の行跡、或は異艦掃斥の趣意、横濱貿易の淑慝等、自己の憶見をもて穿鑿の甚しきもかへりみず、御政務の重事をさへ憚らず書記して、武家の門戸市井の戸扉に貼する者屢これあり、次第に增長して猥褻の作文をなし、戊亥兩年殊に甚し、人心を狂惑せしむる物もあるべし、その内片言隻辭を演て笑柄となれるもありとか○同廿七日曇、南風烈しく扇しが、暮六時、猿若町一丁目勘三郎が芝居の後ろ茶屋奴利屋榮助宅より失火して、二丁目三丁目もともに三座の芝居燒亡す、東の裏通は東側殘る、馬道町、聖天横町、齋頭門前、常音門前、山川町、鳥越一丁目より四丁目迄、遍照院、西方寺、正法寺、山谷拍戸八百屋善四郎燒る、等類燒し、廿八日曉に至て鎮る、長七町四十間餘、幅平均して一町十五間程也、一丁目の芝居は事果て後なり、二丁目三丁目の芝居は興行中にて見物の混雜いふ計なし、火事の間官より時々雨ふりしかば、諸人の困苦いふ計りなしとぞ、聖天町、山谷町、淺草寺地中寺院、織田侯下やしき等へ燒込、熱田社は別條なし○九月廿二日より廿八日迄、親鸞聖人六百年御忌引上法會執行、東西本願寺參詣多し、末寺に於ても各法事修行あり○同廿八日、亥刻過、吉原江戸町二丁目娼家紀の字屋六太

郎が屋上より火起り、過にあらず放火なり、壹廓悉く燒亡す、餘烟田町一丁目二丁目に及せり、長四町半餘幅一町四十間程也、しばらく僑居を免され、本所松井町一丁目、深川仲町、山本町、黒江町、根津門前の三ヶ所也、名物門を建設けて其一方より出入す○十一月深川海邊新田に鑄錢座を建らる○同月織田侯より、羽州天童陣屋前城山又舞鶴山と云、より出し白雉一羽を幕府へ獻ぜらる○同月より深川三十三間堂御修復始る、卯年大地震に覆りたる後なり○同十八日、西本願寺風破の後、今年本堂普請成就して遷佛あり、其日の壯麗目を驚かしけるとぞ、諸人參詣多し○三座芝居顔見せ狂言なし○十二月五日夜、亞米利加のヒウスケン、麻布善福寺より赤羽の接遇所へ至りし歸路、途中に闇殺せらる、廣尾光林寺に葬ず○同十三日、夜九時過、八丁堀落杭屋敷より出火、築地本湊町に至り燒亡す、築地稲荷社は殘る、町名十六ヶ町、長五町餘幅平均して一町四十間程也○下旬度々雪降る○同廿六日曉、永田馬場山王權現別當觀理院燒亡○同晦日、曉寅半刻、王子村金輪寺僧坊燒失、權現社山門舞殿末社等は恙なし、

○文久元年　辛酉　二月二十八日改元

革命の運によりて萬延二年を文久と改元あり、二月廿八日御布告あり○元日快晴、早春雨多し○正月十日、暮六時北烈風、本郷金助町火事、二町程燒る、放火と云ふ○同廿三日、夜四時、小柄原町田屋金兵衛宅より出火して、旅舍十五軒燒亡、中村町山王門前三の輪町等燒、九十間に四十間餘○同廿五日、圓光大師去年六百五十年御忌當り、去年より淨家寺院追々に法會を設く、弘覺大師と謚號を賜る○同廿五日、曉寅半刻、北品川宿一丁目旅舍倉田屋なか宅より出火して、同二丁目より三丁目中程迄燒亡、明方鎭る、旅舍多く燒る、長二町半幅平均して五十間程也○淺草御門見付、安政二卯年燒失に付御修復始る○同月より淺草寺奥山に於て、秋山平十郎作加藤清正虎狩の活偶人、竹田縫之助が作のからくり人形を見せものとす、活人形は次第にたくみになりたれど、珍らしからねば見物少し○二月四日、夜子刻、内藤新宿旅舍過半燒亡、長三町十間餘幅平均二十七間程なり○四橋の側に番所を置る、永代橋、新大橋、両國橋、大川橋○早春より夏へかけ雨天多し○湯島天滿宮境内百日芝居興行、結城座名頭なり、三月に至り半途に止、回向院にも百日芝居あり○同八日、大川筋渡し船を停らる事數月なり○同十六日、酉半刻地震○両國橋西詰に於て、曲馬興行見物多し○同八日より三月十八日迄、六阿彌陀如來安置寺院、六ヶ寺、行基菩薩彫刻以來一千百五十年に當しにより、回向院内拜あり、此頃雨多くして詣人少し○同十八日、曉細雨中、品川新宿二丁目旅舍三河や辰次郎物置より出火、山の側一町計海の側へ火移り、二町餘東海寺入口迄燒たり○春の頃より諸物價登揚せり、是に依て二月より町會所に於て、市中の貧民へ御救米を頒たる、六月に至り停む、又富商よりも貧民へ施物多し○三月上巳雨○同三日より四月十二日迄、西新井村惣持寺弘法大師開帳、參詣群集し、奉納物あまたあり○同日より六十日の間、回向院に於て、武州多摩郡高雄山權現開帳、八王子の西なり○同朔日より四月十八日まで、小石川西岸寺圓光大師鏡御影開帳○同四日、浮世繪師歌川國芳死、六十五歳、孫三郎、一勇齋又朝樓と號す、初代豐國の門人にして、文化の末より板本のさし畫を畫き、天保の頃より錦繪其外多畫きて行はれたり○同四日、暮時雷雨○同六日、明六時、餌鳥屋敷火事、町會所の向なり○同夜酉の下刻、四谷内藤新宿上町火事○同八日、本材木町三丁目火事○同月蕃書御調所を小川町講武所へ移さる○三月淺草御藏前床見せ再興○同十二日より六十日の間、牛込横寺町圓福寺にて、駿州岩本實相寺祖師開帳○同十七日、夕八時頃雷雨、又黄昏雷鳴ありて所所へ墮る、聞く所ばかり凡二十餘所なり○同月本所回向院青山鳳閣寺境内にて、百日芝居興行あり、青山邊はめづらしき事とて見物多し○四月三日、曉丑刻、四谷傳馬町續武家地より出火して、麹町十三丁目、竹町、四谷伊賀町、坂町、御先手其外組屋敷市谷本村へ燒出、尾州侯長屋へ燒込、明方に鎭る、長四町四十間餘、幅平均二町十間程なり○同五日、夜子下刻、駿河臺鈴木町火事○【無補】是月豐島町紫屋方へ、白晝幽靈現るゝとの評判にて、讀賣にも出でしか

ば見物群集す○【無補】是月疱瘡流行○五月二日、明方、牛込牡丹屋敷火事、神樂坂の中程迄燒たり○同三日曉、富澤町火事○同二十二日夜より、亥の方に異星現る、光芒竪に延て長し、（稻星といふ、其後曇りて見えず、又廿八日夜現る）○同二十八日、夜中、高縄東禪寺英吉利人旅宿へ、浪士大勢切入て警固の士と鬪諍に及び、双方疵をかうむる○今年異國人旅宿は、麻布善福寺亞米利加、赤羽接遇所フルエス、高縄東禪寺芝西應寺英吉利、三田大增寺濟海寺月岬正覺寺佛蘭西、伊皿子長應寺阿蘭陀、三田大中寺魯西亞等なり○同月災旱數旬をわたり、六月下旬やうやく雨降る○此頃傷寒又熱病眼病等多し○六月百姓町人大船所持する事をゆるさる○同十五日より十七日迄、入谷長松寺にて朝顏の會あり、七月又淺草寺奥山にもこれあり○七月朔日夜、青山善光寺本堂風もなきに潰れたり、（其前に震動ありし故、本尊は他へ移し置て、怪我人等も無しとぞ）○同夜虎御門内火事○當秋五穀豐饒にして近年稀の事といふ○八月幸橋御門外町地に、御醫師三上氏拜領町屋草創、（戊春家作なりて快庵屋數と云）○同廿五日、夜子刻地震○同日より、牛込若松町正光院内、湯島天滿宮内白日芝居興行○淺草奥山に於て異獸を見する、犬の大さにて角あり、黑毛地に垂る、名を「チャウエイ」と云、蠻語にはあらずとぞ○同月頃より街頭に犬多く死す、又馬の斃たるも多し○九月芝永井町續御靈屋御掃除屋敷の内、金地院拜領町屋と成る、御掃除屋敷は幸橋外明地に於て代地として給れり○團子坂藪下邊菊の造物は、忠臣藏狂言の人形なり○同十五日、神田明神祭禮恒例の通神輿車樂附祭等出す、（十六日の禮參雨ふりて十七日に參詣多し）○【無補】是月神田邊に於て、地獄と呼べる淫賣女數百人召捕へられ入牢○十月二日、去る卯年大地震に横死の輩七回忌に付、諸寺院施餓鬼法事あり○同五日夜より曉迄大風雨、家屋を傷損す○同十日、湯島天滿宮祭禮、產子町々車樂邊物等出て、九日には群集せしが、當日雨天にて渡らず○同九日夜、武州横濱港出火、十日の晝頃に及ぶ、町屋は燒け異國人の商館は殘る、此後

横濱港度々火あり、一々不レ記レ日○今年も根津千駄木藪下の邊、菊の造物多く出來て日々遊觀の人多し、巢鴨染井の造菊は、前卷にいへる如く文化九年の秋より始り、江城の尊卑日毎に群行してこれを賞しける頃、先考に誘れてこのわたり見めぐらひしも、明治戊寅の年に及てはや六十七年の昔となりぬ、夫より後も大かた年々にこれを造りて此里の名物とはなりぬ、然るに造り菊は鄙俗の物として見ざる人あれど、此時節丹楓の佳境を繹るの外に花なき頃にして、東京の中央より道を阻る事も遠からざれば此邊に徘徊し、團子坂に名を得し河漏麪に一樽を傾け、はるかの野徑を眺望し、或は此邊の拍戸に醉を催し、衆人とゝもに連臍の藝花園に入庭中をながめ、菊の花壇盆種の草木多かるを賞し、一日逍遙して夕照の斜なるを惜む輩も鮮からず、眞にこれ仲秋の一樂事なり○秋の頃異國より渡りし虎一匹、同十四日より麴町十三丁目裏續き福聚院境内にて見せ物とす、大さ五尺餘あり、（前の豹にくらべれば甚巨大なり、見物來る毎に幟をかかげて見するなり、其後橋場におゐて見せけるなり）○同廿八日、築地本願寺報恩講引上法會執行、（當十一月さし合ことある故當月に行へり）○【無補】此月犬病流行、十一月までに多く斃る俗に犬のコロリといふ○十一月朔日、酉の祭參、終日終夜の大雨にて詣人少し、（二の酉は御祝儀に付無レ之、三の酉參詣多し）○【無補】同日地震強し○【無補】同廿四日、吉原普請落成、假宅引拂ふ○十二月七日、夕七半時、芝六軒町續薩州侯御屋敷より出火、北の方金杉通西側迄燒る、長五町餘幅平均して二町程なり○同十二日、夜五時過、京橋與作屋敷より出火、水谷町、金六町、白魚やしき、銀座一丁目迄燒る○同夜四時頃、内藤新宿上町出火、旅舍燒亡す、（聲云、以上二件の火事、闇の中には十一月十二日とあり）○冬雨少く雪更に降らず○【無補】同廿五日、石塚豐芥子歿、（六十三歳）

増訂武江年表巻之十 畢

増訂武江年表卷之十一

○文久二年　壬戌　八月閏

正月元日、雪降積り尺に餘る、廿日頃迄消ず○正月より雨少く日々風吹く○同十一日、夜九時、町會所付神田受負地三之助物置より出火○雉子橋御門外へ蕃書調所を移さる○品川御殿山へ異國人の旅館を建○正月兩國橋西詰に駱駝と號して見せ物出づ、眞の駱駝には非ずとぞ○同廿七日、夜子刻、四谷天龍寺門前家主孫二郎宅より出火、長一丁半、幅平均三十間程類燒す○晦日南大風、夕八時過、小石川指谷南片町續武家地、木村某宅より出火し、武家方多く燒、駒込片町北方半分、肴町邊正念寺、大圓寺、淺嘉町、土物店北の方、高林寺門前町家、瑞泰寺の側、同向側組屋敷、太田侯下屋敷長屋數棟、千駄木町西の方燒け、大觀音光源寺、大保福寺等は殘る、酒井侯下屋敷、御鷹匠組類燒、夜六時過鎮る、長六町餘幅平均一町廿間程也、又田畑の邊栽木屋等所々類燒あり○二月朔日、暮六時過、大名小路松平内藏頭殿中屋敷より出火、諸侯六軒類燒あり、長三町四十間餘、幅平均一町五十間程○六日巳中刻、牛込七軒寺町佛性寺災○同七日、夜子刻過、芝增上寺門前の土手跡町、材木屋炭薪屋の間より出火して、濱松町四丁目西側、中門前三丁目、芝金杉通一丁目二丁目三丁目、同裏一丁目二丁目三丁目四丁目、同片町、同濱町、同同朋町、經覺寺門前、西應寺町燒込、戸田侯下屋敷、酒井侯陣屋敷、船置場等類燒、長四町半、幅平均して一丁半程なり、寺院は十一ヶ寺燒る、正傳寺殘る○同十日晝、芝二本榎相福寺火○同十一日、曉七時過、下谷町壹丁目續常在寺より出火、瀬川屋敷、五條天神宮燒、同所側より北の方迄、新黑門町、仁王門前御家來屋敷、下谷町壹丁目二丁目類燒す、長一町十間餘、幅五十間程なり、雨少し降る○同十七日、曉丑刻、深川森下町浦五郎といふ者の宅より出火、長一町程

燒亡す○同十八日より六十日の間、淺草寺町正覺寺にて、中山法華寺鬼子母神開帳○同十九日、北風烈しく戌中刻、江戸橋藏屋敷の内、同橋際の見守番屋番人文藏萬助の床店より失火して、萬町通一丁目、東の方青物町、平松町、新右衞門町、榑正町、南塗物町、常磐町、活鯛屋敷、本材木町一丁目より八丁目迄、高輪代地松屋町へ火移り、明方に至り鎮る、通り筋は中橋廣小路半分、南傳馬町東側まで燒込、町名は五十二町なり長十一町餘、幅平均して一町五十間程なり、同夜五時頃石川島燒る、飛火にはあらずして別にあやまつ所とぞ○同二十日、晝四時過麻布市兵衞町名主庄兵衞物置隣家境より出火、武家地へ燒込、坂江町も類燒す、長二町十間餘、幅平均して十間程なり○正月より雨なく、日々風扇て火災度度あり○同廿五日より六十日、湯島天滿宮開帳、本社土藏造にて此たび壯麗の美作成れり奉納小庭偶人等、又坑者（かつぬり）の細工にて牛と兎の作物等をさむ奇巧なり、詣人多し○同二十八日より六十日の間、南品川海晏寺觀世音、鮫洲明神、舟玉明神、幷境内辨才天開帳、境内に芝居興行あり○【無補】是月小人島出生の親子三人渡來せりとて、矮人を見世物とす、人德四十八歳身の丈一尺五寸、妻野女卅二歳身の丈一尺四寸五分、其子節德五歳身の丈六寸餘なり、一枚繪に出る○三月四日、曉丑刻、深川永代寺門前町家持清吉慶之助宅の境より出火、東仲町迄土橋と云、燒亡、長一町十間餘、幅十八間程なり○同日巳刻、本兩替町出火○同九日、亥中刻、芝西應寺町家持半七塀際より出火、長一町餘幅三十間程なり、右の外にも小火度々あり○淺草寺奥山長隅に假屋を建、早竹虎吉再出る、獨樂廻し、輕業、手妻等あり○春の頃より東叡山中堂御修復、翌年二月に成就す○隅田川花見、武家の狼藉もの多し○三月二十四日より始まり、大川端細川侯中屋敷清正公社、開扉參詣をゆるさる、是より毎月二十四日詣人群をなせり、肥後國熊本勸請の像を模刻し、あらたに勸請せられし所にして、等身の像といふ○千駄木邊の藝花園の庭中に、色々の樹木の葉を以て人物其外の形を造りて見する、各五節句の趣向也○四月日を失す角觝入小柳某口論の遺恨をうけしが、夜中同輩不動山某と殿某と二人、小柳が僑居に忍入て

かれを斬害し、即時二人とも官府へ自訴す○四月七日、暮六時、八丁堀水谷町受地より出火、長一町半、幅三十間程類焼す○同二十一日より、親鸞聖人六百年の遠忌に付、築地門跡にて法會修行有、（去年十一月の延たるなり、廿一日より廿五日迄日々雨降る）○五月海賊橋牧野侯屋敷、御國益會所に改らる、（七月に至りて御沙汰止たり）○五月より、相州藤澤山の遊行上人、淺草日輪寺に止宿ありて道俗化益あり、日々參詣多し○同十二日明方、和泉橋通種痘所焼亡○六月炎旱數旬に及べり○夏の半より麻疹世に行れ、七月の半に至りては彌蔓延し、良賤男女この病痾に罹らざる家なし、此病夙齢の輩に多く（天保七年の麻疹に かゝらざる輩なり）、強年の人には稀なり、凡男は輕く女は重し、それが中に妊娠にして命を全ふせるもの甚少し、産後もこれに亞ぐ、後に聞けば二月の頃西洋の舶崎陽に泊して此病を傳へ次第に京大坂に弘り、三四月の頃より行れける由、江戸に肇りしは小石川某寺の所化何がし二人、中國より江戸に來りし旅中に煩ひて、四月の頃病中寺内へ入、闔山の所化に傳染しけるが、夫より五月の末に至り少しく行れ、六月の末よりは次第に熾にして、衆庶枕を並べて臥したり、文政天保の度にかはり、こたびは殊に劇して、良醫も猥に藥餌を施す事あたはず、或は吐し咳嗽を生じ手足厥冷に及ぶ、烏犀角は内攻を防ぐの藥なれど、用ふる事度に過れば逆上して正氣を失ふに至るとぞ、固より熱氣甚しく狂を發して、水を飲んとしては駈出し河溝へ身を投じ、亦は井の中へ入て死るもありし、醫師は巧拙をいはずして東西に奔走し、藥舗は藥種を擇ずして售ふに遑なく、高價を貪れるも多かるべし、しかるに醫生も藥舗も又續て同病に罹れるも尠からず、製藥店招牌をかゝげて售ふもあれど、症分によりては應驗等しからざるもあるべし、七月より別て盛にして、命を失ふ者幾千人なりや量るべからず、三昧の寺院去る午年暴瀉病流行の時に倍して、公驗を以て日を約し茶吸の烟とはなしぬ、故に寺院は葬式を行ふにいとまなく、日本橋上には一日棺の渡る事貳百に暨る日もありしとぞ、又七月の半よりは暴瀉の病にまさりし急症やむ者多くこれあり、こは老少をいはず即時兆し吐瀉甚しく、片時の間に取詰て救藥すべからず、死後惣身赤くなるもの多し、その中には麻疹の後食養生懈りて再感せるもありしとか、又雀亂の類もありと聞り、（麻疹鳥獸にも迫して、牛馬鶏犬の斃たるもあり、）錢湯風呂屋箆頭舗更（かみゆひどこ）に客なし、花街の娼妓各煩ひて來客を迎へざる家多かりし、七月九日十日淺草寺千日詣參る人少く、十六日閻魔參又同じ、少年の走百病（やぶいら）これなきが故也、両國橋畔の夜舗七月半は更に燈燭を點ずる事なく、納涼避暑の輩かつてなし、相州大山に登るもの又稀にして、道中より煩ひて歸りたるもありけり、八月の半より町々木戸に齋竹を立、軒に奉燈の挑灯を釣り、鎮守神輿獅子頭をわたし、神樂所をしつらへて神をいさめ、この禍を攘ふといへり、後には次第に長じて大なる車樂を曳渡し、伎踊邃物を催して街頭をわたす、此風俗一般になり、又諸所の神社にも臨時の祭執行せしもこれあり○今年米穀豐饒にして、八朔二百十日僉日和なり、しかれども諸物の價尚貴踊し、麻疹其餘の病にて合家枕を並べて臥し、活業を休しもの〻ありて、賤民甚困苦せる故、七月上旬より町會所の倉廩を發して、市井の貧民へわかたる、又有德の輩よりも施行多し（無聲云是時飯田町中坂下柳原氏にて麻疹の咒をなす、諸人群集山の如し）○同朔日曉、高輪東禪寺異國人旅館へ、浪士亂入暴行あり、（死傷疵人あり）○同十五日、山王權現祭禮、車樂邃物等例の通催し、御城内へも入けるが、幕府其外の御覽なし○中旬深川卅三間堂、去る卯年地震の時破損に及びしを、御修復ありて舊觀に復せり○築地西本願寺本堂普請成就す○【無補】同晦日曉、築地出火○七月十五日、戌下刻より光物筋を引て坤の方へ飛ぶ事夥し（頭上をはなれ、事甚近くして引もきらず、）曉の頃尚盛なり、諸人恐怖せり○廿六七日頃、彗星乾の方に現ず、光芒甚微なり○此頃辻斬甚多かりし故、夜中の往來更に少く、路上おのづから寂莫たり○同廿八日より

六十日の間、淺草田畝長國寺鷲大明神開帳あり、しかれども世上に麻疹暴瀉病等行るゝ故詣人甚少し○八月以來雨多くして晴天の日稀なり○八月十一日、夜五時前、麹町三丁目菊一治兵衛といへる紅油の肆より失火して、同四丁目五丁目等類燒す、長一丁十間餘幅平均して三十間程なり○上野と芝の兩山御火消を廢せられ、出火の節は町火消人夫へ駈付の役を命ぜらる○八月下旬より、諸侯多く御在所へ趣かれたり○品川異國人旅舍追々に成る、波止場成就す○八月より、市谷谷町安養寺境内に、早竹虎吉輕躁幻技獨樂廻しの芝居興行○深川猿江に水月庵といふ蕎麥屋できる、構の内に大なる池ありて風趣ありしが、七年程にして廢たり○閏八月六日、芝神明宮產子町々臨時祭を催し、車樂花萬度等出す、流行病に依てなり○烏森稻荷の產子、山谷熱田明神、市谷八幡宮、赤城明神等の產子もこれに同じ、此邊賑ひて見物群集す○同月日缺淨瑠璃語常盤津豐後掾死、廣尾祥雲寺に葬す○九月十五日、神田明神蔭祭車樂踊臺等を出し、十四日より賑はへり○十月駒込光源寺大觀音堂宇佛像共修復成る○巣鴨駒込千駄木邊、菊の造物出來る、里見八犬士、廿四孝其外なり○同九日、夜五半時、西紺屋町河岸通り出火、尾張町迄布袋屋の隣迄、燒る○十一月十四日、暮六時過、吉原京町一丁目裏屋より出火して、一廓殘らず燒亡せり、僑居は七百日の間、深川黑江町、仲町、山本町、本所一ッ目にてゆるされたり○同廿六日曉、芝金杉一丁目火事○兩替屋仲間より神田の社前へ、岩石を積み石にて刻みし獅子の子落しの作り物を納む○十二月朔日曉、赤坂新町一丁目より出火、同所傳馬町、田町河岸通、并組屋敷の邊より溜池端桐畑又俗に云食傷町迄燒込、長五町餘類燒す○同五日、大風夕八時、青山百人町邊火事○同六日、晝四時過、西北大風、大千住五丁目火事○同廿四日夜、大川端小笠原侯屋敷火事○新大橋御修覆始る○同十三日、品川御殿山異國人の旅館へ、浪士集りて夜中炮を放つて燒却せり、五ヶ國の内英吉利の分大方に營作成しを、一

時の烟とはなしぬ○【補】同廿一日、和學所講談所付塙次郎、三番町にて暗殺せらる○同月より淺草寺奥山に於て、怪談活偶人見せ物出る、秋山平十郎作、ぜんまい機關竹田縫之助細工也○駒込光源寺大觀音像箔を置改め、堂宇の破壞を修復す、財主連雀町小田原屋吉右衛門なり、◎重複、

○文久三年　癸亥

正月暖氣雨雪なし、去歳より所々の梅開く、正月火事少し○同九日、夜四時、小石川極樂水松平駿州侯下屋敷より出火、北風強く類燒もあり○同廿五日、赤坂黑田侯中屋敷に、去る申年の頃より宰府の天滿宮を勸請ありしが、今日より始て諸人の參詣をゆるさる、夫より毎月參詣あり、崖に臨み東北の眺望よし、梅樹を栽られ山上に茶店をもまうけたり○二月初旬より櫻花咲く○同月新錢通用始る、四文錢、文久通寶なり○同月十三日、幕府御上洛御發輿ありて、六月十六日還輿あり、東街道陸地通御なり○同十八日より六十日の間、雜司谷鬼子母神開帳、本堂修復成りしにより、開帳ありしかど詣人少し○兩國橋西詰にて駱駝を見せものとす、天保に渡りしよりちいさし○三月初旬より横濱に於て、異國の使船鎖港の御應接激切に及ばんの由、この事に付閭巷の浮說により實否を辨ぜずして、去る丑年の如く諸人慴怕のこゝろをいだき、耆嫗婦幼をして遠陬の僻地へ去らしめ、資財雜具は郊外の親戚知己の許へ預くるとて、これを運送しけるが、程なく騷屑の噂も止ければ、四月のころより各安堵して本處へ歸れり、此間尊卑の家に費す所の金銀はいかばかりならむ、又棍賊侯白時を得て掠奪せるも多かりしとぞ、此節撈人車夫傭夫等の賃錢甚貴かりし○三月より、市谷安養寺境内に百日芝居興行す○同十六日、暮六半時頃、本郷新町屋大根畠といふより出火、西南風にて湯島天滿宮本社拜殿去年修復なりて壯麗の社にて、殊に本社は土庫にてありしが、惜むべし灰燼となりぬ、燒、別當所は殘る、門前町屋、柳井堂、池の端茅町南の方少々、同仲町、玄桂屋敷、三組町坂の下は加藤侯の向側、御すきや町等類燒し、夜九時頃鎮る、長五町餘、幅平均一町五十間程なり、瑞雲寺、麟祥院、根生院等はのこる○同二十日、曉八時頃、藤堂侯向佐久間町二丁目

火事、半町程焼る○四月新徴組浪士、酒井繁之丞殿庄内侯、の附属に命ぜらる○此頃浪士徘徊して辻斬止ず、兩國橋畔には其徒の内犯律のよしにて、二人の首級をかけて勇威を示せり、所々鬪諍ありて穏ならず○四月兩國橋西詰にて、異國渡來の牝象を見せものとす、灰毛九尺計あり、三歳と云○夏中回向院にて、百日芝居興行○此頃谷中本行寺境内に、幼兒集りて相撲の技を催しけるが、次第に長じ、後には何方となく素人の子供なり、輻輳して、互に贏輸を爭ひしかば、其父母もこれに泥み、美麗なる褌襠を拵へ土俵をも築かしめたり、下谷常在寺、本郷眞光寺その外所々の寺院墨地等にて催しける、秋にいたりても猶盛なり、但木戸錢棧敷代等は更に受る事なし○六月鐵砲洲明石町木挽町續氷川屋敷、海岸御警衛に付召上らる○同三日、南大風今曉八時頃、飯倉町續芝永井町代地赤羽なり明家より出火して、飯倉一丁目より五丁目迄、順丁寺門前松平中務大輔殿中屋敷、仙石侯、松平右近將監殿、京極佐州侯、幷旗本衆屋敷十七軒、普門院門前、大養寺門前、神谷町、葺手町、永井町代地、御靈屋御掃除屋敷、熊野社、西久保八幡殘る、天德寺向側、西久保車坂町、同新下谷町其外數ヶ町類焼す、武家も多く焼たり、虎の御門外京極家、金毘羅社、御勘定奉行御役屋敷迄焼込、夕八時頃鎮る、長凡十五町半、幅平均三十間程なり○同日夕、西御丸炎上ありしが、此火の飛ぶ所と云り、此日は暑威殊に盛にてありし○六月九日、佛蘭西の舶神奈川へ着す○神田三天王祭禮延引、八月に成る○同十五日、赤坂氷川明神祭神輿のみ渡る○同日山王權現宮祭禮延引○同十六日、幕府御船にて洛より還御○同下旬、四谷天王祭あり○二十八日、兩國橋邊夜店始る、花火はなし納凉の輩少し○同下旬の頃より、小石川御簞笥町裏續切支丹坂茗荷谷町邊、市谷月桂寺德運寺の邊樹木茂りし所に雀合戰あり、日毎に巨細群り來、諸人見物多かりしが七月に至り止む○六月の頃より、中澁谷村宮益町裏千代田稲荷社はやり出し、日毎に貴賤男女歩を運びしかば、此あたりには酒肆茶店を列ね、花を染たる一様の暖簾をかけ、諸商人出て賑ひける、冬にいたり詣人やゝ減じたり○七月十九日、異星天漢の脇に現ず、其後曇天にて見えず○同日より六十日の間、深川淨心寺にて、甲州身延山祖師七面宮開帳、詣人例よりも少かりし○同月暴瀉病少しく行はる、死亡の者去年の半より少し○八月神田天王祭禮、神輿御旅出あり、五日大傳馬町へ、七日南傳馬町へ、十日小舟町へ出づ、歸社は例年の日割なり、大行燈飾り物等なし○同八日九日、淺草寺三社權現祭禮、三月を延したるなり、車樂伎踊邊物等出て賑へり○同十五日、深川八幡宮祭禮、車樂五十輛程伎踊邊物等多く出て、前年より賑へり○諸物價登揚せる事、去年にまされり○九月五日、曉丑刻、馬喰町一丁目より出火、通鹽町、通油町、横山町、村松町、若松町邊、其外武家屋敷數ヶ所、細川侯中屋敷焼込たれど清正公社は恙なし、等類焼し、明方鎮る、長六町餘、幅平均して二町十間の餘なり○同七日曉、麻布今井谷火事○九月十五日、神田明神祭禮執行なし、來々丑年に延る○同廿六日、晝四半時頃往原郡目黒在三田村合藥鐵砲に用ふる所の品なり、の製所に過つて火を發す、其響四五里に聞えたり、即死怪瑕の者七十餘人といふ、此變にあひしもの身首所を異にし、五體微塵となり、遠に隔りたる喬木の枝に、片腕のみ〳〵り居たるを看たるもありしとぞ○十月三日、曉寅刻、赤坂紀の國坂下町屋より出火、北風にて火消屋敷迄焼込、元赤坂町等都て長二町餘焼る○同十九日曉、西の窪天德寺失火、本堂假建にて焼たり○十一月十一日曉、麹町火○同月孛魯西（フルエス）の聘船品川沖へ碇泊し書を呈す○同十五日、酉の下刻、御本丸二の丸炎上、亥刻頃鎮火○同二十三日、晝四時前、駿河町三井呉服店より失火して、駿河町、室町二丁目三丁目、本兩替町、北鞘町、品川町、同裏河岸、本船町、小田原町、長濱町一二丁目、安針町等焼亡、長延二町四十間、幅平均して一丁半程なり○同廿七日曉、大千住二丁目より出火、同三丁目迄焼る○十一月朔日以來更に雨降らず、火災度々あり、十二月十七日、淺草寺年の市の日たま〳〵雨ふる、夫より正月に至るまで雨更になし、年内より梅花咲く○猿若町三座芝居顔

見せ狂言なし、茶屋かざり物なし○十二月廿七日、今年再度幕府の御上洛あり、翌年六月廿日還御あり○御留守中三座芝居興行を休む○十二月水戸浪人或新徵組と唱へ富家に至り攘夷を名として、金銀無心申入るゝ者、捕方の儀御徇有り○此頃藪潛りと號し、紙捻を以て編たる陣笠、又袋物屋にて大き成胴亂、毛皮の大巾着商ふ、又鐵扇行はる○此頃葡萄鼠といへる染色はやり、女子等此色を用ふ○西洋畫寫眞繪等追々行はる○近頃上總國周淮郡の内八ヶ村の海岸に、ひゞと唱へし柵を立、海苔をとり乾のりに製して、江戸其外へ送るもの多し、

○元治元年　甲子　三月朔日改元

正月三日晝時、靑山玉窓寺より失火して、南大風吹今井谷まで燒る○同日暮六時、三味線堀組屋敷火○同六日暮六時頃、北本所番場町より出火、組屋敷等類燒長一町餘幅三十間程なり○同九日、曉八時過北東風烈しく、深川永代寺門前仲町より失火して、山本町、黑江町、蛤町河岸迄燒、吉原町娼家の僑居も悉く燒亡に及び、夜明て鎭る、長二町餘、幅平均して一町半程也、町中に在し一の鳥居に燒付たり○去冬十一月十二月雨降らず、正月九日にいたり、曇り小雪ふり間もなく止む○正月二十六日、酉中刻、吉原江戸町一丁目娼家大口屋文右衞門宅より出火、去戌年災後あらましに家作なりしが、再度燒けて假宅は尙引續深川本所に於て商賣す○芝神明宮本社再建成就す、内外宮御拜殿故千木の造り樣、一方は内宮の片損とし、一方は外宮の片損の形に作りたり○二月三日、北大風夜に入少し穩なり、しかるに夜五時前、本銀町四軒屋敷の明家より出火して、此火は過ちにあらず、惡黨あつて放つ所なりといふ、新革屋町、本銀町一丁目二丁目、本石町一丁目二丁目、十軒店、金吹町、本革屋町、本町一丁目二丁目、本兩替町、室町二丁目、駿河町、品川町北鞘町等類燒に及び、曉八半時頃鎭る、長四町幅平均して二町餘なり、白旗いなり社は殘れり○同十一日初午祭、大方二の午に延る○近年異國の船舶沿海へ泊してより人心易からず、宇内の息層更に靜る事なし、別て去年は中國和州等の戰爭屢にして、其域を阻るといへども寢

食を安んずる事なし、然るに浪士跋扈して、五月の頃より總州野州常州等の地に蜂起し、一揆をなして野州筑波大平山等に楯籠り、富商を募りて金策をなし、農夫を驅役して惱しければ、官府より討手の多勢を向られ、數月を經ずして鎭制ありたり、これらの顚末は一擧の盡る所にあらず、且江城下の事件にあらざればこゝに省けり○三月朔日、革命の運により年號改元ありて、元治元年と成る○同十日より三十日の間、谷中延壽寺日荷上人像開帳、朝參等多し○同十二日より六十日の間、傳通院内福聚院三國傳來三神具足大黑天開帳、境内見せ物奉納物等多し、參詣群集す○同十日、夜五半時、築地門跡西の方朽木侯中屋敷より失火して、武家屋敷數宇、御軍艦操練所燒、門跡地中の寺院、又南の方南小田原町、南本郷町等燒亡、曉に及で鎭る、長三町幅平均して二町程といふ○同十四日、曉八半時南西風强く扇しが、瀨戸物町と室町二丁目の間せと物町仕立や平兵衞と、室町飛脚や京屋彌兵衞の堺なり、より出火して、瀨戸物町、室町一丁目二丁目三丁目、伊勢町、小田原町一丁目二丁目、安針町、本町三丁目四丁目、本石町四丁目、大傳馬町、鹽町、岩付町、鐵砲町、小傳馬町、同上町、道有屋敷、岩井町、岩本町、龜井町、橋本町一丁目二丁目三丁目、松下町代地、龍閑町代地、鎌倉横町代地、今川橋受負地、江川町、久右衞門町富松町、豐島町一丁目二丁目三丁目、元柳原六丁目、佐久間町代地、横山町代地、九軒町、元岩井町、紺屋町二丁目三丁目、幸伯屋敷、大和町、小泉町、松枝町其外燒亡の分とも町數五十九町、お玉が池細川侯屋敷、御旗本衆其外武家方數軒類燒あり、夜明て巳刻鎭る、長九町幅平均三町程なり○同十五日、亥刻過、元飯田町魚板橋の西、御旗本石谷氏屋敷より失火、外一軒餘燒其餘火災屢あり○同廿八日、夜子刻、西久保天德寺災○淺草寺奥山竹田縫之助が作にて、活偶人見せ物出る、懷胎の女腹内を開き、懷胎十月の形を見せものに出しけるは、兩國橋手前にこれあり、十月の形かはらする細工、其外偶人の働あり○三月より牛天神境内にて、百日間芝居興行○四月十七日、夕

八時、淺草幡隨意院火事○同廿二日、暮六半時過、猿若町三丁目芝居付茶屋筑前屋喜七が宅より出火、同町一丁目二丁目三丁目、三座の芝居、南馬道町、聖天横町、北馬道町、淺草寺地中の内十一ヶ寺境内町屋とも類燒、長四町餘、幅平均して一町四十間なり○同廿三日、夕七時過、深川元町より出火、森下町へ燒込、長一町二十間程なり○五月三日、明六時過、地震強く長し○六月五日、大傳馬町天王御旅出の事、當年より五年の間休む、同七日南傳馬町天王例の通御旅出有り、小舟町天王は廿五日御旅出○同十五日、山王權現祭禮、神輿行列のみ恒例の道筋を渡し奉り、產子の町町より車樂邊物等は出さず、よつて夕八時頃本社へ還輿あり○同廿日、幕府御船にて京師より還御あり○湯島天滿宮災後本社ばかり建つ、廿三日夜正遷宮、廿七日祭禮執行あり○七月廿六夜待、高輪品川湯島大川通其外更に人なし○八月六日、夜子刻、芝三島町糸屋庄助の家より失火して、神明門前、三島町、宇田川町、同横町、七軒町、神明町、濱松町一丁目、板倉侯屋敷へ燒込、長四町餘幅平均して廿間計なり、神明宮恙なし、神主小泉氏西東氏燒たり○同九日、夜前より雨、夜明より大風雨、南風扇さ後西北風に替り、屋上塀牆等大破に及ぶ所多し○同十四日十五日雨、良夜看月空し、夫より雨しげく、彼岸中も晴天一日なり○同月八日より、毛利大膳大夫殿櫻田の上屋敷、麻布龍土の中屋敷とも、家作取崩すべき由人夫に命ぜられ、町火消の人足も出たり、大勢撤却に及びし處、九日朝より風雨烈しく、上屋敷の鎮守稲荷祠へかゝりし頃、俄に猛風吹起りければ、諸人甚恐怖せり、北の方なる稲荷祠の後には奇石あり、穀生石と噂ありける由、地下に埋れし事其限りを知らずと、そこの石に觸るゝもの無き爲にとて垣を結びあり、上屋敷屋宇は去年破壞し礎石さへあらず、邸中鳥有となれり、龍土の方は屋宇を排ね倉庫は廿餘宇あり、玄關より奥殿にいたる迄壯麗の營作なれど、二三年このかた住居もなく、庭中は亂草迷離と變れたり、

檜木やしきとよばるゝ所の檜の巨樹は、後の方外構へに添たる所に列り立り、邸中喬木多し、谷に池あり蓴菜生じたるは古池としらる、豐太閤より給はりしといふ石燈籠あり、笠は五尺餘りもあるべし、世俗雪看形と唱る物の類也、天滿宮稲荷社あり、又寺院あり、本堂五間四面なり、惜むべし右建物一日の内に悉く墜て廣原とはなれり、奥殿を毀ける時大なる蝙蝠飛去たり、傳へて云この室内へ人數の入るに、半の數にて入る時は必ず怪異あり、依て丁の數にて入る事になれりと云傳ふる由也○八月は大の月三月續し中の月故、十七日十八日芝金地院觀世音開帳あり○九月暖氣にて單衣を着し、笠日傘等を用ふる人多し○十月御上洛の濟せられし御祝儀として、江戸町人一統へ六萬三千兩の金子を賜はる、寵の數に頒ち、大家となく小家となく一軒に錢三貫百三十九文なり○同十日湯島天滿宮祭禮、車樂伎踊邊物等出て、前日より賑へり、本郷眞光寺天滿宮も同日祭禮を執行し、車樂踊等催せり、しかるに十日夜本所柳島邊の火事にて、火消の人夫行違ひ往來殊の外混雜せり○同二十三日、曉七時前、本所吉岡町火事、清水町古錢座燒る、長一町幅廿二間程なり、此火事は過ちにあらず放火のよしなり○此頃辻斬の噂止て世上靜也○十一月酉の日、下谷坂本町二丁目要傳寺、巢鴨靈感院、鮫が橋本迹寺何れも法華宗なり、等にて酉の祭始り、これより年々詣人多し、竹把李頭等を售ふ○同廿三日、吉原揚屋町小火○十二月十四日曉風、牛込揚場町河岸通町屋燒る、一丁程なり○同十五日、浮世繪師二世歌川豐國死、七十九歳、元祖豐國の門人にして、始は一雄齋國貞と號し、又五渡亭香蝶樓梅丹など稱し、通稱は角田庄藏といふ、文化より六十年來世に行はれたり、龜戸光明寺に葬す○同十九日、麻布櫻田町火事○本所伊豫橋永井侯中屋敷示敎稲荷社參詣をゆるさる、次第に繁昌して諸願をかくるもの多し、近き頃靈告ありて、濱町屋敷の土中を穿ちて得られし像といふ○能役者先代寶生太夫稱彌五郎薙髮して紫雪と號し、賀州へ赴き彼地に住しけるが、今年彼地に死す、忌日は失せり、筋違にて勸進能興行せし人なり○高田感通寺境内に、此頃小祠を營みて筆硯大明神と號し、筆道の守護神と稱

へて毎月朔日十九日を祭日とし、小兒をして詣しめける、何の神にや知らず、年ならずして廢せり、

○慶應元年　乙丑　五月閏　四月十八日改元

去冬より暖氣にて、雨少く雪更になし、早春雨多く降り火災少し○正月十一日、狂歌師梅の屋秣翁死、六十二歳、稱吉田佐吉、一號鶴壽、神田佐久間町住、辭世、爪づくがさいご此世の暇乞ひま行駒の送り狼○同月淺草寺奥山に於て、秋山平十郎作にて十二支に因ある活偶人の見せ物出る○二月より回向院境内に於て、百日芝居興行○三月廿日、京都より東門跡御下向有、淺草本願寺へ着せらる、日光山御神忌にふつてなりとぞ○同十八日、淺草三社權現祭禮、町々より車樂邊物多く出る、前日雨ふり、當日は半日雨降る○四月四日、曉七時、神田明神下御臺所町續武家地、吉田某宅より出火、坂上へ燒上り、呉服店澤の井の側、神田社前に近き町屋、湯島一丁目の河岸迄燒、夜明鎮り雨降る○同十七日、日光山御神忌、二百五十年の御忌辰なり、諸侯御代參あり○五月八日より三十日の間、高田本松寺願滿祖師開帳○同廿二日、夜四時過、霞ヶ關の下阿部侯屋敷より出火、柳澤侯、太田侯等類燒あり○同月末より閏月に至り雨多し○閏五月十八日曉、田安侯御館火事○同廿八日より、兩國橋邊花火等當年これなし○去年より米穀薪炭酒味噌油絹布の類、其餘諸物の價次第に登揚し、菜蔬魚類に至る迄其價甚貴し○六月十五日、赤坂氷川明神祭禮、神輿のみを渡す○同日夜風雨烈しく明方彌強く、深川邊高潮漲りて、低き所床の上へ五尺計り水乘る、近在村々洪水溢濫す、溺死の者多し○同廿三日、夜雨強く降り雷霆あり、神田川の邊、柳原、本所松倉町、淺草三好町等へ落る○同廿八日より六十日の間、本所回向院境内に於て、奥州金花山大金寺の本尊自然木八臂辨才天開帳あり、日日曉より參詣の男女諸方より群り、振鈴擊鉦を廢して跳踊絃歌を催し、又大なる行燈を造り上に色々のつくり物をもて飾りたり、燈火を點じ、これを荷ひて門前につどへり、朝毎に此繁昌はありしかど、素より浮氣の俗人鄕鄰に傚へるのみにして信心にあらざれば、此黨は更なり格別の群集もなかりし故、香花は甚薄かりし、よつて閉龕の後歸國延引に蹔びしとなむ、開帳中寺内に大なる假屋を構へ渡邊捨次郎といふ者曲馬の藝をなす、見物多し、その外力持怪談人形などいふ物も見せたり○同月末より、駒込より白山の邊に、毎夕八時頃より雀合戰あり數萬の雀群りしが、見物の諸人日毎に集ひ見物しける由也○七月中三十日間、三田臺町藥王寺祖師開帳○米價諸色高直に付、同月より町會所に於て、市中の貧民へ御救の米錢を頒ち與へらる○秋淺草報恩寺本堂再建成○八月十四日夜、淺草堀田原火事、三島門前町屋大岡侯長屋へ燒込○同十五日、夜晴天月清光を見る、珍らしき事也、十四日はくもる○芝泉岳寺門前同寺持境内千六百七十餘坪の墨地へ、異國人接遇所を建らる、町屋の内六百坪程の所取拂○王子村飛鳥山下を掘割り、大川より船を通ぜしめられ、又飛鳥山の下に反射爐錐臺を建築あり○九月十日より十日の間、猿若町一丁目中村勘三郎が芝居壽狂言興行す、去年六十一年目に當るを延したるなり○同月十五日、神田明神祭禮、本社には假の祭典のみにして神輿も出ず、恒例の執行なし、幕府の御進發御留守故也、然るに產子町々の内、作事の職人其餘遊俠の黨竊に議して、車樂數輛伎踊邊物等を催し、十四日より町々を渡し、十五日には筋違橋御門の内に揃ひて、御茶の水通より本鄕通り、本社の前を曳渡しければ、本社の賑ひ見物の群集、錐を立べき所なかりし、然るに官府より御沙汰ありて、各貲贖錢を命ぜられたり○十一月廿一日、夜大風、橋場町より出火、二町餘燒、拍戸川口某が舖もやけたり○同廿二日、夕八時過北風強く、小石川櫻木町續御賄方組屋敷より出火二町計燒失○今年より雜司谷鬼子母神境内鶯明神へ、十一月西の日酉の祭とて詣る事始る、是より年々賑はへり○十二月三日、夜四時、淺草材木町河岸火事○同十二日、夜四半時ごろ、淺草田原町一丁目より失火、北大風、西は門跡裏門前町屋、高原屋敷少し燒込、東仲町に家々より多くの財寶を積置しに火燃移りて、淺草寺風雷神門幷左右兩側の寺院燒る、二王門より内は恙なし、花川戸町角古物六地藏の石燈

籠焼て聊缺損じたり、花戸川町、茶屋町、並木町、諏訪町、黒船町焼け、駒形堂は殘る、此火遠く南本所へ飛で、長崎町、三笠町、長岡町、幷この邊武家地組屋敷、又本所十六軒屋敷後の方焼、深川猿江の邊、大島村邊所々飛火にて焼たり、十三日晝九時頃漸鎮る、淺草の邊計りは凡八町に六町程焼たり○同廿六日、明六時、下谷長者町一丁目東の方より出火、松下町代地並武家地少々焼込○冬雪更になし雨少し○冬より春へ掛偷盗多し○今年（忌辰を失す、聲云、四月十三日歟、畫人谷口月窓卒、九十一歳、名世達、號孟慳、痴絶庵、勢州山田寂照寺の月鐸老師の門人にして、善く師の畫れし人物の骨格出水等の風趣をうつしける人なり、伊勢の産にして壯歳の時江戸に下れり、晩年薩州侯の芝邸に住し、又目黒村に住せり）○諸家の銃隊調練次第に盛にして、隊伍をなし諸方の調練場に至る、各西洋風の太鼓を鳴らして群行せり○大坂の淨瑠璃語竹本對馬太夫江戸に下れり、諸人競ふて聽聞す、

○慶應二年　丙寅

正月元日、晴天晝九時頃、四谷傳馬町二丁目より出火して、風もあらざりしが延焼に及び、四谷通り三町餘幅一町ほど組屋敷へも焼込たり○正月より淺草奥山見せ物、秋山平十郎活人形、竹田縫之助ゼンマイからくり等なり○十日風雨、明六時頃、霞が關火事○去冬より雪更に降らず○二月茅場町藥師境内花角力殊の外繁昌す○上野、花見の頃、山内の出茶屋を停らる○三月九日、大風雨止て後夜中、神田九軒町御鐵砲臺師大塚某宅より出火、小泉町松枝町松下町代地少しや（け）込、武家地も類焼あり、長一町半餘、幅平均して三十五間なり○南傳馬町三丁目東の横町に住る救火備夫の頭と唱へし金太郎（町火消せ組の鳶頭なり、）といふ者、近頃世に行るゝ寄場といふを開き、家號を佐の松と稱へ、間口十一間半奥行九間餘舞臺四間餘、三方二階棧敷を搆へたり、歌舞妓狂言を催し、俳優は少年の男子にて十七八歳より十二歳を限とし、又年わかき女子も交り、各無言にして淨瑠璃語の詞により口を動し、物いふさまして藝をなす、世に綽名して活偶人と云ふ、江戸第一の大寄と稱して、見物日毎に群集しけるが、制度に觸る事

ありて三月の末興行を停られ、罪科に處せられたり、（俳少年は駒雀、玉子、駒次郎などいふもの上手分なり）○淺草御藏前へ活人形見せ物出る、膝栗毛彌二北八の人形、亦遊女浴湯裸の姿を見する○四月朔日、夜四時、芝濱松町一丁目炭薪屋龜吉宅より失火して、神明門前七軒町、神明町、三島町、宇田川町、同横町、柴井町、露月町、源助町、牧野侯、（小名）遠山侯、（同）植田侯屋敷類焼、翌二日明方鎮る、長延六町餘幅平均して五十六間餘也、神明宮の鳥居笠木焼落て怪我人あり○同四日、夜四ッ時、神田富松町元地火事、佐久間町四丁目裏町へ焼込○同十日、曉丑下刻、筋違橋御門内阿部侯屋敷より出火、（御旗本衆やしき四軒計類焼あり）○同十五日曉、小石川御簞笥町出火、武家地とも一町計り焼たり○四月凉氣にて諸人絮衣（わたいれ）を着す、病者多し○貳朱金引換始る○猿若町なる操芝居座元薩摩吉右衞門は、筋違橋外講武所付町屋敷、（加賀原の跡なり）、同結城孫三郎は米澤町へ芝居を移し興行を免されて、四月十五日より始てその所に於て操芝居興行す、（茶屋も軒を並べて數軒出來、見物群集しける）が、頓て衰へしかば秋の頃より興行を休む）○四月十五日より、小石川白山權現社内に於て、百日芝居興行○近き頃より辨當屋といふ者（行厨に比して調理し、重箱へ詰たる物なり、）はやり出しけるが、次第に行れ商ふ家數軒に及べり、○五月より砲術行軍等の調練に、西洋の笛を用ふる事始る、又調練場へ趣く途中に笛太鼓を用ふる事を停らる○同月より兩國橋の東詰に於て、西洋傳來木匠の器械を見せ物とす、（多くの車を以板を挽割或は錐揉等なして穴を穿つの奇巧なり、されど見物甚少かりし故間もなく止む）○近年續て諸物の價沸騰し、今茲は別て米穀不登にして其價貴踊し、五六月のころよりは小賣百文に付て一合五勺に換へたり八九月の頃に至りては一合一勺位に及べり、如此く登踊して賤民の困苦いふばかりなし、五月二十八日の夜五時頃、何ものとも知らず南品川御嶽町稲荷祠の太鼓を取出し、同所本覺寺の境内にいたり打鳴らしければ、何方よりか雜人多く集ひ來り、夫より群行して南品川馬場町油屋某が宅を破却し、南品川宿、北品川歩行新宿、東海寺門前の町屋を打毀す事凡四十

籠焼て聊缺損したり、花戸川町、茶屋町、並木町、諏訪町、黒船町焼け、駒形堂は殘る、此火遠く南本所へ飛で、長崎町、三笠町、長岡町、幷この邊武家地組屋敷、又本所十六軒屋敷後の方焼、深川猿江の邊、大島村邊所々飛火にて焼たり、十三日晝九時頃漸鎮る、淺草の邊計りは凡八町に六町程焼たり○同廿六日、明六時、下谷長者町一丁目東の方より出火、松下町代地並武家地少々焼込○冬雪更になし雨少し○冬より春へ掛偷盗多し○今年忌辰を失す、聲云四月十三日殘、晝人谷口月窓卒、九十一歳、名世逢、號孟僊、痴絶庵、勢州山田寂照寺の月餌老師の門人にして、善く師の畫れし人物の骨格由水等の風趣をうつしける人なり、伊勢の産にして壯歳の時江戸に下れり、晩年薩州侯の芝邸に住し、又目黒村に住せり○諸家の銃隊調練次第に盛にして、隊伍をなし諸方の調練場に至る、各西洋風の太鼓を鳴らして群行せり○大坂の淨瑠璃語竹本對馬太夫江戸に下れり、諸人競ふて聽聞す、

○慶應二年　丙寅

正月元日、晴天晝九時頃、四谷傳馬町二丁目より出火して、風もあらざりしが延焼に及び、四谷通り三町餘幅一町ほど組屋敷へも焼込たり○正月より淺草奥山見せ物、秋山平十郎活人形、竹田縫之助ゼンマイからくり等なり○十日風雨、明六時頃、霞が關火事○去冬より雪更に降らず○二月茅場町藥師境内花角力殊の外繁昌す○上野、花見の頃、山内の出茶屋を停らる○三月九日、大風雨止て後夜中、神田九軒町御鐵砲臺師大塚某宅より出火、小泉町松枝町松下町代地少しや焼け込、武家地も類焼あり、長一町半餘、幅平均して三十五間なり○南傳馬町三丁目東の横町に住る救火備夫の頭と唱へし金太郎町火消せ組の鳶頭なり、といふ者、近頃世に行るゝ寄場といふを開き、家號を佐の松と稱へ、間口十一間半奥行九間餘舞臺四間餘、三方二階棧敷を搆へたり、歌舞妓狂言を催し、俳優は少年の男子にて十七八歳より十二歳を限とし、又年わかき女子も交り、各無言にして淨瑠璃語の詞により口を動し、物いふさまして藝をなす、世に綽名して活偶人と云ふ、江戸第一の大寄と稱して、見物日毎に群集しけるが、制度に觸る事

ありて三月の末興行を停られ、罪科に處せられたり、俳少年は駒雀、玉子、駒次郎などいふもの上手分なり○淺草御藏前へ活人形見せ物出る、膝栗毛彌二北八の人形、亦遊女浴湯裸の姿を見する○四月朔日、夜四時、芝濱松町一丁目炭薪屋龜吉宅より失火して、神明門前七軒町、神明町、三島町、宇田川町、同横町、柴井町、露月町、源助町、牧野侯、小名遠山侯、同植田侯屋敷類焼、翌二日明方鎮る、長延六町餘幅平均して五十六間餘也、神明宮の鳥居笠木焼落て怪我人あり○同四日、夜四ッ時、神田富松町元地火事、佐久間町四丁目裏町へ焼込○同十日、曉丑下刻、筋違橋御門内阿部侯屋敷より出火、御旗本衆やしき四軒計類焼あり○同十五日曉、小石川御簞笥町出火、武家地とも一町計り焼たり○四月凉氣にて諸人絮衣（わたいれ）を着す、病者多し○武朱金引換始る○猿若町なる操芝居座元薩摩吉右衞門は、筋違橋外講武所付町屋敷、加賀原の跡なり、同結城孫三郎は米澤町へ芝居を移し興行を免されて、四月十五日より始てその所に於て操芝居興行す、茶屋も軒を並べて數軒出來、見物群集しけるが、頓て衰へしかば秋の頃より興行を休む○四月十五日より、小石川白山權現社内に於て、百日芝居興行○近き頃より辨當屋といふ者、行厨に比して調理し、重箱へ詰たる物なり、はやり出しけるが、次第に行れ商ふ家數軒に及べり、○五月より砲術行軍等の調練に、西洋の笛を用ふる事始る、又調練場へ趣く途中に笛太鼓を用ふる事を停らる○同月より兩國橋の東詰に於て、西洋傳來木匠の器械を見せ物とす、多くの車を以板を挽割或は錐揉等なして穴を穿つの奇巧なり、されど見物甚少かりし故間もなく止む○近年續て諸物の價沸騰し、今茲は別て米穀不登にして其價貴踊し、五六月のころよりは小賣百文に付て一合五勺に換へたり八九月の頃に至りては一合一勺位に及べり、如此く登踊して賤民の困苦いふばかりなし、五月二十八日の夜五時頃、何ものとも知らず南品川御嶽町稲荷祠の太鼓を取出し、同所本覺寺の境内にいたり打鳴らしければ、何方よりか雜人多く集ひ來り、夫より群行して南品川馬場町油屋某が宅を破却し、南品川宿、北品川歩行新宿、東海寺門前の町屋を打毀す事凡四十

軒程、卽時に散じて行方を知らず、夫よりしてかゝる狼戾の輩諸方に蜂起して日夜に群行し、本芝同田町、金杉町、芝西應寺町、濱松町中門前等に及し、六月二日は新和泉町、四谷邊、鮫河橋、麻布本村等の町屋を壞てり、又三日には堀留町、牛込中里町、早稻田町、馬場下町、鎌倉横町、赤坂田町、新町の邊、四日には本所茅場町、四谷傳馬町、五日には本所綠町に及べり、この內幼弱の少年も立交りて、飛鳥の如く駈廻りてともにこぼちける由なり、（天明の打こわしは少年の男子先立したり、奇といふべし、）何方より來て何方へ歸るといふ事を知らず、不思議の事といひあへり、かゝる狼藉に及びしかど、全く飢餓に迫りし事故、六月中には町會所より貧民御救として、一人分錢壹貫百文宛を頒ち與へられ、九月初旬には百文に付二合五勺の御拂米これあるべしとて、坊間へ張札を以て徇られしが、其公驗行渡らず、此米は賤民の內にもわけて貧窶窮迫の者にわかちて、飢餓を救ふべしとありしが、此撰に洩たるを羨且憤りて、九月十日の頃よりは、本所大島町邊の貧民急卒に大路に輳り、富商の家又は米屋味噌屋炭薪屋等の門邊にイで救施を求む、大釜を押て借受、押借の米を焚て是を饗ふ、是よりや始りけむ深川猿江のあたり、松代町本所松倉町邊、其餘追々諸方に屯集し、本所法恩寺の境內に集り、卒塔婆を折て薪とし、米を焚て夜を明せり、寺主も始の程は穩に諭し軟言けるが、餘りの放逸に困じ果、さればとて巨多の人數にして達晨に暨び、捨置べからざれば止事を得ず、寺社奉行所町御奉行所へ訴へ申けるにより、人數を向られて卽時に追擺はる、しかれども猶他所の市店に迫り、武家へも趣きて扶助を募る、本所細川家には最寄の町々へ百金を給ひ、津輕家には表門へ押寄せし族を制せられしかど、更に不肯に依て空炮を放ちて追退けられたり、十五日頃淺草邊橋場今戸に及ぼし、淺草寺、辨天山橋場法源寺、總泉寺に集り、富商の施財を催促す、深川靈巖寺へも集りし由なり、十七日には中の郷南割下水

下谷坂本其外所々に羣り大路に駢闐せり、依て商家は戶扉を鎖して聲をもたてず、十八日下谷龍泉寺町の族大恩寺に集り、谷中天王寺へも羣れり、和泉橋北廣小路下谷稻荷社內へも屯しける、十八日は上野大師の緣日にて詣る人もありけるが、異國人此邊を通りかゝりけるを、羣集の貧民大聲を擧て罵詈、礫を打てやまざれば異國人恐れて逃延たり、十八日夜よりは神田町々の賤民も道路に屯集して、前同樣の所行有春米屋も怖れて戶を閉家業を休しかば、諸人彌迷惑せり○九月神田佐久間町の河岸へ貧民御救の假屋を建られて扶育せられ、又同廿一日より、五ヶの寺院に於て焚出しの御救始りしかど更に間にあはず、未明より其所に集り與へられたり、五ヶの寺院は本所回向院、谷中天王寺、大塚護國寺、澁谷長谷寺、三田功運寺等なり、富饒の輩は此節賤民の狼戾を憤る有ど、暴行を厭ひ各米錢を曬す事夥し、猿若町三座の芝居興行を停む、遊里に趣くもの更になく、妓家貨食舗等の寂莫たる想像すべし○六月日々曇りて雨多し○神田社地三天王御旅出なし○同七日より別隊組の輩日夜巡邏始る、市中に四ヶ所の詰場を設らる○同十五日、山王權現祭禮執行なし○水戶鐵錢通用始る、四文錢なり○同二十日より六十日の間、本所回向院に於て、三河國勝鬘皇寺聖德太子像開帳ゐり、（境內見せ物、曲馬、力持、活人形、笑話家官餘、牛若丸、僧正坊、天狗、熊坂長範等なり、細工人淡野當久平）○芝金杉圓珠寺境內百日芝居興行○七月十七日より三十日の間、山谷正法寺毘沙門天開帳、朝夕ゐり多し○同廿九日曉、橋本町四丁目火事、北風にて長二町半餘、幅五十間計り燒亡せり○八月三日、定火消御役屋敷當時八ヶ所の處、四ヶ所（赤坂、市谷、九段坂上、御茶の水）を廢せられ四ヶ所に成る、駿河臺、麴町、冶容洲河岸、靈南坂なり○同六日朝七日終日大雨、夜に入大風雨にて大川出水○彼岸中雨多し○同十六日、月蝕皆既、五時より九時過迄なり○同十九日、英吉利人四人（內男二人女二人）王子村の邊へ遊歷して、谷中の團粉坂を過ける時、烏合の貧民紙幟を立、富家へ至り

曦施を乞ふの爲弊衣を着し、あらぬさまして羣行しけるを見て笑ひけるを、濫行不軌の族これを憤り、衆口等しく罵りて礫を打しより、次第に人數增て散動し手々に瓦礫を抛ける、別隊組の士もこれに副て護送せられけれど、多勢に辟易して制する事あたはず、馬をはやめて馳られけれど、追々に人數重りあひしを、段々に逃のびて、淺草寺門前より御藏前を經てより彌混駁し、別隊組の輩は猿屋町の會所御藏等へ逃入しかど、屋上より尙石瓦を投ること始に倍して、面部其外へ疵をかふむり、血に染て終に川中に踊入り、東岸本所邊より忍び歸られしもありとぞ、又異國の男女は始め車に乘けるが、此騷動により生る心地なく、車を弃徒跣にて走り辛ふじて逃のび、夜に入りて旅館へ歸りけるよし也○同二十日、京師に於て幕府御他界あり○八月の頃より、淺草御藏前に場を張りて、天神小僧となづけたる男兒出て、文字の曲書をなす、生年七歳桶川宿の生れといへり、容貌も醜くからず、姓名は聞ざりし、逆筆左文字或は手巾をもて頭へ筆を結つけ、又は臂へはさみて書す、見物の好により眞草逆筆等自在に書す、奇といふべし○御軍役御改正、炮術次第に御催促あり、小筒の隊を立られ筒袖黑陣羽織股引を用らる、又八月より町人受負にて歩兵數多召抱へらる○今年獨樂廻し輕趫技幻等の藝術をもて亞墨利加人に傭れ、彼國へ趣きしもの姓名左の如し、是は當春横濱に於て銘々其技藝を施しけるが、亞米利加のベンクッといふ者の懇望により、當九月より來る辰年十月迄、二年の間を約し傭れけるよし也、

△獨樂廻　淺草田原町三丁目松井源水、妻はな、娘みつ、同さき、悴國太郎七歳△幻戯　北本所荒井町柳川蝶十郎、神田相生町隅田川浪五郎、妻小まん△輕趫繩亘　右浪五郎悴登和吉、三味線　右浪五郎妹とら△手妻　同居浪七△こま廻し　淺草龍寶寺門前松井菊二郎娘つね八歳こまの中へ入同居人松五郎△獅子の曲　世に云角兵衛獅子の曲なり、同居人梅吉、同松十△曲持足藝　吉原京町二丁目濱碇事定吉、右上乘養子長吉、同居梅吉、後見、小石川白壁町市太郎、上乘龍之助、南傳馬町一丁目吉兵衛忰兼吉、笛吹小石川上富坂町林藏、太鼓打妻戀町繁松等なり、

藝の目錄左の如し、

○幻戯の分、

△三番叟揉消木偶、後に替り二間四面の幕に成△乙姫偶人、後に替り龍燈に成火を點す△唐兒人形、後替り頭一尺五寸のだるまに成△扁頭木偶、俗に云福助、後に替り高五尺の三平二滿女に成△舞樂の木偶、後に替り花車高二尺△ゼンマイ機械、傀儡師△ゼンマイからくり鷄卵比翼かへし△大和鴛籠小鳥の娶入△千壽萬壽の玉水からくり△淀川簾水からくり△二重花臺水からくり△天地八聲蒸籠△四ツ綱石橋獅子の狂ひ△平隍子崩れ亘り△平綱亘り△蝶の曲、蝶の造物を色々にはたらかせ、末に眞の蝶をはなつ、

○足藝曲持の分、

△三挺階子曲乘の藝△大幟曲持上乘の藝△崩れ階子上乘藝△一本竹上乘藝△大半切桶曲持△石臺曲乘藝△大水瓶曲持藝△大階子同△崩れ居風呂桶同△柳樽同、右何れも上に小兒を乘する△數の小桶上乘藝但しはれ蟲と云、

○獨樂の分、

△大ごま一ッ一尺八寸、目方一貫五百目△麻の紐一本、目方一貫七百目△一尺ごま一ッ目方廿八匁△一尺四方箱四、黑ぬり蒔繪△萬度、四方開き中より牡丹の造物出る、竪二尺横一尺五寸△羽子板曲ごま△石橋渡り、階子丈四尺二尺四方△大ごま二ッに割れ内より娘つれ出て踊る、但三尺五寸△天神宮、但しあてもの△浦島木偶但珊瑚樹亘り竪五尺横四尺△諫皷鷄、四方開き長七尺横五寸四方△籠拔ごま、横四間半竪一尺△時計、一丈七尺横八尺五寸△富突木偶、ぜんまい仕掛△ごだんごま五、六寸五分△挑灯ごま一、一尺小田原ちやうちんに成火を點ず△數のこま、三十五△刀、こまの双わたり、

○九月十二日、明六時前、淺草森田町火事、片町へ燒込一町半程なり、放火する所といふ○此頃懷中の烟管に短きを用ふるが故、之を售ふ家多し、長さ四寸五寸位なり○十月朔日曉淺草寺隨神門の前覺善院より失火して、馬道山の宿花川戸町迄燒る、猿若町は殘る、凡一町半計なり○同廿二日夜、湯島天滿宮石坂下町屋火事、半町餘燒○同廿八日、夜四

時過、小川町裏神保小路半町餘燒亡○同廿九日、曉丑刻、永田馬場山王門前より出火、武家地一町程類燒す同夜數ヶ所に災あり○同十二日の後十一月に至り更に雨降らず、火災度々あり、十二月二日五十日目にて雨降る、同月末より猿若町三丁目守田勘彌が芝居にて、大仕かけ土間の眞中より橋をせり上る○十一月三日、未下刻、鮫が橋南町より出火して、紀州侯邸へ燒込たり○同月武家方武藝調練衣類の御制度を定らる、筒袖衣類陣羽織陣股引（ダンブクロ）等用らる、（其餘の事はこれを略す）○同月常磐橋御門内に、遊擊隊當番所を建らる○同四日夜四時過、深川熊井町の油屋あさ宅より失火して、相川町、中島町、蛤町の邊、黑江町、仲町、永代寺八幡宮の側迄燒る、吉原町娼家の僑居も殘れるは無し、曉七時頃にいたり鎭る、長四町五十間、幅四町程なり○三芝居顏見せ狂言興行なし、茶屋飜り物もなし○米價百文に付一合一勺位にかゆるなり○同六日、巳刻、芝口三丁目西側より出火、源助町へ燒込東側は殘る、長一町餘燒亡○同九日、夜子半刻、元乘物町の裏家に獨住して、日傭に出る新兵衞といふ獨身男、沈醉して火を過ちてより、同町は更なり北風にて燒ひろがり、新革屋町、新銀町、蠟燭町、關口町、横大工町、永富町、皆川町一圓、竪大工町、土白壁町、三河町一丁目二丁目三丁目、（三丁目は南の方計）、旗本衆四軒、養安院屋鋪、鎌倉町、龍閑町、四軒屋敷、松下町、塗師町、新石町一丁目、鍛冶町一丁目二丁目西側、本銀町一丁目二丁目、本石町一丁目、本町一丁目、（右二丁は燒込）本革屋町、本南替町、北鞘町、品川町、室町西側、一石橋燒落、西河岸町通一丁目より四丁目迄、西河岸町、青物町、萬町、呉服町、元大工町、元四日市町、檜物町、上槇町、數寄屋町、北槇町、左内町、平松町、音羽町、小松町、川瀨石町、南油町、新右衞門町、博正町、箔屋町、岩倉町、下槇町、福島町、本材木町一丁目より八丁目迄、中橋廣小路町、南傳馬町一丁目より三丁目迄、大鋸町、南槇町、富槇町、柾木町、南塗師町、南鞘町、桶町、二南鍛冶町、二南大工町、

五郎兵衞町、北紺屋町、疊町、白魚屋敷、京橋半分、竹河岸通中の橋燒落、松川町、二鈴木町、因幡町、常磐町、具足町、柳町、炭町、本八丁堀、五八町堀、南北町奉行衆、與力同心組屋敷大半燒、岡崎町、松屋町、永島町、長澤町、幸町、日比谷町、八丁堀金六町、同水谷町、二南八丁堀一丁目より五丁目迄代地、并龜島町、本港町、船松町、二竹島町、其餘町數合百五十三町なり、諸侯には本多侯、細川侯、（中屋敷）、井伊侯、（同）松平越州侯、朽木侯、松平阿州侯、（中屋敷）、松平遠州侯、土井侯、（中）奥平侯、（中）松平相州侯、中川侯、（中）細川若州侯、その外此邊旗本衆三軒、佃島、石川島、鐵砲洲砲臺、寺院は國圓寺、社は伊雜太神宮、白旗稻荷社、金蔓稻荷社、（本店）、原鐵砲洲稻荷社其外小祠多し、長延廿一町餘、幅平均して七町餘の類燒也、十日晝時過ぎ京橋手前にて鎭れり、燒死怪我人多く、倉庫の燒落たるは數を知らず、災後諸材木工匠傭夫の價次第に登貴せり○同十一日、明六時過ぎ、吉原江戸町一丁目娼家大枡屋いちが家より火出て、西北風にて同二丁目、揚屋町、京町一丁目二丁目、角町へ燒込、構への外非人頭園の内へ飛火して、長三町餘幅平均一丁四十間程燒失し、晝四時頃鎭る、娼家の僑居は深川永代寺門前、同仲町、山本町、黑江町等にて、二年の間免されたり○今年も大の月三月續の處、十一月は中の月にて、十七日十八日芝金地院觀世音開帳あり○同晦日、曉八時、淺草元鳥越火事、一町半幅五十間程燒、（甚内橋の南やけて鳥越の社はつゝがなし）○近頃强盜甚多く、次第に跋扈して富家へ押入、金銀資財を掠奪す、これによつてお旗本衆其餘諸隊に命じて、街衢巡邏せしめらる○冬に至り官許を得ず、私に企だて刺牌（とみつぎ）の戯を催すもの所々にあり、（世にいふ富突興行なり）、牛島蓮華寺、萱場町藥師堂、四日市翁稻荷、淺草幡隨院、根岸時雨が岡（御行の松）不動堂の邊等に於て、堂宇修理等を名として此事を催せり、時雨が丘にては興行の時、寺社御奉行より捕捉の小吏急卒に玆に向ひ群集の男女を押分て場主を捕へられたり、これに驚き僥倖覬覦の小人各逃去らん

として、過て畝中に宛轉落て泥土に塗れ、或は巷に立し商人が鑵子の類を覆し、熱湯激りて灼傷に惱みし族もありて、其混雜いふばかりなしとぞ、各興行日の前後はあれど、其他の場所もこの趣なるべし、頓てその催主一同禁固せられ嚴科に處せられけるとぞ○淺草寺町菊屋橋を石橋に造り改む○十二月十七日、上野御宮囘廊而已燒失す○同十七日 十八日、淺草寺年の市詣人尠し○同廿六日、不忍池辨財天祠修復成りて、今日遷宮あり○同廿七日、曉北大風寅刻、北品川歩行新宿錢湯の家より出火して、南品川まで旅舍の大廈大抵燒亡す、長九町半程也○同廿九日、夜亥刻過、本郷春木町二丁目より出火、北風烈しく同町三丁目武家地組屋敷、近藤登之助殿屋敷、加州侯南長屋の向迄燒け、本郷三丁目より一丁目迄、湯島四丁目圓滿寺、新町屋坂の上り口迄、藤堂秉之丞殿屋敷、西は本郷元町竹町の邊、御小人御中間組屋敷、三念寺邊、立花雲州侯屋敷等燒る、此火川を越て駿河臺なる太田姫稲荷社のみ燒たり、靈雲寺、眞光寺、麟祥院、聖堂等は恙なかりし、聖堂脇の學問所は北の方聊燒込たり、長凡五町餘、幅平均して二町四十間程なり○同時少し後れて、小石川白山前妙清寺門前の風呂屋より失火して、淨心寺同門前町屋、常檢寺、大圓寺門前、指が谷町、圓乘寺、駒込片町、御先隊組屋敷より失火して、阿部侯下屋敷燒込、其餘武家地多く燒亡せり、九軒屋敷の邊にて鎭る、長さ十一町幅平均一町半程なり○冬雪更に降らず○牛を屠りて羮とし商ふ家所々に出來たり又西洋料理と號する貨食舗所々に出來て、家作西洋の風を模擬せるものあり○西洋絹布毛氈の類、諸器物等商ふ店次第に增たり○此頃濁酒世に行れ、中汲と稱へこれを釀して商ふ店次第に殖たり、價の賤しきをもて下賤の飲ものとはなれるにや、研北雜志に席琰謂レ人曰、貧者以レ酒爲レ衣といへるもげにさる事と覺ゆ、濁酒一に濁醪黃醅罩醪などいへり、永正十三年御選謎合せに、「十里の道をさげ歸るにごり酒」、また澤庵和尙へ濁り酒を贈るとて、十里酒と銘を書たりしかば、「十里とは二五りといへるこゝろかやすみがたき世に身をしぼり酒澤庵○菖蒲屋和佐之介となのれる女太夫、諸流の淨瑠璃語り分と號し、はやり小唄をさへ取交へて諸所の寄せ場へ出て行れたり、內藤新宿茶店の娘なるよし、

○慶應三年　丁卯

正月元日晴天、舊冬月末の火災により、年禮に出る輩太神樂、烏追等街に少し、春になりても火災度々あり○同二日、夜酉刻、細雨中、辰の口松平內藏頭殿屋敷火事（町火消ヲ組の鳶の者、武家方人數と喧嘩に及べり）○同四日、駿河臺鈴木町火事○同五日より、諒闇によつて鳴物御停止あり、依て早春世上靜にして寂寥たり○正月雨少く日々烈風扇く○去年冬より諸物價彌ましに貴し○同七日、夜亥下刻、橋場總泉寺より出火、本堂僧坊燒、西北風烈くして大川を越、牛島小梅村へ飛で民家數軒燒たり、○同八日、明方濱町土屋侯屋敷より出火○同十三日、夕八時頃より初雪降積る、十七日又雪○二月日々烈風○十日初午稲荷祭　世上一統執行なし、三月末又は四月に執行ふ○正月半より閭巷の談に、王子村邊里の寡婦痘疹の爲に幼兒を喪ひ、愛着の餘り狂を發し、其兒の肉を食てより鬼女となり、其邊境は更なり江戸市中をも徘徊し、夜毎に家々の小兒を啖ふといふ事一般に云ふらしけるが、固より無根の妄譚なれば、やがて其噂やみたり○同十五日、曉丑刻、麻布雜式坂下町綿打職金五郎の家より失火して、宮下町、新網町代地十番やけ込、永坂町光照寺門前飯倉新町其外武家地等燒る、長二町四十間、幅平均五十三間程なり、明方に至り鎭る○三月朔日より、諸役人繼上下を用ひず、袴外套着用すべき旨を命ぜらる○同四日雪○同九日雷雨○同十日、夕七時、小網町二丁目肴屋より出火、三丁目類燒○同十四日曉、千住中村町より出火小柄原町旅舍過半燒て、箕の輪町北方へ燒込○同二十三日、曉丑刻、淺草茅町二丁目より失火して、同三

丁目、福井町一丁目二丁目、上平右衞門町、（燒込）猿屋町、天王町、同代地、瓦町御改正會所、芝御掃除屋敷代地、御藏付床見せ、書替所御用屋敷、松平伊賀守殿中屋敷本多侯中やしき、池田侯、（やけ込）、同大圓寺牛頭天王社、十王堂、花德院、閻魔堂、天王橋等燒る、（ふんま堂は普請なりて間もなく燒たり）、長四町餘、幅平均して五十間程なり、夜明て鎭る、御藏前第六天社は恙なし○同二十五日、亥刻、本所相生町一丁目より出火、松坂町燒、大德院にて止る○春より回向院境内、西久保普門院境内にて、百日芝居興行○四月二十七日、淺草寺觀音堂修復に付、本尊を念佛堂へ移しまいらす、（同奥山秋山平十郎作の活人形、竹田縫之助が細工見せもの出たれど、此度は見物少し）○去年より南京米多く入津○春より强盜多し○同月より、芝金杉圓珠寺境内、百日芝居興行○四月冷氣の日多し○五月八日曉、惣十郎町より出火、内山町、瀧山町、竹川町、守山町等類燒、長一町半、幅五十間程也○幸橋御門外三上快庵拜領地續き、典藥頭中山攝津守殿拜領町屋敷に成、中山屋敷といふ○同十二日、淺草橋場町元家持與惣二、家衰へ土庫を毀しけるに、土中より元字金九百兩を掘出せり、四代以前のあるじが埋置し所なる由○同八日より六十日の間、牛込原町圓福寺に於て、中山法華經寺鬼子母神開帳○同十九日より、外神田操芝居興行、間もなく止む○文字鏁の童謠行はる○下賤の婦女簪二本をつかねて頭へさすものあり、めをとざしといふ○此頃西洋の傘を用ふる人多し、和俗蝙蝠傘といふ、但し晴雨ともに用ふるなり、始は武家にて多く用ひしが、翌年よりは一般に用る事になる○六月初旬冷氣催し諸人袷衣を着す、風邪熱病行はる○六月旱天（井水涸る）○同月神田三天王御旅出なし○赤坂氷川明神祭禮、神輿出ず○同月一石橋災後修復成る○中旬より八月へかけ雨少し○同月活偶人細工に名ありし秋山平十郎卒○兩國橋畔納涼殊に賑し（花火は當年これなし）○同月より上野山内締切、雜人の入を止らる○七月寺社御奉行所一ヶ所に成る、（土屋侯のみのこる）○同月四宿の關門を廢せらる○二十五日曉、芝切

通間部侯屋敷出火、町屋少々類燒○八月廿三日より彼岸に入、七日の間日々雨降り、六あみだ參札所觀音參等甚少し○九月一ッ橋御門外明地に、異國人傳習所を建られ營作成る○同月暖氣にして單衣着する人多し○同月末歩兵多人數御暇給はりしより、諸所に於て亂妨狼藉の所行あり○鐵砲洲海岸築地船松町二丁目十軒町續御軍艦操練所の跡へ、異國人の旅館を建られ、且貿易の所とせらる、（變名ホテルといふ）翌年夏の頃に至り大抵成就し、大廈甍を列ね丹漆黝堊を以て裝飾す、其中央なる樓上の突兀たる海岸に著しく、玆に登れば西には江城の巍々たる、遠は富嶽函嶺を瞻仰し、南には芝浦より品川迄長汀曲浦の風趣を望み、東南は海面にして遙に房總の群山波上に汎び、衆船の來往は眼下に遮り、北には筑波二荒の高岳空に聳ゆ、近くは穀下侯伯の臺榭市店の鱗差も一瞬のうちに有て頗佳景の所也、後の方苑林あり、芝をふせ花木を栽て所所に小亭を設けたり、此所も海上の眺望尤よろし○同月より葡萄牙、孛漏生（フルエス）、瑞西、白耳義、伊太里、丁抹等の國々に條約を定らる○同月の頃より、淺草田圃立花侯下屋敷鎭守、太郎稻荷社へ參詣群集する事始れり、此社は享和の頃より參詣群集しけるが、文化三年の春より廢れ、今年又俄に繁昌し、此邊新堀と唱へし溝の兩側へ、茶店食舗等建つらね、櫻の稚木を栽並ぶる事一町程なり、石の鳥居石燈籠挑灯幟幕等夥しく奉納し、日々參詣して神符を乞受け、靈驗を仰ぐ人多かりしが、翌年四月の頃よりして次第に絶えたり、（當社は文化の始はやり出けるる頃、坊間に鬻ぐ錦繪草紙落話狂文の類梓に鑱しもの集て二卷とし、松蘿館椿江のぬしが藏せらるゝを見たり是を見て其繁昌思ひやらる、然るに文化三年芝車町より出たる大火の後すたれたり）○同十五日、快晴暖氣、神田明神祭禮神輿行列のみにして、晝四時頃神田橋を入常磐橋を出て、夫よりは例の道筋を渡しまいらす、夕八時還輿あり、產子町々車樂ねり物等更にこれなし○同十七日、夜九時頃、葵坂下鍋島侯中やしき燒亡○偷盜の賊超過に付、十一月より市中所々に假の屯所、（十餘ヶ所）を設けて、別隊組撒兵組その他の兵隊夜

夜こゝに屯して、坊間を巡視して賊徒の防とせらる、又諸侯よりも巡邏の人數を出さる、何れも新たに建設るにあらず、家の美惡によらず人數多く屯集するの大廬をえらびて、その所に招ずるなり○十月二日、去る安政二年震災に死亡の儔十三年の忌辰に付、諸宗寺院に於て法事修行あり、緇素參詣して香花をさゝぐ○同廿六日、金札御發行に付、來々巳年三月迄金銀同樣に通用いたし、御年貢之外公納に用ひ可ゝ申旨御徇あり○十一月二日、淺草寺觀音堂修復成て、今夜遷佛供養あり、信心の男女夜中まで雲集す○同月十八日、大の月三月續し中の月故、昨日今日芝金地院觀世音開扉杓子を與ふ○十二月廿三日、明六時二の丸御炎上あり○同十三日、歩兵の輩吉原町に於て喧嘩に及び、同十四日多勢こゝに集り來り、銃砲を放ち家屋を鉤鉦する事甚し、廓中の男女周章恐懼して他所へ逋れたりしが、官吏來り漸くに鎮られたり○同廿五日、芝薩州侯屋敷に於て事あり、其顚末は知らざれど曉より討手を向られ、藩中より火起りて烏烟天を焦し、砲聲屢響渡りしかば、都下の良賤仔細を辨ぜず、急遽慴怕して貼屑の思ひをなせり、夫より近傍の市中此兵燹に罹りしは、芝西應寺町、同金杉四丁目、同材木町、本芝一丁目二丁目、芝田町五丁目より八丁目迄燒込、寺は西應寺、法泉寺、永門寺、源照寺、薩州侯高繩屋敷、島津淡州侯、南品川宿一丁目より四丁目迄、長德寺門前、妙國寺前等なり○深夜小出侯屋敷火事○冬の頃夜中竊に屋上又は垣塀の内家前等へ、神佛の守を散らし置ものあり、翌日其家のあるじ奴婢等これを拾ひ得て、不思議の事とて尊信するものもあり、人心を惑はす所爲なれば、官府より御沙汰あり、やがて此事止たり○寫眞鏡圖說初編一冊梓行、故人楊江柳河暾春三子撰、二編は明治元年に梓行せり、

増訂武江年表巻之十一 畢

増訂武江年表索引

索引凡例

一、本索引は增訂武江年表所載の各事項を、其の最も狹義なる件名の下に編入し、更に之を五十音順(イキエヱオヲを區別せず)に排列したるものなり。

一、件名は最も普通なる語をとれり。されば固有名詞にありても、南傳馬町日本橋等の如きは、其の名稱の下に編入すといへども、編蘭笠及び客星等の如きは、笠及び星の條下に收めたり。

一、通言俗語は凡て其の首字よりとり、詩歌は各其の題下に編入せり。

一、人名は學者――氏號、士人――氏名、俳人――號、戲作者――戲號、藝人――藝名、僧侶は諡號法名を問はず最も普通なるものをとれり。

一、若し檢出せし件名の條下に所要のものを得ざる時は、更に同意義又は廣義の件名を搜索せらるべし。

增訂武江年表索引

ア

青木昆湯
　官儒――歿　一二九
青柳町
　――町屋成　八七
青物市場
　――移轉　五九
青山善光寺
　――移徙　七五
　――本堂崩壞　三〇六
　「カイ」開帳をも見よ
赤井得水
　書家――歿　一〇三
赤坂築地
　――成　四三
赤坂氷川明神社
　――移徙遷宮　九一
明ずい門
　「バヽ」馬場先門をも見よ
縣宗知
　茶人――歿　八五
赤穗義士
　――卅三回忌石碑建立　九四
　「カタ」敵討をも見よ
赤松沙鷗
　儒家――歿　一二七
赤松太庚
　儒家――歿　一二七
秋葉權現社
　――移徙　二五四
　「カイ」開帳をも見よ
秋山平十郎
　木偶細工師――歿　三三二
朱樂菅江
　狂歌師――歿　一七一
淺井了意
　――に二人ある事　六四
安積澹泊
　儒家――歿　九八
朝川善庵
　儒家――歿　二四九
朝顏
　――の異品流行　一九九
朝顏會
　――流行　三〇六
淺草御藏
　――創立　一六
淺草御藏前
　――床見世再興　三〇五
淺草御門見付
　――修復　三〇四
淺草十王堂
　――燒亡　五〇
淺草文庫

――設立　三九
浅草餅
傳法院僧正より――の名を給ふ　八四
浅野吉良及傷一件　六九
旭天滿宮
――の由來　一七〇
朝日山王社
駒込――建立　一〇二
麻布御殿
――造營　六九
麻布新堀
――成　六八
浅間山
天明三――燒
浅利義信
撃劍家――歿　二六二
蘆の屋檢校
――歿　二八〇
飛鳥井雅章
――下向　四八、四九
飛鳥圭洲
儒家――歿　一一四
飛鳥山
「サタ」櫻「ヒ」碑をも見よ
飛鳥山下掘割
――成　三二一
安宅丸
「フネ」船を見よ
愛宕權現社（芝）
――勸請　六
――本社拜殿石階建立　八
――燒亡　一八
「カイ」開帳をも見よ
安達文仲
詩人――歿　一六五
あづまめぐり
――刊行　二五
あづま物語
――刊行　二五
跡部光海
和學家――歿　九〇
獵子鳥
――群飛　二八八
穴藏
江戸――の始　四〇
穴八幡宮
高田――樓門再建成　二五〇
「カイ」開帳をも見よ
會田算左衛門
算術家――歿　二〇二
あひもの町　四二
扇賣
元日――廢絶　一三三
扇屋
王子――開業　一七四
油
江戸に燈し――盡く　二五
亞馬港臥亞國
――始て書を呈す　九
雨乞
其角――の吟　六五
雨
天明三の霖――　一五三
寛政三の大――　一六三
文化四の大――　一八八
文化五の霖――　一九〇
文政八の春連――　二一六
安政六の春霖――　三〇一
元治元の霖――　三一八
雨森牛南
醫家――歿　二〇〇
亞米利加國
弘化三――船來る　二四三
嘉永六――使節船渡來　二六三
安政元――船再來　二六七
安政五――使節去來　二八九、二九〇
操芝居
浅草第六天社にて――興行　二八一
飯倉瑠璃光寺境内にて――興行　二九八
木挽町にて土佐操――興行　九一
戀娘昔八丈大當り　一六九
薩摩小平太の――　二七
薩摩太夫座嵐美に付座本禁獄　二二
薩摩座再興　二一六
薩摩座結城座――興行　三二三
猿若町――初興行　二三五
猿若町結城座廢絶　二五九
品川御殿山口に――を建　八四
外神田にて――興行　二六七、二九、三三
竹本泄賀太夫――興行　二〇四
天保十三――浅草へ移る　二三四
土佐操永閑等の――上覽　五五
寶暦年間――流行　二一一
深川永代寺境内にて――興行　二六二
湯島天滿宮社地にて――興行　三〇〇
新井宜卿
儒家――歿　三〇〇
新井白蛾
易學家――歿　一〇〇
新井白石
儒家――歿　一六五
新井明卿
儒家――歿　八八
荒木吳江
書家――歿　九七
荒木適齋
書家――歿　一六六
霰
慶長十七年火――降　一九四
慶安二大――降　九
安針
「ウイ」ウイリアム、アダムスを見よ　三三
安鎮大權現
安藤東野
――歿　一五七
安南國
――船始て來る　一一一
あんばいよし
――といふ方言　八四

イ井

浅草東仲町の掘拔――　五
掘貫――の始　二四七
「ジロ」白木屋「ヒヤ」冷水賣「ホリ」堀筋井をも見よ　一六〇
遊行上人
――化益　九七
二四七、三一〇

遊撃隊番所
　常磐橋門外に——建　三二八
遊女屋
　柳原の——元誓願寺前へ移る　七
　風呂屋女流行　一二
　風呂屋抱女の人數限定　二三
　丹前風呂屋女　二六
　風呂屋女禁止　三三
　吉原開基以前に於ける江戸の——　一一
　「イン」嬉賣女「オカ」岡場所「ヨシ」吉原なも見よ
祐天上人
　——生實大巖寺の住職となる　六八
　——増上寺住職となる　八〇
　——寂　八三
　二世——寂　二七
醫學館
　——建立　一二六
　——再建　一三六
　——講堂落成　一三八
　——日講始　一六三
英吉利國人
　——陳子坂にて遭難　三二五
英吉利國船
　文政元——浦賀へ漂着　二〇五
　安政五——品川着使節出府　二九〇
　安政六——品川着使節出府　二九八
英吉利國旅館
　高輪——へ浪士襲撃す　三〇六
生方鼎齋
　書家——歿　二八一
幾世餅
　——の起原
　「メイ」名物なも見よ　七四
怡溪和尚
　——寂　八一
池上本門寺
　——燒失　七八
　——本堂再建入佛供養　八七
　「カイ」開帳なも見よ
活鯛屋鋪
　——町屋成　二三
池田英泉
　浮世繪師——歿　二四七
池永道雲
　書家——歿　九八
異國御條約
　——刊行　二九九
異國人傳習所
　一ッ橋門外に——建　三三三
惟舟
　俳人——歿　五五
石
　江の島の龜——　一八五
　川崎明長寺靈龜——の事　九三
　鈴が森の鈴——　四二
　鈴が森の烏——　九九
石井常右衛門
　——所刑　五八
石川梧堂
　書家——歿　二六一
石川豐信
　浮世繪師——歿　一五五
石川雅望

　和學家——歿　二二一
石島正猗
　儒家——歿　一一三
石島橋
　——再架　一四五
石塚豐芥子
　——歿　三〇七
石燈籠
　上野に大——建立　二〇
石投婆像
　眞土山聖太夙詣の——　一四五
醫書講談
　古林見宜の——　八五
伊西把彌亞國
　——使來朝　一七
意成院
　猿江——移徙　一〇五
伊勢參宮
　寛永十四——流行　二三
　寛文元——流行　四六
　寶永二——流行　七四
　享保三——流行　八三
　明和八——流行　一三一
　天保元——流行　二二一
伊勢貞丈
　故實家——歿　一五四
板垣宗憺
　醫家——歿　六七
板倉復軒
　儒家——歿　八九
板坂卜齋
　醫家——歿　三九
市川寛齋
　儒家——歿　二一〇
市川團十郎
　八代目——孝行褒賞　二四〇
市川白猿
　——追放の處御免　二五三
市川米庵
　書家——歿　二九一
市川鳴鶴
　儒家——歿　一六八
市谷稻荷社
　——建立　四三
巫子
　市中の——市外へ移さる　二三六
市野光業
　儒家——歿　一一〇
市場通笑
　戲作者——歿　一九五
市村竹之丞
　四代目——剃髮修法　五四
　四代目——歿　八三
一里塚
　東海道其他に——を築く　六
一石橋
　——修復成　三三二
　——杙芽を生ず　一八九
逸志
　俳人——歿　一〇五
一錢茶屋
　——禁止　四七
五松鶴林

——歿 一九六
泉豐洲 儒家——歿 一九一
和泉橋 掛替成 二九八
伊藤益道 書家——歿 一四一
伊藤好義齋 儒家——歿 九〇
伊藤主膳 ——所刑 二二二
伊藤松軒 歌人—— 一六七
伊藤長秋 書家——歿 一五八
伊東渤海 儒家——歿 一四一
伊東藍田 儒家——歿 一九一
井戸甘容 儒家——歿 一〇九
稲垣長章 儒家——歿 一四二
稲川直光 金彫工——歿 二八
稲毛屋山 篆刻家——歿 二一三
稲葉迂齋 儒家——歿 一一七
稲葉華溪 書家——歿 二〇九
稲葉小僧 强盜——所刑 一七二
犬 角ある——生る 一五六
顔人に似たる——生る 一六三
人に似たる——生る 一六六
元文元——病流行 二四一
明和七——病流行 九七
嘉永五——病流行 一三〇
文久元——病流行 二六〇
犬追物 三〇七
王子村にて——興行 三二
犬小屋 中野に——建つ 六六
稲扱器械 ——の齒を鐵に改む 一二二
井上金峨 儒家——歿 一五四
井上四明 儒家——歿 二〇九
井上蘭臺 儒家——歿 一一八
井上蘭澤 儒家——歿 一四九
井の頭辨才天社 ——建立 二三
「カイ」開帳なも見よ
井川雪下園 書家——歿 一八四
井子信齋 儒家——歿 一五四
猪
——市中を騷がす 二六一
伊庭可笑 戲作者——歿 一五〇
岩間小熊 ——師の敵根岸蒐角と仕合 二
岩本昆寛 金彫工——歿 一七五
飯田東溪 儒家——歿 九八
飯田百川 書家——歿 一二七
飯田町堀 ——船入となる 四七
衣服 唐織縫箔模樣の——禁止 五九
「ソメ」染色模樣なも見よ
今井弘齋 儒師——歿 六三
今大路道三 官醫——歿 一九
鑄物師 文化年間高名の—— 二〇四
入江太華 儒家——歿 九八
入江北海 儒家——歿 一六一
新伊西把彌亞國 ——始て書を呈す 九
因果地藏尊 淺草寺中——流行 一四八
隱元禪師 ——下向 四三
——に國師號追贈 六六
印刷 ——術の變遷 一二
彩色摺の始 一三三
慈海本といふ事 六六
四時游觀錄といふ兩面摺 一四八
摺物に刷入刷工巧を盡す 一七三
摺込彩色の始 一三八
駿河版の起由 五
天海版の一切經 二三
フキボカシ彩色摺の始 一三八
嬉賣女 本所の夜鷹召捕 二六二
三角の——まつ和歌を詠ず 九八
兩國橋に——再び現る 一二一
「カタ」唄比丘尼「ガド」通子「ケコ」けころ
「ヂゴ」地獄「ヤマ」山猫「ヨタ」綿摘なも見よ

ウ

ウキリアム、アダムス 英人——歿 二一
植木屋 ——紫泉亭開園 四三 六六
魚 延享元海——多く死す 一二
鵜飼稱齋 儒師——歿 一三三 六六
鵜飼錬齋 儒家——歿 一四八 一七三 一三八 五
浮世繪 繪草紙役者遊女繪停止 二三
國芳廣重の——流行 二三五 二三七

墓碑略畫式
菱川宮川の——　一八〇
　——　七二
浮世繪師
元祿年間高名の——　七一
享保年間流行の——　九六
寶暦年間流行の——　一二〇
明和年間高名の——　一三三
安永年間高名の——　一四八
享和年間の——　一七九
寛政年間高名の——　一七三
文化年間高名の——　二〇四
浮世繪類考
——成　一七二
鶯
——餌養流行　二三八
宇佐美濤水
儒家——歿　一四一
牛
寛永十七諸國——多く死　二四
牛町
芝——の名稱　二二
牛御前稲荷社
——建立
「カイ」開帳をも見よ　二五四
牛御前社
——頭修復成　一一三
後向石地藏尊
箕輪藥王寺——建立　三二
鶯吏
麹町天滿宮——の神事始　二〇九
歌川國芳
——の醉畫　二六四
浮世繪師——歿　三〇五
宇田川玄隨
醫家——歿　一七〇
歌川豐國
浮世繪師——歿　二一六
二世——歿　三一九
歌川廣重
浮世繪師——歿　二九三
歌川芳房
浮世繪師——歿　三〇二
唄比丘尼
天和年間の——　六〇
——を繼子髮といふ　六〇
——中宿禁止　一〇一
——流行　一六〇
打毀
天明八米酒屋——一件　一五八
慶應二米酒屋——一件　三二三
内田九一
寫眞師——歿　二六八
内田玄對
畫家——歿　二一三
内田陶工
畫家——歿　一八九
鶉
養——流行　二七
烏亭焉馬
戲作家——歿　二一四
腕剛
——といふ非人　五一
ウニコール
——渡來　二二九

采女原馬場
木挽町——成　八九
上田素鏡
書家——歿　一三一
植榴季梁
書家——歿　一五八
上野
——の名稱　一七
上野經堂
——建立　一八
上野清水觀音堂
——建立　二〇
上野山内
締切　三三二
——出茶屋禁止　三二二
上野慈眼大師堂
——建立　三〇
上野常行堂
——建立　一八
上野大佛
「ダイ」大佛を見よ
上野大佛堂
——燒失　二三三
上野多寶塔
——建立　一八
上野中堂
——に藥師及十二神像安置　六六
——に仁王門文殊樓建立　六七
——修復　三〇九
上野東照宮
——建立　一八
——再建　三四
——回廊燒失　三三〇
上野仁王門
——建立　一八、八四
——再建成　二四
——燒亡　一三五
上野廣小路
——成　六七
上野法華堂
——建立　一八
上野本坊
——失火　一三六、一九八
上野山下
——床見世再興　二八八
上野瑠璃殿
——建立勅額下賜　六七
——諸堂修復　一四一
鶉孟一
儒家——歿　一三八
梅
「ウメ」梅屋數「ダウ」臥龍梅「バイ」梅圖を見よ　一八
梅の屋秣翁
狂歌師——歿　三四
梅屋敷
目黑石古坂の——　三三〇
根岸新田の——　一八、八四
「バイ」梅圖「シン」新梅屋數をも見よ　二四
梅若丸
總泉寺にて——七百卅三年忌修行　一三五
木母寺にて——七百卅三年忌修行　六七
木母寺——廿七萬五千日供養　七九
梅人

俳人――歿　一七五
雲光院
――建立　九
――移徙　五九
雲室
――寂　二一八

エ

永代島築地
――成　六八
永代島八幡宮
――勧請　一七
――祭禮の始　二五
延寶年間――の光景　五五
「サイ」祭禮なも見よ
永代橋
――始て架る　六六
――崩壞溺死人多し　一八八
――修復　一九〇
――修復成就　二九〇
――洪水にて破壞　一四七
江市屋格子
――及江市屋宗助の事　九四
要阿和尚
――寂　一〇〇
妖言
井戸水霉ありとの――行る　一五八
馬流行病な讖言せしといふ――行る　六五
香取神社へ大杉明神飛移るとの――行る　八九
鬼女小兒な啖ふとの――行る　三三一
享保十九霉降るといふ――行る　九四
牛旁に霉ありとの――行る　二四一
蕎麥に霉ありとの――行る　一九六
賣醴麁に觸れば疫な病むといふ――行る　二〇五
牡丹餅な食すれば漂疫な攘ふとの――行る　二六九
綿畑の蕎麥霉ありとの――行る　一三七
回向院
本所――建立　四五
「カイ」開帳なも見よ
疫病
享保十七――流行　九三
享保十八――流行　九三
安永元諸國――流行　一三五
安永二――流行　一三六
天明四――流行　一五四
文化十三――流行　二〇〇
天保八――流行　二三〇
嘉永四――流行　二五五
慧空和尚
――百五十回忌修行　二九五
餌差町
小石川――な富坂町と改む　六五
會式
雜司ヶ谷法明寺――　二六一
蝦夷地產物會所
靈岸島に――建　一七二
新大橋詰に――建　二八七
蝦夷亂　五〇、一八八
越中島築立地
深川――成　二五四
江戸川
――浚　七四
江戸買物獨案内
――刊行　二二九
江戸惣鹿子
――刊行　一〇
再訂江戸總鹿子
――刊行　二六
江戸總鹿子名所大全
――刊行　七三
江戸地圖
寛永梓行の――の開版　五六
江戸圖鑑綱目
――刊行　三九
江戸圖副說
――成　二
江戸方角註解
――刊行　一〇
江戸橋
弘化三――燒　二二
江戸眞砂六十帖
――成　九三
江戸名家墓所一覽
――刊行　一三六
江戸名所記
――刊行　四七
江戸名勝志
――刊行　一〇四
江戸名所圖會
――刊行　二二六
江戸名所話
――刊行　六五
江戸めぐり
――成　一〇四
江戸往古圖說
――成　一七二
江戸割繪圖
――刊行　二五〇
繪直し
――といふ戲流行　二四六
榎町毘沙門天
牛込――の緣日　二六三
榎本東順
――歿　六五
海老屋
――刊行　二二九
江戸市街
慶長以前に於ける――　一〇
寛永年中の――　二六
承應年間の――　三九
延寶年間の――　五六
元祿年間の――　七三
――町割改正　五
新開地町割　八
江戸城
家康始て――に入る　一
諸侯歲首の賀として始て登城　二
――普請　七
――改築　七
――普請　一〇
御本丸燒失　二四、二九九
西丸燒亡　二二
――外廓修理　二二
江戸砂子
――刊行　九三
再校增補江戸砂子
――刊行　一三六

王子——開業　一七四
繪本東都本化道場紀——刊行　二三二
繪馬「カク」扁額を見よ
エレキテル和製の——　一三四
圓照寺藥師堂柏木村——再建　二四
焉知禪師——寂　八〇
艶次郎——といふ通言　一一三
鹽田行德に——開發　九七
大師河原に——開發　五〇
深川洲崎に——を開發す　一二五
役の行者——千年忌　六八
——に神變大菩薩の號を賜ふ　一七二
圓滿寺
湯島——開創
延命院七面宮谷中——勸請　谷中——再建　二三二
「カイ」開帳をも見よ
延命院日道——所刑　七七

オヲ

おゐだ——といふ方言　三三
岡井嫌州儒家——歿　四五
岡井黄陵儒師——歿　一七七
岡井碧庵儒家——歿　二〇二
おかげまゐり「イセ」伊勢參宮を見よ
小笠原一甫書家——歿　九八
岡秀竹書家——歿　二二一
岡田寒泉官儒——歿　八二
岡田玉山畫家——が事　一九九
尾形光琳畫家——歿　一〇一
——百年忌執行　二七三
尾形乾山陶工——歿　一二五
岡田盤齋神道家——歿　一〇二
岳東海儒師——歿　一七六
岡場所根津門前遊女屋開業　八二
大根畠の由來　一一五
内藤新宿再興御免　一三五
安宅切見世取拂　二一二
天保十三——取拂　二三四
「イヤ」遊女屋「ヨシ」吉原をも見よ
小川泰山——歿　一五五
小川町鷹匠町を——と改む　二四、六五
小川秀藏算術家——歿　一八六
小河保壽書家——歿　一五三
岡部稠朶算術家——歿　一二九
岳廡谷儒家——歿　一七一
岡本玄冶官醫——歿　三二
岡本玄琳官醫——歿　六一
岡林竹書家——歿　九七
沖一峨畫家——歿　二七三
ヲキサ草——流行　二三七
翁稲荷——流行　二三七
荻野鳩谷——歿　一五〇
荻野八重桐俳優——溺死　二〇二
荻生元甫——歿　一一九
荻生徂徠儒家——歿　二三
荻生叔達儒家——歿　八九
荻生道濟儒家——歿　一三
荻生方庵儒家——歿　一一二
荻生鳳卿醫家——歿　七三
お庫門徒儒家——所刑　一四一
お駒飴賣——歿　一六九
尾崎直政金彫工——歿　七五
小澤蘭江曆學者——歿　一八九
忍城——御番城となる　一二七
忍町——の名稱　一五八
白粉——製造の始　二三
尾關庄太郎——の慕　一一九
お仙笠森稲荷の——　八九
織田有藥齋——歿　一一二
お竹大日如來——の事　七三
「カイ」開帳をも見よ　一四一
小田原城　一三三

——落城北條氏滅亡す　一
三平二滿
年の市に——面賣初む　三〇〇
御靈屋掃除屋敷
——所替　三〇六
落穗集
——成　八九
お茶の水
——掘割　四三
——川幅擴廣ぐ　九〇
音羽町
——町屋取拂　八七
踊
寛永十四年——流行　二三
延寶五江戸町々——禁止　五四
踊子
——停止　一〇〇
追儺
龜戸天滿宮の——執行日變更　二五二
小野蘭山
本草家——歿　一九二
お藤
淺草奥山楊枝店の——
大内熊耳
詩人——歿　一三三
大江維翰
儒家——歿　一四〇
大男
生月鯨太左衞門
生月鯨太左衞門歿　一五八
——大空武左衞門　二三九
大女
——おつた　二五三
「ミセ」見世物なも見よ　二一八
大川橋
——初てかゝる　一八七
——修復　一三八
——渡り初め　二九八
大觀音
駒込光源寺——安置　三〇〇
——修復　六二
大坂城番
——交代期變更　三一三
大坂町
儒家——歿　五〇、五七
大鹽竈渚
伊豆——燒　四二
大鹽亂
大島
一四二、一四六、一七七
大高芝山
儒家——歿　一五五
太田錦城
儒家——歿　二三一
太田大洲
本草家——歿　一五八
太田南畝
——歿　二三九
太田姫稲荷社
——建立　二一七
大塚嘉樹
和學家——歿　一六九
大槻磐水
醫家——歿　一四四
大津尋市
金彫工——歿　一三〇
大鳥逸兵衞
——誅せらる　一一八
大西椿年
畫家——歿　九
大場景明
層學家——歿　二五七
大橋
千住——始て架す　一五五
大橋重政
書家——歿　三
大橋重雅
書家——歿　五一
大橋宗桂
將棋家——歿　一九六
二世——歿　二一
大森英秀
金彫工——歿　四五
大屋裏住
狂歌師——歿　一七〇
大藪錢塘
儒家——歿　一九二
大山石尊社
——參の江戸人少し　一一八
萬年青
——の異品流行　一一七
紫——渡來　二九一
小山田與清
和學家——歿　二二〇
阿蘭陀國人
慶長十九——來朝　二〇一
寛永十六——來る　二五五
安政五——領事官去來　一〇
阿蘭陀國船
——始て來る　二四
安政六——始品川着使節出府　二九〇
折焚柴の記
——成　八
溫石
箱入——の始　二九八
女藝者
——の始　八三
——振袖た著る　一四九

カ

介我
俳人——歿　一一〇
海藏寺
青山——開創　一六〇
海禪寺
淺草——移徙　八三
開帳
江戸附近　五〇
青山高德寺十一面觀音——　四二
青山玉窓寺觀音——　一一八
青山善光寺彌陀如來——　二〇二
一四、一八、二四、一五一、一八三、二三、二五三
青山梅窓院泰平觀音——　二〇二
赤坂威德寺不動尊——　二四九
赤坂圓通寺祖師——　二七二
赤坂鈴降稲荷——　一一六
秋葉權現——　一〇七
淺草淡島明神——　二二八
淺草疝澤不動尊——　一五〇

淺草蓮華寺彌陀如來——一一九、一四五
淺草清水寺觀世音——一四四、一八二
淺草金藏院子安觀音——一九八
淺草九品寺齊諦地藏——一一五
淺草光叡寺當麻毛曼荼羅——一〇二
淺草源空寺文殊菩薩——一三二
淺草西福寺辨才天——一一八
淺草西福寺無量壽佛——一四六
淺草三社權現——二二八
淺草淨念寺利劍名號切目如來——一一三
淺草觀訪明神——一〇一
淺草暫願寺薬吹如來——一五一
淺草泉住院辨才天——一〇七
淺草宗安寺觀音——一一九
淺草泰宗寺薬師——二四〇
淺草田圃鬼大明神——一四、三一二
麻布大現寺毘沙門——二三一
淺草燈明寺彌陀——二四五
淺草親恩寺親鸞遺物——一四一、一五二
淺草本願寺祖師——一九六
淺草妙見宮——一四四
淺草柳稻荷本地佛——一一〇、一五二、一九二
麻布光照寺彌陀如來——一三〇
麻布善福寺親鸞像——一一六
麻布善福寺聖德太子——一四六
麻布善福寺開山像——二三二
麻布大法寺大黑天——一一八
愛宕山權現——八、九、一九六
愛宕山辨才天——二四一
愛宕下眞福寺薬師——一一六
愛宕下地藏尊——一〇四
足立郡十連寺閻魔——一二八
足立郡新曹妙顯寺祖師——一四、一九、二一、一五一
足立郡性翁寺本餘彌陀——二二二
吾妻森吾森權現——二一、一五、二一〇
穴八幡觀世音——一〇〇
穴八幡本地佛永至明神——一一二
池上本門寺旋立祖師——一三、一六、二〇〇
池の妙音寺祖師——二〇〇
池の妙音寺辨才天——一三八
池の妙音寺妙見菩薩——一〇七
伊皿子福昌寺薬師——六一
石原德次辨才天——一九二
市谷光德院千手觀音——一三、二四、二六〇
市谷桑の木稻荷——一〇二、一三六、二三〇、三〇一
市谷八幡宮甲冑神——一一七
一の江妙壽寺祖師——二六四
一の宮淺川明神——一一二
出村本佛寺鬼子母神——二四一
稻毛薬師——七七
井の頭辨才天——一〇〇、一三九、二三〇、二四〇、二六六
飯田町世繼稻荷——一〇一、二四〇、三三
飯綱權現——一八八
今戸八幡宮——一九六
牛込赤城明神——一四〇
牛込圓福寺布引祖師——二五五
牛込幸國寺祖神——二四九
牛込神樂坂觀世音不動尊——一〇四
牛込久成寺船守祖師——一四二
牛込經王寺大黑天——二七三
牛込多聞院毘沙門天——一四四
牛込南藏院辨才天——一九一
牛島白髭明神——二三〇
牛島長命寺辨才天——一三六、一九三
牛島護國寺弘法大師——二二七、二四〇
牛島王子權現本地大日如來——二三、二九五
牛御前王子權現——九八、一三六、一九三、二三六、二四〇
鶏木光明寺雷留觀音——一七七、二三三

上野清水堂觀世音——一〇〇、一二五、二四、二七、二三
永代寺丈六觀音——一二七
永代寺飛八幡宮——一四一
永代寺八幡宮——一〇七
永代寺彌陀如來不動尊——二八
回向院境內國府彌陀如來——二六五
回向院境內諸佛——一四一
回向院一言觀音——二八、二六、二四
回向院彌陀波會天滿宮——一九三
回向院藥葱辨才天——二七、二四三
荏原郡大吉寺弱日如來——八八
小川町三崎稻荷明神——一五四
御藏前牛頭天王——二六四
御藏前出世大黑天——一四四
御藏前大護院愛染明王——一〇四
御藏前中央寺大日如來——一四三
御藏前八幡宮——一一〇
押上最敬寺蒙古退治曼荼羅——一四五、二六
押上春慶寺普賢菩薩——一〇四、二六、九五
押上大雲寺觀世音——一一九
音羽町田中八幡宮——一四〇
大久保西向天滿宮——一九六
大相模大乘寺不動尊——一六
大塚大慈寺火防地藏——一九七
折本村淡島明神——一八七
御嶽山藏王權現——一〇七
麴町貢藥師——一一六、二〇五
葛西鷲大明神——二〇一、二四九
葛西觀音寺客人權現——二二五
葛西正覺寺鷲大明神——一五四
葛西國府大聖寺不動尊——二四五、一八六
葛西牛田稻荷——一九、二〇、二八
葛西矢鉤辨才天——二四九
葛西夕貌觀世音——六八
柏木村圓照寺薬師——一七六
川口鍬杖寺地藏尊——一六、一二四〇
川口善光寺如來——二二五、二六、二三七、二四〇、二五七、二九、二六、二四〇、二五七
川越妙昌寺祖師——二四二
川崎眞福寺薬師——二二六
川崎平間寺弘法大師——二四五、二五四、二七、二四〇、二七
川崎明長寺石觀音——一二六
上總馬國光院寶井子權現——二六五
龜有村清雲寺聖觀音——一四六
龜戸御嶽權現神明宮——一一一
龜戸社內花岡明神——一四一
龜戸天滿宮——二二、二九、二六、二五四、二七
龜戸天滿宮法性坊——二〇七、二四九
龜戸東覺寺不動尊——一八三、二六八
龜戸普門院觀音——一一一、一五一
龜戸妙義山權現——一一六、一五三
龜戸龍昭寺靈髮太子——一一九
茅場町藥師如來——二三三、二五五
茅場町藥師境內天滿宮——二六一
烏森稻荷明神——一四三
菅神九百五十年忌諸所天滿宮——二五八
北澤淡島明神——一四二、一五〇
北到下水花嚴寺薬師——一四四
木下川淨光寺藥師——一一〇、二二六、二八、三二、二七、二〇〇、二三五
木下川白髭明神——二二五
魚籃下大信寺觀世音——一〇七
熊谷寺彌陀及蓮生像——一七五、二三三
小石川牛天神——一一〇、二三二
小石川手引地藏尊——一〇五
小石川西岸寺圓光大師——二〇五
小石川大慈寺觀音——一三八
小石川福聚院大黑天——二三、二七、二三七
小金東漸寺圓光大師——一一四
小金本妙寺祖師——二五二

極樂水光圓寺元木藥師 —— 一四六
護國寺觀世音 —— 一〇三、一〇九、一一三、一三八、一五四、一八三、一八七、一九八、二二一、二三三
小傳馬町千代田稲荷 —— 一四三
小日向明照寺地藏不動尊等 —— 一五二
小日向妙見院大日如來 —— 一三五、一八二、二五六
駒込願行寺善導大師 —— 一一二
駒込浩妙寺七面明神 —— 二五八
駒込目赤不動尊 —— 一一一、二六二
埼玉郡野島地藏尊 —— 一四四
相馬大圓寺釋迦 —— 一七七
雜司谷鬼子母神 —— 三一三
鮫洲海晏寺觀音 —— 一一六、二四一
猿町寶塔寺元三大師 —— 一二七
山谷法正寺毘沙門天 —— 三二五
下谷稲荷 —— 一七七
下谷高岩寺延命地藏尊 —— 一〇八、二八一
下谷五條天神 —— 一三一、一四二、一五二
下谷正法院稲荷及本地佛 —— 一五一、一九八
下谷德大寺摩利支天 —— 一四五、二〇〇
下谷蓮城寺祖師 —— 一四一
品川海晏寺境內諸佛 —— 三〇九
品川海晏寺辨才天 —— 二四一
品川海雲寺千體荒神 —— 一八三
品川寺水月觀音 —— 一〇七
不忍池辨才天 —— 一一五、一三一、三三五、三三八
芝圓珠寺七面大明神 —— 一九〇
芝金杉七面大明神 —— 一一〇
芝金杉正傳寺毘沙門天 —— 二六九
芝金地院觀世音 —— 二八二、三二九、三三四
芝神明宮境內天滿宮並眞筆 —— 二五五、一〇四、二二三
芝神明宮境內辨才天 —— 二四〇、二八五
芝泉岳寺義士遺物 —— 一六九
芝泉岳寺釋迦如來 —— 一〇八
芝泉岳寺八相曼荼羅 —— 一六九、三三五、三三八、二四七
芝寶祿稲荷 —— 二五三
柴又題經寺帝釋天 —— 二二八、二四一
十條村眞光寺正觀音 —— 一四四
澁谷金王八幡宮 —— 一二六、一七六、一九八
澁谷長谷寺觀音 —— 一〇二、一四一
下落合村藥王院釋迦 —— 一〇四、一四四
新鳥越妙見宮 —— 二二五
巢鴨天滿宮 —— 一一一
洲崎辨才天 —— 一〇七、一一八、一二七、一三六、一五五、一八二、一九五、二四一、二四二、二八五
清正公二百年忌供養 —— 一九二
淺草寺觀世音 —— 三七、六一、八四、八六、九七、一〇四、一〇九、一三八、一三七、一五〇、一五一、一六三、一六八、一七五、一八八、一九八、二〇一、二二八、二三四、二三二、二四五、二五二、二七一、三〇一
淺草寺境內荒澤不動尊 —— 一〇七
淺草寺境內雨寶童子及辨才天 —— 一三八
淺草寺境內子育仁王尊 —— 一〇四
淺草寺境內松壽院辨才天 —— 一二六
淺草寺境內諸神佛 —— 一四一
淺草寺境內丈六辨才天 —— 一〇三、一〇七
淺草寺境內松尾明神 —— 一〇二
千駄谷鬼子母神 —— 一五四
千駄谷聖輪寺觀音 —— 一二七
千駄谷仙壽院鬼子母神 —— 二三一
千駄谷八幡宮春日明神 —— 一四六
千住驚大明神 —— 一四四
千住日慶寺鬼子母神 —— 一一六
增上寺芙蓉洲辨才天 —— 二三五、二四〇、二八五
增上寺彌陀如來 —— 一〇三
增上寺內常照院一光三尊如來 —— 八一
大師河原淸寶寺地藏 —— 一一一
大師河原平間寺弘法大師 —— 一一〇、一三七、一八六、二八七
大日坂妙足院大日如來 —— 二二九
高雄山權現 —— 二一一、三〇五
高田感通寺毘沙門天 —— 一〇八
高田本松寺祖師 —— 三二〇
高輪庚申堂靑面金剛 —— 一一八、一三六

高輪正覺寺彌陀 —— 一〇五
高輪太子堂稲荷 —— 二三五
高幡金剛寺火防不動 —— 一一五
橘樹郡山口觀世音 —— 一二二
玉川明神 —— 一八三、二三〇
多摩郡國分寺藥師及菩薩 —— 一二六
多摩郡德性寺藥師 —— 一四五
多摩郡谷保天神 —— 一四二
秩父我野子權現及本地佛 —— 一一〇、一九八、二五四
秩父卅四番札所觀音 —— 一三四、一三九、一六五、一七三、一九三
秩父大陽寺髭大士 —— 一九九
津久戸明神八幡宮 —— 一三九
築土明神本地佛 —— 七七、九三
角筈十二社權現本地佛 —— 二〇九、二三二
妻戀稲荷明神 —— 一八二
寺島村法泉寺髻不動 —— 一七二
寺島村蓮花寺弘化大師 —— 二七二
傳通院內大黑天諸尊 —— 一八二
中の郷如意輪寺聖德太子 —— 一一〇、一五四
中野寶仙寺不動尊 —— 一四一、一九八、二三五
中延八幡宮 —— 二三八
業平天神 —— 一一一
成子常圓寺長生日蓮像 —— 二八一
西新井總持寺弘法大師 —— 一九八、二三五、二四五、三〇五
西ヶ原無量寺觀音 —— 一三七
日暮里日丸明神 —— 一〇〇
日暮里妙隆寺祖師 —— 一二四、一九一
二の江妙勝寺祖師 —— 一五五、一九六
新座村東明寺吹上觀音 —— 一四五、一九三
二本榎覺眞寺辨才天 —— 二八六
二本榎承敬寺祖師 —— 一〇七
根津上野尾天神 —— 一七六
根津御旅所本地佛 —— 一四五
根津駒込稲荷明神 —— 二三二
根津權現本地佛 —— 一八三、一九三
野島淨山寺地藏尊 —— 一五四、一五五、二〇〇、二四三、二四五
白山權現鎭守八幡宮 —— 二四一
橋場神明宮內天滿宮 —— 一六六、一九四
橋場不動尊 —— 一四一
幡ヶ谷莊嚴寺不動 —— 一二六
八王寺本立寺祖師 —— 一五〇
馬場村諏訪明神 —— 二四五
羽生總願寺不動尊 —— 一一一
比企郡慈光寺愛染明王 —— 一三一
平河天滿宮 —— 二一一、一四三、一七六、一九二
廣尾天現寺毘沙門天 —— 一一六、一九九、二四一
深川玄信寺彌陀如來 —— 一一九
深川猿江摩利支天 —— 二五五
深川心行寺彌陀及不動尊 —— 七八
深川七渡辨才天 —— 二四二
深川八幡宮 —— 七七、一三九、一四五、一八二、二二八、二四三
日原村一石山十一面觀音 —— 一一八
府中深大寺元三大師 —— 一二五、二〇一
船板の名稱 —— 九四
堀の內妙法寺祖師 —— 一一九、二二三
本郷興善寺祖師 —— 一四二
本郷丸山淨心寺祖師 —— 一一一
本所川上藥師 —— 一〇四
本所自性院延命地藏尊 —— 一五三
本所篠塚地藏尊 —— 二九七
本所一ッ目辨才天 —— 一七七
本所法恩寺祖師 —— 二〇一
本所本久寺祖師 —— 一三七
本所本佛寺鬼子母神 —— 一八九
本所彌勒寺藥師 —— 一一六
眞先稲荷明神 —— 一三六、二一一、二五五
眞先初明宮末社祭神 —— 二八五
待乳山聖天宮 —— 一〇〇、一一〇
松山觀音寺毘沙門天 —— 一三〇

眞間弘法寺——一二八
三田春日明神——一二二、一四三
三田魚籃觀世音——六六、一〇七、一三五、一三七、二六九
三田願海寺不動尊——一〇八
三田慈眼寺鍬引觀音——一四四
三田春林寺薬吹如來——一二五
三田泉福寺藥師——一〇七
三田八幡宮——二八、一二七
三田明王院弘法大師——一〇八
三田藥王寺祖師——三一一
三の輪眞正寺觀音——一〇七
三保谷村薬師院千手觀音——一五〇
三回稲荷——一一〇、一七、二一八
武藏總社住吉和州三神——一四九
目黒祐天寺彌陀如來及祐天像——一〇七、二六六、二六九、二〇〇
目黒高幢寺權現及辨才天——一二七
目黒高高幢寺金毘羅——二四一
目黒正覺寺鬼子母神——二一八、二八一
目黒成就院薬師——二四
目黒麟薬師——二〇二
目黒誕生入幡宮——一一一
目黒不動尊——一一、一五、二七、二四〇、二六
目黒瀧泉寺不動——二八五
目白不動尊——一二二、一四六
木母寺梅若寺本尊——二一
木母寺梅若丸像——八九
木母寺梅若丸文殊菩薩——一〇三、一九六
矢口新田明神——一四〇、一六九、二七一
谷中一乘寺祖師——一八三
谷中延壽寺日蓮上人像——三一七
谷中延命院七面明神——一五六
谷中感應寺毘沙門天——一六九
谷中子安鬼子母神——一〇四
谷中正運寺祖師——二二四
谷中宗林寺祖師鬼子母神——二二六
谷中大圓寺大黒天——一〇四
谷中長運寺鬼子母神——一〇八
谷中本光寺祖師——一二七
谷中妙福寺祖師——三三二
谷中妙福寺日祝上人——三二八
谷中妙林寺不動尊——一一〇
谷中養原寺辨才天——二九五
柳島法性寺妙見宮——一四〇
柳島妙見宮——二二八
山口村來迎寺聖觀彌陀——一一八
湯島圓藏寺十一面觀音——一五一
湯島天滿宮——一一、一三、一四、一三、一三九
吉川延命寺地藏尊——一四六
四谷子安稲荷本地佛——一九八
四谷眞成院鬼踏地藏——一〇七、一五〇
羅漢寺彌陀如來——一九五
鶯巖島樹本稲荷社藥師——一一八
六阿彌陀——一〇一、一一七、二四七
六阿彌陀不殘——一四六
六阿彌陀求來觀音——一三七
六郷羽田辨才天——一四〇
王子觀現社回稲荷明神——一〇〇、一三七、一三一、一三四、一三五、一三九

諸國

奥州安達原人肌藥師——一二二
奥州圓藏寺虛空藏菩薩——二二八
奥州高巖寺圓光大師——一一二
奥州金華山辨才天——一一二、一五〇
奥川衣川地藏院辨慶像——一一一
奥州西光寺圓隈地藏尊——一〇七、一五二
奥州仙臺往生寺圓光大師——一三七
奥州外濱百濟寺本地佛——一五〇
奥州大全寺辨才天——二二〇
奥州大月寺釋迦——一二〇
奥州二本松鏡石寺觀音——一二八
奥州變眼の彌陀笑實觀音足靡不動——一七八
奥州本誓寺親鸞上人寶物——一二二
奥州無能寺彌陀及無能像——一二二
奥州柳津虛空藏菩薩——一一六
奥州往生寺圓光大師——一〇四
安房鋸恩寺祖師——一〇四、一二一
安房西行寺西行像——一六六
安房清澄寺虛空藏——七九
安房誕生寺祖師——二一
安房名古寺觀世音——一一四、二〇七
安房日蓮寺祖師——一〇八
近江石山寺觀世音——五四
近江義仲寺頂日如來及芭蕉像——一四二
近江多賀大社——一一五
近江田村將軍像——七九
近江行生島辨才天——一一七、一六一
近江白髮明神——七四
伊勢朝熊岳虛空藏菩薩——七六
伊勢國分彌陀如來——九九、二六三
伊勢子安觀音——一〇二
伊勢金剛證寺虛空藏——一〇三、一四五
伊勢白子子安觀音——一〇
伊勢西寺阿彌陀如來——二二八
伊勢入門寺彌陀如來——二二二
伊豆最勝院釋迦——一一〇
伊豆玉澤法華寺祖師——一一三
伊豆長圓寺本地佛——一三九
伊豆八丈島鳥賊明神——二、一五、二〇、二六
伊豆豆法華寺祖師——二二四
伊豆妙國寺祖師——一一九
和泉泉津大社——一二八
越後乙寶寺大日如來——一一二、一九二
越後春日明神本地佛——一二八
越後春日山見沙門天——二七
越後居多社大國主像——一七七
越後西淨寺彌陀——一〇九
越後淨興寺寶物——一九五
越後瑞泉寺親鸞遺物——一三〇
越後菅原付天滿宮——二八一
越後善導寺善導大師——一一五、二三三
越中本法寺淨中出現法華經——一一九
尾張大御堂地藏尊——一二八
上野醫王寺施藥師——二〇二
上野光明寺彌陀如來——一五一
上野源空寺藥師——一二六
上野金剛寺十一面觀音——一〇二
上野正法寺觀世音——一〇三
上野慈持寺十一面觀音——一四六
上野大同山聖德太子——一一九
上野新田川藥師——九三
上野茂林寺十一面觀音——一五五
加賀長榮寺不動尊——二二三
加賀白山釋迦舍利——一一四
上總觀音寺馬頭觀音——一一二、二八六
上總勝覺寺釋迦及四天像——二九〇
上總稱念寺閻吹如來——一一八、一五六
上總松林寺觀音——一一七
上總大國寺彌陀如來——一〇五
上總大日寺大日如來——一三一
上總布施辨才天——二三〇
上總妙覺寺祖師——二四七
上總妙光寺祖師——二〇七、二三八
上總妙宣寺祖師——一一四、二五八
河內強井八幡宮——一一九、一九四、一九八
河內葛井寺觀音——一八四
河內八尾大信寺寶物——一一五
甲斐國興寺沒行者——三〇二
甲斐遠光寺祖師——一一八

甲斐遠妙寺祖師——一九一
甲斐經王寺日蓮——一〇四
甲斐小宇妙法寺祖師——一一八
甲斐西方寺十一面觀音——一四九
甲斐昌福寺祖師——二九〇
甲斐信玄寺不願寺——一〇九
甲斐梅雲寺摩利支天——二五六
甲斐善光寺彌陀燈籠佛——一一〇、二〇〇
甲斐大聖院不動——一四三
甲斐燈籠佛附開帳——二二九
甲斐福昌寺祖師——二四七
甲斐高福寺普德太子——一三〇
甲斐身延山祖師——三〇、二六、三五、二六、三三
甲斐身延山七面明神——一八、二五〇
甲斐妙法寺祖師七面宮——二九一
甲斐入日市不動——八〇
甲斐立正寺祖師——二二三
紀伊淡島明神本地佛——二六、三三〇
紀伊高野山醫王寺藥師——一〇一
紀伊高野山彌陀如來——一三〇
紀伊道成寺觀音——二〇六
京因幡堂藥師開帳——五五
京太秦太子——六九
京因養院觀世音——一〇〇
京音羽觀音——二二八
京大原野春日明神——一二七
京北野菅神像——一三〇
京清水因養院觀音地藏等——一三九
京清水寺千手觀音——三九、一九五
京光明寺張子御影——九七
京西福寺辨才天——一〇
京嵯峨清涼寺釋迦如來——六、九、三、一〇、三五、一七、三九、一三、三三
京嵯峨二尊院彌陀——一四九
京嵯峨法輪寺虛空藏——七八
京實相院朝日妙見菩薩——三〇一
京實相寺日蓮——一〇四
京淨花院法不動——七七
京眞如堂稻荷——九七、一三五
京清涼山金毘羅——一八三
京青蓮院矣不動愛慢——一二二
京泉涌寺釋迦——一五四
京大佛內辨才天——一六二
京知恩寺圓光大師名號——一一一
京頂妙寺二天王——一八七
京東福寺毘沙門天——一三〇
京北叡山來迎寺彌陀——一一六
京本國寺釋迦如來——七四、一一八
京本國寺祖師——一九八、二二五
京本涌寺祖師——一一〇、一四三
京妙滿寺祖師——一一六、二一五
京靈山鹿阿彌陀——七四
京六波羅密寺觀音——二二八
相模梅澤吾妻權現——二〇二
相模江の島辨才天——一一八、二五五
相模江の島上の宮辨才天——一一九、一四、二四、一三六
相模江の島下の宮辨才天——三三七、二五、三五
相模江の島本宮辨才天——一〇六、二四、二六、二六、三五、三六
相模圓敎寺日蓮——一〇三
相模小田原淨本寺祖師——二二五
相模大磯身代地藏尊——一〇二
相模大山子易觀音——一一三
相模大山子易地藏尊——一一二
相模神奈川淺間寺浦島守佛——三六、三五、三四
相模鎌倉清寺の觀世音——一三九
相模鎌倉ゐらゐ井昭寺——一三〇
相模鎌倉安國寺祖師——二六二
相模鎌倉我覺院弘法大師——二四
相模鎌倉覺國寺藥師——二二八
信濃生生寺彌陀及地藏——一四四
下野出流山千手觀音——一一五
下野岩船山地藏尊——九、一〇、二、一六、一七
下野光明寺玉藻社——一九〇
下野大正院藥師如來——三〇一
下野高田山彌陀如來——二八、一九、二、三、一七、一七
下野高田天拜一光三尊——一四一
下野那須野殺生石化度觀音——一一一
下總我孫子々權現——二八一
下總安國寺祖師——二二八
下總一月寺釋迦及不動——一四九
下總古川藥師——一〇七、一四九
下總駒木村諏訪明神——二二四
下總正覺寺不動——一〇四
下總成願寺諏訪明神——二五五
下總正覺寺祖師——二五九
下總新北野——九四
下總等妙寺十一面觀音——一五二
下總中山智泉院鬼子母神——一五〇
下總中山法華經寺鬼子母神——二四二、一三九
下總中山法華經寺祖師——一〇四、一五〇、一五五、一六七、一九、一九、一六、一三六
下總成田不動尊——一一〇、二一九、一六、一四、一三、一三、一四、一九、一四、一一〇、二三、一三、一六、一

相模鎌倉光則寺祖師——一二二
相模鎌倉極樂寺釋迦——一三一
相模鎌倉稱名寺不動尊——一五五
相模鎌倉大佛腹籠彌陀——一〇二
相模鎌倉長勝寺祖師——一四、一九、一二
相模鎌倉鶴ヶ岡八幡宮——一一〇、一九、一五〇
相模鎌倉貞院天滿宮——一一〇、一五一
相模鎌倉本覺寺祖師——二〇〇
相模鎌倉妙法寺祖師——三六、三〇、一六、三三
相模鎌倉妙本寺祖師——一一六
相模鎌倉妙壓寺祖師——一九〇
相模最乘寺道了權現——一五四
相模杉本觀世音——二〇〇
相模國本道了權現——二〇七
相模曾我中村祐信院彌陀——一一二
相模龍の口祖師——一一二
相模梅雲寺三寶荒神——一二八
相模箱根阿彌陀寺本地佛——一三九
相模箱根荒人神——二一七、一三三
相模箱根光明寺十一面觀音——一〇二
相模箱根權現及曾我の像——六四、一八七
相模坂東七番觀音——一〇三
相模補陀洛寺不動及大日——一八七
信濃善光寺如來——一九二
信濃月隱明神——一一三
信濃月隱九頭龍權現——一九三
信濃善光寺如來——六五、九、一四、一四、一四、一九、一七、一〇
信濃諏訪勝軍不動——一〇二
信濃金臥寺不動及釋迦——一一八
信濃廉樂寺四光光慈像——一三七
信濃龍澤寺不動——一〇三
信濃遠龍寺不動——一〇八
信濃石堂村地藏菩薩——一四五
信濃岡山虛空藏菩薩——一四五
佐渡妙宣寺祖師——一五四
佐渡妙照寺祖師——一一、一九五
佐渡實相寺朝日祖師——一一六
佐渡塚原根本寺祖師——一一〇、一四三、一三五、一三五
佐渡阿彌陀房日蓮像——二八六
拳手不動尊——一八七
相模星降天拜祖師——一一六、二〇二
相模法界寺朝日如來——一三九
相模妙純寺祖師——一七六
相模妙傳寺星降梅——一〇三
相模龍泉寺子安觀音——一七七
相模神奈川淺間寺浦島守佛——三六、三五
相模鎌倉清寺の觀世音——一三九
相模鎌倉ゐらゐ井昭寺——一三〇
相模鎌倉安國寺祖師——二六二
相模鎌倉我覺院弘法大師——二四
相模鎌倉覺國寺藥師——二二八
京本國寺釋迦如來——七四、一一八
京本國寺祖師——一九八、二二五
京本涌寺祖師——一一〇、一四三
京妙滿寺祖師——一一六、二一五
京靈山鹿阿彌陀——七四
京六波羅密寺觀音——二二八
相模梅澤吾妻權現——二〇二
相模江の島辨才天——一一八、二五五
相模江の島上の宮辨才天——一一九、一四、二四、一三六
相模江の島下の宮辨才天——三三七、二五、三五
相模江の島本宮辨才天——一〇六、二四、二六、二六、三五、三六
相模圓敎寺日蓮——一〇三
相模小田原淨本寺祖師——二二五
相模大磯身代地藏尊——一〇二
相模大山子易觀音——一一三
相模大山子易地藏尊——一一二
相模神奈川淺間寺浦島守佛——三六、三五
相模鎌倉清寺の觀世音——一三九
相模鎌倉ゐらゐ井昭寺——一三〇
相模鎌倉安國寺祖師——二六二
相模鎌倉我覺院弘法大師——二四
相模鎌倉覺國寺藥師——二二八
信濃生生寺彌陀及地藏——一四四
下野出流山千手觀音——一一五
下野岩船山地藏尊——九、一〇、二、一六、一七
下野光明寺玉藻社——一九〇
下野大正院藥師如來——三〇一
下野高田山彌陀如來——二八、一九、二、三、一七、一七
下野高田天拜一光三尊——一四一
下野那須野殺生石化度觀音——一一一
下總我孫子々權現——二八一
下總安國寺祖師——二二八
下總一月寺釋迦及不動——一四九
下總古川藥師——一〇七、一四九
下總駒木村諏訪明神——二二四
下總正覺寺不動——一〇四
下總成願寺諏訪明神——二五五
下總正覺寺祖師——二五九
下總新北野——九四
下總等妙寺十一面觀音——一五二
下總中山智泉院鬼子母神——一五〇
下總中山法華經寺鬼子母神——二四二、一三九
下總中山法華經寺祖師——一〇四、一五〇、一五五、一六七、一九、一九、一六、一三六
下總成田不動尊——一一〇、二一九、一六、一四、一三、一三、一四、一九、一四、一一〇、二三、一三、一六、一

下總東三井寺地藏尊——一五一
下總法藏寺祐天像——二二五
下總法宣寺祖師——一一八
下總法蓮寺祖師——二九、二〇〇、二三一
下總本土寺白毫光顯祖師——二四、二九、二七一
下總禹滿寺不動及仁王——一九八
下總妙光寺祖師——二二七
下總妙興寺祖師——一二八、二三〇
駿河岩本日蓮像——一〇四
駿河海長寺願滿祖師——二〇二
駿河實相寺祖師——一五二、二五三、二〇五
駿河宗心寺三尊佛——一二六
駿河曾我八幡宮——一二五、一四三
駿河富士山本尊大日如來——二二五
駿河妙海寺祖師——一一六、二二七
駿河蓮永寺日蓮鏡彫——一〇四
攝津生玉明神——一〇四
攝津一心寺彌陀如來——一〇三
攝津北野天滿宮——一五〇
攝津天王寺奥院太子——二一三
攝津天王寺聖德太子——一〇一、二二、二五六、二二四
攝津堀江一光三尊佛——一四六、二〇一
丹後成相寺聖觀音——一四七
出羽本道寺大日如來——一一六
出羽湯殿山大日如來——一〇五、二四二、二〇〇、二二、二四九
土佐五大山文殊菩薩——七四
遠江光明山摩制支天——三〇一
遠江大福寺藥師——一一六
遠江妙日寺祖師——二二八
播磨吳服藥師——七四
常陸磐船願入寺如信像——一七七
常陸大杉大明神——一七七
常陸鹿島五大明王——一〇四
常陸鹿島廣德寺赤童子——一二八
常陸鹿島本地觀音——一一五
常陸祇園寺關羽像——一五六
常陸廣德寺赤童子——一九六
常陸願入寺寶物——一一八
常陸子生神宮寺辨才天——一四四
常陸西念寺寶物——二四
常陸正行寺親鸞像——一九四
常陸神應寺觀世音——二七二
常陸新善光寺彌陀如來——一一五
常陸大寶八幡宮——二八六
常陸筑波山本地觀音——一一二
常陸筑波山藏影山權現——一九六
常陸國寶積寺子安辨才天——一〇八
常陸船玉明神——一九、一
常陸袈笠不動尊——一一三
常陸妙圓寺不動——一一〇
常陸妙德寺日蓮上人——一〇三
三河光明寺天滿宮——二五九
三河勝鬘皇寺太子像——二五六、三二五
三河八幡宮藥師——一一六
三河遍照院弘法大師——一一六
三河鳳來寺不動尊——一〇一
三河法蔵寺出世觀音——一〇八
三河明顯寺聖德太子——一三〇
三河矢矧光明寺天滿宮——二六二
美濃華嚴寺十一面觀音——一五〇
義濃誕生寺圓光大師——一一七
美作誕生寺法然上人像——六五
山城宇治蜂社本地佛——一五四
大和天の河辨才天——一四九
大和喜光寺十一面觀音——一二六
大和子鳥寺役行者——一二八
大和西大寺釋迦——一一三
大和當麻寺彌陀如來——一三二
大和奈良二月堂觀音——九八、一〇三、一三〇、一四五、一三九、一五三
大和法隆寺聖德太子——二三五
神佛——に幟を建始む——一〇九
——目錄刊行の始——一九七
海福寺
深川——開創——四三
街萬里
儒家——破——一六七
笄
——の起原井異說——六二
象牙の——流行——一二一
向耕亭
料理屋——廢絕——二二一
孝義錄
——刊行——一七五
仰願寺蠟燭
——の始——五六
耕元
書家——破——一九八
幸國寺
牛込——布引祖師像安置——二〇
幸太夫
漂流人——歸朝——一六六
講釋師
安永年間高名の——一四八
高幡寺
目黑——開創——九五
講武所
小川町に——建——二九八
永道橋門內に——設立——三〇一
築地に——成——二八一
講武所付受負地
高野山模景
永代寺に——を造る——二八七
幸龍寺
淺草——建立——一三二
淺草——の骨塚——
高林寺
金鳳山——開創——一七六
家屋
瓦葺の始——一八三
瓦葺御免——
藁葺禁止——
加賀屋長兵衛
——忠義の事——九四
柿本人麿
——千年忌諡號を賜ふ——一四八
鍵屋清左衛門
——が帳面の上書き——八七
扁額
明石屋甚藏遭難の——を淺草寺に奉納——九九
淺草熊谷稻荷社巴御前の——一八六
淺草觀音堂楊香の——九四
淺草觀音堂猩々翁の——二三九
狩野豐信鞍置馬の——を淺草寺に奉納——二七七
金王八幡宮田植の——二八七
會德清水堂へ景清牢破の——を奉納——七五
蕾谷淺草寺へ賴政鵺退治の——奉納——二五
相撲大關松風雜司谷鬼子母神へ——奉納——一七六
淺草寺の——一八三
春川秀蝶愛宕社へ祇園會の——奉納——二三二
明人淺草寺に——を揭ぐ——四
角畫
——流行——五
額堂——一七四

神田明神社地——建立 二〇七
神樂坂
——通西側町屋となる 一六五
覺林寺
白金——開創 七一
影繪
彩色——の始 一八一
駕籠
辻——停止 五三
笠
編廚——流行 二五五
葛西因是
儒家——歿 二一四
累
——百年忌修行 一三二
風魔
盜賊——の事 一
笠間巨山
——歿 一七六
笠森稲荷
——流行 一〇五
日暮里に——勸請 一二〇
瘡守稲荷社
——移徙 二
笠屋三勝
——の末裔 七一
下賜金
江戸町人に六萬三千兩下賜 三一九
鹿島探春
儒家——歿 一四四
柏木如亭
詩人——歿 二〇七
歌人
元祿年間高名の—— 二一四
明和年間高名の—— 一三二
天明年間高名の—— 一五九
風邪
延享元諸國——流行 一〇二
延享四諸國——流行 一〇五
明和六——流行 一二九
安永五——流行 一四〇
文化八——流行 一九三
天保三——流行 二二五
嘉永三——流行 二五四
嘉永四——流行 二五五
安政元——流行 二六九
安政四——流行 二八五
萬延元——流行 三〇〇
慶應三——流行 三三二
お七風流行 一七六
ダンボ——流行 二一一
珂碩上人
——寂 六六
歌仙櫻
「サク」櫻を見よ
荷田春滿
——東都に國學教授 九六
荷田在滿
和學家——歿 一一〇
片岡左内
茶人——歿 九七
片岡寛光
歌人——歿 二三〇
敵討
赤穗浪士の—— 七〇

淺草御藏前片町の—— 一七二
淺草天王橋—— 二六五
牛込神樂坂の—— 一五三
護持院が原の—— 二四四
淨瑠璃坂の—— 五一
住吉町の—— 二六九
深川宮橋町の—— 一七一
肩衣
夏の——、簾子—— 二九
荷田御風
國學者——歿 一五四
片桐處翁
畫家——歿 二一六
片桐宗關
茶人——歿 五三
荷田蒼生女
歌人——歿 一五六
刀鍛冶
文化年間高名の—— 二〇四
片山兼山
儒家——歿 一五〇
新井村梅照院樂師小兒蟲封の——を なす 二二〇
木食親正の——流行 二〇七
木食誨念の—— 二九八
梶原稲荷社
大井村——流行 二八八
鰹
嘉永四——獵多し 二五六
古生——を新と僞る事禁止 四七
勝川春英
浮世繪師——歿 二〇八
勝川春章
浮世繪師——歿 一六六
葛飾郡
——二國に分る 六一
葛飾北齋
浮世繪師——歿 二四九
——百廿疊敷の紙へ達磨を畫く 一八三
甲冑
——の振賣 二六四
合羽
夏——の始 一二〇
合羽大佛
如來寺に——を造り物とす 一七〇
桂姫
——の勸化 一九八
桂山義樹
儒家——歿 一〇七
加藤枝直
歌人——歿 一五六
加藤遠塵齋
畫家——歿 一九二
加藤清正
——歿 九
加藤千蔭
和學家——歿 一九〇
金杉新堀
芝——船入成る 五三
叶福助
——土偶流行 二〇三
金森宗知
茶人——歿 四〇
鐘

青山梅窓院の——改鑄　七八
芝切通時の——再興　一三九
芝増上寺の——成　五三
下總八幡八幡宮出土の古——　一六六
築地御堂の——成　二二九
東叡山時の——成　四八
東叡山時の——改鑄　一五八
西久保八幡宮の——芝切通へ移す　五三
本所時の——再興　六三
鐘供養
目白不動尊時の——　九七
羅漢寺の——　六六
西新井總持寺の——　二二二
金子金陵
畫家——歿　二〇一
狩野彰信
畫家——歿　二一八
狩野興信
畫家——歿　一三七
狩野惟信
畫家——歿　一八九
狩野山雪
畫家——歿　七七
狩野安信
畫家——歿　六一
狩野泰信
畫人——歿　一七一
狩野雪信
畫家——歿　五八
川
今川橋通に小川堀割る　六四
川上渭白
茶人——歿　二八八
川上不白
茶人——歿　一八九
河口子深
儒家——歿　一一三
川口善光寺
——建立未加　九八
——本堂修復落成　一一五
——本堂普請成　二四八
「カイ」開帳をも見よ
川浚
明和四關東諸川——　一二七
寛政元諸川——　一六一
天保十四諸川——　二三六
神田川——　一六五
蛙合戰
廣尾古川の——　二五二
河津定廻
——歿　一八四
川邊靈神
靈岸島——流行　二二五
河野春明
金雕工——歿　三〇〇
河村隨軒
——の邸宅　六二
——召出さる　六七
——歿　六八
瓦
江戸にて始て——を燒く　九八
河原遜齋
儒家——歿　三一
瓦葺
「カワラ」家屋をも見よ　二一七
東埔塞國
——船始て來る　五
甲斐德本
醫——小傳　二〇
佳風
俳人——歿　八九
甲賀屋長右衛門
——歿　二九九
歌舞妓
「シバ」芝居を見よ　一八四
歌舞妓年代記
——刊行　一九四
甲子江戸鑑
——刊行　六一
楓
植木屋伊兵衛の——　九五
返り花
文化十三梅櫻——多し　二〇一
櫻の——　二五四
鶩峯文集
——成　六四
狩野長信
畫家——歿　三四
狩野尚信
畫家——歿　三八
狩野信政
畫家——歿　三三
狩野憲信
畫家——歿　四三
狩野英信
畫家——歿　九二
狩野秀信
畫家——歿　一一九
狩野福信
畫家——歿　五一
狩野古信
畫家——歿　八七
狩野益信
畫家——歿　九二
狩野守政
畫家——歿　六五
狩野岑信
畫家——歿　八四
狩野山樂
畫家——歿　七八
狩野榮信
畫家——歿　三九
狩野典信
畫家——歿　五三
狩野高信
畫家——歿　六六
狩野探幽
畫家——歿　二二二
狩野周信
畫家——歿　二〇一
狩野常信
畫家——歿　二一八
狩野洞春
畫家——歿　一三七
狩野時信
畫人——歿　一八九
狩野主信
畫家——歿　七七

鎌倉八幡宮
——焼亡 二一〇
——再建成 二一九
釜師
江戸の—— 二九
紙
雁皮紙の創製 二〇四
木綿紙創製 二二三
和製唐紙の始 二〇四
髪切
元禄年間諸國——流行 七三
明和二——流行 一二五
明和四——流行 一二七
上下
裏付—— 二八
繼——の始 九五
雷
天和三落——四十餘所 五八
寶永三落—— 七五
元文元大——鳴 九七
明和五の大—— 一二八
明和六の大——鳴 一二八
安永三落——三十七ヶ所 一三八
安永九の大—— 一四七
寛政七の落—— 一六八
寛政九の大—— 一七〇
寛政十一の大—— 一七二
文化元大—— 一八三
文化十一の落—— 一九八
文政四大—— 二一〇
天保十三の—— 二二五
天保十四大—— 二二六
嘉永二大—— 二五三
嘉永三の落—— 二五六
嘉永四の落—— 二六八
安政元の落—— 二七二
安政二の落—— 二九〇
安政五の落—— 三〇五
文久元の落—— 三二〇
慶應元の落——
雷除
——と號し赤蜀黍を賣始む 二〇二
風雷神門
——焼失 一二七、三二一
——再建成 一六八
神谷東溪
儒家——歿 一八三
神屋登
相學者——流行 一二〇
髪結床
——數限定 四三
龜
金色の——捕獲 二〇五
不忍池へ木の——を浮ぶ 一三二
駿州より兩頭の——出る 一三六
兩頭の——捕獲 二〇五
龜田鵬齋
儒家——歿 二一七
龜田綾瀬
儒家——歿 二六二
龜戸天滿宮
鎮座 一八
再興 三一
造營 四七
——へ後水尾院宸筆の額を賜ふ 五〇
——神式太宰府に准ず 六七
天神八百年忌——にて連俳興行 六九

——焼失 一〇二
——造營成 一一一
——に樓門建立 一三九
「カイ」開帳をも見よ
龜成
俳人——歿 一一四
冠り付
——流行 七二
賀茂眞淵
あがた居の稱
和學家——歿 一二四
茅場町
本所——の名稱 一二九
茅場町藥師如來
——安置 二二
傘
青日——流行 一二〇
蝙蝠——流行 三三二
晴雨兩用の——流行 二二〇
機關人形芝居
外記座にて——興行 一一二
硝子細工
——流行 一二二、二〇五
烏丸光榮
——下向 一三三
烏丸光廣
關東下向 一〇四
唐衣橘洲
狂歌師——歿 七八
ガラン糖
といふ藥賣 一九六
狩谷棭齋
——歿 二二八
巖育禪師
——歿 一九
感應寺（谷中）
「テン」天王寺を見よ
感應寺（鼠山）
——建立 二二八
漢文刺亞國
——書を呈す 九
釵
——に耳掻をつけし始 六二
舞子の花——流行 九九
夫婦ざし流行 三三二
甘藷
——傳播 七八
青木昆陽——を培養す 九四
——諸國に流布す 九八
神田庵厚丸
戯作者——歿 一一九
神田川
——掘割 一四、四四
神田上水水道
——の起原 三五
神田町會所付受負地
——成 二八七
神田明神社
祭禮渡御 九
遷宮 一四
造營 七四
樓門再建 九二
神事能廢絶 九五
——一の鳥居再建 二三一、三〇二
——修復落成遷宮 二三二

寒暖計
——の和製　二三八

旱魃
寛永三諸國——　一八
寛永十三の——　二三
寛文八諸國——　四九
天和三の——　五九
寶暦十の——　[illegible]
明和七諸國——　一三〇
文化二の——　一八三
文化十一の——　一九八
文化十四諸國——　二〇二
天保五の——　二二七
天保十三の——　二三五
嘉永元の——　二四七
嘉永六の——　二六三
文久元の——　三〇六
文久二の——　三一〇
慶應三の——　三三二

桑風
俳人——歿　八八

眼病
安政六——流行　二九九
文久元——流行　三〇六

キ

紀逸
俳人——歿　一一八

紀伊國屋又太夫
弘法大師の示現により——書をよくす　一九

紀伊國屋文左衛門
——逸事　七三
——歿　九四
二世——歿　一四〇

灸
禁灸治日傳授書——　一一九

舊室
俳人——歿　一二四

救恤
文化五貧民へ——　一九〇
安政五の——　二九三
安政二震災の貧民へ——米下賜　二八〇
文久二の——　三一一
慶應元の——　三二一
慶應二の——　三二四

牛肉屋
——流行　三三〇

求肥飴
中島淨雲——が創製す　二七

宜雲寺
深川——開創　六五

其角
俳人——歿　七六

饑饉
元和五の——　一五
延寶三諸國——　五三
天和元諸國——　五七
正德四諸國——　八一
享保十七諸國——　九三
天明三關東——　一五三
天明四諸國——　一五四
天明六の——　一五七
天保八——御救米下賜　二三〇
——により非人小屋造立元祿十四、　六九

菊
淺草寺奥山に——園を開く　二六一

祇空
俳人——の靈を祭る　九四

菊岡沾涼
俳人——歿　一〇五
二世——歿　一五一

菊岡光行
金雕工——歿　一七二

菊細工
牛島の——　二四一
巢鴨千駄木の——　二三九、二五〇、二七〇、三〇六、三〇七、三一二
團子坂の——　三〇六
目黑茶屋の——　二四六、二五一

菊田伊洲
畫家——歿　二六一

菊地五山
詩人——歿　二五〇

菊屋橋
淺草——を石橋に改築　三三〇

祇敬靈神社
深川八幡宮境内の——　九四

氣候
安永二の嚴寒　一三六
安永三の嚴冬　一三八
安永八四月嚴寒雪降　一四五
天明三——不順　一五三
天明六三月雪櫻花に積る　一五六
文化九嚴寒川氷る　一九六
文政四——不順　二一二
文政六——不順　二一四
天保七——不順　二二九
嘉永二——不順　二四九
嘉永三——不順　二五三
嘉永四——不順　二五五
嘉永五——不順　二五八
嘉永六——不順　二六五
安政元正月暖氣　二六八
安政五——不順　二九一
文久二——不順　三一二
文久三春の暖氣　三一三
元治元——不順　三一九
慶應元——不順　三二〇
慶應二——不順　三二三
慶應三——不順　三二二、三二三

著山和尚
——寂　一六七

雉
羽州より白——獻上　三〇四
攝州九條村より白——が獻ず　一七六

紀州侯
——逝去　二四九

岸本由豆流
和學家——歿　二四三

煙管
——の羅宇短きもの流行　二五一
馬中——流行　三二七

鰐
江戸——釣の始　五二

儀助稻荷
御成道——流行　二六九

木曾海道名所圖會
——刊行　一八四

北尾重政
浮世繪師——歿　二〇七

喜多川歌麿

浮世繪師——歿 一八三
北島雪山
——の書流行 六〇
喜多靜廬
——歿 二四六
喜多武清
畫家——歿 二八四
北村季吟
——召出さる 六三
——歿 七四
北村湖元
和學家——歿 一〇八
北村湖春
和學家——歿 六六
北村正立
歌人——歿 六九
吉祥寺
駒込——移徙 四二
洲崎——開創 六九
吉祥寺橋
「スイ」水道橋を見よ
吉祥天宮
上野に——建立 九四
狐
小兒——に喰殺さる 二四九
眞先稻荷社の—— 一四八
三圍稻荷社の—— 七四
木戸
四宿の——廢止 三三二
祇德
俳人——歿 一一三
杵屋六翁
——歿 二八〇
木下杏林
醫家——歿 八一
木下順庵
儒家——召出さる 五八
——歿 六八
木下道圓
儒家——歿 八三
木目親信
書家——歿 七四
木場
材木問屋——に移る 六八
奇病
飲食振舞猫に似たる少女 二五三
身内より針出る—— 二一一
「大工業が妻目より舍利を出す 八五
黃表紙
「セウ」小說を見よ
木邑高敦
故實家——歿 一〇〇
木村蓬萊
儒家——歿 一二五
狂歌
天明年間——流行 八一
狂歌師
安永年間高名の—— 一四八
天明年間高名の—— 一五九
寬政年間高名の—— 一七三
文化年間高名の—— 二〇三
狂歌堂眞顏
狂歌師——歿 二一九

行基菩薩
——千五十年忌 一一七
狂言
淺草日輪寺にて——興行 一三八
經王寺
日暮里——開創 四三
客人權現社
——建立 二五〇
木屋庄左衞門
刀劍鑑定家——歿 三二
伽羅油
江戸に於ける——の始 三二
玉室和尙
——配流と敕免 一九、二〇
曲馬馬琴
戲作者——歿 二四七
清田君錦
儒家——歿 一五五
清水寺
淺草——本堂建立成 一四四
清元延壽齋
——歿 二一七
清元兵衞
——歿 二一七
魚籃觀世音
三田——安置 二七四
「カイ」開帳なも見よ
基督敎
島原耶蘇宗徒蜂起 二〇
耶蘇宗再發
耶蘇宗徒淺草にて誅せらる
切組燈籠繪
——流行 二三
金魚
——渡來 一九
金銀箔座
——制定 二四
銀座常是
——蠟燭町へ移る 一七二
錦袋圓
——の起原と流行 一四
金雕工
文化年間高名の—— 二〇四
金羅
俳人——歿 一六七

ク

凶會日
——を忌む 二八八
櫛
朱塗の——流行 二三
九、一八
鯨
大井海濱へ小——漂着 二五六
神奈川海岸へ死——漂着 一三五
品川沖へ——漂着 一七〇
高谷村にて——二喉を捕ふ 九四
深川沖へ——來る 二〇九
管簾
——の發明 八二
下り竹齋物語
——刊行 五九
首塚
海藏寺の—— 一七二
久保盅齋

ケ
九品佛
　淨眞寺――開基　五四
　淨心寺――燒亡　一〇七
熊谷稻荷社
　――勸請　四七
熊谷安左衛門
　――歿　七六
熊野權現社
　――屏に龍王の二字現る　一七
粂平内
　「ヒヤ」兵藤平内を見よ
雲
　延寶二黑――棚引く　五三
　正德三蜜夫鏡――出現　八〇
　文化元白旗――現る　一八二
蛛の絲卷
　――成　二四三
栗本光壽
　戲畫家――歿　九三
栗山潛峯
　僧家――歿　一五六
九品佛
　淨眞寺――開基　五四
　淨心寺――燒亡　一〇七
熊谷稻荷社
　――勸請　四七
熊谷安左衛門
　――歿　七六
熊野權現社
　――屏に龍王の二字現る　一七
粂平内
　「ヒヤ」兵藤平内を見よ
雲
　延寶二黑――棚引く　五三
　正德三蜜夫鏡――出現　八〇
　文化元白旗――現る　一八二
蛛の絲卷
　――成　二四三
栗本光壽
　戲畫家――歿　九三
栗山潛峯
　僧家――歿　一五六
車長持
　――禁止　五八
黑川龜玉
　畫家――歿　一一四
黑澤雄岡
　僧家――歿　一六九
九郎助稻荷社
　――移徙　四三
怪異
　永代橋邊の怪聲　一一一
　麹町鳥那商の――　二六八
　皿屋敷お菊が事　三七
　信濃坂の笛吹聲　九七
　淺草寺仁王尊蓮を乘る　四〇
　白晝幽靈現る　三〇五
　文化十三何處ともなく拍子太鼓の聲聞ゆ　二〇一
快庵居士
　――成　三〇六
繪畫
　西洋――流行　三一六
僧家――歿　七五
車長持
　――禁止　五八
黑川龜玉
　畫家――歿　一一四
黑澤雄岡
　僧家――歿　一六九
九郎助稻荷社
　――移徙　四三
怪異
　永代橋邊の怪聲　一一一
　麹町鳥那商の――　二六八
　皿屋敷お菊が事　三七
　信濃坂の笛吹聲　九七
　淺草寺仁王尊蓮を乘る　四〇
　白晝幽靈現る　三〇五
　文化十三何處ともなく拍子太鼓の聲聞ゆ　二〇一
快庵居士
　――成　三〇六
繪畫
　西洋――流行　三一六
懷月堂安慶
　――の浮世繪行はる　八二
　「ウキ」浮世繪をも見よ
外國人上陸場
　芝浦岸に――を設く　二九九
外國人旅館
　品川御殿山へ――建立　三〇八
　品川――へ渡士襲擊　三二二
　高輪――へ渡士襲擊　三二一
　築地に――建　三三三
　文久元の――　三〇六
　「セツ」接遇所をも見よ
傀儡師
　――廢絕　一〇九
廣德寺（圓滿山）
　――小田原より江戸に移る　一
皇和通曆
　――刊行　八八
畫家
　元祿年間高名の――　七一
　明和年間高名の――　一三三
　天明年間高名の――　一五九

　寬政年間高名の――　一七三
　文化年間高名の――　二〇三
鍬形蕙齋
　畫家――歿　二二五
火浣布
　――發明　二二三
花縣
　俳人――歿　一七二
火災
　慶長六の――　五
　慶長十六の――　八五
　元和四の――　一五
　寬永七の――　二〇
　寬永十八の――　二四
　明暦二の――　四
　明暦三の――　四〇
　萬治元の――　四三
　萬治二の――　四三
　寬文元の――　四六
　寬文八の――　四九
　延寶元の――　五三
　天和元の――　五七
　天和三の――　五八
　元祿八の――　六六
　元祿十の――　六七
　元祿十一の――　六七、六八
　元祿十二の――　六八
　元祿十三の――　六八
　元祿十五の――　六九
　元祿十六の――　七〇、七一
　寶永二の――　七五
　寶永三の――　七五、七六
　寶永四の――　七六
　寶永七の――　七八
　正德元の――　八〇
　正德二の――　八〇
　正德三の――　八一
　正德四の――　七九
　正德五の――　八二
　享保元の――　八二
　享保二の――　八三
　享保三の――　八三
　享保四の――　八四
　享保五の――　八四
　享保六の――　八五
　享保七の――　八七
　享保八の――　八七
　享保九の――　八七、八八
　享保十の――　八八
　享保十二の――　八九
　享保十四の――　九〇
　享保十六の――　九二
　享保十七の――　九二
　享保廿の――　九四
　元文二の――　九七
　元文四の――　九八
　延享二の――　一〇二、一〇三
　延享三の――　一〇三
　延享四の――　一〇四
　寬延元の――　一〇七
　寶曆六の――　一一、一〇七
　寶曆七の――　一一一五
　寶曆八の――　一一一六
　寶曆十の――　一一一七
　寶曆十二の――　一一一八
　寶曆十三の――　一一一九
　明和元の――　一二二
　明和二の――　一二四、一二六

明和三の——　一二六
明和四の——　一二七
明和八の——　一三一
安永元の——　一三四
安永三の——　一三七
安永六の——　一四一
安永七の——　一四三
天明元の——　一四九
天明三の——　一五一、一五三
天明四の——　一五四、一五五
天明六の——　一五六
天明七の——　一五七
寛政二の——　一六二
寛政三の——　一六五
寛政四の——　一六五
寛政五の——　一六六
寛政六の——　一六七
寛政七の——　一六八
寛政九の——　一七〇
寛政十の——　一七〇、一七一
寛政十一の——　一七一
寛政十二の——　一七二
享和元の——　一七五
享和二の——　一七六
享和三の——　一七六
文化三の——　一八四、一八六
文化四の——　一八七、一八九
文化六の——　一九一
文化八の——　一九三、一九四
文化九の——　一九六
文化十の——　一九六、一九七
文化十一の——　一九七、一九八
文化十四の——　二〇一
文政元の——　二〇六
文政二の——　二〇七、二〇九
文政三の——　二一〇
文政四の——　二一一
文政五の——　二一三
文政六の——　二一三、二一四、二一五
文政七の——　二一五、二一六
文政八の——　二一七
文政九の——　二一八
文政十の——　二一八
文政十一の——　二一八
文政十二の——　二一九
天保元の——　二一二、二一三
天保二の——　二一四
天保三の——　二一三、二一五
天保四の——　二一六
天保五の——　二一六、二一七
天保六の——　二一七、二一八
天保七の——　二一九
天保九の——　二二〇、二二一
天保十の——　二二一
天保十一の——　二二二
天保十二の——　二二二、二二三
天保十三の——　二二四
天保十四の——　二二六
弘化元の——　二二九
弘化二の——　二四〇、二四一
弘化三の——　二四一
弘化四の——　二四四、二四六
嘉永元の——　二四七、二四八
嘉永二の——　二四九、二五〇、二五一
嘉永三の——　二五二、二五三、二五四
嘉永四の——　二五四、二五五、二五六、二五七
嘉永五の——　二五七、二五八、二五九、二六〇
嘉永六の——　二六一、二六二、二六三、二六四
安政元の——　二六八、二六九、二七〇
安政二の——　二七一、二七二、二七三、二七四、二七五
安政三の——　二七八、二七九、二八〇、二八四
安政四の——　二八五、二八六、二八七、二八八
安政五の——　二八九、二九〇、二九一、二九三、二九五
安政六の——　二九五、二九七、二九九、三〇〇
安政六の——　二九八、二九九
高延元の——　三〇〇、三〇一、三〇二、三〇三、三〇四
文久元の——　三〇四、三〇五、三〇六、三〇七
文久二の——　三〇八、三〇九、三一〇、三一一
文久三の——　三一二、三一三、三一四、三一五
元治元の——　三一六、三一七、三一八、三一九
慶應元の——　三二〇、三二一、三二二、三二三
慶應二の——　三二三、三二四、三二五、三二六、三二〇
慶應三の——　三二二、三二三、三二三、三二三

「シバ」芝居「ヨシ」吉原をも見よ

火災豫防

嘉永五の——　二二五八

火事羽織

寛——の始　二二〇

菓子屋

享和年間高名の——　一八二

月桂寺

市谷平安寺——と改稱　二二九
——十刹に列す　六五

貨幣

案藏大判小判を鑄造せしむ　二二
武藏小判成る　三
一分小判始て鑄造　四
駿河江戸判制定　五
二朱金通用始る　六七
大判吹替　八八
新小判一分判吹替　二〇七
一朱金通用始　二二六
五兩判新に吹立通用始　二三〇
新吹二朱金通用始　二二四
新二分金通用始　二八二
小判一分判吹替　二九八
大判吹直新金通用　三〇二
小判に光夫と墨書せしめ極印とす
乾金並三ッ寶銀通用始　四
元祿金銀鑄造　六六
新金銀吹替　八一
享保新金銀引替　八四
文字金銀通用始る　九七
大墨銀鑄造　五
寶字銀鑄造　七五
寶字銀通用始　七七
四ッ寶銀通用始　八〇
五匁銀十二枚金一兩に換ゆ　二二七
二朱銀通用始る　二三六
五匁銀通用始る　二二五
新吹南鐐銀通用始　二二五
一朱銀通用始　二二九
一分銀新に吹立らる　二三〇
一歩銀吹替　二九八
二朱銀通用始　二九八
二朱判通用止　七八
四ッ銀通用止　八〇
乾字金通用停止　八三
停元祿銀寶永銀中銀三ッ寶四ッ寶銀通用止　八七
元祿大判通用停止　八八
五匁銀通用停止　二三二
古金銀二歩判二朱銀一朱銀停止　二三六
眞字二分判通用停止　二二七
銀座吹所設立　二〇七
鑄四文々永樂錢の代用とす　七
鑄錢々永樂錢の代用とす　八
寛永通寶鑄造　二三

淺草に新錢座創立　四〇
龜戸にて鑄錢　四七
十文錢通用始　七七
深川十萬坪にて鑄錢　八八
小梅村にて鑄錢　九七
龜戸及小奈木川にて鑄錢す　九八
押上にて鐵錢鑄造　九八
龜戸村にて鐵錢鑄造　一二五
深川鑄錢座廢止　一三八
仙臺にて角錢鑄造　一五四
百文錢通用始　二二八
鐵小錢鑄造　二九九
深川に鑄錢座設立　三〇四
水戸錢通用始　三二五
文久通寶通用始　三一三
永樂錢停止鑑錢を代用とす　七
十文錢通用止　七七
小錢拂底　二五一
諸國銀札停止　七六
金銀札通用御免　九一
金銀札新規停止　一一七
金札發行　三三四
土中より元字金を掘出す　三三二
古錢を弄ぶ事流行　一二〇
異國銀通用御免　二九八
火藥
——製造　二六六
——爆發　二六八、二六九
目黑——製造所爆發　三一五
臥龍梅
——舊根燒失　一二五
寬永寺（東叡山）　一三八
——開創　一五四
寬永諸家系圖　二二八
——成る　二九九
歡喜天像　三〇四
長壽寺出土の——　三二五
願行寺　三一三
——移徙　七
翫具　七七
古今雜　二五一
裸人形腰折を初て造る　七六
初青人形　九一
ピヤポン流行　一一七
河豚太鼓流行　三三四
觀光丸
——品川着　三三二
勸進
町々——宿寧鑒　二八六
觀世音
葛西廿三所——巡禮所成　二六六
下谷淺草廿三所——順禮　七三
高田松平侯中屋敷の——巡詣を許さる　一三二
西國寫——札所巡拜の始　二六〇
西廿三所寫——堂建立　一四七
百——建立勸化　一五一
觀智國師　一五九
——寂　二四
願人坊主　一六
——橋本町へ移る　二六〇
關八州路程全圖　七三
——刊行　五九
完來　二三〇
俳人——歿　一八〇
觀了寺（足立郡）　二〇二
——の千手觀世音　一四九
軍艦操練所　二五九
築地に——を設く　二一七

ケ

けいあん
——といふ俗語　二五八
啓運寺　三〇一
下谷——移徙　四八
刑罪場　二三六
江戸——の變遷　九
慶長見聞集
——成　一〇
けころ
——といへる私娼　一六〇
月琴
——流行　二三八
月蝕
寶曆四の——　一一三
寶曆五の——　一一四
嘉永五の——　二五九
安政二の——　二七四
安政六の——　二九五、二九八
慶應二の——　三二五
俠客
寬文年間の——　五一
——額髮を拔く事流行　五二
町奴捕縛　三七
「ブカ」深見十左衛門なも見よ
拳
——相撲流行　九六
蟲獨虎拳流行　二四五
源空寺
——開創　七
——移徙　四二
喧嘩
消防夫と船頭との——　二八八
玄々一
俳人——歿　一八三
元三大師
——百年忌　六一
乾什
俳人——歿　一一六
けんどん蕎麥
——の始　四七
堅牢地神
——の祠建立　六九
「コヂ」護持院を見よ

コ

元祿寺
湖出市十郎
——歿　一七二
小出二山
儒家——歿　一一四
興敎大師
壁鏤上人——と諡を賜ふ　六四
洪水
寬永四の——　一八
寬永五の——　一六六
寬永十の——　二一
慶安三の——　三四
萬治二の——　四四
萬治三の——　四五
寬文十一の——　五〇
延寶二諸國——　五三
延寶四關東——　五四
延寶七の——　五五

延寶八の――　五五
天和三の――　五八
寶永元關東――　七四
享保五關東――　八四
享保六關東――　八五
享保八江戸近郷――　八七
享保十三の――　九〇
寛保二の――　一〇〇
寛延二の――　一〇八
寶暦七の――　一一五
明和二の――　一二五
明和三の――　一二六
安永元の――　一三五
安永八の――　一四五
安永九の――　一四七
天明元の――　一五〇
天明三の――　一五二
天明六の――　一五七
寛政元の――　一六一
寛政二の――　一六二
寛政三の大――　一六四
享和二の――　一七六
文化五の――　一九〇
文化九の――　一九五
文化十三の――　二〇一
文政五の――　二一三
文政六の――　二一四
文政七の――　二一六
弘化三の――　二四三、二四四
嘉永二の――　二五〇
嘉永五の――　二六〇
安政三の――　二八三
安政四の――　二八七
安政五の――　二九一
安政六の――　二九八
慶應元の――　三二〇
慶應二の――　三二五

勾崎甚内
強盜――淺草にて誅せらる　九

小唄
一蝶作朝妻船の唄流行　七二
上方より投節流行　七二
柴垣節流行　四二
大盡節唄歌流行　九六
飛驒節ほそり片撥等流行　二七
松島庄五郎等の――流行　九六
隆達節弄齋節土手節加賀節等流行　五二
「トウ」童謡「ナカ」長唄をも見よ

江東吟藁
――成　四七

紅梅燒
――流行　二八〇

江府神社略記
――刊行　九〇

弘福寺
牛島――開創　五三

弘法水
下總古河に――湧出　一一四

弘法大師
――八百五十年忌　六一
――九百年忌法會　九四
――九百五十年忌　一五四

弘法大師八十八ヶ所
――參詣始る　一二〇

公海僧正
――寂　六六

古賀精里
官儒――歿　二〇二

國益會所
――設立　三一〇

國姓爺
――援兵を乞ふ　四三

國分庄兵衛
――捺物を牛御前に寄進す　九

壺外
俳人――歿　二一〇

吳完觀
明人――歿　三一

護國寺
――開創　五七
――諸堂建立　六五
――住職正憍正に住ず　六六

護國寺觀音堂
――建立　六七

古今相撲大全
――刊行　一二〇

湖十
俳人――歿　九八

胡椒頭巾
――と宗十郎頭巾　一〇九

午心
俳人――歿　二〇一

古錢
「クヲ」貨幣を見よ

護持院
知足院建立
知足院湯島へ移る
知足院神田橋門外へ移る
知足院を――と改稱　八
――移徙　二一〇
――大破勸化　三一
――建立　五七

護持院大日堂
――建立　六五

骨塚
幸龍寺の――墓誌多し　六六

五重塔
感應寺――再建　六七
淺草寺――建立　一二〇
淺草寺――修復　一六六
――宅封印　三三

五條天神社
――移轉建立　二四一、二八二

胡椒頭巾
――へ天滿天神合祀　六七
「カイ」開帳をも見よ　二四

琴曲
山田檢校が――流行　二〇一
元祿年間高名の――家　一五九
　　七二

後藤榮乘
金雕工――歿　八
後藤延乘
金雕工――歿　二三
後藤光乘
金雕工――歿　六一
後藤桂乘
金雕工――歿　六三
後藤顯乘
金雕工――歿　六三
後藤三右衛門
――宅封印　八三
後藤芝山
儒家――歿　一一一
後藤壽乘
金雕工――歿　一八二
後藤芝山
儒家――歿　六七
後藤壽乘
金雕工――歿　一五四
後藤光乘
金雕工――歿　一六
後藤桂乘
金雕工――歿　一八二
後藤顯乘
金雕工――歿　四七
後藤三右衛門
――宅封印　二四〇
後藤芝山
儒家――歿　一五〇
後藤壽乘
金雕工――歿　九九

後藤卽乘
金雕工——歿　五〇
後藤通乘
金雕工——歿　八五
後藤程乘
金雕工——歿　五三
後藤德乘
——歿　二〇
古銅吹立所
本所に——建　一六九
後藤梨春
物產家——歿　一三一
後藤廉乘
金雕工——歿　七七
小奈木川新堀
——成　四六
近衞信尹
——江戸へ下る　八
戀川春町
戲作者——歿　一六一
木挽町築地
——成　四三
小日向築地
——成　二二七
小日向馬場
——成　六一
五百羅漢堂
——建立成　五五
吳服物
——寸法制定　一三八
絹布の長さを定めらる
護物
俳人——歿　八八
小堀政一
茶人——歿　四七、五三
小堀政尹
茶人——歿　六一
小堀政貴
茶人——歿　一五三
聲色
役者——つかひの始　九七
駒市
——廢止　六九
駒込富士
——に曾我兄弟社建立　七九
——名物蓼蘇蛇　七八
米
「ペイ」米穀を見よ
子安稻荷
——流行　二六九
小柳常吉
力士——暗殺せらる　三〇九
小山寒巖
畫家——歿　一七五
小山判官
——が舊蹟　七三
曆
問屋十一人に制定
貞享——頒行　六七
寶曆——頒行　六一
寬政——頒行　一一三
文政十二の大小——　一七〇
天保十三新——頒行　二一九
嘉永元の大小——　二三四
安政五の大小——　二四六
萬延元の大小——　二八九
古曆便覽
——刊行　三〇〇
五靈香
眼藥——の由來　一一六
五輪町
コレラ病
文政二——流行
安政五——流行
安政六——流行
文久三——流行
語路
——流行　三〇四
五璉
俳人——歿　二
權太原
——の稱　四一
金地院
——に闘寬石像安置　二〇七
——築立成　二九一
蒟蒻島　二九八
金輪寺　三一五
古曆了意
——歿　五〇
古筆了祐
——歿　八五
古筆了榮
——歿　五三
古筆了延
——歿　二〇
古筆了音
——歿　一六九
古筆了佐
——歿　一三一
古筆了周
——歿　七七
古筆了泉
——歿　四六
古筆了仲
——歿　八
古筆了珉
——歿　一六一
王子——僧坊燒失　三〇四

サ

在五庵
——といふ料理屋　二七〇
濟松寺
牛込——開創　三一
齋藤德元
俳人——江戸に下る　一九
西方寺（高田）
——開創　二四
西福寺（東北山）
——移徙　四、二三
宰府天滿宮
黑田侯屋敷の——開扉　三一三
祭禮
青山熊野權現（寬政七）——　一六九
青山熊野權現（文化四）——　一八九
赤城明神（文政五）——　二一三
赤城明神（文政七）——獅子頭を飾る　二一六
赤坂氷川明神（嘉永六）——　二六四
赤坂氷川明神（安政四）——　二八七

赤坂氷川明神（慶應元）――　三二〇
浅草三社權現（天明元）――　一四九
浅草三社權現（文政六）――　二一四
浅草三社權現（文久三）――　三一五
浅草三社權現（慶應元）――　三二〇
浅草寺六天（天明元）――　一四九
浅草寺六天（天保四）――　二二五
麻布氷川明神（寛政三）――　一六四
麻布氷川明神（天保元）――　二二二
麻布氷川明神（天保三）――　二二四
市谷八幡宮（安永三）――　一三八
飯倉熊野權現（安政六）――　二九八
牛御前（安永八）――　一四六
鳥越天満宮（安永七）――　一四四
鳥越天満宮（安政六）――　二九七
烏森稲荷（天明四）――　一五四
神田明神（天和元）――隔年執行　一五七
神田明神（元祿元）――神輿始て城内に入る　三
神田明神（寶暦十三）――　一二〇
神田明神（明和二）――　一二五
神田明神（明和八）――延引　一三二
神田明神社假殿にて（安永二）――　一三六
神田明神（天明三）　一五三
神田明神（天和元）――隔年執行　五七
山王權現（寛政四）――　一六五
山王權現（文政十一）――付祭　二一八
山王權現（天保十三）――　二三五
山王權現（安政元）――　二六九
山王權現（安政三）――　二八二
山王權現（安政五）――　二九〇
山王權現（文久二）――　三一一
山王權現（文久三）――　三一五
山王權現（高延元）――　三〇二
山王權現（元治元）――　三一八
下谷小野照崎明神（寶暦七）――　一一五、二一〇
下谷稲荷社（寛政二）――　一六二
芝神明宮（嘉永六）――　二六五
芝神明宮の臨時（文久二）――　三一二
芝八幡宮（天保十一）――　二三二
杉森稲荷（寶暦九）――中絶　二二〇
千束稲荷（天保三）――怪異人有　二二四
高田穴八幡宮（寶暦九）――　二七
高田穴八幡（明和四）――　二二七
築地濱稲荷（安永二）――　二三六
月隱明神（天保九）――　二三一
烏越明神（明和五）――　二二八
神田明神（天明七）――　一五八
神田明神（寛政三）――　一六五
神田明神（文化四）――　一八九
神田明神（文政十）――　二一八
神田明神（天保八）――附祭　二三〇
神田明神（天保十二）――と附祭　二三三
神田明神（嘉永六）――延期　二六四
神田明神（安政二）――　二七三
神田明神（安政四）――　二八七
神田明神（安政六）――　二九九
神田明神（文久元）――　三〇六
神田明神影（文久二）――　三一二
神田明神（文久三）――　三一五
神田明神（慶應元）――　三二一
神田明神（慶應三）――　三三三
小石川氷川明神（明和六）――　二二九
小舟町天王（正德年間）――飾物　八二
小舟町天王（弘化四）――　二四六
小舟町天王（嘉永六）――　二六四
駒込神明宮（寶暦九）――　一一七
山谷熱田明神（寶暦十三）――　一一九
山王權現（元和元）――　一四
山王權現（寛永十一）――　二二

淺草寺境内に――を栽る　二八四
富賀岡八幡宮の歌仙――　八二
深川砂村に――を栽る　一九七
文久三年二月――咲く　三一三
矢場村寺院塀の控木花咲く　一九一
吉原仲の町に――を栽る　九九
四谷上水端へ――を栽る　二八一
蟲玄寺の會式――　一一二
櫻繪師
――花隈　二一六
櫻川おせん
美嬉――　一四三
櫻草
――培養　二〇〇
櫻島
大隅國――燒　一四六
櫻田變　三〇一
櫻馬場
湯島――成　五八
佐久間お竹
「チタ」お竹大日如來を見よ
佐久間東川
書家――歿　一七二
佐久間文示
儒家――歿　一七二
酒
清――鉄乏濁酒を售ふ　二三一
濁――流行　三三〇
佐々木玄龍
書家――歿　八七
佐々木文山
書家――歿　九四
薩摩藩邸
――燒打　三三四
砂糖
和――創製　一二八
佐藤一齋
儒家――歿　二九九
砂糖豆賣
――女　二六〇
里村玄祥
連歌師――歿　五三
里村玄俊
連歌師――歿　四七
里村玄陣
連歌師――歿　四七
里村昌通
連歌師――歿　五五
里村昌程
連歌師――歿　六三
里村昌迪
連歌師――歿　一一六
里村昌陸
連歌師――歿　七六
里村仍民
連歌師――歿　八九
佐野東洲
書家――歿　一九八
澤田東江
書家――歿　一六九
雜司谷鬼子母神
――再建參詣群集　七一
「カイ」開帳をも見よ

鞘畫
――流行　一七四
猴山叡麓
書家――歿　一四六
笊蕎麥
深川名物――　一六五
猿若道順
――歿　四三
左簾
俳人――歿　一四六
佐脇嵩之
畫家――歿　一三五
佐脇嵩雪
畫家――歿　一八三
參勤交代
諸侯――の始　二五
――期日變更　八七
――先規の如く改る　九一
三橋亭
――といふ酒樓　一四五
三十三間堂
淺草――建築　二五
淺草――預人交代　三一
淺草――燒亡　六八
淺草――深川に移る　六九
深川――燐失並再建　八一
深川――破壞　九一
深川――修復　一一一
深川――再建　一二四
深川――破壞　一二九
深川――再建成就　一八四
深川――暴風にて半破壞　二二六
――修復　三〇四、三一一
山椒魚
板橋水車にて――を獲　一七五
山東京傳
戲作者――歿　二〇一
三の橋
本所――橋杭なく架す　一六七
杉風
俳人――歿　九三
山王權現社
寛永七――建立　二〇
――移徙　三三
――造營遷宮　四四
――別當觀理院燒失　三〇四
「サイ」祭禮をも見よ

シ

修驗者
市中の――市外へ移さる　二三六
秋色女
俳人――歿　八八
修性院
谷中――の庭を遊覽せしむ　二四
柔術
――の起原　四六
狩獵
幕府小金御狩　八八、二四九
自雲靈神
――の事　一〇二
慈海僧正
――寂　六六
支干